北陸新幹線
埋蔵文化財発掘調査報告書4

—長野市内その1—

篠ノ井遺跡群
石川条里遺跡
築地遺跡
於下遺跡
今里遺跡

1998

日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局
長野市
長野県教育委員会
㈶長野県埋蔵文化財センター

北陸新幹線
埋蔵文化財発掘調査報告書4

—長野市内その1—

篠ノ井遺跡群
石川条里遺跡
築地遺跡
於下遺跡
今里遺跡

1998

日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局
長野市
長野県教育委員会
㈶長野県埋蔵文化財センター

1A～C区全景

1D区全景

円形周溝墓群

瓦塔A

瓦塔B初層

塼仏

調査区全景

②・③区全景

序

首都圏と信州を短時間で結ぶ北陸新幹線は220万県民の悲願であり、未来への希望でもありました。この県民の長年の夢は長野オリンピック招致とともに、陽の目を見ることになり、昨年10月、ついに開通いたしました。

北陸新幹線建設にともない、破壊が予想される多くの遺跡について当センターでは足掛け4年にわたって発掘調査を実施し、その概要を現地説明会、出土品展示会、㈶長野県埋蔵文化財センター年報等によって逐次公開してまいりました。そして発掘調査終了後は引き続き整理作業を行い地域の歴史文化解明に寄与すべく発掘成果の公開・資料化の努力を続け、ここにようやくすべての遺跡の報告書を刊行することができました。

今回報告する長野市南部地域の5遺跡は千曲川と犀川によって形成された広大な平地に立地しており、この地域は古代東山道、北国街道等が通過し、古くから交通の要衝としてさかえた地であります。そしてこれを裏づけるように、弥生時代から中世にわたるさまざまな遺構と膨大な遺物が発見されました。これらのなかには50基を越える円形周溝墓群や瓦塔など貴重な資料が数多く含まれており、今後当地方のみならず、長野県全体の歴史を理解する上で重要な資料を提示することができたと思われます。

当センターの業務は文化財保護法の規定によるものとはいえ、その遂行にあたっては多くの皆様の深いご理解とご協力が欠かせぬことは言うまでもありません。調査開始から本書発刊にいたるまでお世話いただいた、日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局・長野県北陸新幹線局・長野市・同教育委員会・地元対策委員会等、並びにご指導・助言をいただいた長野県教育委員会文化財保護課をはじめとする方々、そして40度近い猛暑の発掘現場に鍬をふるい、あるいはその後の記録整理作業に従事された多くのみなさんに対して、心から敬意と感謝を表する次第であります。

平成10年3月10日

㈶長野県埋蔵文化財センター
理事長　戸　田　正　明

例　言

1　本書は、北陸新幹線建設工事にかかわる、長野県長野市篠ノ井遺跡群、石川条里遺跡、築地遺跡、於下遺跡、今里遺跡の発掘調査報告書である。

2　上記遺跡の概要については、すでに当センター発行の『長野県埋蔵文化財センター年報』9～12で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。

3　本書で使用した地図は、鉄道建設公団作成の北陸新幹線路線図（1：500)、長野市都市計画図（1：2500、1：10000）をもとに作成したほか建設省国土地理院発行の地形図（1：25000）を使用した。

4　航空写真は㈱写真測図研究所に委託したものである。

5　本報告書の人骨鑑定は京都大学霊長類研究所　茂原信生氏に依頼し、玉稿を賜った。ここに記して謝意を表するものである。

また科学分析については次の機関に依頼した。

プラント・オパール分析、花粉分析　古環境研究所

材同定　パリノ・サーヴェイ

6　遺物の写真撮影は上田調査事務所で田村　彬が行った。

7　執筆分担は次のとおりである。

市川　隆之	5章、6章
両角　英敏	4章、写真図版
澤谷　昌英・田中正治郎	2章第3節　円形周溝墓群、3章
出河　裕典	2章第3節　瓦塔
田中正治郎	上記以外

8　遺構番号は、時代にかかわらず種別ごとに付したが、原則として発掘調査時の番号を変えていない。このため欠番があることを了解されたい。遺物番号は、土器は遺構ごとの通し番号、石器・玉類・金属器についてはすべての器種を通じた通し番号を付した。これらの番号は挿図・挿表・写真図版のいずれにも符合する。

9　注・参考文献は各章あるいは節の末尾にまとめた。

10　本書の編集・校正は田中が行い、広瀬昭弘が全体を校閲・校正した。なお、付章は原則として原稿のままとした。

11　本書で報告した各遺跡の記録および出土遺物は長野県立歴史館が保管している。

12　発掘調査・報告書作成にあたり、下記の諸氏・諸機関にご指導・ご支援いただいた。記して謝意を表するものである。(敬称略、五十音順)

立命館大学　高橋　学

野尻湖博物館　中村由克

長野市教育委員会

凡　例

1　本書に掲載した実測図の縮尺は下記の通りで、該当箇所のスケールの上に記してある。

1）主な遺構実測図

遺構分布図　1：1000、1：200　竪穴住居跡　1：80　カマド　1：40　掘建柱建物跡　1：80

方形・円形周溝墓　1：80　井戸・溝・土坑・土器棺墓　1：40～適宜

2）主な遺物実測図

土器　1：4、1：6　小型石器等　2：3　石器・金属器　1：4～1：8

2　本書に掲載した主な遺物写真の縮尺は、下記のとおりである。

土器・土製品　1：3　大型土器　1：4　石器・金属器　1：4～適宜

3　遺物の出土地点の表記は遺物番号のみとし、特殊なものについては図示した。

4　実測図中の線種・スクリーントーン等は、下記のように用いた。これら以外の場合は、当該項目のなかで説明している。

1）遺構実測図

①平面図　貼り床・堅敲面：一点鎖線　カマド火床：粗い網点　炉：実戦枠に粗い網点

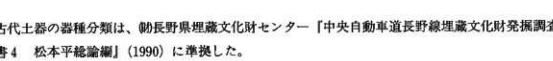
床面焼土：砂目　床面炭化物：二点鎖線枠砂目　推定プラン：破線

②断面図　火床・焼土：粗い網点　炭化物・焼土を多く含む層：砂目

2）遺物実測図

①土器の断面は、弥生土器・土師器は白ヌキ、須恵器は黒ヌリ、灰釉陶器は粗い網点とし、赤色塗彩は細かい網点、黒色処理は粗い網点とした。

②石器・金属器の断面は白ヌキとした。



5　古代土器の器種分類は、㈶長野県埋蔵文化財センター『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4　松本平総論編』(1990) に準拠した。

本 文 目 次

巻頭図版
序
例言
凡例
目次

第1章 序　章

第1節　調査の経緯

1　調査に至る経緯……1

2　調査体制と調査期間……2

3　指導者・協力者……3

4　調査参加者……4

第2節　調査の方法

1　発掘調査の方法……5

2　整理作業の方法……7

(1)遺物整理の方法と収納　(2)遺物の分類について

第3節　遺跡周辺の環境

1　地理的環境……8

2　歴史的環境……9

(1)旧石器時代・縄文時代　(2)弥生時代　(3)古墳時代　(4)古代　(5)中世

第2章 篠ノ井遺跡群

第1節　遺跡と調査の概要

1　遺跡の概要……27

2　調査の概要……27

(1)調査範囲と調査方法　(2)調査経過　(3)調査成果の概要　(4)基本土層

第2節　遺構と遺物

1　弥生時代後期～古墳時代中期の遺構……49

(1)概要　(2)竪穴住居跡　(3)その他の遺構

2　弥生時代後期～古墳時代中期の土器……102

3　円形周溝墓群……134

(1)概要　(2)円形周溝墓　(3)土器棺墓　(4)方形周溝墓

4　円形周溝墓群の土器……172

5　古墳時代後期の遺構……187

(1)概要　(2)竪穴住居跡　(3)その他の遺構

6　古墳時代後期の土器……230

7　古代の遺構……256

(1)概要　(2)竪穴住居跡　(3)掘立柱建物跡　(4)その他の遺構
8　古代の土器 ……331
9　中世の遺構 ……354
10　石器・金属器・玉類 ……363
第3節　成果と課題
円形周溝墓 ……383
瓦塔 ……388
第3章　石川条里遺跡
第1節　遺跡と調査の概要
1　遺跡の概要 ……404
2　調査の概要 ……404
(1)調査範囲と調査方法　(2)調査の経過と概要
第2節　遺構
第3節　成果と課題
第4章　築地遺跡
第1節　遺跡と調査の概要
1　遺跡の概要 ……409
2　調査の概要 ……409
(1)調査範囲と調査方法　(2)調査経過　(3)調査成果の概要　(4)基本土層
第2節　遺構と遺物
1　平安時代 ……415
2　中世 ……444
第3節　小結
第5章　於下遺跡
第1節　遺跡の概観と調査の概要
1　遺跡の概観 ……456
2　調査の概要 ……456
3　歴史的環境と地形・土層 ……456
(1)歴史的環境　(2)地形環境と基本土層
第2節　検出された遺構と遺物
1　遺構 ……459
2　遺物 ……467
第3節　小結
第6章　今里遺跡
第1節　遺跡の概要
1　遺跡の概観 ……484
2　調査の概要 ……484
3　地形と基本土層 ……484
第2節　遺構と遺物
第3節　小結

付　章
第１節　篠ノ井遺跡群出土の人骨と動物遺存体
第２節　築地遺跡出土の人骨と動物遺存体
第３節　篠ノ井遺跡群におけるプラント・オパール分析
第４節　石川条里遺跡におけるプラント・オパール分析
第５節　篠ノ井遺跡群における花粉分析
第６節　石川条里遺跡における花粉分析
第７節　篠ノ井遺跡群から出土した弥生時代後期住居の柱材等の樹種

挿図目次

第１章　序　　章
第１図　グリッド呼称法……5
第２図　長野盆地南部の地形……8
第３図　遺跡分布図（折り込み）……15･16
第２章　篠ノ井遺跡群
第４図　基本層序……31
第５図　グリッド設定図……32
第６図　全体図（折り込み）……33･34
第７図　遺構配置図(1)　弥生後期……35
第８図　遺構配置図(2)……36
第９図　遺構配置図(3)……37
第10図　遺構配置図(4)……38
第11図　遺構配置図(5)……39
第12図　遺構配置図(6)　古墳～古代……40
第13図　遺構配置図(7)……41
第14図　遺構配置図(8)……42
第15図　遺構配置図(9)……43
第16図　遺構配置図(10)……44
第17図　遺構配置図(11)……45
第18図　遺構配置図(12)　中世……46
第19図　遺構配置図(13)……47
第20図　遺構配置図(14)……48
第21図　SB201……49
第22図　SB202……50
第23図　SB204……51
第24図　SB205……51
第25図　SB206……52
第26図　SB207……52
第27図　SB209……54
第28図　SB210……54
第29図　SB211……55
第30図　SB212……56
第31図　SB213……57
第32図　SB214……57
第33図　SB215……57
第34図　SB216……58
第35図　SB217……59
第36図　SB218……60
第37図　SB220……61
第38図　SB221……62
第39図　SB222……63
第40図　SB223……63
第41図　SB224……64
第42図　SB227……65
第43図　SB231……67
第44図　SB232……67
第45図　SB233……68
第46図　SB234……68
第47図　SB235……69
第48図　SB236……69
第49図　SB238……70
第50図　SB239……70
第51図　SB240……71
第52図　SB242……72
第53図　SB303……72
第54図　SB311……73

第55図　SB312……73
第56図　SB351……74
第57図　SB359……75
第58図　SB360……76
第59図　SB364……76
第60図　SB365……77
第61図　SB366……78
第62図　SB367……79
第63図　SB368……80
第64図　SB373……81
第65図　SB374(1)……82
第66図　SB374(2)……83
第67図　SB376……84
第68図　SB377……84
第69図　SB380……85
第70図　SB381……86
第71図　SB382……86
第72図　SB384……87
第73図　SB523……88
第74図　SB555……89
第75図　SB556……90
第76図　SB558……91
第77図　SB577……91
第78図　SB579……92
第79図　その他の遺構(1)……100
第80図　その他の遺構(2)……101
第81図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(1)……112
第82図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(2)……113
第83図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(3)……114
第84図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(4)……115
第85図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(5)……116
第86図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(6)……117
第87図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(7)……118
第88図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(8)……119
第89図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(9)……120
第90図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(10)……121
第91図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(11)……122
第92図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(12)……123
第93図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(13)……124
第94図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(14)……125
第95図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(15)……126
第96図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(16)……127
第97図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(17)……128
第98図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(18)……129
第99図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(19)……130
第100図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(20)……131
第101図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(21)……132
第102図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(22)……133
第103図　円形周溝墓(1)……153
第104図　円形周溝墓(2)……154
第105図　円形周溝墓(3)……155
第106図　円形周溝墓(4)……156
第107図　円形周溝墓(5)……157
第108図　円形周溝墓(6)……158
第109図　円形周溝墓(7)……159
第110図　円形周溝墓(8)……160
第111図　円形周溝墓(9)……161
第112図　円形周溝墓(10)……162

第113図　円形周溝墓(11)……163
第114図　円形周溝墓(12)……164
第115図　円形周溝墓(13)……165
第116図　円形周溝墓(14)……166
第117図　円形周溝墓(15)……167
第118図　円形周溝墓(16)……168
第119図　土器棺墓(1)……169
第120図　土器棺墓(2)……170
第121図　土器棺墓(3)……171
第122図　円形周溝墓の土器(1)……178
第123図　円形周溝墓の土器(2)……179
第124図　円形周溝墓の土器(3)……180
第125図　円形周溝墓の土器(4)……181
第126図　円形周溝墓の土器(5)……182
第127図　円形周溝墓の土器(6)……183
第128図　円形周溝墓の土器(7)……184
第129図　円形周溝墓の土器(8)……185
第130図　円形周溝墓の土器(9)……186
第131図　SB103……188
第132図　SB302……189
第133図　SB305……189
第134図　SB313……190
第135図　SB314……191
第136図　SB326……192
第137図　SB329……192
第138図　SB331……193
第139図　SB332……193
第140図　SB333……194
第141図　SB340……195
第142図　SB342……196
第143図　SB348……197
第144図　SB349(1)……198
第145図　SB349(2)……199
第146図　SB349(3)……200
第147図　SB353……201
第148図　SB355……202
第149図　SB357……202
第150図　SB358……203
第151図　SB361……203
第152図　SB371……204
第153図　SB372……205
第154図　SB386……205
第155図　SB387……206
第156図　SB401……207
第157図　SB402……208
第158図　SB403……209
第159図　SB410……210
第160図　SB414……211
第161図　SB415……212
第162図　SB505……212
第163図　SB515……214
第164図　SB517……215
第165図　SB518……216
第166図　SB520……217
第167図　SB529……217
第168図　SB530……218
第169図　SB533……218
第170図　SB534……219
第171図　SB536……219
第172図　SB541……220
第173図　SB545……220
第174図　SB546……221
第175図　SB561……222
第176図　SB562……222
第177図　SB564……223
第178図　SB567……224
第179図　SB571……225
第180図　その他の遺構……229
第181図　古墳時代後期の土器(1)……238
第182図　古墳時代後期の土器(2)……239
第183図　古墳時代後期の土器(3)……240
第184図　古墳時代後期の土器(4)……241
第185図　古墳時代後期の土器(5)……242
第186図　古墳時代後期の土器(6)……243
第187図　古墳時代後期の土器(7)……244
第188図　古墳時代後期の土器(8)……245
第189図　古墳時代後期の土器(9)……246
第190図　古墳時代後期の土器(10)……247
第191図　古墳時代後期の土器(11)……248
第192図　古墳時代後期の土器(12)……249

第193図　古墳時代後期の土器(13)……250
第194図　古墳時代後期の土器(14)……251
第195図　古墳時代後期の土器(15)……252
第196図　古墳時代後期の土器(16)……253
第197図　古墳時代後期の土器(17)……254
第198図　古墳時代後期の土器(18)……255
第199図　SB102……256
第200図　SB105……257
第201図　SB107……257
第202図　SB304……258
第203図　SB307……259
第204図　SB315……260
第205図　SB318……262
第206図　SB319……262
第207図　SB322……263
第208図　SB325……264
第209図　SB327・330……265
第210図　SB328……265
第211図　SB334……266
第212図　SB339……267
第213図　SB343……268
第214図　SB346……269
第215図　SB344・347……269
第216図　SB356……270
第217図　SB362……270
第218図　SB363……271
第219図　SB369……271
第220図　SB392……272
第221図　SB394……273
第222図　SB396……274
第223図　SB397……275
第224図　SB399……276
第225図　SB400……276
第226図　SB395・407……277
第227図　SB416……279
第228図　SB501……280
第229図　SB502……281
第230図　SB503……281
第231図　SB504……282
第232図　SB506……282
第233図　SB507・521……283
第234図　SB508・510……284
第235図　SB509……285
第236図　SB514……285
第237図　SB516……286
第238図　SB519……286
第239図　SB522……287
第240図　SB524……288
第241図　SB525……288
第242図　SB526……289
第243図　SB527……289
第244図　SB528……290
第245図　SB532……290
第246図　SB531……291
第247図　SB537……292
第248図　SB538……293
第249図　SB539……294
第250図　SB540……295
第251図　SB543……296
第252図　SB544……296
第253図　SB542・547……297
第254図　SB550……297
第255図　SB559……299
第256図　SB565……299
第257図　SB568……300
第258図　SB569……300
第259図　SB573……301
第260図　SB576……301
第261図　掘立柱建物跡(1)……303
第262図　掘立柱建物跡(2)……304
第263図　掘立柱建物跡(3)……306
第264図　掘立柱建物跡(4)……307
第265図　掘立柱建物跡(5)……309
第266図　掘立柱建物跡(6)……310
第267図　掘立柱建物跡(7)……312
第268図　掘立柱建物跡(8)……313
第269図　掘立柱建物跡(9)……315
第270図　掘立柱建物跡(10)……316
第271図　掘立柱建物跡(11)……317
第272図　掘立柱建物跡(12)……319

第273図　その他の遺構(1)……324
第274図　その他の遺構(2)……327
第275図　その他の遺構……329
第276図　古代の土器(1)……340
第277図　古代の土器(2)……341
第278図　古代の土器(3)……342
第279図　古代の土器(4)……343
第280図　古代の土器(5)……344
第281図　古代の土器(6)……345
第282図　古代の土器(7)……346
第283図　古代の土器(8)……347
第284図　古代の土器(9)……348
第285図　古代の土器(10)……349
第286図　古代の土器(11)……350
第287図　古代の土器(12)……351
第288図　古代の土器(13)……352
第289図　古代の土器(14)……353
第290図　中世の遺構……355
第291図　中世の遺構……357
第292図　中世の遺構……359
第293図　中世の遺構……360
第294図　中世の遺構……361
第295図　石器(1)……372
第296図　石器(2)……373
第297図　石器(3)……374
第298図　石器(4)……375
第299図　石器(5)……376
第300図　石器(6)……377
第301図　石器(7)……378
第302図　金属器(1)……379
第303図　金属器(2)……380
第304図　玉類(1)……381
第305図　玉類(2)……382
第306図　軸部の法量……389
第307図　屋蓋の分類……390
第308図　長野県内の瓦塔出土遺跡……392
第309図　稲添遺跡の瓦塔……393
第310図　平田本郷遺跡の墨書土器と瓦塔……395
第311図　瓦塔A(1)……398
第312図　瓦塔A(2)……399
第313図　瓦塔A(3)……400
第314図　瓦塔A(4)・B(1)……401
第315図　瓦塔B(2)……402
第316図　瓦塔・塼仏……403
第３章　石川条里遺跡
第317図　石川条里遺跡の位置……404
第318図　調査範囲……405
第319図　出土土器……406
第320図　遺構配置図……407
第４章　築地遺跡
第321図　グリッド設定状況および基本土層……412
第322図　平安時代遺構配置図……413
第323図　中世遺構配置図……414
第324図　SB01 ……416
第325図　SB02 ……417
第326図　SB03 ……418
第327図　SB04 ……419
第328図　SB05 ……419
第329図　SB06 ……420
第330図　SB10 ……421
第331図　SB11 ……421
第332図　SB15 ……422
第333図　SB16 ……423
第334図　SB18 ……424
第335図　SB19 ……425
第336図　SB20 ……426
第337図　SB25 ……428
第338図　SB26 ……428
第339図　SB27 ……429
第340図　SB28 ……429
第341図　SB29 ……430
第342図　SB30 ……431
第343図　SB31 ……432
第344図　SB32 ……433
第345図　SB33 ……434
第346図　SB34 ……434
第347図　SB35 ……435
第348図　SB37 ……435
第349図　SD01・03・21・26・28 ……437
第350図　SD01・03・21・26・28出土遺物 ……438

第351図　SD10 ……439
第352図　SK405・744・746・756 ……441
第353図　SQ01 ……442
第354図　遺構外出土遺物……443
第355図　SB07 ……444
第356図　SB09 ……445
第357図　ST01・02 ……446
第358図　ST04 ……447
第359図　ST06 ……448
第360図　ST07 ……448
第361図　ST08 ……449
第362図　ST09 ……449
第363図　SD02・08・37 ……451
第364図　SD50 ……452
第365図　SK282・526 ……453
第５章　於下遺跡
第366図　グリッド設定図……474
第367図　於下館位置図……474
第368図　グリッド設定と基本土層……475
第369図　遺構全体図……476
第370図　掘立柱建物跡……477
第371図　土坑１……478
第372図　土坑２……479
第373図　溝跡セクション図……480
第374図　柱穴跡底面標高別分布……481
第375図　焼物……482
第376図　石製品・金属製品・銭貨……483
第６章　今里遺跡
第377図　グリッド配置と基本土層……487
第378図　遺構……488

写真図版目次

巻頭図版　篠ノ井遺跡群出土瓦塔・埴仏
篠ノ井遺跡群１Ａ～Ｃ区全景、１Ｄ区全景、円形周溝墓群
築地遺跡調査区全景、②・③全景
篠ノ井遺跡群（PL１～92）
PL１　円形周溝墓群全景、平成５年度調査分１Ａ区遠景、１Ａ区北側調査前風景、円形周溝墓群調査風景、平成７年度調査分１Ｄ・Ｅ区調査風景
PL２　弥生時代後期～古墳時代中期面調査区全景（１Ａ～Ｃ区、唐猫地区）
PL３　弥生時代後期～古墳時代中期面調査区全景（１Ｄ・Ｅ区）
PL４　弥生時代後期～古墳時代中期遺構（SB201・202・204～207・210・212）
PL５　弥生時代後期～古墳時代中期遺構（SB211・214・221・239・240、SK214）
PL６　弥生時代後期～古墳時代中期遺構（SB366・368・374）
PL７　弥生時代後期～古墳時代中期遺構（SB374・549・579）
PL８　弥生時代後期～古墳時代中期遺構（SD201・202・206・207・319・321・323、SK221）
PL９　弥生時代後期～古墳時代中期遺構（SK252・263・485、土器棺504、SE201、SM240～242）
PL10　円形周溝墓群（SM101・102・104）
PL11　円形周溝墓群（SM105・109）
PL12　円形周溝墓群（SM204・208・211・213・214）
PL13　円形周溝墓群（SM216・219・222・223）
PL14　円形周溝墓群（SM224～227）
PL15　円形周溝墓群（土器棺墓…土器棺101・201～203）
PL16　古墳時代後期～古代面調査区全景（１Ａ～Ｃ区）
PL17　古墳時代後期～古代面調査区全景（１Ｄ・Ｅ区、２Ａ区）
PL18　古墳時代後期遺構（SB305・313・326・329・331・340）
PL19　古墳時代後期遺構（SB340・342・349）
PL20　古墳時代後期遺構（SB351・353・358・371

・401)
PL21 古墳時代後期遺構（SB402・411・414・505）
PL22 古墳時代後期遺構（SB513・517・518・533・546）
PL23 古墳時代後期遺構（SB567・571、ST320、SD322、SK312、SE303）
PL24 古代遺構（SB304・307・315・316・318・322）
PL25 古代遺構（SB325・327・330・346・356・392・397）
PL26 古代遺構（SB394・514・516・531）
PL27 古代遺構（SB524・525・528・537・539・564・565）
PL28 古代遺構（ST101・309・311・313～317、SF308）
PL29 古代遺構（ST318、SA302・306、SD308・311・315及び瓦塔出土状況・324～326、SC304・305、SK310）
PL30 古代遺構（SK348・437・450、SX301）
中世遺構（SD501・502）
PL31 中世遺構（1B区中世面全景、ST301～305、SD306、SK302、SE304）
PL32 弥生時代後期～古墳時代中期土器（SB201）
PL33 弥生時代後期～古墳時代中期土器（SB201・202・204）
PL34 弥生時代後期～古墳時代中期土器（SB204～206）
PL35 弥生時代後期～古墳時代中期土器（SB206・210・211）
PL36 弥生時代後期～古墳時代中期土器（SB211・212）
PL37 弥生時代後期～古墳時代中期土器（SB218・221）
PL38 弥生時代後期～古墳時代中期土器（SB231・232・236・240）
PL39 弥生時代後期～古墳時代中期土器（SB240・303・311・312・359・360）
PL40 弥生時代後期～古墳時代中期土器（SB364・365・367・368・380・384）
PL41 弥生時代後期～古墳時代中期土器（SB374・523）
PL42 弥生時代後期～古墳時代中期土器（SB523・556・558・577）
PL43 弥生時代後期～古墳時代中期土器（SB579）
PL44 弥生時代後期～古墳時代中期土器（SK214・221・222・485）
PL45 弥生時代後期～古墳時代中期土器（SK485、SE201）
PL46 弥生時代後期～古墳時代中期土器（SE201、土器棺504）
PL47 弥生時代後期～古墳時代中期土器（遺構外出遺物）
PL48 円形周溝墓群出土土器〔弥生時代後期〕（SM101・104・107）
PL49 円形周溝墓群出土土器〔弥生時代後期〕（SM103・104・109・111・112・203・204）
PL50 円形周溝墓群出土土器〔弥生時代後期〕（SM201・205・208・209・210・211）
PL51 円形周溝墓群出土土器〔弥生時代後期〕（SM211・215）
PL52 円形周溝墓群出土土器〔弥生時代後期〕（SM216・221・222）
PL53 円形周溝墓群出土土器〔弥生時代後期〕（SM222）
PL54 円形周溝墓群出土土器〔弥生時代後期〕（SM222・224）
PL55 円形周溝墓群出土土器〔弥生時代後期〕（SM224・226）
PL56 円形周溝墓群出土土器〔弥生時代後期〕（SM225・226）
PL57 円形周溝墓群出土土器〔弥生時代後期〕（SM227・229・232・237、土器棺203）
PL58 円形周溝墓群出土土器〔弥生時代後期〕（土器棺203）
PL59 円形周溝墓群出土土器〔弥生時代後期〕（土器棺203）
PL60 円形周溝墓群出土土器〔弥生時代後期〕（土器棺101・201）
PL61 円形周溝墓群出土土器〔弥生時代後期〕（土器棺201・202）

PL62　古墳時代後期土器（SB101・302・305・313・314・331）
PL63　古墳時代後期土器（SB326・329・333・340）
PL64　古墳時代後期土器（SB340・342）
PL65　古墳時代後期土器（SB342・348・349・353）
PL66　古墳時代後期土器（SB353）
PL67　古墳時代後期土器（SB353）
PL68　古墳時代後期土器（SB353）
PL69　古墳時代後期土器（SB358・371）
PL70　古墳時代後期土器（SB371・372・385・386・387・402・403）
PL71　古墳時代後期土器（SB411・414・415・505・513・515・517・518）
PL72　古墳時代後期土器（SB533・534・536・541・545・546・567・577）
PL73　古墳時代後期土器（SB562・567・571）
PL74　古墳時代後期土器（SD322、SK312、遺構外出土遺物）
PL75　古代土器（SB107・304・307・315・327）
PL76　古代土器（SB328・330・332・339・341・343・346・363・369）
PL77　古代土器（SB356・392・394・395・397・407・412・501・502・503・509）
PL78　古代土器（SB507・508・514・516・519・521・524・525・526・528・532）
PL79　古代土器（SB531）
PL80　古代土器（SB531・537・539・540・543・544・547）
PL81　古代土器（SB554・559・564・565・568）
PL82　古代土器（SB573・576、ST317、SD304・324、SK310・437・461・589・751）
PL83　古代土器（SX301、遺構外出土遺物）
PL84　瓦塔（瓦塔A）
PL85　瓦塔・塼仏（瓦塔A・B、SE304 塼仏）
PL86
PL87
PL88　石器・石製品
PL89
PL90
PL91　金属器
PL92　玉類

石川条里遺跡（PL93）
PL93　第1・2・8・10トレンチ、SC1003・1004

築地遺跡（PL94～104）
PL94　調査区全景、調査前風景、①区基本土層、②区調査風景
PL95　②・③区全景
古代遺構（SB01・02）
PL96　古代遺構（SB03～05・16・19・20・25・35、SK746）
PL97　古代遺構（SB30・33・37、SD10、SK756、SQ01）
PL98　古代遺構（SB07・09、SD02・08・37、SK282）
PL99　古代土器（SB01～05・10・15）
PL100　古代土器（SB18～20）
PL101　古代土器（SB25・27・29～32）
PL102　古代土器（SB33・35・37、SD01・03・10・21・28）
PL103　古代土器（SK405・744・746・756、SQ01）
中世土器（SB07・09、SK282・526）
遺構外出土土器
PL104　金属器、銭貨、石類

於下遺跡（PL105～110）
PL105　調査前の状況、遺跡全景、中心部の遺構
PL106　調査区全景、中央部柱穴、東側柱穴、西側柱穴
PL107　遺構（SD01・02・05・08、SK03・04）
PL108　遺構（SK05・10～12・19～21・23～26）
PL109　カワラケ、陶磁器類
PL110　内耳鍋・すり鉢、石製品、金属製品

今里遺跡（PL111）
PL111　基本土層、調査区全景、溝状遺構、畝状遺構、旧道跡

第1章　序　　章

第1節　調査の経緯

1　調査に至る経緯

本書所収遺跡の発掘調査は、日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局（以下、鉄建公団）による長野市南部地域における北陸新幹線建設に関連して行われたものである。なお、長野市北部地域の諸遺跡も同時に調査しているが、この部分については別冊で報告する。また、隣接する長野自動車道関連の篠ノ井遺跡群・石川条里遺跡については平成8年度に刊行済みである。

従来より、長野県においては、高速道路建設にかかわる埋蔵文化財保護は広域にわたる統一的措置が求められることから、長野県教育委員会（以下、県教委）が対応してきた。そして、その発掘調査は財長野県埋蔵文化財センター（以下、センター）が実施してきた。また、側道拡幅などこれらと一体的に行われる開発についても市町村との協議の上、センターが調査を行うことが多い。

本書で報告する北陸新幹線についても、高速道路と同様の対応が求められ、新幹線のルートに当たる北佐久郡軽井沢町から長野市に至るさまざまな地域で発掘調査が行われることとなった。

本書に収録した長野市南部地域でもとくに千曲川に接する地域は、以前より遺跡の密集地として知られ、周知の遺跡としては塩崎遺跡群、篠ノ井遺跡群、石川条里遺跡等が有名であり、長野市教育委員会、当センター等がかなりの面積を調査している。その結果、この地域については、分布する遺跡の範囲、時代・時期等が確定されつつある。これに対し、千曲川と犀川に挟まれた川中島地区は周知の遺跡も少なく、発掘調査自体ほとんど行われたことがないため、未周知遺跡の存在がおおいに予想されるところであった。そこで、これら周知の遺跡の内容及び範囲の確定のための試掘調査とともに、未周知遺跡の存否を確認するための試掘調査がセンターによって行われた。その結果、未周知の遺跡として川中島遺跡が新たに発見され、その調査結果は『長野県埋蔵文化財センター年報』9で公表されている。そして、南から篠ノ井遺跡群・石川条里遺跡・築地遺跡・於下遺跡・今里遺跡が調査されることとなった。

各遺跡の調査年次は次項に記したが、発掘及び整理は年度ごとに鉄建公団及び長野市が県教委に委託し、県教委がセンターに再委託して実施された。発掘調査の契約面積は下記のとおりである。

（年　度）	（遺　跡）	（調査契約面積）
平成4年度	川中島遺跡	1,000㎡
平成5年度	篠ノ井～川中島間試掘	5,650㎡
	篠ノ井遺跡群	2,200㎡
	築地遺跡	200㎡
	今里遺跡	2,350㎡
平成6年度	篠ノ井遺跡群	2,800㎡
	石川条里遺跡	3,500㎡
	築地遺跡	4,600㎡（うち側道分440㎡）
	於下遺跡	1,500㎡（　〃　460㎡）

平成7年度	篠ノ井遺跡群	500㎡
	石川条里遺跡	1,000㎡

2 調査体制と調査期間

調査体制及び調査期間は以下のとおりである。

(1) 平成4年度

調査体制	事務局長	峯村 忠次
	同 総務部長	神林 幹生
	同 調査部長	小林 秀夫
	長野調査事務所長	岡田 正彦
	同 庶務課長	羽生田 博幸
	同 調査課長	原 明芳
	同 調査研究員	綿田弘実 伊藤友久
調査期間	川中島遺跡	平成4年11月14日～平成4年12月25日

(2) 平成5年度

調査体制	事務局長	峯村 忠次
	同 総務部長	神林 幹生
	同 調査部長	小林 秀夫
	長野調査事務所長	岡田 正彦
	同 庶務課長	羽生田 博幸
	同 調査課長	原 明芳
	同 調査研究員	広田和穂 宮下裕司 吉江英夫 清水 弘 青木一男 馬場信義 井口慶久 綿田弘実 田中正治郎
調査期間	篠ノ井～川中島間	平成5年4月19日～平成5年12月10日
	(築地)	平成5年11月24日～平成5年12月10日
	(今里)	平成5年11月4日～平成5年12月3日
	篠ノ井遺跡群	平成5年9月15日～平成5年12月15日

(3) 平成6年度

調査体制	事務局長	峯村 忠次
	同 総務部長	神林 幹生
	同 調査部長	小林 秀夫
	長野調査事務所長	岡田 正彦
	同 庶務課長	羽生田 博幸
	同 調査課長	原 明芳
	同 調査研究員	澤谷昌英 依田 茂 両角英敏 贄田 明 清水春樹 三木雅博 綿田弘実 市川隆之 山崎光顕
調査期間	篠ノ井遺跡群	平成6年4月11日～平成6年9月22日

(築地)　平成6年4月11日～平成6年7月17日
(於下)　平成6年11月21日～平成6年12月22日
石川条里遺跡　平成6年8月30日～平成6年9月22日

(4) 平成7年度

調査体制　事務局長　峯村　忠次
同　総務部長　西尾　紀夫
同　調査部長　小林　秀夫
長野調査事務所長　小林　秀夫
同　庶務課長　戸谷　功
同　調査課長　百瀬　長秀
同　調査研究員　澤谷昌英　和田　進　藤森俊彦　山崎まゆみ　田中正治郎

調査期間　篠ノ井遺跡群　平成7年9月14日～平成7年11月17日
石川条里遺跡　平成7年4月11日～平成7年4月21日

(5) 平成8年度

整理体制　事務局長　青木　久
同　総務部長　西尾　紀夫
同　調査部長　小林　秀夫
上田調査事務所長　小林　秀夫
同　庶務課長　山口　栄一
同　調査課長　広瀬　昭弘
同　調査研究員　両角英敏　田中正治郎

土器接合作業

整理作業内容　遺物の接合・集計・実測・復原・写真撮影を行う。

(6) 平成9年度

整理体制　事務局長　青木　久
同　総務部長　西尾　紀夫
同　調査部長　小林　秀夫
上田調査事務所長　小林　秀夫
同　庶務課長　山口　栄一
同　調査課長　広瀬　昭弘
同　調査研究員　両角英敏　田中正治郎
澤谷昌英

実測作業

整理作業内容　遺物実測・写真撮影・トレース、遺物・遺構図の図版組み、原稿執筆、編集、校正を行う。

3　指導者・協力者

発掘調査と整理作業にあたり、下記の方々や機関にご指導・ご協力をいただいた。ここにお名前を記して感謝したい。(敬称略)
山口明、風間栄一、長野市教育委員会、直井雅尚、中村義和、高橋光司、品田高志

4　発掘調査及び整理作業参加者（敬称略）

石坂　好子　上原　利男　大蔵　辰雄　大矢ひろ子　倉石みつ江　坂井　夏子　鈴木　竹子　高橋　清子
田中　克人　田中　研一　橋詰　定子　藤本　百合　松岡　定雄　丸山美知子　村田　佐　柳沢　文男
吉原　静子　若林ひろ子　上嶋浜次郎　林部　英美　増田　益利　中沢　哲　内山　文枝　宍戸　静江
高山　徳子　寺島　典子　山本　和美　小池　市治　太田喜和子　石坂けさみ　大矢　敏夫　太田　里子
山崎　清江　池田　展敏　牛沢　輝雄　小林　保　斉藤　国興　斉藤はつ子　田子与一郎　戸谷　龍澄
中川麻由美　西村甲子郎　野沢　新作　原田　正人　深沢　恵子　宮尾　正夫　宮崎　好子　宮沢とく子
柳沢　春枝　山岸　貞義　米沢きよ江　井口　琴　坂口けい子　永井百合子　堀内ます子　清水　威子
宮沢　晴子　野沢　花枝　柳沢　玲子　松尾みさ子　赤羽　啓子　石井ゆみ子　国光　一穂　竹内富美子
鳥羽　徳子　宮尾　昌晴　相沢　人　長田　圭二　木島　信雄　篠原ことし　須田幾久世　岡藤　清流
田中　英子　中沢よし子　松沢　守　篠原隆一郎　水口　高志　飯田　和子　今井美枝子　上野　久香
梅原　祝　大井まき枝　大西　啓子　大原はるえ　片桐はまよ　北村　幸枝　西東千佳子　田島　富子
西松まり子　増沢ふさえ　丸山すみ子　丸山　公子　宮原　広子　三好とも子　大林久美子　北村久美子
久保ます江　佐藤　桂子　高柳すえ子　中村小百合　西村　美幸　橋本　信子　松林　明子　宮坂　美樹
宮野尾和子　宮本　宰江　村田　雅子　徳永　勝子　夏目　紘子　鷲沢　啓子　堀内　幸子　市川ちず子
清水　栄子　藤原　泰子　尾嶋　平一　工藤　和美　雲井　博子　中沢由美子　三好　信好　宮島　珠子
渡辺けさ子　赤羽　利治　金子　幸雄　小松みつ子　坂田　昭二　摺田　伸子　滝沢富士太郎　塚原和子
梅田　康子　佐々木勅美　土屋由美子　藤木　正枝　丸山　裕子　三井美津子　井出　里見　内山　重利
風間　栄子　直田　尚子　高遠　博　中村　光子　中村いづ美　西沢　恵子　藤井　陽介　村山　浩平
吉野　史絵　大澤　豊　佐藤　明子　伝田　名正　藪　一義　小林　英子　島田　恵子　高橋　美穂
丸山　園枝　峰村　敏子　柳沢るり子　安東　武子　内山　美砂　北沢　節子　小林　タイ　近藤　久子
中沢さか江　西川恵美子　西沢　米子　長谷川征子　松林　節子　宮入　さち　山岸　隆男　米田ちえ子
滝沢　久子　加藤　周子　高沼千恵子　小林喜美子　春原　静江　吉沢　正弘　高野　操　岡田　皖子
涌井　恭江　北村　芳子

平成9年度整理班

第2節　調査の方法

1　発掘調査の方法

(1)　試掘と調査区の設定

本調査に先駆けて平成5年4月から㈶長野県埋蔵文化財センターにより、新幹線路線内の試掘調査が行われ、その結果に基づき調査範囲を設定した。

篠ノ井遺跡群では道路敷地となっている一部の用地を除き、ほぼ全域を調査区としたが、在来線（ＪＲ信越線・現しなの鉄道）と新幹線用地が重なる部分についてはトレンチ調査にとどめた。また千曲川堤防を越えた現流路内についても、可能な限り立ち会い調査に努めた。

篠ノ井遺跡群に続く石川条里遺跡は、新幹線が在来線と並行するため大規模に掘削することはできず、また水田遺跡であるため、トレンチ調査と工事時点での立ち会いによって水田の広がりを確認するにとどまった。

築地遺跡②区以南と③区以北は古水田がまばらに分布する程度で、遺構の分布は極めて希薄となるためトレンチ及びテストピットによる調査で終了した。

於下遺跡は試掘による成果と推定於下館の位置から調査区を決定し、それ以外の地域については試掘調査のみにとどめた。

今里遺跡も於下遺跡と同様に試掘結果から調査区を設定した。

(2)　遺跡名称と遺跡記号

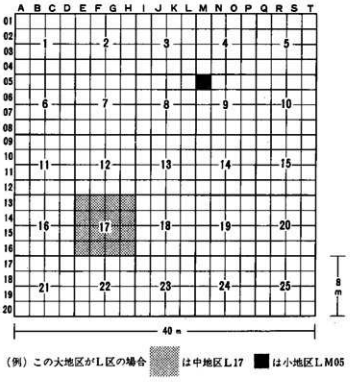
本書で報告する遺跡名には下記の略号を用いた。遺物・写真ほかの記録類の注記などはこれによる。

篠ノ井遺跡群	ＭＳＮ
石川条里遺跡	ＭＩＳ
築地遺跡	ＭＴＪ
於下遺跡	ＭＯＳ
今里遺跡	ＭＩＭ

(3)　グリッドの設定と呼称法（第1図）

グリッドの設定は、国家座標（平面直角座標系・第Ⅷ系）を利用し、大々地区・大地区・中地区・小地区の4段階に区分した。

まず200ｍ×200ｍの区画を設定して調査区全体を被い、これを大々地区としてⅠ・Ⅱ・Ⅲ……とローマ数字で表した。次にこの大々地区内を縦・横5等分して40ｍ×40ｍの区画を25個作り、これを大



第1図　グリッド呼称法

地区とした。大地区の呼称は北西隅から南東にむかってAからYまでのアルファベット大文字を用いる。同じくこの大地区を25区画に分割して8m×8mの方眼を作り中地区とした。中地区は1から25までの算用数字を用いる。

通常はこの中地区を基準として調査を進めるが、この方眼では広すぎる場合等では、大地区を2m×2mの方眼で区画（400個）する。これは小地区と呼ばれ、縦（南北）方向に01から20の数字、横（東西）方向にAからTまでのアルファベットを付して地区名とした。したがって大々地区「II区」に属する大地区「L区」の中の中地区「15区」は「IIL15」と表記され、小地区が用いられる場合は「IILA80」などと表される。

グリッドは遺跡ごとに単独で設定されており、とくに近隣遺跡のグリッドとの整合性は図っていない。

(4) 遺構記号と遺構番号

記録・注記等の便宜を図るため、遺構の名称は記号を用い、遺構番号は時代等にかかわらず種類ごとに検出順に付した。遺構記号は、基本的に検出時点での平面的な形態や遺物の分布状況等を示すもので、必ずしも個々の遺構の性格・機能を表したものではない。本報告書では混乱を避けるため発掘調査時点での遺構記号・遺構番号を原則として使用している。このため一部に欠番が生じていることを了解されたい。また、遺構番号が重複したものについては整理作業段階で補正した。

なお、本書で用いた遺構記号は当センターで共通に用いているものであり、以下のとおりである。

[SB]　直径あるいは一片2m以上の方形、円形等の掘り込み（竪穴住居跡、竪穴状遺構）。

[SK]　単独、または他の掘り込みと関連が認められないSBよりも小さな掘り込み（土坑、井戸、貯蔵穴、落とし穴等）。

[SE]　井戸と明確に判断される掘り込み。

[SA]　SBよりも小さな掘り込みや石が列として配置されるもの（柵、築地等）。

[ST]　SBよりも小さな掘り込みや石が一定間隔で方形、円形に配置されるもの（掘建柱建物跡、礎石をもつ建物跡）。

[SD]　帯状の掘り込み（溝、河道等）。

[SF]　単独で存在し、火を焚いたあとが面的に広がるもの（火床、炉跡等）。

[SM]　古墳、墳墓等の埋葬施設。掘り込みをもつとは限らず、形態はさまざま。

[SC]　細長い人工の高まり（畦畔等）。

[SL]　帯状の高まりと掘り込みが対をなしているもの（畑跡等）。

[SX]　以上の遺構記号、及びSQ（遺物集中）、SH（礫集中）、SY（須恵器窯、炭焼き窯の諸記号）に該当しない不明遺構。

さらに、SB・ST・SA内の掘り込み（柱穴等）にはPを付した。

(5) 遺構の調査方法

検出された遺構は、まずおおよその平面形を確認した後、主軸方向や付属施設を考慮しながら先行トレンチをあけて埋土の状況や床・壁を確認する。そして、土層観察用に埋土の一部を十字形のベルト状に残して掘り下げる。このベルトは土層断面を記録した後除去し、遺物はこのベルトで区画された部分ごとに、あるいは土層ごとに取り上げたが完形もしくはそれに近いと思われたものはその位置を記録した。床面・底面に接触する遺物も同様である。これらの作業の後、炉・カマド・柱穴等の付属施設を検出し、これらの施設も必要に応じ、先行トレンチを入れるか半分割して状況を記録しつつ掘り下げた。なお土層観

察の際の土色の記録は原則として、『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）による。

(6) 測　量

遺構の測量は簡易遣り方測量（オフセット測量）により調査研究員及び、その指導のもとに作業員が行ったが、一部では調査期間の制約等の理由からトータルステーションを用いた単点測量による図化を業者に委託した。住居跡等については個別遺構図を作成し、その他の遺構は中地区単位の割り付け図として実測した。縮尺は1：20を基本とし、住居跡の付属施設（カマド等）は必要に応じて1：10とした。

(7) 写　真

遺跡の景観や遺構等の撮影にはニコンFM2とペンタックス6×7を使用し、ともにモノクロプリントとカラーリバーサルで撮影した。撮影は調査研究員が行い、現像と密着焼き付けは業者に委託した。航空写真は測量業者に委託した。

2　整理作業の方法

(1) 発掘記録の整理

発掘調査後の冬季整理作業では、現場で作成された図面類と写真の整理を最優先にした。図面類は、記載事項（遺跡名、遺構名、地区名、標高縮尺等）の点検を行い、住居跡など主な遺構については平面図、断面図、部分図などを相互に照合・補正し、第2原図を作成した。あわせて調査経過、遺構の構造所見等を「遺構所見整理カード」に記載し、第2原図とともに「遺構カード」に貼り込んだ。この作業は遺構調査担当者が行った。写真の整理は現場での記録簿と照合しながらアルバム、スライドファイルに収納し検索用の写真台帳を作成した。遺物については洗浄、注記にとどめ、これ以上の整理は報告書作成に向けた整理作業にゆだねることとした。

以上の冬季整理作業は長野事務所で行い、報告書作成にかかわる本格的な整理作業は上田事務所にて行われた。

(2) 遺物の整理

遺物への注記は、遺跡記号、遺構記号・番号、または地区名・取り上げ番号を記し、玉類・小型石器・金属器等には観察及び保存処理の支障とならぬよう直接の注記はひかえた。注記作業は手書きのほか、インクジェットによる注記マシンを用いた。

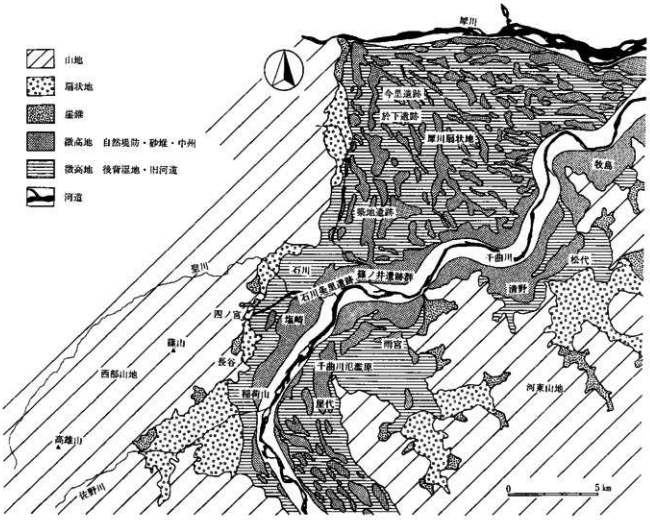
土器・石器は分類・選別ののち、接合・復原をへて実測を行った。金属製品は長野県立歴史館に委託し保存処理を施した。

第3節　遺跡周辺の環境

1　地理的環境　長野盆地南部の地形

長野盆地は南北長さ約40km、東西幅約8～10km、標高330～400mの紡錘形をした盆地である。西側は西部山地、東側は河東山地地域に明瞭に区分され、盆地周辺は流入する中小河川によって形成された扇状地で埋められている。現長野市街地の中心部は裾花川扇状地上に発達し、盆地南部は犀川扇状地からなっている。盆地を貫く千曲川はこれらの扇状地の発達に影響され、自由蛇行しつつも、最大の扇状地を造る犀川の押し出しによって盆地東側に追いやられている。

犀川扇状地は長野市犀口を扇頂とし、南東方向にゆるやかに傾斜（勾配4／1000m）して展開しており先端は千曲川と接し、南端は岡田川と接している。傾斜方向に比高差数m以内の微高地と微低地が交互に放射状に配列されており、微高地は犀川の網状流路によって形成された自然堤防や旧河道の砂堆・中州などで、砂・礫などの粗粒堆積物から構成されている。本報告書に収録した築地遺跡・於下遺跡・今里遺跡はみなこれら微高地上に立地するものと考えられる。また微低地は後背湿地や旧河道の部分である。微高地は畑地・果樹園に、微低地は水田等に利用されてきたが最近では土地利用から地形を復元することも容



第2図　長野盆地南部の地形

易ではなくなりつつある。

千曲川氾濫原上にも自然堤防・後背湿地がさまざまな微地形を形成しており、微地形は遺跡の分布にも大きな影響を与えているが、上流から観察すれば以下の通りである。

戸倉町から更埴市屋代にかけての氾濫原上には自然堤防・後背湿地の列が幾筋にも並び、千曲川の乱流の様子がうかがえ、文献にも流路の変更が記されている。更埴市稲荷山・八幡付近で千曲川は河床勾配を1／1000mと緩め、北西から北東方向へ流れの向きを変えつつ蛇行を始める。左岸では佐野川扇状地の東端に3mの崖があり、標高350mのラインをつくる。これも本流の側方侵食によって形成された崖である。

稲荷山以北では左岸側に八幡、稲荷山、塩崎、平久保、旧篠ノ井（東篠ノ井、横田）、東福寺にかけて大規模な自然堤防が形成されており、篠ノ井遺跡群もこの微高地上に展開している。また、その西側に発達する後背湿地は古くから水田として利用され、石川条里遺跡もその代表的なものの一つである。右岸側には雨宮、清野、松代、牧島にかけて自然堤防と後背湿地としての湾入低地が広がり、それぞれ大規模な集落遺跡と条里水田が展開している。

2　歴史的環境と周辺遺跡

(1)　旧石器時代・縄文時代

千曲川左岸地域では現在までのところ旧石器時代の遺跡は明瞭なかたちでは確認されていない。篠ノ井遺跡群の西にある篠山の山麓（標高380m）に立地する長野市鶴前遺跡（5－1）から黒曜石製のナイフ形石器が1点発見されている。これは2側辺に加工を施すいわゆる茂呂形ナイフ形石器で、旧石器時代後期（武蔵野台地第Ⅳ層～第Ⅲ層分化期相当）に属する資料であるが、残念ながら弥生時代後期の遺物包含層からの単独出土である。

旧石器時代の終末、御子柴文化に相当すると考えられる資料は、鶴前遺跡及び鶴前遺跡から200m程東の同じ篠山の山麓（標高471m）に位置する塩崎城見山砦遺跡（269）で確認されている。鶴前遺跡では弥生後期の遺物包含層中から頁岩製の柳葉形尖頭器（？）1点が出土した。塩崎城見山砦遺跡では安山岩製の木葉形尖頭器8点、打製石器8点、石鏃・掻削器12点の出土が確認されている。同遺跡では尾根の鞍部に2か所ほどの遺物集中区が想定されるが、中世の城郭施設によって破壊されている。

縄文時代は、早期前半に帰属する良好な柴落遺跡が確認されており、更埴市烏林遺跡（54）で、立野式押型文期の竪穴住居2軒、土坑6基が検出された。遺物は豊富で出土土器総点数1,077点、石器総点数6,106点にも及ぶ。早期中葉では烏林遺跡から貝殻沈線文土器（三戸式・田戸下層式）の破片が、後半期では烏林遺跡及び鶴前遺跡から条痕文土器及び絡条体圧痕文土器の破片が採集されている。縄文前期は鶴前遺跡で前葉～中葉期の竪穴住居1軒が検出されている。

また更埴市小坂西遺跡（52）で同時期と推定される竪穴住居1軒が確認され、本遺跡でもほぼ同時期の竪穴住居3軒と土坑5基、柱穴17基が検出された。これらの遺跡からは縄文尖底土器を含むいわゆる中道式以降の特異な土器が伴出している。該期に至ると自然堤防上の篠ノ井遺跡群（2－4）からも羽状縄文土器の破片が出土するようになり、千曲川右岸の長野市松原遺跡（74）で有尾式相当期の遺構が確認されている。

縄文中期は、前半の勝坂式併行期に帰属するとみられる土坑が鶴前遺跡で検出されている以外、遺構の検出例はない。中期では初頭段階に鶴前遺跡で五領ケ台式併行期の土器が採集されている他は後半期から後期にかけて遺構の発見例がなく、烏林遺跡と篠ノ井遺跡群（2）で加曽利E式併行期の土器、堀ノ内式併行期の土器が採集されているにすぎない。一方右岸地域では松原遺跡に中期初頭段階の集落跡が確認されたほか、更埴市屋代遺跡群（92）でも五領ケ台式併行期及び中期後半加曽利E式併行期の集落が発見さ

れている。縄文晩期は中葉まで遺構の発見がなく、初頭の隆帯文土器～佐野式併行期の土器が鳥林遺跡、小坂西遺跡で採集されている。

(2) 弥生時代

曇内Ⅰ期後半段階の西日本、東海地域の弥生土器群は、在地の縄文晩期氷式土器に共伴する。晩期氷式段階は、鶴前遺跡（5－1）の竪穴住居、篠ノ井遺跡群市営体育館地点（2－6）、同聖川堤防地点（2－2）の土坑のほかは遺構として未確認であるものの、土器は千曲川左岸・右岸の自然堤防上及び周辺山麓沿いの遺跡から広範囲に確認されている。土器の分布状況からは、この時期に活発な人の動きをみることができる。また晩期の土器群が出土した遺跡は、以降弥生集落が営まれており土地利用もこの段階を引き継いでいる。

篠ノ井遺跡群、塩崎遺跡群が立地する千曲川左岸の自然堤防上は、善光寺平では稲作受容期からいち早く居住域として営まれ、弥生時代を通して継続的に集落が展開する。伊勢宮遺跡（3－5）、聖川堤防地点（2－2）からは遠賀川系、条痕文系（樫王式、水神平式）の土器群が打製・磨製石庖丁などとともに出土している。条痕文系土器は左岸山麓沿いの池尻遺跡（48）、小坂西沖遺跡（53）、鶴前遺跡などにもみられ、左岸域に弥生文化の兆しが顕著に現れる。

更に曇内Ⅱ～Ⅲ期の段階になると、塩崎遺跡群市道松節小田井神社地点〈松節遺跡〉（3－3）の群をなす30基の木棺墓群、聖川堤防地点の竪穴住居・土坑が検出され、自然堤防上に集落と墓域が存在したことが確認された。これらの遺跡から出土した曇内Ⅱ期に平行する伊勢宮式土器は、縄文・沈線文などが施文される土器群であるが、壷・甕などの器形は弥生中期を通じて本地域に踏襲されていくものである。この段階の土器群は、人面付土器を出土した荒井遺跡（92－6）、大宮遺跡（91－3）など右岸自然堤防上でも多数出土し、地域的な広がりがみられる。

Ⅲ期の土器は、沈線文に加え櫛描文を多用するものが多くなり、Ⅲ期後半には栗林式土器として千曲川流域及び中部・関東地方まで広範囲で出土している。左岸・右岸の自然堤防上の聖川堤防地点、篠ノ井遺跡、荒井遺跡、松ケ崎遺跡、生仁遺跡などで竪穴住居が検出され、松原遺跡（74）では後期まで継続する集落となる。ほぼ弥生中期前半（Ⅲ期）で右岸左岸の自然堤防上（篠ノ井遺跡群）を集落、後背湿地（石川条里）を可耕地とする利用が始まったとみられる。

弥生中期（Ⅳ期）は遺跡数が増加し、その状況から自然堤防上の大規模拠点集落と、山麓沿いの中小規模周辺集落が形成されている。左岸では塩崎小学校地点（3－2）、聖川堤防地点、篠ノ井南253号線地点（3－4）などで竪穴住居30軒余りが検出され、右岸では松原遺跡からの三百数十軒の竪穴住居をはじめ島遺跡（98－1）や生仁遺跡（91－2）に数軒の住居がある。また松原遺跡からはこの地域独自の礫床墓が複数見つかっている。周辺山麓寄りでは、左岸の湯ノ入下遺跡（22）、右岸の大穴遺跡（99）、屋代清水遺跡（97）があり、どれもほぼこの時期に限定された集落である。松原遺跡は、防御的な施設とされる濠で周囲を取り囲む環濠集落であった。この時期には磨製、打製の石鏃が急増し、可耕地の拡大をめぐる周辺地域との争いがあったことが想像される。

農耕に関係する遺物では、湯ノ入下遺跡からのアズキの炭化種子、塩崎遺跡群一本木地籍からの炭化米、荒井遺跡からの炭化麦などいくつかの生産物が出土している。石川条里遺跡では水田遺構が検出され以後水田が継続している。時期は不確定であるが、松節遺跡からは鋼鐸と石製模造鉾が発見され、祭祀にかかわる場が自然堤防上にあったことをうかがわせる。また光林寺裏遺跡（10）からは鉄斧5点と勾玉が出土するなどこの地域で金属器が数多く使用されたとみることができ、松原遺跡出土の赤漆塗りの竪櫛、高坏の存在などと考え合わせると、階層差の現れを示唆するものである。

弥生後期（畿内Ⅴ期）に至ると、更に集落規模が拡大する。前代の栗林式土器文化に引き続き、この地域独自の中部高地型櫛描文・赤色塗彩を施す箱清水式土器を生み出し、善光寺平及び千曲川流域に文化圏を築く。この文化圏では箱清水式土器のほか、竪穴住居は隅丸の長方形で出入口部に小柱穴を並列する構造をもち、墓は主体部を円形の溝で囲んだ円形周溝墓を特徴としている。左岸自然堤防上では塩崎遺跡群、篠ノ井遺跡群から竪穴住居が100軒以上検出され、本書収録の篠ノ井遺跡群新幹線地点では円形周溝墓が複数群をなして検出されている。住居からは、鉄鏃、板状鉄刃鋤鍬先、ヤリガンナ等の鉄製品が、墓の副葬品として、銅・鉄銅・ガラス小玉が多数出土した。そして前代にもまして金属器が普及し、集落間もしくは集落内での階層差がみえ始める。右岸では屋代遺跡群、生仁遺跡、四ツ屋遺跡（76）に拠点集落が営まれ、竪穴住居40軒余りが検出されている。これらの遺跡からは卜占骨、刻骨など呪術関連の遺物が出土し、農耕祭祀が盛んであった様子を示している。

後期終末段階（Ⅵ期）では、他地域との交流が活発となる。篠ノ井遺跡群では箱清水式土器とともに東海・北陸地域の特徴的な土器が混在し、鶴前遺跡、外西川原遺跡（66）の特定の住居からは北陸地域の土器が主体を占めている。竪穴住居の平面形は、隅丸長方形から方形に変化し、墓は共同墓地的な円形周溝墓から聖川堤防地点にみる大形の方形周溝墓が出現する。また北平1号墳（182）は集落と隔絶した山の尾根上に立地している。土器の動きからは、全国規模での地域的な統合があったことが指摘されている。

(3)　古墳時代

弥生時代後期終末ないしは古墳時代初頭には、長野市北東部の山上に位置する墳丘墓として北平1号墳がある。主軸長17mで2つの埋葬主体が確認され、主体部からは東海地域に本貫をおく土器群のほかに勾玉、管玉、ガラス小玉が出土した。当該期で本遺跡周辺の善光寺平南部域では、今のところこの墳丘墓に匹敵する山頂の墓は確認されていないが、篠ノ井遺跡群聖川堤防地点には弥生後期以来の周溝墓群の中に大形で特殊な形態の墳丘墓をみることができる。

同遺跡群では弥生後期後半に集落域と墓域が環濠等によって隔絶され古墳前期まで生活領域として継続しているが、周溝墓には全長20mで方形周溝墓の陸橋部をわずかに突出させた形態のもの（SDZ9）や全長25mで陸橋部を大きく突出させた前方後方型周溝墓（SDZ3）が検出されている。埋葬主体は削平され詳細は不明であるが、北平1号墳と類似する副葬品が想定される。この前方後方型周溝墓に後続する時期に千曲川左岸山頂には古墳が出現する。

4世紀代の古墳では姫塚古墳（121）と同一の尾根上に川柳将軍塚古墳（122）がある。いずれも未調査のため不明な点が多いが、前者は全長32mの前方後方墳で、後者は全長93mの前方後円墳である。川柳将軍塚古墳では墳丘外から埴輪円筒棺の出土があり、また多くの小型鏡・各種玉類が出土品として伝世されている。更に5世紀の古墳として篠山の山麓裾部に全長53mの前方後円墳である中郷古墳（134）がある。

千曲川右岸では全長100mの前方後円墳である森将軍塚古墳（217）がある。森将軍塚古墳は盗掘をうけていたものの鉛載の三角縁神獣鏡や各種玉類、土器、金属器等が主体部から出土している。右岸では更に前方後円墳が築造され、全長66.7mの土口将軍塚古墳（201）→全長73.0mの倉科将軍塚古墳（206）→全長32.0mの有明山将軍塚古墳（218）へと継続している。このように善光寺平南部域の千曲川を挟んで点在する古墳に関しては、一連の首長系列ととらえる見方が有力で、姫塚古墳→森将軍塚古墳→川柳将軍塚古墳→土口将軍塚古墳→中郷古墳・倉科将軍塚古墳→有明山将軍塚古墳といった一地域圏の流れが想定されている。

長野市北東部の千曲川右岸には、1つの尾根上に4基の前方後円墳が並ぶ和田東山古墳群（174）がある。築造時期は4世紀中ごろから5世紀代にかけてのものと考えられ、当地域の首長系列を示すものと考

えられる。西に隣接する尾根上には大星山古墳群（175）があり、4世紀後半から5世紀後半にかけての方墳と円墳が確認されている。更に西の尾根には前方後円墳として大室18号墳（176）があり5世紀代の築造と考えられている。前方後円墳の密集地であった千曲川中流域では5世紀中ごろ～後半以降、前方後円墳が姿を消す状況となる。

長野市北東部の千曲川右岸では5世紀中ごろ以降大室古墳群（177 181）の形成が始まり、合掌型石室という特異な形態をもつ小形積石塚古墳が出現する。以後横穴式石室をもつ盛土墳へと変化をみせながら7世紀までその築造が継続し、500基を超える規模に膨れ上がる。ここにみられる積石塚古墳は、大室周辺のほか右岸地域に点在する。一方善光寺平南部の千曲川左岸には積石塚古墳や合掌型石室はまったくみられず、竪穴式石室をもつ直径33mの越将軍塚古墳（147）や直径32mの四之宮将軍塚古墳（132）など大形円墳が築造され、更に古墳後期には鵜萩古墳（139）や池ノ上古墳（130）のような横穴石室をもつ15m前後の中型円墳や、10m前後の小形円墳が多く築造され群集墳を構成するに至る。

千曲川と山を隔てた篠山山間地である信更地域では5世紀中ごろ以降と考えられる全長39mの前方後円墳の田野口大塚古墳（172）や直径32mの円墳赤田大塚1号墳（171）、直径30mの藤塚1号古墳・小山田藤塚古墳（169）などが築造されている。この信更地域では今のところ県内で最古の須恵器窯である松ノ山窯跡（234）が発見され、出土須恵器は陶邑古窯跡群で生産された須恵器と類似した特徴をもつことが指摘されている。

古墳前期の集落遺跡は弥生後期に比べると遺跡数、検出遺構数において少ないが、千曲川左岸、右岸ともに自然堤防上に展開している。左岸では篠ノ井遺跡群高速道地点（2）・市営体育館地点（2－6）において竪穴住居や掘立柱建物跡が検出され、塩崎遺跡群市道松節小田井神社地点（3－3）等でも竪穴住居が確認されている。また高速道石川条里遺跡では枅下（クネ）地点（1－1）を含め該期の大規模な祭祀跡が検出され、川柳将軍塚古墳や中郷古墳との関連が示唆される。

更に本遺跡からは水田跡も確認され、集落―耕地―祭祀―墓といった一連の時代様相の解明が可能となっている。右岸では松原遺跡（74）、生仁遺跡（91－2）、灰塚古墳（91－5）等に竪穴住居が確認されているが、城ノ内遺跡（92－2）、大境遺跡（92－1）等がある屋代遺跡群（92）、五輪堂遺跡（92－2）がある栗佐遺跡群（93）が集落の主体となっている。右岸域でも左岸と同様に本遺跡と同じ石鋤を出土した生仁遺跡が祭祀場と考えられ、更埴条里遺跡（101）で水田跡が検出されている。

古墳中期・後期の集落は、左岸では前期集落と同様に自然堤防上の各遺跡に遺構が確認されている。現在までの遺構の検出状況では篠ノ井遺跡群より塩崎遺跡群に密集度が高い。後期には自然堤防上の本遺跡群に加え、犀川扇状地の扇端部に位置する田中沖遺跡（14・15）にも集落が出現する。これら後期の集落は奈良・平安時代に継続している。

これに対し右岸では中期集落遺跡として森将軍塚古墳下の山麓寄りに屋代清水遺跡（97）があり竪穴住居12軒、掘立柱建物13棟等が検出されるなど、自然堤防上以外でも中条遺跡（83）等広域に展開している。また自然堤防上の遺跡では五輪堂遺跡をはじめ、未報告ではあるが屋代遺跡群仮称高速道地点にみる大規模集落跡や各種玉類などの特殊遺物の出土が確認されている。後期の集落では、自然堤防上の各遺跡の他に屋代遺跡群（81）などが加わり集落分布が更に拡大している状況がうかがえる。

(4) 古 代

屋代遺跡群（92）をはじめとして本遺跡周辺では大規模な発掘調査が相次ぎ、新たな所見が加えられつつある。しかし、多くの遺跡は整理途中でもあり、周辺遺跡の概況についても今後大幅な書き換えが必要になると思われるが、ここでは現時点で知られる様相についてまとめておくことにしたい。当地域は古代

においては更科郡の小谷郷に所属したとみられており、文献記録からはこの周辺にいたとされる個人名と式内社がいくつか知られる程度である。

これに対して考古学的な資料は度重なる発掘調査によってかなり蓄積されてきているが、この地区全体の構造や変遷については十分な検討がなされているとは言いがたいところもある。本遺跡の立地する東篠ノ井、塩崎地区の地形は巨視的にみれば自然堤防、後背低地、山手の緩斜面地帯、山地に区分される。後背低地では石川条里遺跡（1）の水田遺跡、自然堤防上は南から塩崎遺跡群（3）・篠ノ井遺跡群（2）の集落遺跡が並列し、山手の緩斜面地帯では鶴前遺跡（5－1）をはじめとする小規模な遺跡が点在する。また、山地内の小規模な平坦地では猪平遺跡（46）などの小集落遺跡も検出されている。ただし微視的にみると時期ごとに集落遺跡の立地場所や構造、地形変化に伴って水田域と居住域が変化している傾向もうかがえる。

集落遺跡の立地変化をみると奈良時代の集落は自然堤防の塩崎遺跡群をはじめとして鶴前遺跡などの山手の緩斜面地帯にも散在的に検出されているが、8世紀後半ごろから9世紀にかけてはほぼ自然堤防上に集中する傾向が知られる。ところが、9世紀後半ごろから再び鶴前遺跡などの山手の緩斜面地帯にも集落が出現するとともに、猪平遺跡などのように山中の小規模な平坦地でも小規模な集落遺跡が出現する様相がみられる。平安時代後半の遺跡については自然堤防上では集落が不明瞭となり、山手の緩斜面地帯を中心に小規模な集落遺跡が検出されているにすぎない。自然堤防上の遺跡が不明瞭な理由は遺跡立地の変化、あるいは遺構の遺存状況によるものかは判然としないが、平安時代の洪水砂層以上の遺構については中世も含めて井戸などの深い遺構しか検出されていない状況と関連すると思われる。

こうした集落立地変化に関しては概略の変化もうかがえるが、構造的な変化については詳細は明らかになっていない。その中で、塩崎遺跡群では「専司」とヘラ描きされた須恵器の出土、篠ノ井遺跡群高速道路地点や聖川沿いの長野市教育委員会調査地点（2－2）での9世紀代の大量の墨書土器の出土、そして本遺跡の塼仏や瓦塔出土は注目される。また、高速道石川条里遺跡北方の石川地区山手には古瓦出土が知られる上石川廃寺（24－1）、西側の山地の裏手には須恵器の窯がいくつかある。

水田遺構は石川条里遺跡から篠ノ井遺跡群の一部など後背低地を中心として広範囲に洪水砂層で埋没した水田遺構が検出されている。この水田は近世を除く全時代を通した中でもっとも広域に水田遺構が確認でき、しかも条里型地割によるものである。さらに地表面の条里型地割とはズレが認められる点も指摘されている。この水田の年代は洪水年代に関連して9世紀後半と考えられている。なお、この水田遺構は長野市教育委員会によって数地点が調査されており、その中で大畦脇では篠ノ井遺跡群と同文字種の刻天文字の墨書土器が検出されている。

上記のような遺跡立地の変化に加えて、いくつかの地形の変化や堆積環境に関する所見も得られている。一つには篠ノ井遺跡群（4）地点（2－2）の自然堤防背面にあたる場所では、古墳時代前期には居住遺構、平安時代には水田遺構、平安時代の前期末の洪水以後には再び居住遺構が検出される変遷が明らかにされた。この変化では少なくとも平安時代前半には水田域がかなり広範囲に広がることが知られるとともに、古墳時代以来の低地の埋没が進展してくる様相がみられる。なお、平安時代に最も水田域が拡大する背景には自然堤防上の長大な溝構築との関連が指摘されていたが、その一部を今回の調査でも確認することができた。溝は平安時代前期の住居を破壊し、周辺の自然堤防を水田化させたが火に途べる洪水で埋没し、水田も放棄されるのである。

二つ目には平安時代前期末にはこの地域を広範囲に覆う洪水がみられ、この洪水でかなり地形が変化した様相も知られているのである。この洪水は善光寺平南部から千曲川沿いの遺跡で広域に確認されているもので、各遺跡ともほぼ同時期ととらえられる。この洪水は本遺跡でも弥生時代以後では比較できる洪水

がみられない程の大規模なものであり、その年代は文献記録の仁和4（888）年の洪水記録に対比する説がある。考古学的には灰釉陶器年代を基準として検討が加えられていたため、従来では洪水年代と文献の年代のズレが指摘されていたが、近年では灰釉陶器年代の変更に伴って、ほぼ近似した年代であるとする見解が有力になりつつある。

この洪水砂層の成因については千曲川上流域で火山の水蒸気爆発に伴う泥流により千曲川が堰き止められ、それが氾濫したことにより起こったとする説が示されているが疑問視する意見もあって見解の一致はみていない。これらの問題は千曲川沿いの低地の遺跡調査の中で地震との関連や洪水のあり方の検討によって今後より明らかにされてくるものと期待される。この洪水の与えた影響については子細に明らかになっていないが、自然堤防上の長大な溝及び自然堤防上の水田も放棄され、低湿地域の埋没を一気に押し進めて平坦化を進めたとも思われる。自然堤防上の溝が放棄される理由については千曲川の流路の変更による取水が難しくなったことや、微地形の変化を伴ったものと推測され、旧来の配水システムに多大な影響を与えたものとも考えられる。

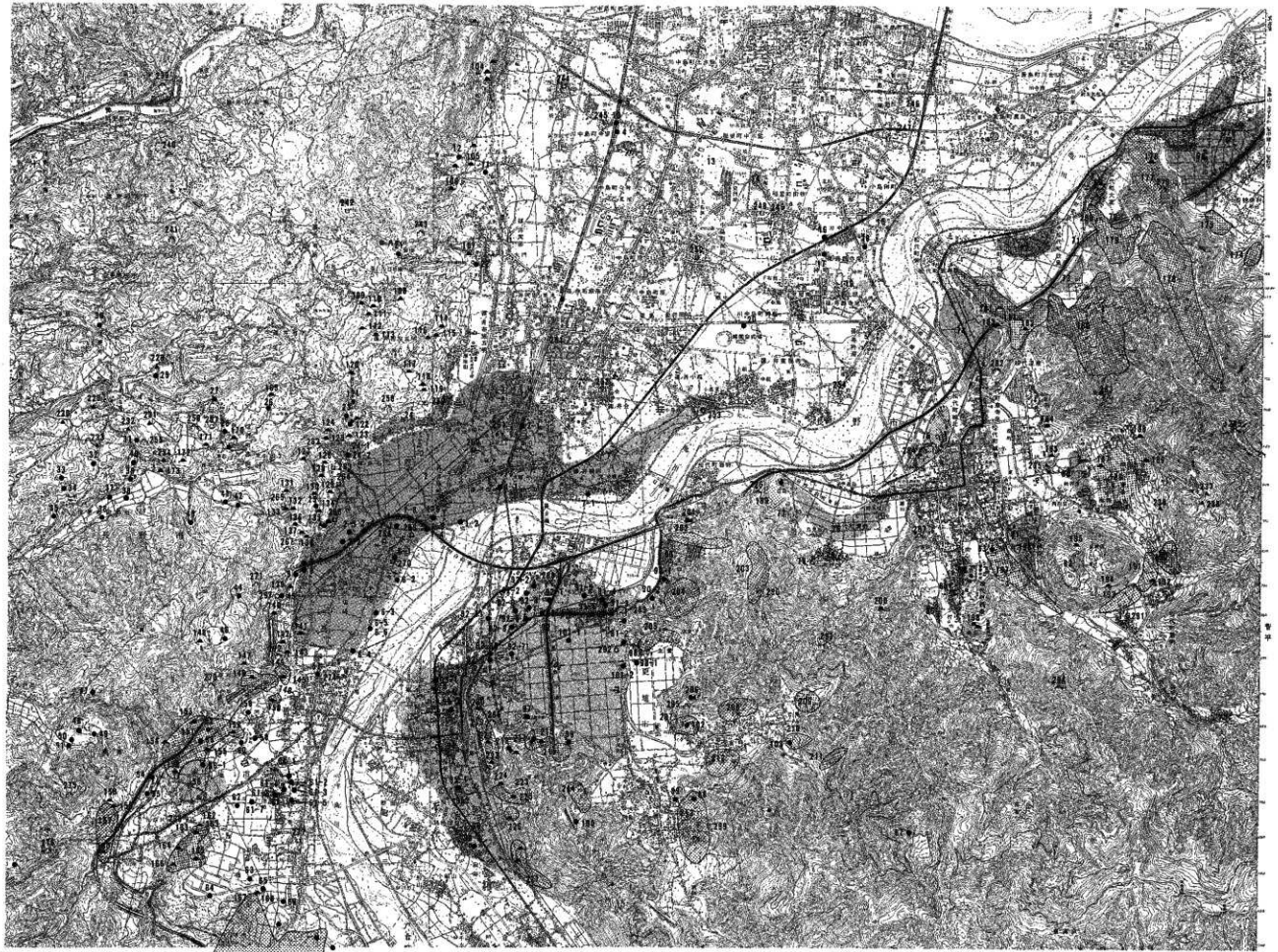
なお、塩崎地区の近隣地域でいくつか注目されている遺跡があるので簡単に触れておく。まず、千曲川対岸の屋代遺跡群では近年、高速道路工事に伴う発掘調査が実施され、多数の木簡が検出された。その内容は従来の知見を大幅に書き換えるものであり、埴科郡衙との関連も注目されている。また、この屋代遺跡群に近接して更埴条里遺跡、雨の宮廃寺がある。塩崎地区の南方の更埴市八幡地区の社宮司遺跡（63）では三彩が出土し、調査面積が小さいながらも掘立柱建物跡のみで竪穴住居跡がみられない遺跡として注目されている。官衙関連遺跡とも考えられているが、詳細は明らかになっていない。

(5) 中　世

中世では篠ノ井遺跡群から築地遺跡にかけては布施本庄、於下・今里遺跡周辺は布施御厨あるいは宮部御厨となる。文献記録によって様々なことが知られる一方で、中世遺跡調査例は断片的で当地域の様相はよくわかっていない。ここでは考古学的な状況を中心に触れておく。

今回の新幹線地点の調査以前には、自然堤防上では井戸跡や溝跡が若干知られているのみで、明確な建物跡などの検出された例はなかった。これは平安時代後半以後の遺跡が、非常に分かりづらくなっている点と関連し、中世では少なくとも住居はあったと考えられていたにすぎない。また、低地域でも中世水田遺構の残存状態が悪いため、調査されたものは犀川沿いの一部が知られていたのみであった。そのような状況のなかで今回の中世遺構の検出は非常に意義深いことといえるだろう。しかしながら氾濫原内の中世遺跡の全体像については依然としてあまり検討できていない。今のところ山手の緩斜面地帯では鶴前遺跡でわずかながら掘建柱建物跡が検出され、西側山地では山城である塩崎城見山砦遺跡や赤沢城の一部が調査されている。

なお、この周辺の山城としては、上記以外に塩崎城、所在地不明ながら『塩崎村史』に記載される犬平砦（麦藁城？）・薬師山砦、北に隣接した石川地区では石川城（262）・湯の入城（258）・二つ柳（259）などが知られる。館については詳細は明らかになっておらず、高速道石川条里遺跡内の館も従来全く知られていなかったものである。この周辺で確定されている館は少ないが、推定されている場所は四ノ宮地籍の四宮氏館、赤沢城下の赤沢氏館、自然堤防上の殿屋敷地点周辺や堀ノ内地籍、下くね地籍などがある。しかし、ほとんどが字名を中心として推測されているもので、根拠が弱い推定地も含まれる。隣接した石川地区では聖川上流の堀ノ内、垣内地籍、大当地籍、塚田地籍で館が推定されている。城以外では長谷寺背後の山から過去に経筒が出土していることが知られる。



第３図　長野盆地南部の遺跡分布図　　（1：50,000）

善光寺平南域の遺跡地名表

〈千曲川左岸遺跡〉

○遺物出土　◎遺構検出

番号	遺跡名	旧石器	縄文 草・早	縄文 前・中	縄文 後・晩	縄文 不明	弥生 中期	弥生 後期	弥生 不明	古墳 前期	古墳 中期	古墳 後期	古墳 不明	奈良	平安 前半	平安 中	平安 後半	平安 不明	中近世	文献
1	篠ノ井遺跡群				○		◎	◎		◎		◎		◎	◎	◎			◎	54、55、58
1-1	新幹線地点																			
1-2	大規模自転車道							◎		◎		◎		◎	◎				◎	84
1-3	聖川堤防				○		◎	◎		◎		◎		◎	◎				◎	107
1-4	聖徳橋地点					○			○				○	○				○		
1-5	市道山崎唐猫線						○	◎		◎				◎	◎					98
1-6	中部電力鉄塔							◎		◎										101
1-7	市営体育館				◎		◎	◎		◎				○	○					〃
1-8	高速道路地点						◎	◎		◎		◎		◎	◎	◎	◎			142
2	石川条里遺跡			◎			◎	◎		◎	◎			◎	◎				◎	53、54、55、88～91、97、103、106、110
2-1	新幹線地点														◎				◎	
2-2	耕下地点									◎	◎			◎	◎				○	89
2-3	消防塩崎分署							◎		◎	◎				◎					86
2-4	高速道路地点			◎			◎	◎		◎	◎			◎	◎				◎	143
3	祭地遺跡														◎	◎			◎	58
4	於下遺跡															◎			◎	
5	今里遺跡																			
6	塩崎遺跡群				○		◎	◎		◎	◎	◎		◎	◎		◎		○	
6-1	市道角間線地点				○			◎						◎	◎				◎	93
6-2	塩崎小学校地点						◎	◎		◎	◎	◎		◎	◎				○	73、79、82、83、108
6-3	市道松節小田井神社地点						◎	◎		◎	◎	◎		◎	◎				○	92、129
6-4	市道篠ノ井南253号線地点						◎	◎		◎	◎			◎	◎				○	103
6-5	伊勢宮遺跡						◎	◎												1、73
6-6	中条遺跡								○				○	○					○	100
7	横田遺跡群						○	○		○		◎		○	○	◎				
7-1	富士宮遺跡											◎				◎				94
8	鶴前遺跡				◎		◎	◎		◎	◎			◎	◎	◎			◎	60
8-1	中電鉄塔地点														◎					96
9	鶴巻七尋沿線遺跡						◎				◎	◎								59
10	長峰遺跡																		○	
11	湯沢尻遺跡					○			○											
12	光林寺裏山遺跡						○													127
13	上九反遺跡												○	○		○				
14	田牧居屋遺跡														◎		◎		◎	114
15	花立遺跡								○							○				
16	田中沖Ⅰ遺跡									◎		◎		◎	◎	◎			○	80
17	田中沖Ⅱ遺跡						○					◎		◎	◎	◎			○	104
18	八幡原遺跡																		○	
19	東川原遺跡													○				○		
20	南宮遺跡															◎				109
21	新田遺跡					○												○		
22	寺内遺跡					○			○				○							
23	湯の入上遺跡						◎	○	○											
24	石川方田遺跡群								○				○							
24-1	上石川遺跡群								○				○							
24-2	上石川廃寺跡														◎					
25	上見林遺跡					○										◎				113
26	小山田池遺跡						○													

番号	遺跡名	旧石器	縄文				弥生			古墳				奈良	平安				中近世	文献
			草・早	前・中	後・晩	不明	中期	後期	不明	前期	中期	後期	不明		前半	中	後半	不明		
27	寺屋敷遺跡						○													
28	卒塔原遺跡					○														
29	鹿の入遺跡					○														
30	大崎遺跡																	○		
31	天神山遺跡					○														
32	かじか沢遺跡					○			○				○	○				○		
33	瀬原遺跡	○																		
34	天池遺跡																	○		
35	寺平遺跡					○												○		
36	家の入遺跡																	○		
37	釜上遺跡					○												○		
38	大清水遺跡					○														85
39	大峰遺跡					○			○				○	○				○		〃
40	平林遺跡																	○		
41	宮下遺跡			○	○						◎			◎	◎					116
42	薬山遺跡																	○		
43	戸口遺跡																	○		
44	下辺遺跡								○											
45	長谷遺跡								○				○	○				○		
46	猪平遺跡		○	◎											◎	◎			◎	116
47	篠山遺跡		○	○																
48	池尻遺跡		○	○	◎															68、128
49	佐野山遺跡	○																		
50	佐野山遺跡			○																44
51	峠遺跡		○																	〃
52	小坂西遺跡		○	◎	○			◎											◎	59
53	小坂西沖遺跡				○															44
54	鳥林遺跡		◎					○							◎					59
55	塚塚遺跡																			44
56	桑原遺跡群																			
56-1	返町遺跡						○					○								44、52
57	大牧遺跡																			44
58	元町遺跡											○								〃
59	治田池下遺跡		○	○																〃
60	治田池畔遺跡						○													44、52
61	八幡遺跡群																			
61-1	志川遺跡											○								44
61-2	六反田遺跡											○								〃
61-3	よこまくり遺跡											○								〃
61-4	れんでば遺跡											○								〃
61-5	よこみぞ遺跡											○								〃
61-6	青木遺跡														○					9、20
61-7	北稲付遺跡														◎					26
62	真光寺遺跡			○																44
63	社宮司遺跡														◎					30
64	白石遺跡																		◎	40
65	宮川遺跡							◎												44
66	外西川原遺跡							◎		◎		◎							◎	40

番号	遺跡名	旧石器	縄文 草・早	縄文 前・中	縄文 後・晩	縄文 不明	弥生 中期	弥生 後期	弥生 不明	古墳 前期	古墳 中期	古墳 後期	古墳 不明	奈良	平安 前半	平安 中	平安 後半	平安 不明	中近世	文献
67	町川田遺跡							◎												95
68	川田条里遺跡				◎		◎	◎		◎	◎	◎			◎				◎	54、55、88
69	大窪遺跡								○				○	○				○		
70	村東山手遺跡			◎	◎														○	54、55
71	小滝遺跡																		◎	54、57
72	一等枚遺跡								○				○	○				○		
73	牧島遺跡																	○		
74	松原遺跡						◎	◎				◎		◎	◎	◎			◎	54、55、56、105、111、112
75	松代城北遺跡																	○		
76	四ツ屋遺跡							◎		◎	◎				◎					47、49、51、69、73、83
77	宮村遺跡																	○		
78	大村遺跡								○									○		
79	林正寺遺跡																		○	
80	般若寺遺跡					○			○				○	○				○		
81	屋地遺跡						◎	◎				◎		◎	◎		◎			73、102、118
82	皆神山遺跡					○														
83	中条遺跡							◎		◎	◎	◎			◎					
84	市場遺跡								○				○	○				○		
85	中村遺跡								○				○	○				○		81
86	鹿島遺跡					○														
87	百瀬遺跡	○	○																	
88	県山遺跡	○																		
89	中ノ宮遺跡						○													44、52
90	土口遺跡群																			
90-1	土口遺跡																		◎	
90-2	日ノ尾遺跡				○		○													
91	雨宮遺跡群																			
91-1	唐崎遺跡						○													44、52
91-2	生仁遺跡				○		◎	◎		◎	◎	◎		◎	◎		◎		◎	17、38、73
91-3	大宮遺跡				○							◎								
91-4	雨宮廃寺跡																			73
91-5	灰塚遺跡									◎		○								18
91-6	大日堂遺跡																			73
92	屋代遺跡群			◎	◎		◎	◎		◎	◎	◎		◎	◎	◎			◎	56、57、58、64
92-1	大境遺跡			○				◎		◎		○							◎	43、58
92-2	城ノ内遺跡				○		○	◎		◎	◎	◎		◎	◎	◎			◎	11、16、40、50、73
92-3	松ケ崎遺跡						○												◎	40
92-4	町浦遺跡														◎					〃
92-5	北中原遺跡				○					○	○				◎					〃
92-6	荒井遺跡						◎												◎	6
92-7	大塚遺跡											○				◎				7
92-8	馬口遺跡													◎	◎	○				8、10、21、31、33、35、36、40、73
92-9	郷津遺跡						○	◎												40
92-10	古道遺跡							◎												〃
92-11	地之目遺跡・一丁田遺跡											◎							◎	59

番号	遺跡名	旧石器	縄文 草・早	縄文 前・中	縄文 後・晩	縄文 不明	弥生 中期	弥生 後期	弥生 不明	古墳 前期	古墳 中期	古墳 後期	古墳 不明	奈良	平安 前半	平安 中	平安 後半	平安 不明	中近世	文献
93	栗佐遺跡群																			
93-1	北村遺跡									◎										40
93-2	五輪堂遺跡						○	◎		◎	◎	◎		◎	◎					22、23、32、39、73、133
94	小島遺跡群											○								37
95	打沢遺跡群											○								
95-1	大臥遺跡							○												
96	疫病遺跡群			○	○		○	○												
96-1	西王子遺跡											○								
97	屈代清水遺跡				○		◎			◎	◎				◎				◎	41
98	生堂遺跡群																			
98-1	島遺跡						◎								◎					40、120、122
99	大穴遺跡		○	○	○		◎	◎				◎			◎					57、58
100	岡地清水遺跡											◎			◎					57
101	更埴条里遺跡				◎		○	◎							◎				◎	34、56、57、58、70、73
101-1	町田遺跡																◎			
101-2	本誓寺遺跡														○					29
102	北山遺跡																			
103	矢ノ口遺跡																			

〈千曲川流域古墳〉

△は墳形などにより時期を推測

番号	遺跡名	古墳 前期	古墳 中期	古墳 後期	古墳 不明	文献
104	鎧村古墳			◎		72、73
105	境内古墳群		◎	◎		72
106	岡田義古墳			◎		〃
107	寺内古墳			◎		〃
108	上大久保古墳			◎		〃
109	北石津古墳			△		〃
110	鶯籠石古墳			◎		〃
111	六部塚古墳			○		〃
112	将軍塚古墳			◎		〃
113	南石津古墳			◎		〃
114	海道北山古墳			◎		〃
115	大平1号古墳			△		〃
116	布施塚古墳		△			72、73
117	柳沢1号古墳			△		72
118	山畑新田古墳			△		〃
119	藤塚古墳			△		〃
120	湯ノ入古墳群			△		〃
121	姫塚古墳	◎				72、73
122	川柳将軍塚古墳	◎				34、67、73、133、138
123	宮下1号古墳			△		72
124	飯綱社古墳	◎				15、72
125	大和田1号古墳			△		72

番号	遺跡名	古墳 前期	古墳 中期	古墳 後期	古墳 不明	文献
126	城古墳			◎		72
127	鎧坂古墳群			◎		〃
128	虚空蔵平1号			△		〃
129	丸山・岡内古墳			◎		48
130	池ノ上古墳			◎		72
131	薬師山古墳群			△		〃
132	四之宮将軍山古墳		△			〃
133	八ツ巣1号古墳			◎		〃
134	中郷古墳		△			136
135	中郷古墳陪塚		△			72
136	大伝母古墳			◎		〃
137	小日向古墳			◎		〃
138	秋葉山古墳			◎		〃
139	鶴蔵古墳			◎		〃
140	平古墳			◎		〃
141	八幡宮古墳		◎			〃
142	城山古墳			◎		〃
143	東谷古墳			◎		〃
144	東谷古墳群			△		〃
145	湯ノ崎1号墳			◎		13

番号	遺跡名	古墳 前期	古墳 中期	古墳 後期	古墳 不明	文献
146	塚穴古墳群			◎		
147	越将軍塚古墳		◎			44、73
148	猫山古墳		◎			44、72
149	湯ノ崎古墳群			△		〃
150	一本松古墳			◎		〃
151	小坂古墳群			△		〃
152	後見塚古墳			△		〃
153	遠見塚古墳			△		〃
154	宝殿1号古墳			△		〃
155	小坂塚古墳			△		〃
156	塚ノ口1号古墳			△		〃
157	吹上塚古墳群	△	◎	△		〃
158	吹上塚西古墳		◎			〃
159	吹上塚東古墳	△				〃
160	中原古墳			△		〃
161	八幡古墳群		◎	◎		〃
162	矢先山1号古墳		◎			〃
163	矢先山下古墳				△	〃
164	山ノ神古墳				△	〃
165	鐘塚古墳			◎		〃

番号	遺跡名	古墳 前期	中期	後期	不明	文献
166	こがの峯1号			△		44、72
167	横枕山古墳群		◎			〃
168	丸山古墳			△		〃
169	小山田藤塚古墳			△		〃
170	白山塚古墳		◎			
171	赤田大塚古墳		◎			
172	荊野口大塚古墳	◎				134
173	榎田塚古墳		◎			
174	和田東山古墳群	◎				
175	大足山古墳群	◎	◎			63
176	大塚18号墳	△				
177	大室北山支群			◎		2～5、72、73、87
178	大室大室谷支群	◎	◎			〃
179	大宗霞城支群		◎			〃
180	大室北谷支群		◎			〃
181	大宗金井山支群		◎			〃
182	北平1号墳	◎				63
183	松原1号墳		◎			54
184	長礼山1・2号墳		◎			72、73、78、86、140
185	天王山古墳			◎		72
186	東条古墳群			◎		
187	竹原笹塚古墳			◎		73、137
188	雷岡王塚古墳			◎		73、138
189	鹿の沢古墳			◎		72
190	牧内古墳群			◎		〃
191	御塚古墳群			◎		〃

番号	遺跡名	古墳 前期	中期	後期	不明	文献
192	桑根井空塚古墳			◎		72、139
193	村北古墳群		◎	◎		72
194	小丸山古墳			◎		
195	皆神山西・北麓古墳群			◎		72
196	南大平古墳			◎		
197	虫歯・宮崎古墳群			◎		72
198	舞鶴山1・2号墳		◎	◎		72、73
199	清野古墳群			◎		72
200	母袋山古墳			◎		〃
201	土口将軍塚古墳		◎			73、117
202	土口北山古墳群			◎		
203	並平古墳群				○	
204	土口古墳群			◎		44、72
205	生雲北山古墳群			◎		〃
206	倉科将軍塚古墳		◎			44、73
207	倉科北山古墳群			△		44、72
208	大峰古墳群		◎	◎		〃
209	竹尾古墳群			△		〃
210	矢ノ口古墳群			△		〃
211	杉山古墳群		△	◎		〃
212	口端古墳群			△		〃
213	森古墳群		◎	◎		〃
214	岡地古墳群			◎		〃
215	大穴古墳群			◎		44、58、72
216	将軍塚古墳群		◎	◎		19、42

番号	遺跡名	古墳 前期	中期	後期	不明	文献
217	森将軍塚古墳	◎				19、42
218	有明山将軍塚古墳			△		44、73
219	小島古墳群			△		44、72
220	一宮御岳神社古墳		◎			〃
221	東山神社古墳		◎			〃
222	お坊塚古墳				△	〃
223	打沢古墳群			△		〃
224	打沢古墳			△		〃
225	姥塚古墳		◎			〃
226	皇空蔵古墳群			△		〃
227	寂蒔古墳群			△		〃

〈窯跡〉

番号	遺跡名	古墳後期	奈良	平安前期	文献
228	鹿の入窯跡			○	72
229	前田窯跡			○	〃
230	原市場窯跡			○	〃
231	鍋窯窯跡			○	〃
232	いもじゃくぼ窯跡			○	〃
233	城の腰窯跡			○	〃
234	松ノ山窯跡	◎			72・73
235	天王山窯跡			○	72
236	牧内窯跡			○	〃
237	滝本窯跡			○	〃
238	池ノ平窯跡			○	〃

〈山城1〉

番号	遺跡名	文献
239	笹平城	71
240	須立城	〃
241	新山城	77
242	有旅城	71
243	篠の城	〃
244	内後館	71・135
245	於下館	61・71
246	名称なし	135
247	大塚館	71・135
248	東昌寺館	—
249	広田城	71
250	富部館	—
251	布施城	71
252	横田城	71・135
253	小森館	71
254	杵淵館	71・135
255	和田城	71・77・135
256	西の城	71・135
257	車の城	〃
258	湯の入城	—
259	二つ柳城	—

番号	遺跡名	文献
260	塚田	—
261	大塔城	71・135
262	石川城	—
263	堀の内	—
264	囲内	—
265	薬山砦	65
266	四宮館	〃
267	見山砦	59
268	善右エ門屋敷	65
269	下耕	—
270	殿屋敷	—
271	塩崎城	71・135
272	赤沢城	71
273	小板城	〃
274	稲荷山城	71・135
275	龍王城	71
276	佐野城	71・135
277	八幡松田館	71
278	川田氏館	〃
279	古山城	〃

番号	遺跡名	文献
280	霞城	71・135
281	金井山城	〃
282	寺尾城	〃
283	尼飾城	〃
284	松代城	71
285	奇妙山砦	〃
286	妻女山城	—
287	竹山城	71
288	屋代古城	—
289	唐崎山城	71・135
290	天城城	71
291	平林館	〃
292	生仁館	38・71・135
293	鞍骨城	71・135
294	ノロシ山城	71
295	鷲尾城	71・135
296	屋代城	45・71・135
297	長谷　経塚	52・119・130
298	矢崎山　経塚	〃
299	大峰　経塚	125・130

引用・参考文献（五十音順）

1 磯崎正彦 1959 『長野県篠ノ井市伊勢宮遺跡の古式弥生土器』「信濃」Ⅲ-11-6

2 大塚初重 1962 『信濃大室古墳群』「古代学研究」30

3 大塚初重 1969 『信濃大室古墳群』「考古学集刊」4-3

4 大塚初重・小林三郎・石川日出志 1993 『信濃大室　積石塚古墳の研究　Ⅰ』

5 大室古墳群調査会 1970 『信濃大室古墳群北支群緊急発掘調査報告書』

6 岡田正彦 1969 『長野県更埴市荒井遺跡採集の一括資料』「信濃」Ⅲ-21-11

7 岡田正彦 1970 『長野県更埴市屋代大塚遺跡調査報告』「信濃」Ⅲ-22-4

8 岡田正彦 1971 『長野県更埴市屋代馬口遺跡調査報告』「信濃」Ⅲ-23-5

9 岡田正彦・竹内三千夫 1972 『更埴市大字八幡青木遺跡発掘調査報告』「長野県考古学会誌」14

10 岡田正彦 1973 『長野県更埴市馬口遺跡出土の緑釉手付水瓶』「長野県考古学会誌」5

11 岡田正彦 1977 『城之内遺跡』「日本考古学年報24」

12 蒲原宏行・高崎光司ほか 1979 『善光寺平南部における古墳の実測調査』「信濃」Ⅲ-31-12

13 桐原健 1966 『長野県更埴市稲荷山湯の崎一本松古墳覚書』「信濃」Ⅲ-18-9

14 桐原健 1976 『川柳将軍塚古墳の再認識』「千曲」23

15 桐原健・松尾昌彦 1984 『長野県飯綱社古墳の出土遺物』「信濃」Ⅲ-36-4

16 更埴市教育委員会 1961 『城ノ内―信州千曲河岸の土師式集落の研究』

17 更埴市教育委員会 1969 『生仁』

18 更埴市教育委員会 1970 『下条・灰塚遺跡―長野県更埴市の古代集落遺跡発掘調査報告書』

19 更埴市教育委員会 1973 『長野県森将軍塚古墳』

20 更埴市教育委員会 1977 『長野県更埴市大字八幡青木遺跡発掘調査報告書』

21 更埴市教育委員会 1978 『屋代馬口K―長野県更埴市屋代遺跡群馬口K遺跡緊急発掘調査報告書―』

22 更埴市教育委員会 1981 『更埴市栗佐遺跡群五輪堂遺跡―長野県屋代南高等学校地点試掘確認調査報告書―』

23 更埴市教育委員会 1982 『更埴市栗佐遺跡群五輪堂遺跡Ⅱ―長野県屋代南高等学校地点発掘調査報告書―』

24 更埴市教育委員会 1983 『長野県更埴市横沢遺跡群Ⅰ―横沢地区は場整備に伴う発掘調査報告書―』

25 更埴市教育委員会 1984 『長野県更埴市横沢遺跡群Ⅱ―横沢地区は場整備に伴う発掘調査報告書―』

26 更埴市教育委員会 1984 『長野県更埴市八幡遺跡群北稲付遺跡―西部沖は場整備に伴う発掘調査報告書―』

27 更埴市教育委員会 1985 『長野県更埴市南沖遺跡Ⅱ―長野信用金庫屋代支店建設に伴う発掘調査報告書―』

28 更埴市教育委員会 1985 『長野県更埴市横沢遺跡群Ⅲ―横沢地区は場整備に伴う発掘調査報告書―』

29 更埴市教育委員会 1985 『本誓寺遺跡調査の概要』

30 更埴市教育委員会 1986 『長野県更埴市社宮司遺跡―西部沖県営は場整備に伴う発掘調査報告書―』

31 更埴市教育委員会 1986 『屋代遺跡群馬口遺跡―長野県屋代高等学校改築に伴う発掘調査報告書―』

32 更埴市教育委員会 1987 『更埴市栗佐遺跡群五輪堂遺跡Ⅳ―長野県屋代南高等学校特別教室棟建設に伴う発掘調査報告書―』

33 更埴市教育委員会 1987 『屋代遺跡群馬口遺跡Ⅱ--長野県屋代高等学校体育館建設に伴う発掘調査―』

34　更埴市教育委員会　1988『長野県更埴市屋代遺跡群・更埴条里水田址詳細分布調査報告書—』

35　更埴市教育委員会　1988『屋代遺跡群馬口遺跡Ⅲ—長野県屋代高等学校プール等建設に伴う発掘調査報告書—』

36　更埴市教育委員会　1989『長野県更埴市屋代遺跡群馬口遺跡Ⅳ—長野県屋代高等学校合宿所建設に伴う発掘調査報告書—』

37　更埴市教育委員会　1989『長野県更埴市小島遺跡—都市計画道路駅前線工事に伴う発掘調査報告書—』

38　更埴市教育委員会　1989『長野県更埴市　生仁遺跡Ⅲ—県営雨宮地区落水防除事業に伴う発掘調査報告書—』

39　更埴市教育委員会　1990『更埴市粟佐遺跡群五輪盆遺跡Ⅲ—屋代南高校改築に伴う発掘調査報告書—』

40　更埴市教育委員会　1990『平成元年度　更埴市埋蔵文化財調査報告書』

41　更埴市教育委員会　1992『屋代清水遺跡—県立歴史館建設に伴う発掘調査報告書—』

42　更埴市教育委員会　1992『史跡　森将軍塚古墳—保存整備事業発掘調査報告書—』

43　更埴市教育委員会　1994『長野県更埴市屋代遺跡群　大境遺跡Ⅳ・Ⅴ　中部電力雨宮変電所・鉄塔建設に伴う発掘調査報告書』

44　更埴市史編纂委員会　1994『更埴市史　第1巻　古代・中世編』

45　更埴市教育委員会　1995『長野県更埴市　屋代城跡範囲確認調査報告書』

46　小林秀夫　1975『善光寺平における積石塚古墳の諸問題』「長野県考古学誌」21

47　小林秀夫　1976『長野市四ツ谷特殊遺構の遺物』「信濃考古」36

48　笹沢浩　1971『長野市篠ノ井國内古墳出土の壁画』「長野」38

49　笹沢弘　1975『長野市四ツ谷遺跡出土の後期弥生式土器』「信濃考古」39

50　笹沢弘・岡田正彦　1978『更埴市城之内遺跡』「信濃考古」27

51　佐藤慶二　1977『長野市四ツ谷遺跡出土の須恵器』「長野県考古学会誌」29

52　更級埴科地方誌刊行会　1978『更級埴科地方誌　第2巻　原始古代中世編』

53　財）長野県埋蔵文化財センター　1989『長野県埋蔵文化財センター　年報5』

54　財）長野県埋蔵文化財センター　1990『長野県埋蔵文化財センター　年報6』

55　財）長野県埋蔵文化財センター　1991『長野県埋蔵文化財センター　年報7』

56　財）長野県埋蔵文化財センター　1992『長野県埋蔵文化財センター　年報8』

57　財）長野県埋蔵文化財センター　1993『長野県埋蔵文化財センター　年報9』

58　財）長野県埋蔵文化財センター　1994『長野県埋蔵文化財センター　年報10』

59　財）長野県埋蔵文化財センター　1994『中央自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13　更埴市内・長野市内その1　鳥林遺跡　小坂西遺跡　鶴萩七尋岩除遺跡　赤沢城跡　塩崎城見山砦遺跡　地之目遺跡　一丁目遺跡』

60　財）長野県埋蔵文化財センター　1994『中央自動車道　埋蔵文化財発掘調査報告書14　長野市内その2　鶴前遺跡』

61　財）長野県埋蔵文化財センター　1995『長野県埋蔵文化財センター　年報11』

62　財）長野県埋蔵文化財センター　1996『長野県埋蔵文化財センター　年報12』

63　財）長野県埋蔵文化財センター　1996『上信越自動車道　埋蔵文化財発掘調査報告書7　長野市内　その5　大星山古墳群北平1号墳』

64 財）長野県埋蔵文化財センター　1996『上信越自動車道　埋蔵文化財発掘調査報告書23　更埴市内　その二　長野県屋代遺跡群出土木簡』

65 塩崎村史刊行会　1971『塩崎村史』

66 信濃史料刊行会　1956『信濃史料　第1巻（上・下）』

67 下平秀夫　1968『川柳将軍塚古墳発見の埴輪円筒棺をめぐって』「信濃」Ⅲ-20-4

68 下平秀夫　1970『長野県更埴市桑原池尻遺跡調査概報(2)』「信濃」Ⅲ-22-4

69 竹丸三千夫　1974『長野市松代町清野四ツ谷遺跡の古式土師』「信濃」Ⅲ-26-2

70 長野県教育委員会　1968『地下に発見された更埴条里遺構の研究』

71 長野県教育委員会　1983『長野県の中世城郭跡　分布調査報告書』

72 長野県史刊行会　1981『長野県史　考古資料編　全1巻(1)　遺跡地名表』

73 長野県史刊行会　1982『長野県史　考古資料編　全1巻(2)　主要遺跡（北・東信編）』

74 長野県史刊行会　1986『長野県史　通史編　第2巻　中世』

75 長野県史刊行会　1988『長野県史　考古資料編　全1巻(4)　遺構・遺物』

76 長野県史刊行会　1989『長野県史　通史編　第1巻　原始・古代』

77 長野県町村誌刊行会　1985『長野県町村誌』

78 長野市教育委員会　1974『長礼山2号墳発掘調査略報』

79 長野市教育委員会　1978『塩崎遺跡群―塩崎小学校地点遺跡　第1次調査報告―』

80 長野市教育委員会　1978『田中沖遺跡　第1次発掘調査概報』

81 長野市教育委員会　1978『中村遺跡―松代西条小学校地点遺跡の調査報告』

82 長野市教育委員会　1979『塩崎遺跡群―塩崎小学校地点遺跡　第2次調査報告―』

83 長野市教育委員会　1980『四ツ屋遺跡（1～3次）・徳間遺跡・塩崎遺跡群（第3次）』

84 長野市教育委員会　1980『篠ノ井遺跡群―大規模自転車道地点遺跡の調査報告』

85 長野市教育委員会　1981『箱清水遺跡・大峯遺跡・大清水遺跡』

86 長野市教育委員会　1981『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』

87 長野市教育委員会　1981『長野・大室古墳群―分布調査報告書―』

88 長野市教育委員会　1983『浅川扇状地遺跡群両迎田遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構』

89 長野市教育委員会　1984『石川条里的遺構・上駒沢遺跡』

90 長野市教育委員会　1985『石川条里的遺構(3)　（付・上駒沢遺跡）』

91 長野市教育委員会　1985『長野市二ツ柳堀没水田址の調査』（『信濃』Ⅲ-37-9）

92 長野市教育委員会　1986『塩崎遺跡　Ⅳ―市道松節―小田井神社地点遺跡―』

93 長野市教育委員会　1987『塩崎遺跡　Ⅴ　殿屋敷遺跡―角間地区市道改良事業地点』

94 長野市教育委員会　1987『横田遺跡群　富士宮遺跡　鉄塔建設に伴う緊急発掘報告』

95 長野市教育委員会　1988『町川田遺跡』

96 長野市教育委員会　1989『長野市塩崎鶴前遺跡・塩崎城跡―中部電力㈱　送電用鉄塔建設に伴う発掘調査報告書―』

97 長野市教育委員会　1989『石川条里遺跡(4)』

98 長野市教育委員会　1989『篠ノ井遺跡群Ⅱ―市道山崎唐猫線地点―』

99 長野市教育委員会　1989『松代城跡　―平成元年度発掘調査概報―』

100 長野市教育委員会　1989『中条遺跡―長野県松代高等学校体育館建設事業地点―』

101 長野市教育委員会　1990『篠ノ井遺跡群Ⅲ―中部電力北信坂城線鉄塔地点・長野市営塩崎体育館地

点一』

102　長野市教育委員会　1990『屋地遺跡Ⅱ—国補中小河川姫川改修事業地点』

103　長野市教育委員会　1991『塩崎遺跡群(6)・塩崎遺跡群市道篠ノ井南253号線地点・石川条里遺跡(5)—石川条里遺跡消防塩崎分署地点—』

104　長野市教育委員会　1991『田中沖遺跡Ⅱ　長野市神明広田区画整備事業地点』

105　長野市教育委員会　1991『松原遺跡　長野南農業協同組合集荷場施設建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

106　長野市教育委員会　1991『石川条里遺跡(6)　—篠ノ井西部地区県営圃場整備事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書』

107　長野市教育委員会　1992『篠ノ井遺跡群(4)　—犀川堤防地点—』

108　長野市教育委員会　1992『塩崎遺跡群(7)塩崎小学校・水泳プール改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

109　長野市教育委員会　1992『南宮遺跡』

110　長野市教育委員会　1993『石川条里遺跡(7)　長野市北野土地区画整備事業　県営住宅みこと月団地建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

111　長野市教育委員会　1993『松原遺跡Ⅱ—市道松代東111号線地点』

112　長野市教育委員会　1993『松原遺跡Ⅲ　主要地方道中野更埴線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

113　長野市教育委員会　1993『上見林遺跡　主要地方道長野信州新線建設に伴う埋蔵文化崎発掘調査報告書』

114　長野市教育委員会　1993『田牧居場遺跡—長野県住宅供給公社糯黒住宅団地造成地地点—』

115　長野市教育委員会　1993『史跡　松代藩主真田家墓所—宗教法人長国寺庫裏建設に係る現状変更に伴う発掘調査報告書—』

116　長野市教育委員会　1994『緒平遺跡・宮ノ下遺跡—更科カントリークラブ造成事業に伴う緊急発掘調査報告書—』

117　長野市・更埴市教育委員会　1987『土口将軍塚古墳—重要遺跡確認緊急調査—』

118　日本窯業史研究所　1977『長野市松代　屋地遺跡』

119　林　和男　1985『欠作山経塚出土の経筒』「長野」123

120　丸山敏一朗　1974『善光寺平南縁の自然堤防上の遺跡について』「信濃」Ⅲ-26-5

121　丸山敏一朗　1976『善光寺平南域の古墳立地について』　「信濃」Ⅲ-28-4

122　丸山敏一朗　1976『更埴市島・道前の土壙墓』「長野県考古学会誌」26

123　宮下健司　1979『長野県川柳将軍塚古墳をめぐる古文献』　「信濃」Ⅲ-31-9

124　宮下健司　1985『長野県石川条里周辺における原始・古代の空間構造』「信濃」Ⅲ-37-9

125　宮本邦基　1934『長谷寺発掘金覚の経塚に就て』「信濃」Ⅰ-3-6

126　宮本邦基　1939『信濃国篠ノ井町発見の子持ち勾玉』「中部考古学会報」4-1

127　本村豪章　1972『長野市篠ノ井光林寺蔵出土遺物の研究』「MUSEUM」254

128　森嶋稔・米山一政　1968『長野県更埴市桑原池尻遺跡調査報告(1)』「上代文化」34

129　森嶋稔　1976『銅鐸及び石製模造鉄』「篠ノ井指定文化財調査報告書」

130　森嶋稔　1981『信濃経塚資料にみる二・三の課題』「信濃」Ⅲ-33-12

131　森本六爾　1929『川柳将軍塚の研究』

132 矢口忠良　1968『長野県更埴市桑原地区太田原向山古窯址出土須恵器について』「信濃」III-20-7

133 矢島宏雄　1978『馬骨を出土した更埴市五輪堂遺跡』「長野県考古学会誌」31

134 矢中隆・山田昌久　1987『長野市田野口大塚古墳の測量調査』「信濃」III-39-4

135 湯本軍一責任編集　1980『日本城郭体系　第8巻　長野・山梨』新人物往来社

136 米山一政　1966『中郷神社前方後円墳』「篠ノ井指定文化財調査報告書」

137 米山一政　1971『竹原笠塚古墳』「長野市の文化財」

138 米山一政　1973『菅間大塚古墳』「長野県指定文化財調査報告」4

139 米山一政　1973『桑根井空塚』「長野県指定文化財調査報告」4

140 米山一政　1976『長礼山1号古墳』「日本考古学年報」27

141 長野遺跡分布図

142 財）長野県埋蔵文化財センター　1997『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書16　長野市内その4　篠ノ井遺跡群』

143 財）長野県埋蔵文化財センター　1997『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15　長野市内その3　石川条里遺跡』

第２章　篠ノ井遺跡群

第１節　遺跡と調査の概要

１　遺跡の概要

篠ノ井遺跡群・石川条里遺跡は長野盆地の南西部分の端に位置し、西側の西部山地、東側の千曲川に挟まれ、自然堤防、後背湿地の発達した千曲川氾濫原上にある。

篠ノ井遺跡群は長野市篠ノ井塩崎地籍を中心とし、石川条理遺跡南西部の千曲川左岸の自然堤防上に立地する。その面積は約８㎢に及び、南は聖川、北は岡田川を境に、塩崎遺跡群、石川条里遺跡とに区分される。したがって、今回報告する新幹線用地内は遺跡の南東部にあたり、その南端は堤防を越えて千曲川の現河道にまで及んでいる。

遺跡範囲内は南から果樹園・畑・水田と変化しており、第２・５図に示すとおり自然堤防から後背湿地にかわる地形の移行が認められる。

これまでの発掘調査では断片的ではあるが縄文時代から中世にいたる遺構・遺物が多数発見されておりとくに弥生時代中・後期の集落・墓域として知られていた。ことに平成元年度から開始された高速道路建設に伴う調査では弥生時代後期の環濠集落のほか古墳時代前期の方形周溝墓、前方後方形周溝墓等が検出され該期の大規模な集落が存在することを確認したほか、９世紀を中心とした古代集落の分布とも重なることが判明している。

２　調査の概要

(1)　調査範囲と調査方法

調査区は南から１～４区に分けた。２区と３区は県道稲荷山線で区分されており、土地利用も果樹園・畑地から水田へと変化するが、他の区分は農道・筆界などまったくの便宜である。最北の４区は岡田川を隔てて石川条里遺跡と接触する。試掘結果から多数の遺構が予想された１区については南からＡ～Ｅ地区を設定したがこれも農道等による便宜的な区分である。

調査は３年にわたって行われ、平成５年度は調査区全域の試掘と１Ａ区南端の堤防地点、１Ｄ・Ｅ区の一部が調査された。翌平成６年度は１区全面を調査し、堤防改修に伴い、唐猫神社地点も調査した。平成７年度は最後に残った側道部分を調査し、広大な篠ノ井遺跡群新幹線地点の調査を終えた。

調査方法としては、重機で表土を除去したのち、遺構の調査を行い、遺構外の遺物は小地区（２ｍグリッド）単位で取り上げた。なお石川条里遺跡に近接する３区、４区は水田遺構であり、調査可能な面積もごくわずかになるため、トレンチ調査のみで終了した。

(2)　調査経過（調査日誌抄）

調査期間　平成５年７月６日～12月25日、平成６年４月５日～９月29日、平成７年７月17日～11月17日

平成５年度

７月６日	４Ａ・Ｂ区試掘開始。
７月13日	計７本の畦畔を確認し、４Ａ・Ｂ区試掘終了。
７月15日	２Ａ・Ｂ区試掘開始。
７月16日	水田と住居跡を確認し、２Ａ・Ｂ区試掘終了。 ２Ｂ区が水田域の南限であることを確認。
７月20日	３区試掘開始。平安時代の水田を確認し、同日試掘終了。
７月21日	２Ａ・Ｂ区本調査開始。
７月26日	４Ｂ区畦畔の調査開始。
７月28日	４Ｂ区畦畔の調査終了。
８月５日	２Ａ・Ｂ区で試掘で確認された住居跡（SB501）を調査。
８月９日	１Ａ区千曲川堤防側試掘開始。
８月16日	古墳時代後期と弥生時代後期の遺物包含層を確認し、試掘終了。
８月18日	２Ａ・Ｂ区調査終了。
８月19日	２Ａ区試掘開始。
８月20日	住居跡を確認し、２Ａ区試掘終了。本調査開始。
９月３日	２Ａ区本調査終了。
９月20日	１Ａ区千曲川堤防側及び１Ｄ・Ｅ区古墳時代後期～平安時代面調査開始。
９月29日	１Ａ区千曲川堤防側古墳時代後期～平安時代面空撮。
10月15日	１Ａ区千曲川堤防側古墳時代後期～平安時代面調査終了。
10月18日	１Ａ区千曲川堤防側弥生時代後期面調査開始。
11月４・５日	現地説明会（見学者115人）。
11月19日	１Ａ区千曲川堤防側弥生時代後期面調査終了。
12月８日	１Ｄ・Ｅ区古墳時代後期～平安時代面調査終了。
12月９日	１Ｄ・Ｅ区弥生時代後期～古墳時代中期面調査開始。
12月21日	１Ｄ・Ｅ区弥生時代後期～古墳時代中期面調査終了。
12月24・25日	千曲川堤防内側橋脚工事立会い調査。 円形周溝墓の存在を確認。
12月26日	冬期整理作業開始（～３月31日）。

平成６年度

４月５日	１Ａ・Ｂ区古墳時代後期～平安時代面調査開始。
４月８日	１Ａ区IVM25グリッドで蹄脚硯出土。 噴砂と９世紀後半に比定される洪水砂層を確認。
４月18日	１Ｂ区平安時代畠址（SL301）、中世面調査開始。

２Ａ・Ｂ区SB501

１Ａ区千曲川堤防側円形周溝墓群

１Ｂ区噴砂と洪水砂層

	１Ｃ区古墳時代後期～平安時代面調査開始。
４月19日	１Ｂ区SE304より塼仏出土。
４月26日	１Ｂ区平安時代畠址（SL301）、中世面調査終了。
５月16日	１Ｂ区SX301の調査開始。瓦塔の小破片が出土し始める。
５月27日	１Ａ～Ｃ区古墳時代後期～平安時代面空撮。
５月31日	１Ｃ区弥生時代後期～古墳時代中期面調査開始。
６月９日	１Ａ・Ｂ区弥生時代後期～古墳時代中期面調査開始。瓦塔の大型破片出土。
６月30日	１Ｃ区SB374より銅鏡出土。
７月４日	１Ｃ区SB349より土鈴出土。
７月５日	１Ｃ区古墳時代後期～平安時代面調査終了。
７月６日	１Ａ・Ｂ区古墳時代後期～平安時代面調査終了。 唐猫地区古墳時代後期～平安時代面調査開始。
７月８日	唐猫地区古墳時代後期～平安時代面調査終了。
７月11日	唐猫地区弥生時代後期面調査開始。
７月14日	１Ｃ区弥生時代後期～古墳時代中期面空撮。 唐猫地区弥生時代後期面調査終了。
７月20日	１Ｃ区弥生時代後期～古墳時代中期面調査終了。
７月26日	１Ａ・Ｂ区弥生時代後期～古墳時代中期面空撮。
７月31日	現地説明会（見学者　167名）。
８月１日	１Ｄ区古墳時代後期～平安時代面調査開始。 長野放送（NBS）、長野朝日放送（ABN）が円形周溝墓を取材。
８月４日	１Ａ区SM211の主体部及び周溝内人骨と共に鉄鏡出土。
８月５日	１Ａ区SM213の主体部人骨と共に銅鏡出土。
８月８日	１Ｂ区SB211の人骨と共に銅鏡出土。
８月９日	１Ａ・Ｂ区弥生時代後期～古墳時代中期面調査終了。
８月26日	１Ｄ区古墳時代後期～平安時代面空撮。
８月31日	１Ｄ区古墳時代後期～平安時代面調査終了。
９月１日	１Ｄ区弥生時代後期～古墳時代中期面調査開始。
９月20日	１Ｄ区弥生時代後期～古墳時代中期面空撮。
９月29日	１Ｄ区弥生時代後期～古墳時代中期面調査終了。
１月４日	冬期整理作業開始（～３月31日）。

平成７年度

７月17日	篠ノ井遺跡群出土人骨、獣骨保存処理開始。
９月４日	１Ｄ・Ｅ区古墳時代後期～平安時代面調査開始。
９月29日	篠ノ井遺跡群出土人骨、獣骨保存処理終了。

１Ｂ区SB340調査風景

１Ｂ区SM213銅鏡出土状況

１Ｅ区SB579遺物出土状況

10月５日　　１Ｄ・Ｅ区古墳時代後期～平安時代面空撮。
10月11日　　１Ｄ・Ｅ区古墳時代後期～平安時代面調査終了。
10月12日　　１Ｄ・Ｅ区弥生時代後期～古墳時代中期面調査開始。
11月13日　　１Ｄ・Ｅ区弥生時代後期～古墳時代中期面空撮。
11月17日　　１Ｄ・Ｅ区弥生時代後期～古墳時代中期面調査終了。
11月20日　　冬期整理作業開始（～12月27日）。

(3) 調査成果の概要

１Ａ区堤防地点では子想通り円形周溝墓が確認され、長野市教委調査による聖川堤防地点との連続性がうかがわれた。そしてこのことは唐猫神社地点の調査で実証されることになる。また千曲川堤防の改修に伴い、堤防の下からも円形周溝墓が確認され、現在の千曲川の河道もかつては墓域の一部であったことが判明した。この広大な墓域は１Ｂ区中央付近まで広がっており、明確に集落域と区分されている。Ｃ・Ｄ・Ｅ区は弥生時代～中世の集落域となっており、とくにＤ・Ｅ区は住居跡が密集する。この地域には篠ノ井遺跡群内の他の地点では検出例の少ない古墳時代後期の集落も分布している。

また、長野県内では珍しい瓦塔もまとまって得られた。２区は用地の制約から、わずかな面積を調査したにとどまったが、明らかに遺構密度は低くなり、かわりに洪水砂で覆われた水田跡が明確となる。そして３区・４区ではまったくの水田遺跡となることが判明した。

考古学的な所見以外では噴砂の発見があいつぎ、この地域での地震活動、地殻変動の解明に好資料を提供することとなった。

(4) 基本土層（第４図）

本遺跡の基本層序は周辺遺跡にも広範に認められる洪水砂層を鍵層とし、その上下を明確にするため柱状図を第４図に示した。洪水砂は一部地域では薄かったり、後世の攪乱を受けて不明確になっている場面もみられるが、一般的には明確に他の土壌と区別され、15～30cmの層厚を保っていることが多い。この砂層は平安時代前期９世紀末の仁和４年（888）５月８日の洪水に比定する見解が支配的であり、千曲川流域では検出された遺構の時期決定等に必ずといってよいほど用いられている。

基本層序	Ⅰ	によい黄褐色シルト質土	耕作土　通称えぐみ。３・４区水田域ではグライ化
	Ⅱ	褐色～によい黄褐色砂質土	洪水砂
	Ⅲａ	灰黄褐色シルト質土	古水田溶脱層　粘性あり
	Ⅲｂ	灰黄褐色シルト質土	
	Ⅳ	暗褐色シルト質土	第１検出面（中世～古墳時代後期）
	Ⅴ	によい黄褐色シルト質土	第２検出面（弥生時代後期）
	Ⅵ	黒褐色シルト質土	
	Ⅶ	によい黄色褐色シルト質土	

Ⅰ層は畑・果樹園・水田等に利用されている現代の耕作土で集落域では黄褐色の細砂～シルトであるが石川条里遺跡に接続する４区の水田域ではグライ化し灰～青灰色となる。Ⅰ層下部には中世遺構が存在し粗い砂質で黒褐色を呈する中世独特の遺構覆土がシミ状に現れる。

Ⅱ層は前述の洪水砂層で、本遺跡内では南端の１Ａ区を除き全域で明確に検出される。これは１Ａ区が自然堤防の頂点付近にあたるため洪水砂が堆積しにくかったことに加え、後世の耕作に伴う攪乱を受けた結果Ⅰ層の土壌と混合してしまったことが原因として想定される。なお、本遺跡でも地震の際に形成され

た噴砂が観察されるが、どの噴砂も例外なく洪水砂によって切られている。この噴砂は9世紀半ばの住居跡の覆土を貫いていることから、洪水と比してあまり遠くない時期に発生したと思われる。

Ⅲa層は、基本となるⅢ層が平安時代の大規模な水田化によって、溶脱を受けた結果形成されたと考えられている。しかしこの水田は開田後まもなく前記の洪水に伴い埋没してしまったため、水田土壌の形成は一部地域を除いてあまり明確ではない。溶脱層とともに形成される集積層も同様に、明確とはいいがたいが広範囲に分布している。

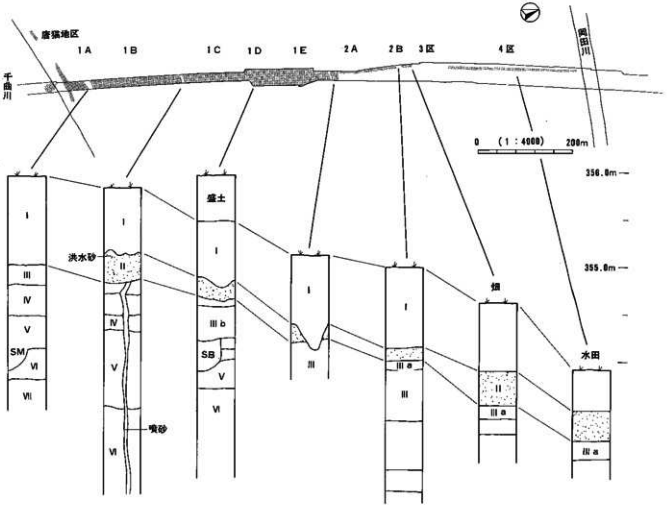
Ⅳ層は暗褐色を呈し、上面が古代から古墳時代後期の遺構検出面となる。遺構はⅢ層が覆土となるため黒っぽい地山に明るい褐色の遺構が検出される。また中世の遺構の下部もこの面で検出される。

Ⅴ層は弥生時代後期の遺構の検出面に相当し、この層をやや掘り下げた地点で円形周溝墓・住居跡等を確認した。

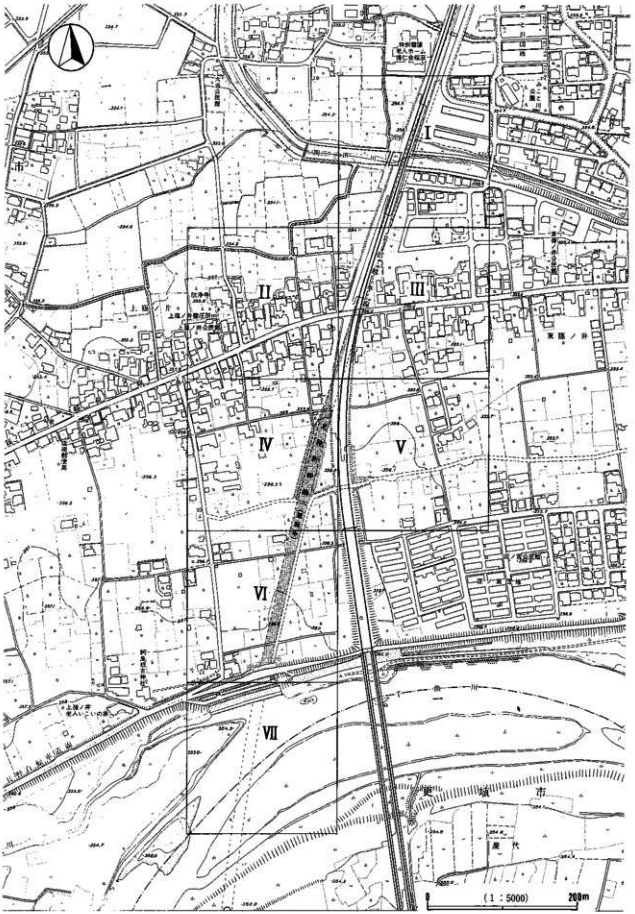
Ⅵ層以下は無遺物層となる。他の層と同様、洵汰のよい細砂～シルト質の土壌が堆積している。

調査時点ではまずⅡ層の洪水砂までを重機で除去し、Ⅲ層上面にみえる中世の遺構を調査したのち人力にてⅢa、Ⅲb層をはぎ取って第1検出面を精査した。古代～古墳時代後期の遺構の調査終了後、再び重機を投入して、Ⅴ層の半ばまで掘削し、弥生時代後期に相当する第2検出面を設定した。

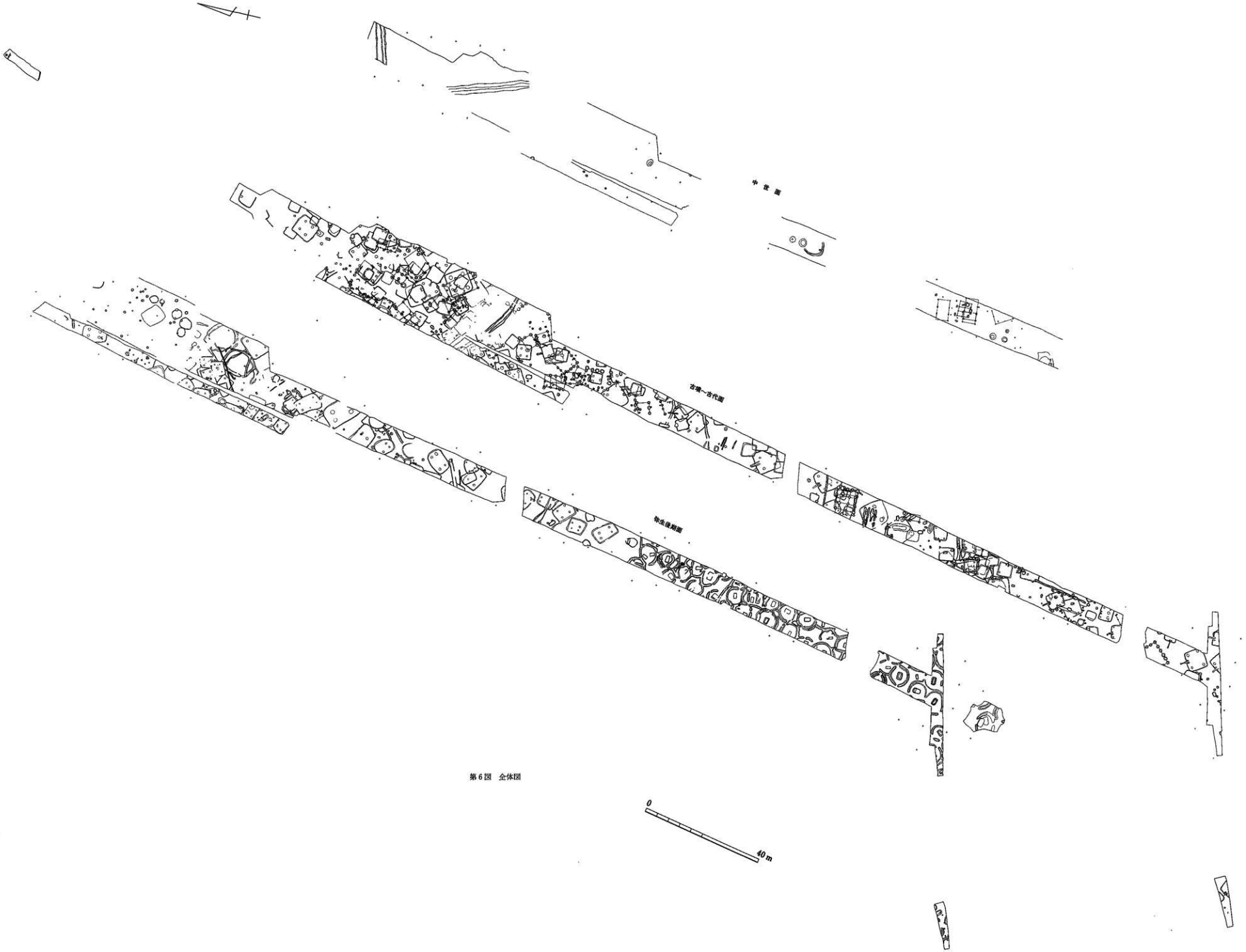
Ⅵ層以下は均一な細砂で形成された黄褐色の無遺物層となり、地表下約4mで湧水点に達する。とくに記すべき変化は観察されず、色調に多少の差異がみられる程度で、土壌化したような黒褐色の帯もほとんど確認されなかった。



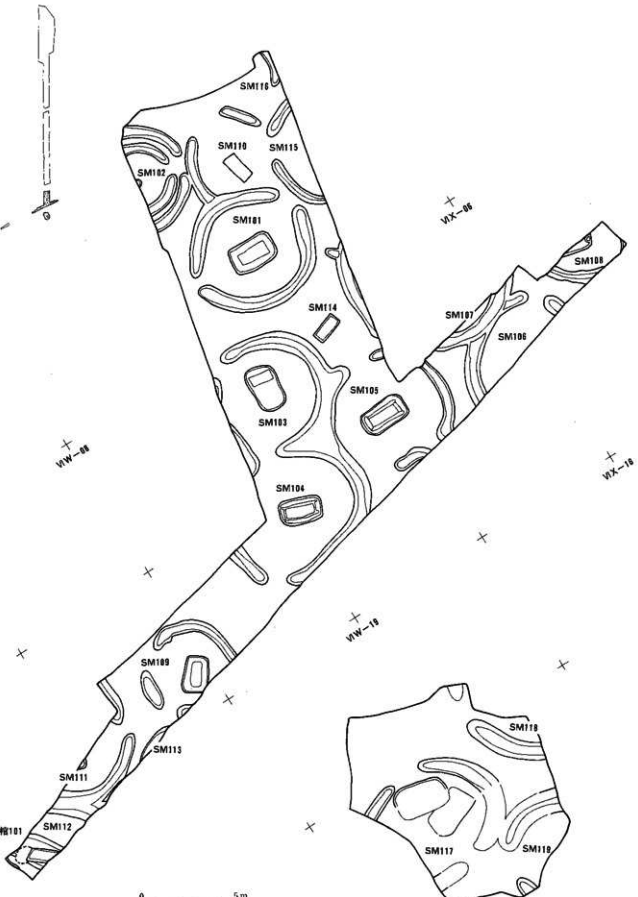
第4図　基本層序



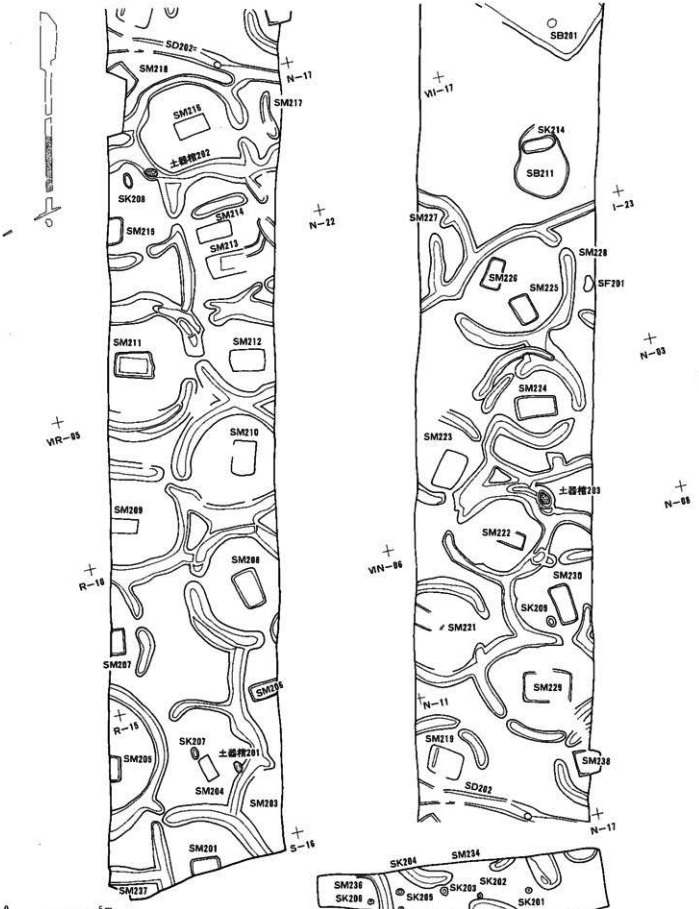
第５図　グリット設定図



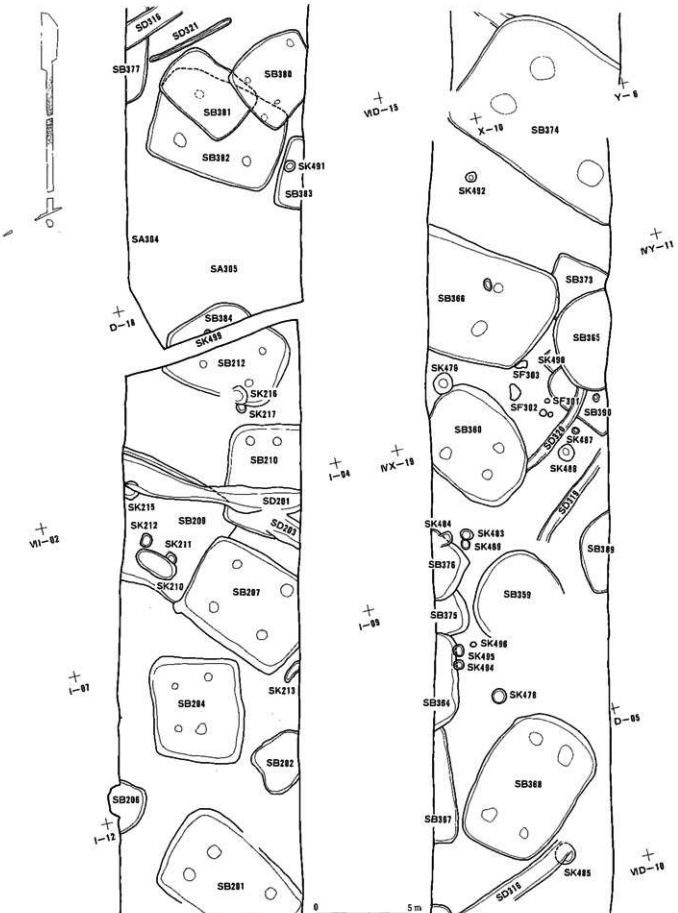
第6図　全体図



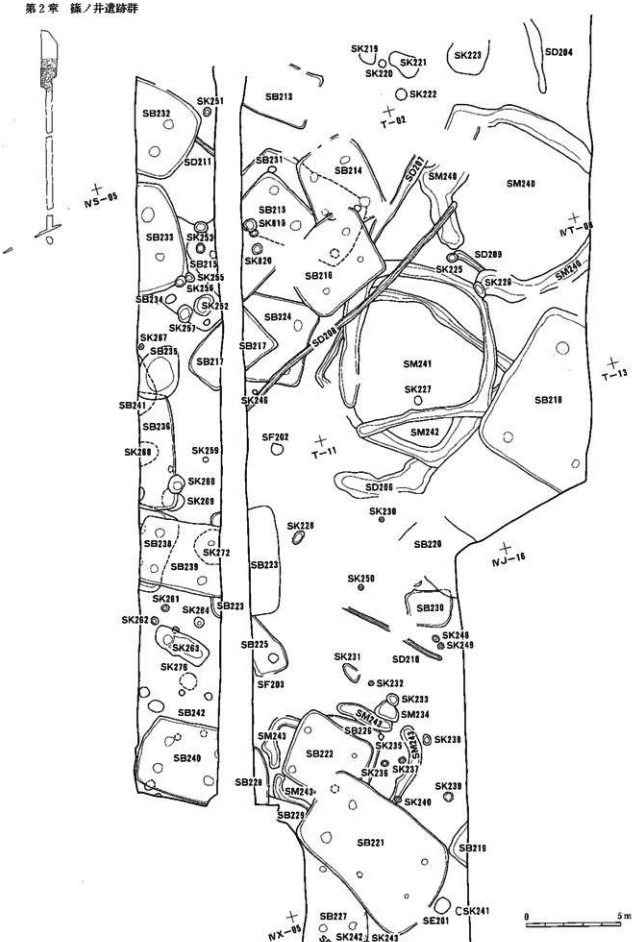
第7図　遺構配置図(1)　弥生時代後期



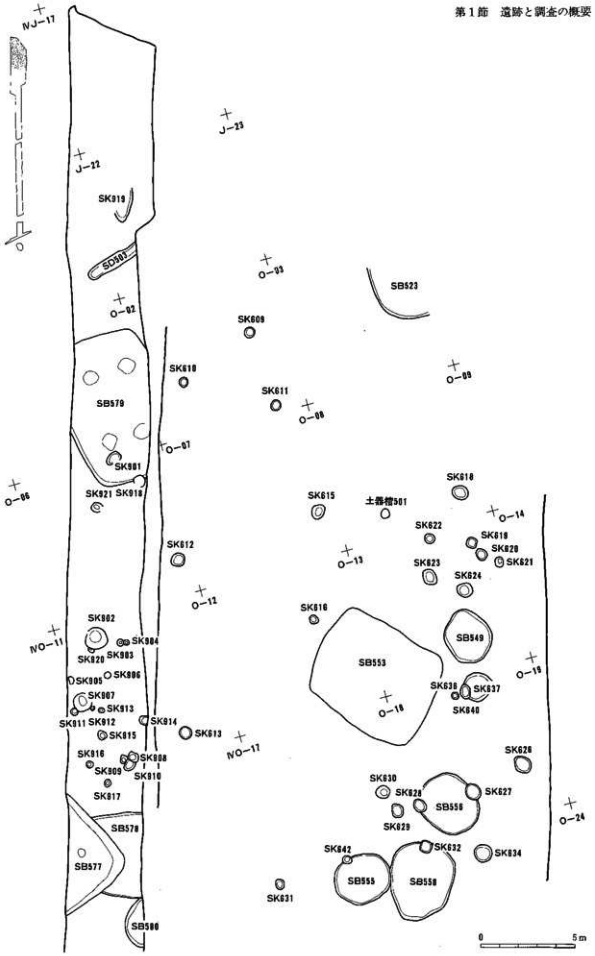
第８図　遺構配置図(2)　弥生時代後期



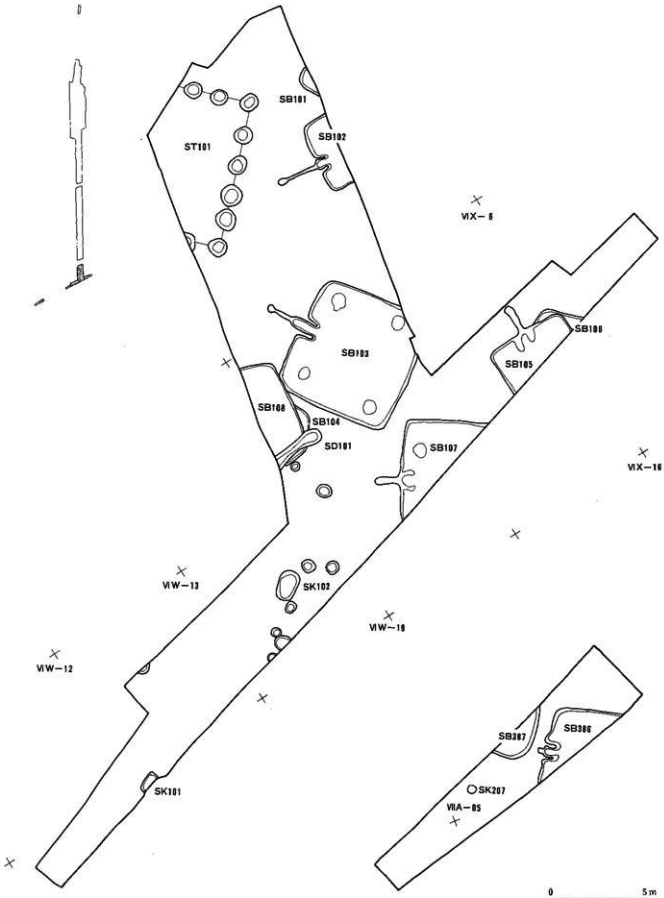
第9図　遺構配置図(3)　弥生時代後期



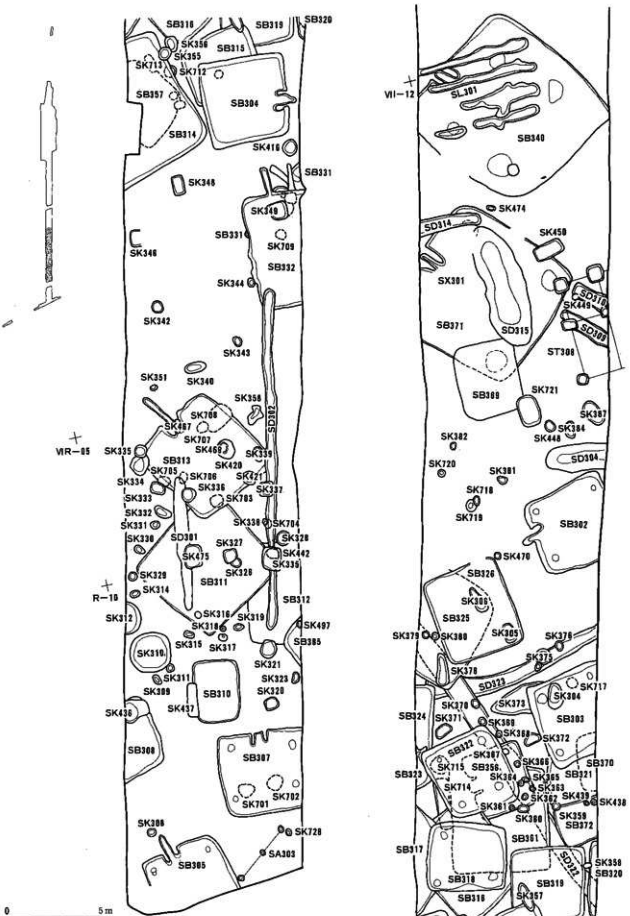
第10図　遺構配置図(4)　弥生時代後期



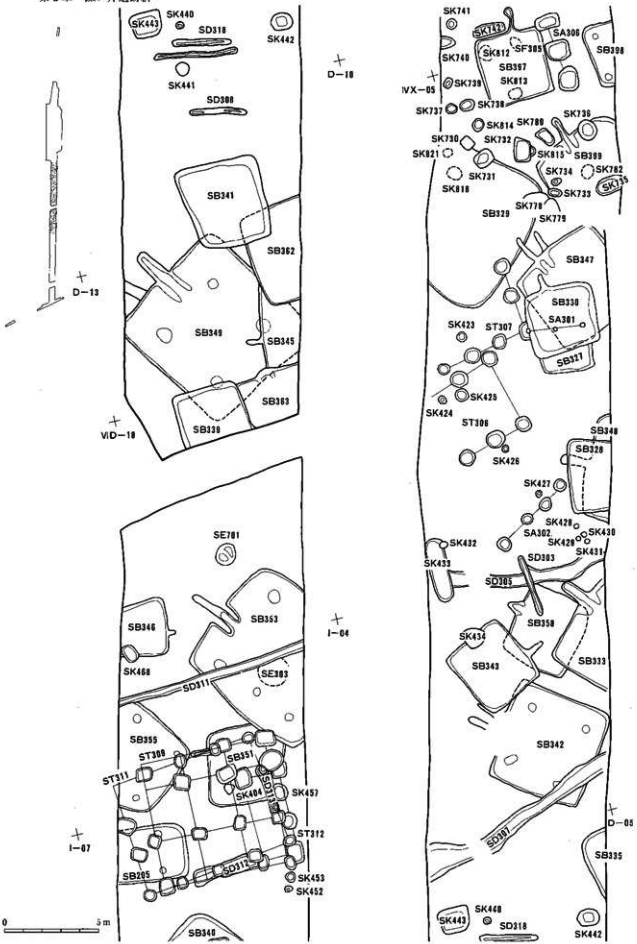
第11図　遺構配置図(5)　弥生時代後期



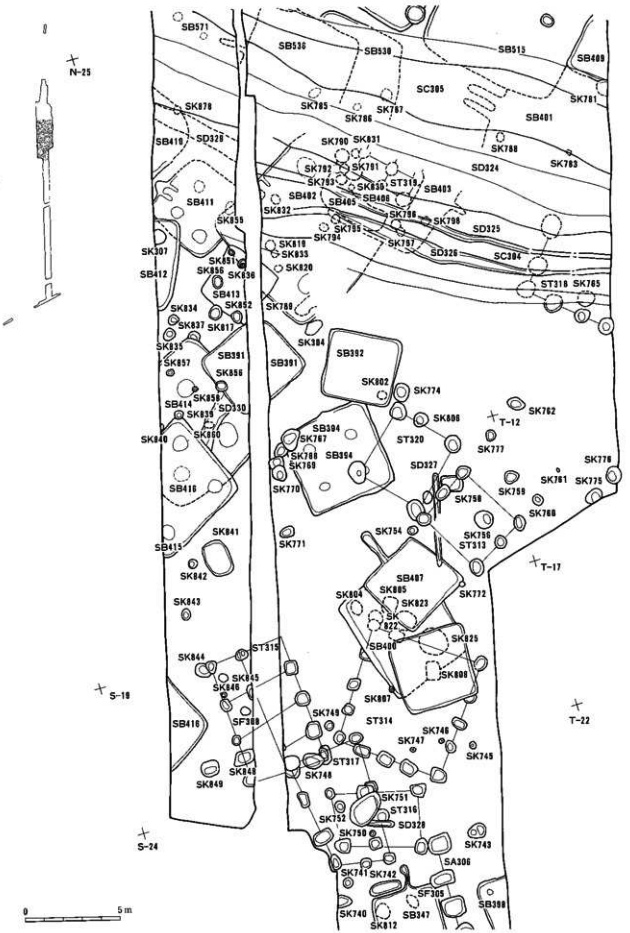
第12図　遺構配置図(6)　古墳時代～古代



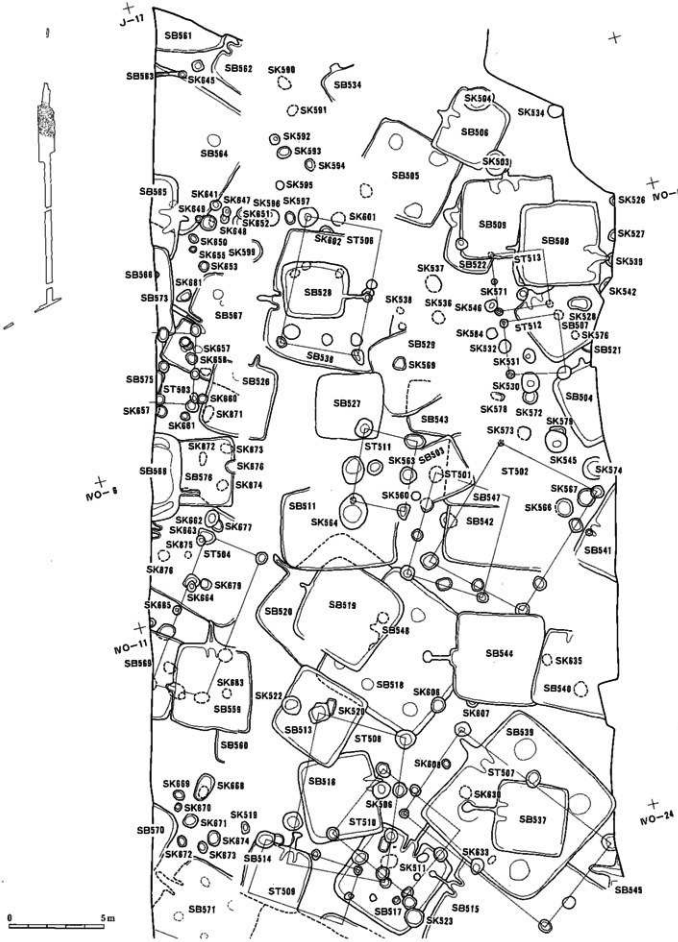
第13図　遺構配置図(7)　古墳時代～古代



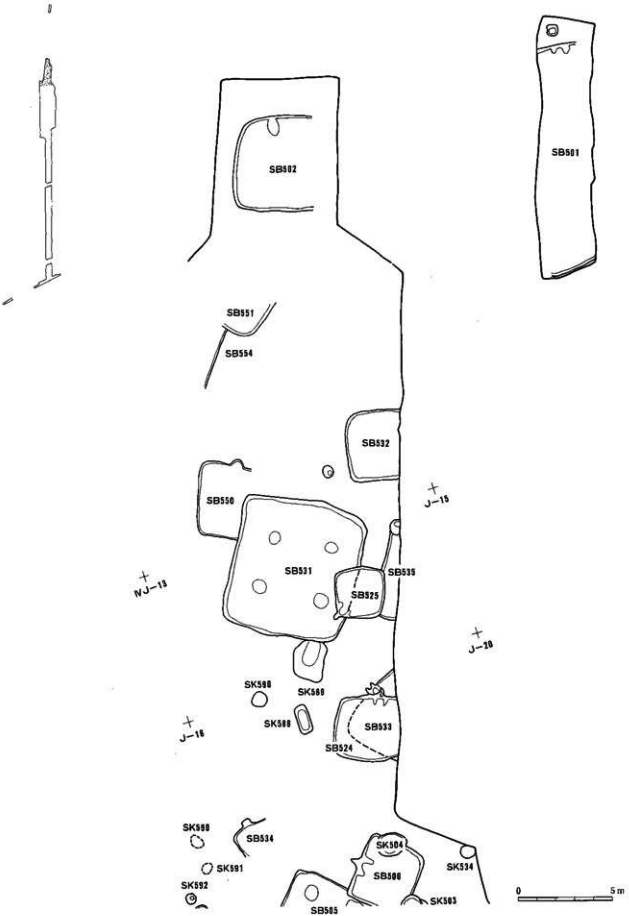
第14図　遺構配置図(8)　古墳時代～古代



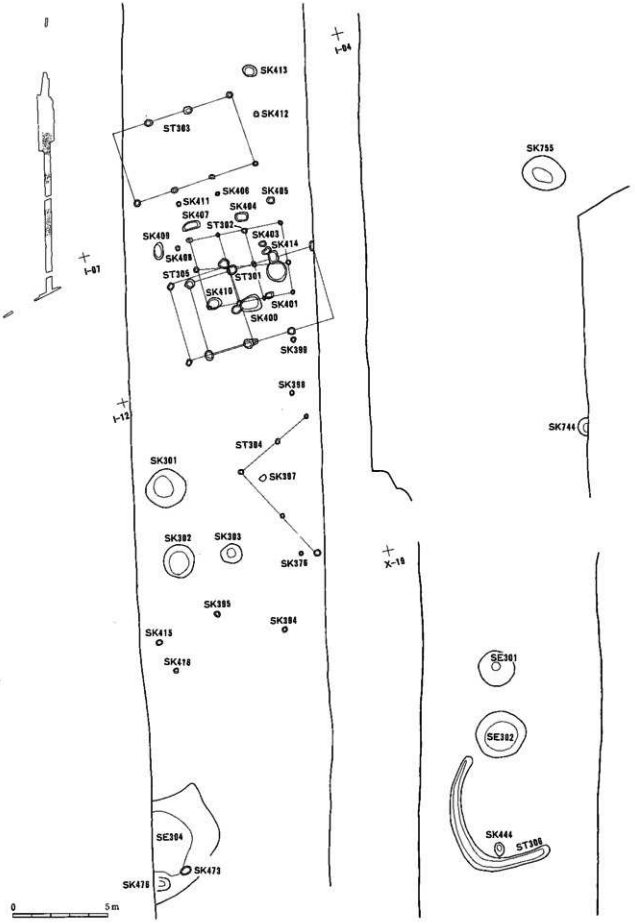
第15図　遺構配置図(9)　古墳時代～古代



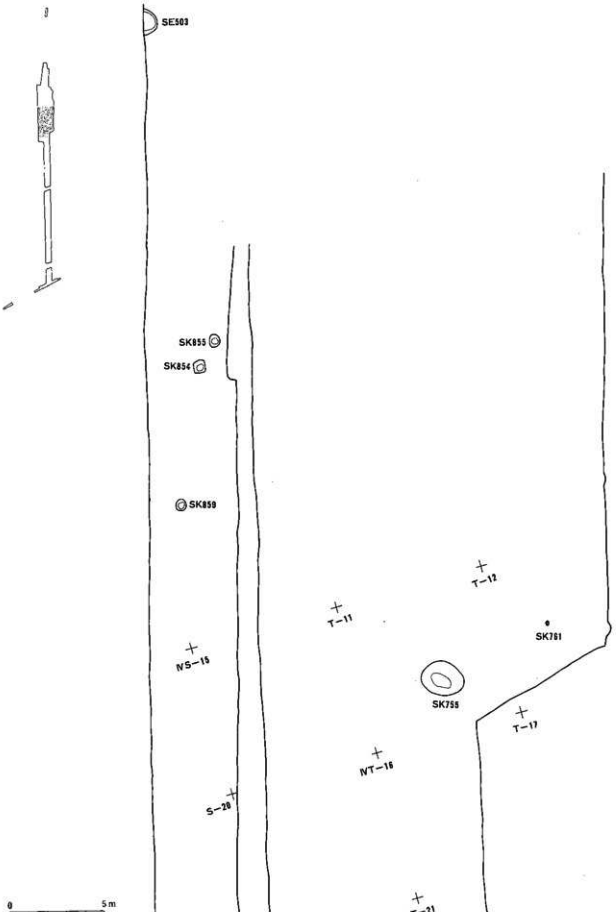
第16図　遺構配置図(8)　古墳時代～古代



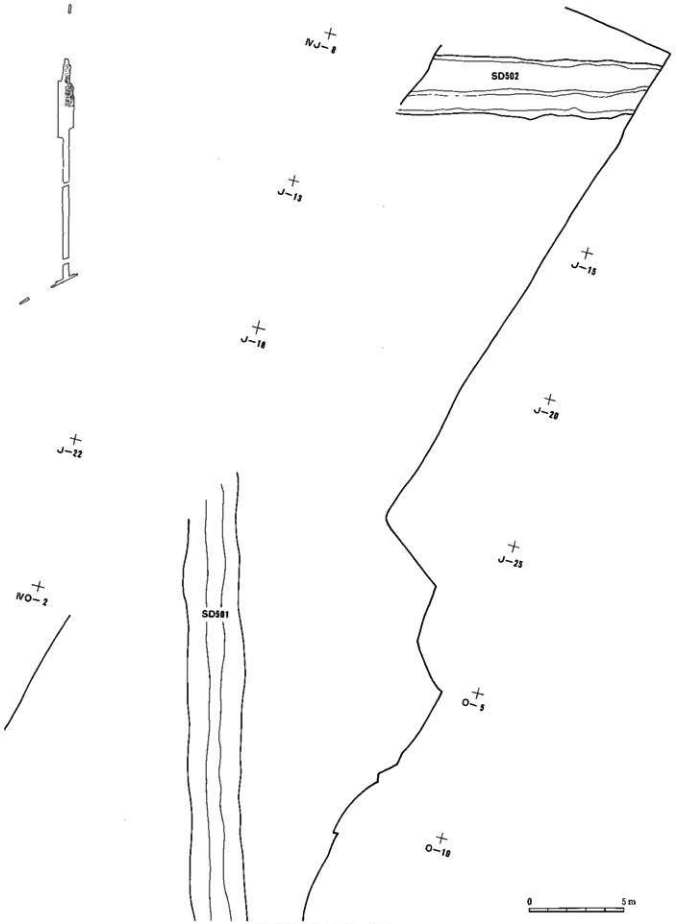
第17図　遺構配置図(1)　古墳時代～古代



第18図　遺構配置図(12)　中世１



第19図　遺構配置図03　中世2



第20図　遺構配置図(4)　中世３

第2節　遺構と遺物

1　弥生時代後期～古墳時代中期の遺構（円形周溝墓を除く）

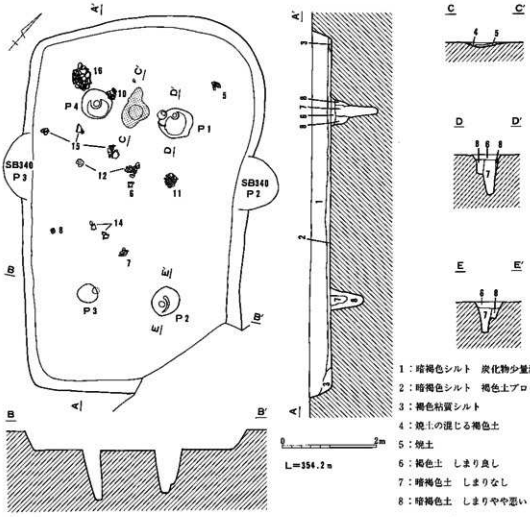
(1) 概　要

弥生時代後期の住居跡は70軒、古墳時代前期～中期に相当すると思われる住居跡は6軒であるが、土器型式上、弥生時代と古墳時代を明確に分離することは現状では不可能であるため一括して扱うこととした。弥生時代後期には円形周溝墓が含まれるが、前述のとおり分布域を明確に違えるため別に述べる。

篠ノ井遺跡群高速道路地点や聖川堤防地点と比較して、弥生時代中期の遺構が確認されないこと、古墳時代前期の遺構が極めて少ないことが特徴と言えよう。

(2) 竪穴住居跡

SB201（第21図、PL 4）

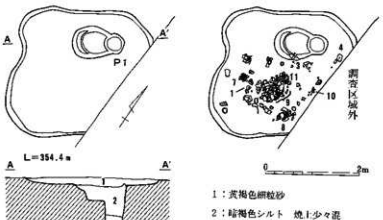


第21図　SB201

位　　置　1B区、VI－I 12・13・17グリッド

重複関係　SB340に切られる。
形　　状　隅丸長方形。一部調査区域外にかかる。平面図上の耳状の張り出しはSB340の柱穴である。
覆　　土　下層にブロック上の攪乱土を持つ以外、ほぼ単層。人為埋没と考える。
壁　　傾斜して立ち上がる。
床　　面　明確な貼り床で堅固に仕上がっている。貼り替え、掘り方等は確認されなかった。ほぼ水平である。
柱　　穴　典型的な4本柱。柱痕は明瞭で攪乱土はみられないため、柱は根元で切断され持ち去られたものと推定される。
炉　　地床炉、土器等は敷かれていない。
その他施設　特になし。
遺　　物　覆土全体に多く、高さ50cmを超える壺、甕が出土している。床面には完全な鉢、無頸壺がある。実測可能な破片が多く、該期の土器のセットがほぼそろっている。（第80・81図）
所　　見　典型的な箱清水期の住居跡。入口施設が不明である以外良好な遺存状態であった。17と18の大甕は対をなすと考えられ、土器棺の可能性が高いが、発掘時点では確認できなかった。また16の壺もやや問題である。

SB202（第22図、PL４）
位　　置　１Ｂ区、Ⅵ－Ｉ08・13グリッド
重複関係　なし。
形　　状　不整形。一部調査区域外にかかる。
覆　　土　掘り込みは浅く、ピット内を除き単層であるため判断材料に乏しいが、自然埋没と考えたい。
壁　　床が不明瞭であるため、壁の立ち上がりも判然としない。
床　　面　不明確かつ軟弱。当然ながら掘り方等はみられない。



第22図　SB202

柱　　穴　Ｐ１は断面形状から柱穴と考えたいが、判然としない。
炉　　なし。
その他施設　特になし。
遺　　物　覆土全体、特に上層に多く、床面付近でやや少ない。またピット内からはほとんど出土していない。外来系と思われるものもあるが小破片ばかりである。（第82図）
所　　見　典型的な箱清水期の住居跡とはかけはなれた形態であり、土坑墓の可能性もなくはないが骨等がみられないことから土器廃棄施設と考えたい。

SB204（第23図、PL４）

位　　置　１Ｂ区、Ⅵ－Ⅰ02・07・08グリッド

重複関係　SB205に切られる。

形　　状　ゆがんだ方形。

覆　　土　単層。自然埋没？

壁　　覆土と地床との差が不明瞭であるため、壁の立ち上がりも判然としない。

床　　面　堅固であり明確。掘り方等はみられない。

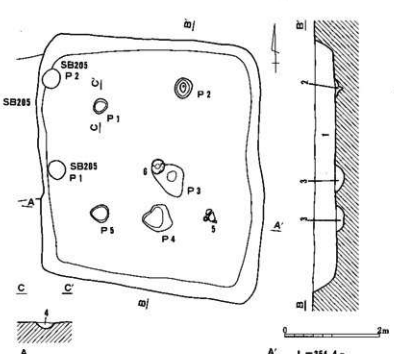
柱　　穴　Ｐ１とＰ５は柱穴と考えたいが、対をなす柱穴が適正な位置になく、断面形態も柱穴らしくなく、柱痕もないため判然としない。

炉　　なし。

その他施設　特になし。

遺　　物　覆土全体、特に上層に多いが、図になるものは多くない。外来系と思われるものは小破片である。（第83図）

所　　見　方形に近いプランから時期的にやや下るものと思われ、出土した外来系土器が注目される。



第23図　SB204

SB205（第24図、PL４）

位　　置　１Ｂ区、Ⅵ－Ⅰ07グリッド

重複関係　SB204を切る。

形　　状　隅丸長方形。一部調査区域外。

覆　　土　単層。自然埋没？

壁　　覆土と地床との差が不明瞭であるため、壁の立ち上がりも判然としない。

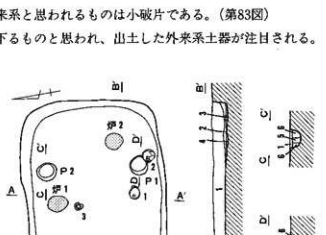
床　　面　堅固であり明確。掘り方等はみられない。

柱　　穴　Ｐ１とＰ２は柱穴と考えたいが、対をなす柱穴は調査区域外。

炉　　地床炉と考えられるものが２基あるが、どちらも壁際に寄っている。

その他施設　特になし。

遺　　物　全体に少ない。床面に大きな破片がまとまっていることから遺棄の可能性が大きい。



第24図　SB205

所　　見　出土土器から古墳時代前期に相当すると思われるが、長方形のプランはやや特異である。

SB206（第25図、PL４）

位　　置　11B区、Ⅵ－Ⅰ07・12グリッド

重複関係　なし。

形　　状　隅丸長方形？ほとんどが調査区域外。

覆　　土　単層。人為埋没？

壁　　覆土と地山との差は明瞭であり、壁は傾斜して立ち上がる。

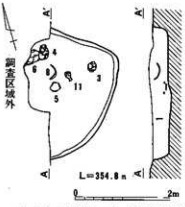
床　　面　軟弱であるが明確。掘り方等はみられない。

柱　　穴　なし？

炉　　不明。

その他施設　特になし。

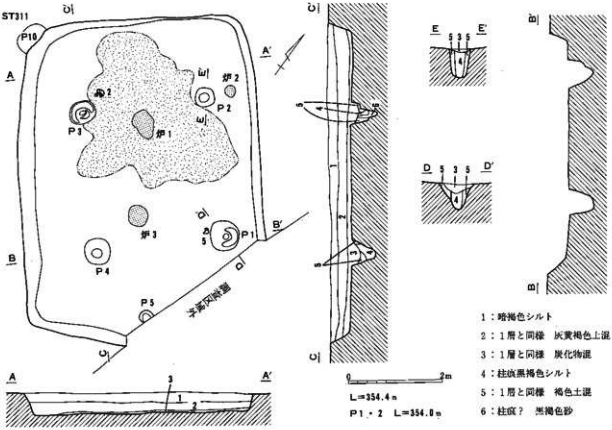
遺　　物　全体に多く、完形に近いもの、大型破片が大部分。折り重なるような状況だったという。



1：にぶい黄褐色シルト　灰黄褐色土混

第25図　SB206

所　　見　出土土器には群馬県に分布する樽式に近い小型壺が含まれており、他の壺類も全面に赤彩を施すなど、在地の箱清水式でもやや古相の特徴を備えている。遺構の大部分が調査区域外であるため明確ではないが、しっかりした床等がみられないことから、住居跡と考えるより土坑墓等の特殊遺構を想定したほうが良さそうである。発掘担当者は大型土坑墓等を想定している。



第26図　SB207

SB207（第26図、PL４）

位　　置　１Ｂ区、Ⅵ－Ⅰ02・03・08グリッド

重複関係　SB209を切り、ST311に切られる。

形　　状　隅丸長方形。一部調査区域外。

覆　　土　炭化物の混入する層が認められるため、自然埋没と思われる。

壁　　明確に検出され、やや傾斜して立ち上がる。

床　　面　堅固な貼り床。掘り方、貼り替え等はみられない。

柱　　穴　典型的な４本柱。Ｐ５は入口施設にかかわるものと考えられるが、調査区の制約から片方しか確認できなかった。

炉　　３基確認され、いずれも地床炉である。炉１と炉２は主・副の関係にあると思われるが炉３は性格が不明である。炉１と炉３で新旧をなすのかもしれない。炉１の周りに灰混じりの炭が広がっているが、これは箱清水期の住居にしばしばみられるものである。

その他施設　特になし。

遺　　物　全体に多いが、破片ばかりである。古墳時代前期の様相を呈するものが目立ち４のように器種不明のものもある。

所　　見　出土土器から古墳時代前期あたりに相当すると考えられるが、住居の形態は箱清水期そのものである。土器の変化に住居の変化が追いつかないだけのことかもしれないが、炉３の存在が気になる。

SB209（第27図、PL－）

位　　置　１Ｂ区、Ⅵ－Ｄ22・23、Ⅰ02・03グリッド

重複関係　SB207・210、SD201、SK210・211・212・215に切られる。

形　　状　長方形？半分近くが調査区域外のためはっきりしない。

覆　　土　下層に灰を多く含む土層が認められるが、それ以外は単層のため自然埋没と思われる。

壁　　明確に検出され、やや傾斜して立ち上がる。

床　　面　堅固な貼り床。掘り方、貼り替え等はみられない。

柱　　穴　柱穴状のピットはＰ３・４であるがこれらと対をなすと思われるものは確認されず、柱の本数は不明である。

炉　　炉あるいはそれに類似するものは４基確認されているが、明確なものは炉１・４である。炉４はしっかりした掘り込みをもつが、炉１は地床炉であり、残りは単なる焼土の広がりといった程度である。いずれも規模、住居跡内の位置が尋常でなく、本住居跡の時期並びに性格を暗示させる。

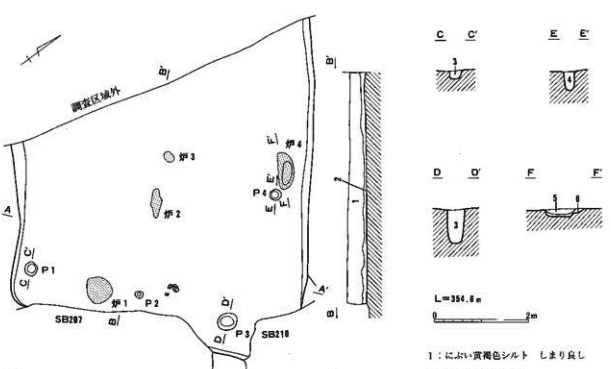
その他施設　特になし。

遺　　物　全体に多いが、破片ばかりで図になるものはほとんどない。１は外来系の土器であるが器形等詳細は不明である。

所　　見　出土土器から、弥生時代後期～古墳時代前期に相当すると考えられるが、典型的な箱清水期の住居の形態とは異なっており、類例の増加が待たれる。

SB210（第28図、PL４）

位　　置　１Ｂ区、Ⅵ－Ｄ23、Ⅰ03グリッド



第27図　SB209

重複関係　SB209を切り、SD201・203、SE303に切られる。

形　　状　隅丸長方形？一部調査区域外のためはっきりしない。

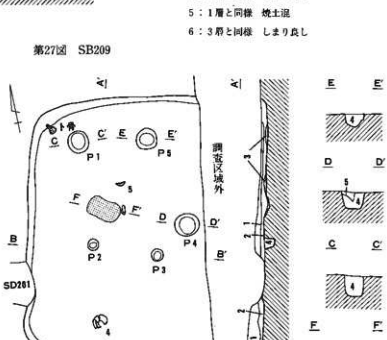
覆　　土　縞状の土層が認められるため自然埋没と考える。

壁　　明確に検出され、やや傾斜して立ち上がる。

床　　面　堅固な貼り床。掘り方、貼り替え等はみられない。

柱　　穴　柱穴にはＰ１・２・３・５が相当すると思われるが、住居跡内での位置が適正でなく、断定的なことは言いかねる。

炉　　炉は住居跡中央付近に位置するが、これは縄清水期の典型的な形態とはやや異なる。炉直上に大型土器破片があるが、土器敷炉ではなく単なる地床炉である。

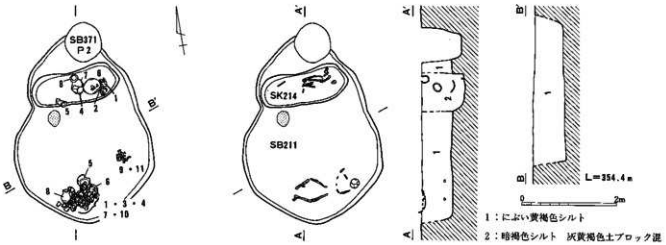


第28図　SB210

その他施設　特になし。

遺　　物　全体に多いが、破片ばかりで図になるものは少ない。投棄あるいは流れ込みによるものと考えたい。1は赤彩のない小型壺で器形もやや特異である。4は大型壺の頸部に3孔を施したもので再利用の一例と思われるが断定はできない。

所　　見　炉と柱穴の位置関係から図示したように住居跡ではなく、軸を東西方向にとる大型住居の可能性も考えられる。この場合半分以上が調査区域外となる。



第29図　SB211

SB211（第29図、PL5）

位　　置　1B区、VI－D23、I03グリッド

重複関係　SK214に切られる。

形　　状　不整形。

覆　　土　単層、人為埋没。

壁　　明確に検出され、やや傾斜して立ち上がる。

床　　面　やや堅固、貼り床ではない。掘り方等はない。

柱　　穴　なし。

炉　　？　地床炉という程のものではないが焼けた面がある。

その他施設　特になし。

遺　　物　集積された状態で出土し、完形品、大型破片ばかりである。下層に人骨。棺の痕跡は認められなかったが、頭部を東に向けた伸展葬に近い状況である。

所　　見　平面形態、遺物の状況等から住居跡であるはずもなく、廃屋墓あるいは大型の土坑墓と考えられる。土器は他の住居跡、円形周溝墓に比較してやや新しい様相を呈しているようで、本跡が円形周溝墓群で形成される墓域の北端に接する部分にあたることは示唆的である。

人骨はガラス小玉を伴っていた。集積された土器の状況から、調査担当者は塔のように積み上げてあったのではないかと推測している。

また本跡を切るSK214も同様な性格の土坑であり、弥生後期から古墳時代前期に至る墓制の変遷を考える上で、重要な資料となろう。

SB212（第30図、PL４）

位　　置　１Ｂ区、Ⅵ－Ｄ23グリッド

重複関係　SK216・217、SE701に切られる。

形　　状　隅丸長方形。約半分が調査区域外。

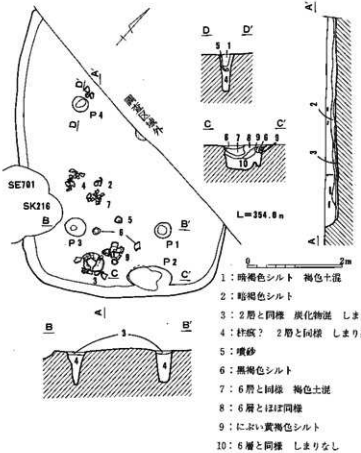
覆　　土　炭化物の多い層が覆土下層に分布しており、自然埋没と考えられる。

壁　　明確に検出され、やや傾斜して立ち上がる。

床　　面　やや堅固、貼り床ではない。掘り方等はない。

柱　　穴　Ｐ１・３・４が相当する。Ｐ２は入口施設にかかわるものだろう。

炉　　地床炉及びこれに伴うと思われる焼土がみられるが、ほとんど調査区域外。



第30図　SB212

その他施設　特になし。

遺　　物　覆土全般に多く出土しているが、破片ばかりであり、床面から浮いた状態のものが多い。土器のほとんどは住居跡廃絶後の投棄と考えたい。

所　　見　箱清水期の典型的な住居跡。

SB213（第31図、PL－）

位　　置　１Ｄ区、Ⅵ－Ｏ23グリッド

重複関係　SK785、SD324に切られる。

形　　状　長方形。ほとんどの部分をSD324に破壊され、一部調査区域外。

覆　　土　ブロック状の土が覆土となっており、人為埋没と考えられる。

壁　　明確に検出され、やや傾斜して立ち上がる。

床　　面　やや堅固、貼り床ではない。掘り方等はない。

柱　　穴　不明。

炉　　不明。

その他施設　特になし。北壁にピットがあるがごく浅いもので性格不明。

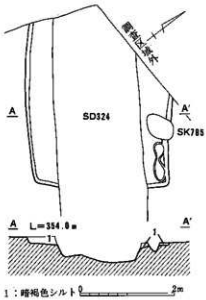
遺　　物　遺物ほとんどなし。

所　　見　箱清水期の典型的な住居跡と思われる。

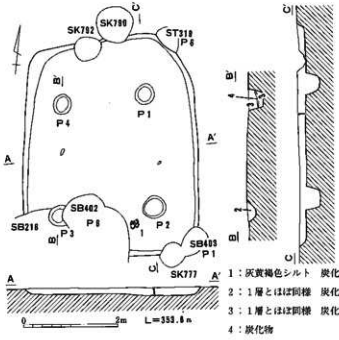
SB214（第32図、PL５）

位　　置　１Ｄ区、Ⅵ－Ｔ01グリッド

重複関係　SB216・402・403、ST319、SK790・791・792・796・797に切られる。



第31図　SB213



第32図　SB214

形　　状　隅丸長方形。

覆　　土　単層。自然埋没？

壁　　明確に検出され、やや傾斜して立ち上がる。

床　　面　やや軟弱、貼り床ではない。掘り方等はない。

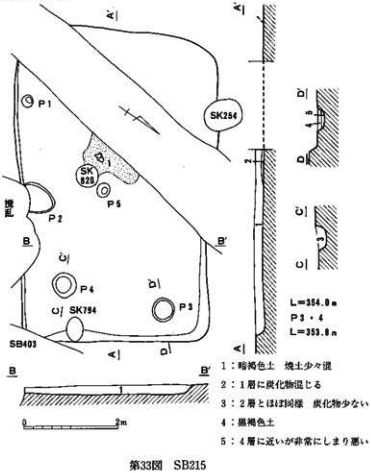
柱　　穴　Ｐ１～４の４本柱。

炉　　不明。Ｐ２・３の間に存在するとすればSB216によって破壊されている。

その他施設　特になし。

遺　　物　全般に少なく破片が少数出土したのみ。

所　　見　箱清水期の典型的な住居跡と思われる。



第33図　SB215

SB215（第33図、PL－）

位　　置　１Ｄ区、Ⅵ－Ｓ05、Ｔ01グリッド

重複関係　SB224・231を切り、SB214・216、SK254・403・794・819・820・823に切られる。

形　　状　長方形。

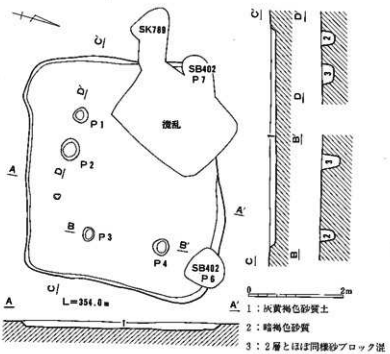
覆　　土　単層。自然埋没？

壁　　明確に検出され、やや傾斜して立ち上がる。

床　　面　北側部分は堅固な貼り床となっているが貼り替え、掘り方等はみられない。
柱　　穴　いくつかピットはあるが明確な柱穴は確認されなかった。P2は壁柱穴とも思われるが判然としない。
炉　　不明。中央付近に炭が広がっているので調査できなかった部分にあると思われる。
その他施設　P4上に焼土がみられるが性格不明。
遺　　物　全般に少なく破片が少数出土したのみ。図示できたものは1点のみである。覆土上層に多いことから投棄されたものと思われる。覆土中より鉄斧、鉄鎌が出土しているが地点不明。
所　　見　箱清水期の典型的な住居跡だが、柱穴が明確でないことが気になる。

SB216（第34図、PL－）

位　　置　1D区、Ⅵ－T01・06グリッド
重複関係　SB214、SD207、SM241を切り、SB402、SK789に切られる。
形　　状　長方形？やや不整形。一部撹乱を受けている。
覆　　土　単層。自然埋没？
壁　　明確に検出され、傾斜して立ち上がる。
床　　面　軟弱であり、明確な貼り床とはなっていない。掘り方等もみられない。
柱　　穴　P1・3・4が相当する。いずれもあまり深くなく、柱痕も認められない。
炉　　不明。撹乱を受けた部分にあった可能性もある。
その他施設　特になし。
遺　　物　全般に少なく破片が少数出土したのみ。図示できたものは1点のみである。
所　　見　平面形態及び出土遺物から箱清水期の住居跡と考える。



第34図　SB216

SB217（第35図、PL－）

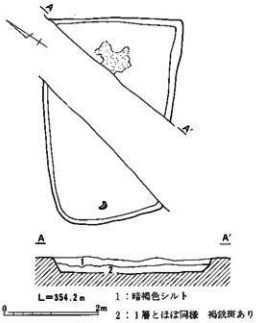
位　　置　1D区、Ⅵ－S10グリッド
重複関係　SB224を切り、SB391に切られる。
形　　状　長方形？やや不整形。中央部は工事の都合により調査できなかった。
覆　　土　ブロック状の断面が確認され、人為埋没と判断した。
壁　　明確に検出され、傾斜して立ち上がる。
床　　面　堅固であるが、貼り床ではない。掘り方もみられなかった。
柱　　穴　なし。不明ではなく、存在しないと考える。

炉　　不明。床面の一部に炭の広がっている部分があるため調査できなかった部分に存在した可能性もある。

その他施設　特になし。

遺　　物　全般に少なく、壁際に多いことから投棄あるいは流れ込みによるものと考える。

所　　見　調査の不手際により、覆土の大半を削平してしまった上、調査できなかった部分が多いので確定的なことは言えないが、柱穴が存在しないこと、箱清水期の住居としては小さいこと、骨片・銅銙等が出土していること等から、住居跡よりも土坑墓の可能性が高い。



第35図　SB217

SB218（第36図、PL－）

位　　置　1D区、VI－T07・12グリッド

重複関係　SM242・243を切り、ST318に切られる。

形　　状　隅丸長方形。一部調査区域外。

覆　　土　炭化物を含んだ層が縞状にみられることから、自然埋没の過程で火を焚いたと想像される。

壁　　明確に検出され、傾斜して立ち上がる。

床　　面　2面存在するが、軟弱であり、いわゆる貼り床状ではない。

柱　　穴　第一床面ではP1・2・4・5、第二床面ではP5・7が主柱穴と考えられるが、住居の規模に比して直径・深さが小さい気がする。

炉　　不明。床面の一部に炭の広がっている部分があるため、これを炉とすることも可能だが焼土そのものは確認できなかった。

その他施設　特になし。

遺　　物　全般に多いが、小破片ばかりで図になるものは少ない。覆土の状況から埋没の途中で投棄されたものと思われる。

所　　見　柱を増やした上、床も作り替えているにもかかわらず床を拡張した痕跡は認められない。床が軟弱なこと、明確な炉が確認されないことも疑問である。住居よりも集会所的な施設を想定したほうが良いのかもしれない。形態的には箱清水期の典型的なものである。

SB219（第10図、PL－）

位　　置　1D区、VI－T21グリッド

重複関係　なし。

形　　状　不明。ほとんど調査区域外。

覆　　土　流れ込みが土層断面から明確。したがって自然埋没。

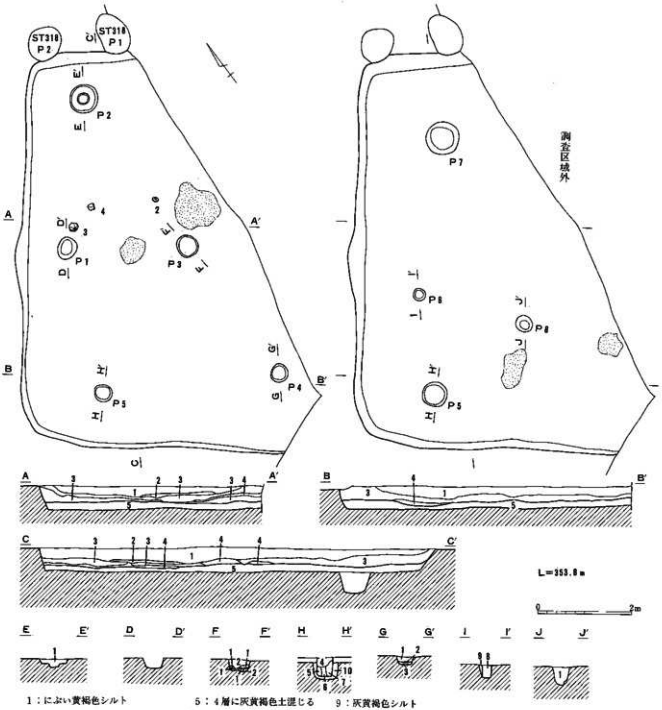
壁　　明確に検出され、傾斜して立ち上がる。

床　　面　不明確かつ軟弱。掘り方等はない。

柱　　穴　不明。

炉　　不明。

その他施設　特になし。



第36図　SB218

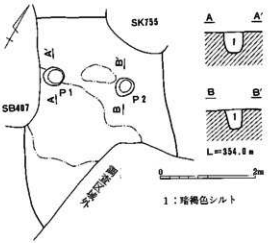
遺　　物　上層に小破片ばかりやや多めに出土。投棄または流れ込み。特記遺物なし。

所　　見　形状から住居跡としたが、調査面積が少なすぎるため詳細不明。

SB220（第37図、PL－）

位　　置　１Ｄ区、Ⅵ－Ｔ11・16グリッド

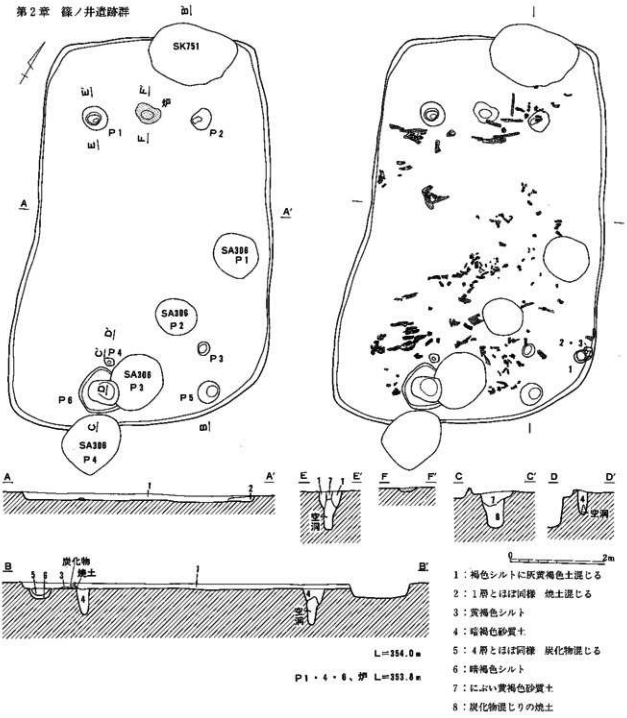
重複関係　SB407、SK755に切られる。一部調査区域外。
形　　状　隅丸長方形？
覆　　土　検出の不手際により不明。
壁　　　不明。
床　　面　堅固な貼り床。掘り方等はない。
柱　　穴　Ｐ１・２。残りは調査区域外と思われる。
炉　　　不明。調査区域外と思われる。
その他施設　不明。
遺　　物　覆土が存在しないため遺物なし。
所　　見　床面の広がりと検出面の高さから、弥生時代後期と推定する。



第37図　SB220

SB221（第38図、PL５）
位　　置　１Ｄ区、Ⅵ－Ｓ25、Ｔ21、Ｘ05、Ｙ01グリッド
重複関係　SK751、SA306に切られる。
形　　状　くずれた隅丸長方形。
覆　　土　単層。わずかしか残っていないため埋没過程不明。
壁　　　明確に検出され、傾斜して立ち上がる。
床　　面　堅固な貼り床。掘り方、貼り替え等は観察されなかった。
柱　　穴　Ｐ１～４の４本柱。Ｐ５・６は入口施設にかかわるものと思われる。Ｐ２・４は柱痕がみられたが、柱穴同様規模の小さなものである。
炉　　　Ｐ１～２間に１基。地床炉。
その他施設　特になし。
遺　　物　覆土が薄いためか遺物は少ないが、壁際の床面から外来系の壺が出土している。これに共伴する在地系の壺は箱清水式の中でもやや新しい様相をもつ。
所　　見　床面には多量の炭化材・焼土が広がり、一見消失家屋を思わせるが、焼土の広がりはまばらで、壁面も焼けておらず、何より床面遺物が少なすぎるため、住居廃絶後の焼却と考えたい。柱痕が認められるので、柱は切断されたものと推定される。
　形態的にはややくずれているものの、箱清水期の典型的な住居である。住居の規模に比して柱が細いことが気になる。

SB222（第39図、PL－）
位　　置　１Ｄ区、Ⅵ－Ｓ20・25グリッド
重複関係　SB226を切り、SB221、ST316、SK751に切られる。
形　　状　隅丸正方形？
覆　　土　レンズ状の堆積が認められるため自然埋没と思われる。
壁　　　明確に検出され、ゆるやかに立ち上がる。
床　　面　やや堅固であるが凹凸があり、貼り床ではない。掘り方等は観察されなかった。
柱　　穴　Ｐ１～４。



第38図　SB221

炉　　炉らしい焼土は４か所あるが炉２が主であろう。すべて地床炉で新旧関係等は不明。

その他施設　特になし。

遺　　物　覆土が薄いためか遺物は少ない。

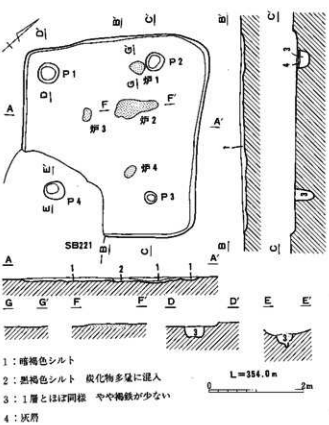
所　　見　覆土からは縄清水期の甕が出土しているが、住居形態は方形に近く、弥生時代後期付近に比定されるSB221に切られているため、それ以前ということになる。

SB223（第40図、PL－）

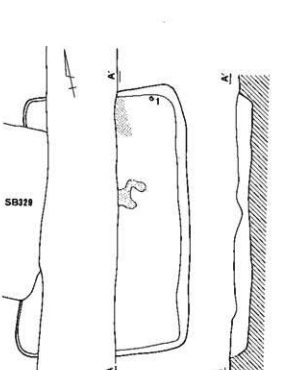
位　　置　１Ｄ区、Ⅵ－Ｓ15・20グリッド

重複関係　SB225を切り、SB239、SK272に切られる。

形　　状　長方形。中央部は工事の都合で調査できなかった。



第39図　SB222



第40図　SB223

覆　　土　単層。自然埋没？

壁　　明確に検出され、傾斜して立ち上がる。

床　　面　堅固であるが、貼り床は一部のみで観察された。掘り方等はない。

柱　　穴　不明。なし？

炉　　なし。焼土の広がりは2か所あるが、どちらもまばらに焼土が散っている程度。

その他施設　特になし。

遺　　物　遺物は少なくないが破片ばかりで図になるものはない。床面遺物も皆無に等しいので投棄または流れ込みによるものと思われる。

所　　見　明確な炉も柱穴もないため性格不明。形態、出土遺物から箱清水期である。

SB224（第41図、PL－）

位　　置　1D区、VI－S05・10、T06グリッド

重複関係　SB210・216・217、SD208に切られる。

形　　状　長方形？　一部調査区外。

覆　　土　単層。自然埋没？

壁　　明確に検出され、傾斜して立ち上がる。

床　　面　軟弱であり、貼り床、掘り方等はない。

柱　　穴　P1・2。これらと対をなすものは不明。

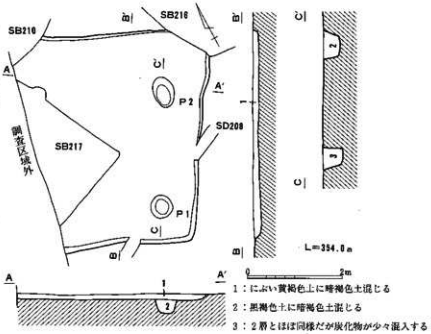
炉　　不明。

その他施設　特になし。

遺　　物　遺物は少ない上に破片ばかりで図になるものはほとんどない。床面遺物も皆無。したがって

投棄または流れ込みによるものと思われる。外来系の土器片が出土している。

所　　見　形態、出土遺物から縄清水期であると思われるが、床が軟弱な点が気になる。



第41図　SB224

SB225（第10図、PL－）

位　　置　1D区、VI－S20グリッド

重複関係　SB223、ST315に切られる。

形　　状　長方形？一部調査区外。

覆　　土　単層。自然埋没？

壁　　明確に検出され、傾斜して立ち上がる。

床　　面　堅固であるが、貼り床、掘り方等はない。

柱　　穴　不明。なし？

炉　　不明。なし？

その他施設　特になし。

遺　　物　遺物は少なく破片ばかりで図になるものはない。流れ込みまたは投棄によるものと思われる。

所　　見　規模、形態から一般的な住居跡とは考えられず、竪穴状遺構ととらえたい。床面から壺の胴部破片がまとまって出土したが、図にならなかった。

SB226（第10図、PL－）

位　　置　1D区、VI－S20、25グリッド

重複関係　SM243を切り、SB221・222、SK235に切られる。

形　　状　切られて不明。

覆　　土　単層。自然埋没？

壁　　明確に検出され、ほぼ垂直。

床　　面　堅固であるが、貼り床・掘り方等ははっきりしない。

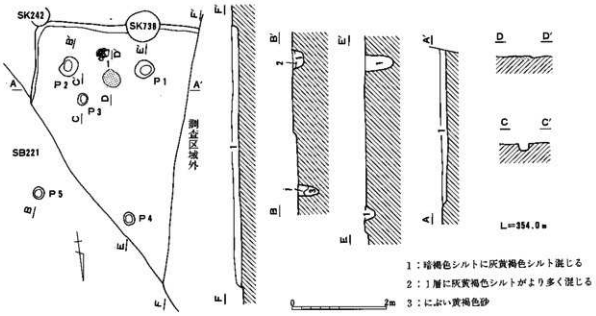
柱　　穴　不明。

炉　　不明。壁付近に小規模な床面焼土がみられるが炉ではない。

その他施設　不明。

遺　　物　遺物は少なく破片ばかりである。壁付近に多いことから、流れ込みによるものと考えたい。

所　　見　縄清水期の住居跡と考えられるが、調査できた範囲が少なく、断定はできない。他の住居跡に比して掘り込みが浅いことが気になる。床面から甕の胴部破片がまとまって出土したが図にならなかった。



第42図　SB227

SB227（第42図、PL－）

位　　置　1D区、VI－S25、X05グリッド

重複関係　SD205を切り、SB221、SK242・738・812に切られる。

形　　状　長方形。

覆　　土　単層。自然埋没？

壁　　明確に検出され、やや傾斜して立ち上がる。

床　　面　堅固であるが、貼り床という程ではない。掘り方等はない。

柱　　穴　P1・2・4・5。明確な柱痕はみられない。典型的な4本柱。

炉　　P1・2間。地焼炉。

その他施設　特になし。

遺　　物　全体に多いが破片ばかりである。投棄または流れ込みによるものがほとんどと思われる。スプーンの柄と思われる土製品が覆土から出土している。

所　　見　箱清水期の住居跡。入口を北にとるものは珍しい。

SB228（第10図、PL－）

位　　置　1D区、VI－S20・24・25グリッド

重複関係　SB229を切る。

形　　状　不明。ほとんどが調査区域外。

覆　　土　単層。自然埋没？

壁　　明確に検出され、やや傾斜して立ち上がる。

床　　面　堅固であるが、貼り床という程ではない。掘り方等はない。

柱　　穴　不明。

炉　　不明。

その他施設　特になし。

遺　　物　ほとんどなし。
所　　見　調査範囲可能な範囲が狭く何とも言いようがない。西側に位置するSB240の一部とも考えられる。

SB229（第10図、PL－）
位　　置　1D区、VI－S25グリッド
重複関係　SB228に切られる。
形　　状　不明。ほとんどが調査区域外。
覆　　土　単層。自然埋没？
壁　　　明確に検出され、やや傾斜して立ち上がる。
床　　面　堅固であるが、貼り床という程ではない。掘り方等はない。
柱　　穴　不明。
炉　　　不明。
その他施設　特になし。
遺　　物　ほとんどなし。
所　　見　調査可能な範囲が狭く何とも言いようがない。

SB230（第10図、PL－）
位　　置　1D区、VI－T16グリッド
重複関係　SB220を切り、SB408、SK825に切られる。
形　　状　隅丸長方形？
覆　　土　単層。自然埋没？
壁　　　明確に検出され、やや傾斜して立ち上がる。
床　　面　堅固であるが、貼り床という程ではない。掘り方等はない。
柱　　穴　なし。
炉　　　なし。
その他施設　特になし。
遺　　物　覆土全体から出土しているが、細片ばかりで図になるようなものはない。投棄または流れ込み。
所　　見　竪穴状遺構。出土遺物から箱清水期と思われる。

SB231（第43図、PL－）
位　　置　1D区、VI－S05、T01グリッド
重複関係　SB214・215・216・402・403、SK819・832に切られる。
形　　状　長方形。一部調査区域外。
覆　　土　単層。自然埋没？
壁　　　明確に検出され、傾斜して立ち上がる。
床　　面　北壁周辺のみ堅固。掘り方、貼り床等はない。
柱　　穴　P1・2・4。残りは調査区域外。
炉　　　なし。
その他施設　特になし。

遺　　物　覆土全体から出土しているが、細片ばかりで図になるようなものはほとんどない。投棄または流れ込み。床面中央から縄清水期の甕が出土しているが図にならなかった。

所　　見　形態的には縄清水期の住居跡と思われるが、柱穴の位置が尋常でなく、炉も見当たらないことから性格は不明である。

SB232（第44図、PL－）

位　　置　1D区、VI－N25、S05グリッド

重複関係　SK878を切る。

形　　状　隅丸長方形？約半分が調査区域外。

覆　　土　自然埋没。土層断面から明らか。

壁　　明確に検出され、やや傾斜して立ち上がる。

床　　面　堅固だが貼り床ではない。掘り方、貼り替え等はない。

柱　　穴　P1・2。残りは調査区域外。

炉　　不明。調査区域外と思われる。

その他施設　特になし。

遺　　物　覆土下層に多い。投棄または流れ込みによるものと考えたい。

所　　見　典型的な縄清水期の住居跡。入口施設が明らかでないが、あるいはP5・6がそれに当たるのかもしれない。

SB233（第45図、PL－）

位　　置　1D区、VI－S05グリッド

重複関係　SB234を切り、SK255・256に切られる。

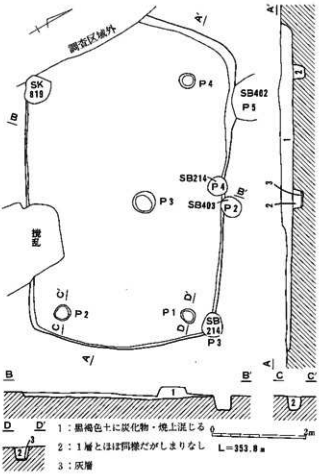
形　　状　隅丸長方形？約半分が調査区域外。

覆　　土　単層。自然埋没？

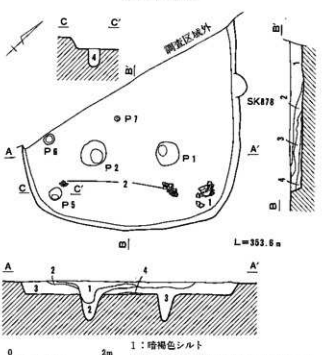
壁　　明確に検出され、傾斜して立ち上がる。

床　　面　堅固な貼り床。掘り方、貼り替え等はない。

柱　　穴　P1・2。残りは調査区域外。P3



第43図　SB231



第44図　SB232

は入口施設と思われる。

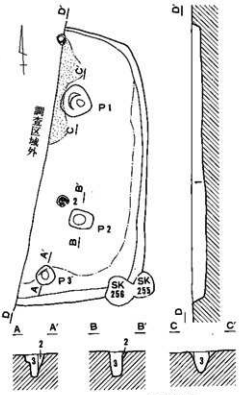
炉　　不明だが床面の一部に炭が濃密に散布する部分が認められるため、この付近の調査区域外に存在すると思われる。

その他施設　特になし。

遺　　物　覆土全体に多いが細片ばかりで図になるものは少ない。投棄または流れ込みによるものと考えたい。

特記遺物　特になし。

所　　見　典型的な箱清水期の住居跡。



第45図　SB233

SB234（第46図、PL－）

位　　置　1D区、Ⅵ－S05・10グリッド

重複関係　SB215・233、SK252・253・254・255・256・257に切られる。

形　　状　隅丸長方形？一部調査区域外。

覆　　土　調査の不手際により覆土ほとんどなし。

壁　　不明。

床　　面　部分的に堅固であるが、貼り床とは言い切れない。掘り方等はない。

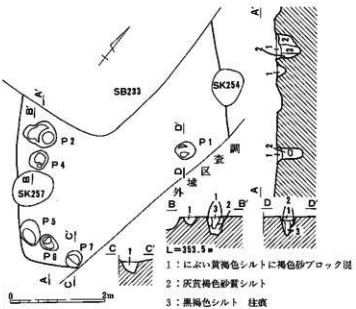
柱　　穴　不明。床下にいくつかピットがあるが本跡との帰属関係は明らかでない。

炉　　不明。

その他施設　特になし。

遺　　物　不明。重機による検出時点ではあまり遺物はみられなかった。

所　　見　床面の形状から箱清水期の住居跡と考えたい。



第46図　SB234

SB235（第47図、PL－）

位　　置　1D区、Ⅵ－S09・10グリッド

重複関係　SB414に切られる。

形　　状　楕円形。一部調査区域外。

覆　　土　レンズ状堆積が認められるため自然埋没と思われる。

壁　　緩やかに立ち上がる。

床　　面　明確な床は存在しない。

柱　　穴　なし。

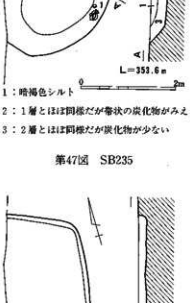
炉　　なし。

その他施設　特になし。

遺　　物　上層の壁際にわずかにみられるため、流れ込みによるものと思われる。骨の小片が出土して

いるが、種類不明。

所　　見　住居跡でないことは明らかだが性格不明。時期的には縄清水期。



1：暗褐色シルト
2：1層とほぼ同様だが帯状の炭化物がみえる
3：2層とほぼ同様だが炭化物が少ない

第47図　SB235

SB236（第48図、PL－）

位　　置　1D区、Ⅵ－S09・10・14グリッド

重複関係　SB235・238・241、SK259・268・269を切り、SB414・415、SK266に切られる。

形　　状　長方形？だとすれば約半分が調査区域外。

覆　　土　単層。自然埋没？

壁　　傾斜して立ち上がる。やや不明瞭。

床　　面　部分的に堅固であるが不明確。貼り床、掘り方等は存在しない。

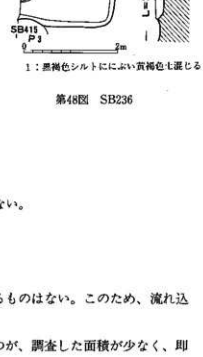
柱　　穴　不明。P1は浅く、入口施設にかかわるものと考えたい。したがって主柱穴は調査区域外。

炉　　不明。たぶん調査区域外。

その他施設　特になし。

遺　　物　覆土全体から非常に多く出土しているが、細片ばかりで図になるものは少数にとどまった。このため、投棄によるものがほとんどだと思われる。平面図に示した土器はすべて床面に遺棄されていたものであるが、1はやや時代が下るものか。

出土遺物から弥生時代後期の住居跡だと考えられるが、調査できなかった部分が多く、はっきりしない。1の土器が気になる。



1：黒褐色シルトにぶい黄褐色土混じる

第48図　SB236

SB238（第49図、PL－）

位　　置　1D区、Ⅵ－S14グリッド

重複関係　SB236・239に切られる。

形　　状　不明。長方形？だとすれば大部分が調査区域外。

覆　　土　単層。自然埋没？

壁　　傾斜して立ち上がる。やや不明瞭。

床　　面　部分的に堅固であるが不明確。貼り床、掘り方等は存在しない。

柱　　穴　P1。P2は浅く、主柱穴とするにはやや疑問。

炉　　不明。たぶん調査区域外。

その他施設　周溝あり。壁下を全周するものと思われる。

遺　　物　覆土全体から出土しているが、量はわずかであり、図になるものはない。このため、流れ込みによるものがほとんどだと思われる。

所　　見　床面付近から出土した遺物は、すべて縄清水式の特徴をもつが、調査した面積が少なく、即断はできない。該期の住居跡で周溝をもつものはまれである。

SB239（第50図、PL５）

位　　置　１Ｄ区、Ⅵ－Ｓ14・15グリッド

重複関係　SB223・238、SK272を切る。

形　　状　長方形。一部調査区域外。

覆　　土　単層だが覆土が薄いため、埋没過程不明。

壁　　傾斜して立ち上がる。やや不明瞭。

床　　面　堅固な貼り床。貼り替え、掘り方等は存在しない。

柱　　穴　Ｐ１～４。典型的な４本柱。Ｐ５はＰ１の支柱と考えたい。

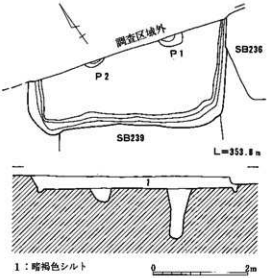
炉　　Ｐ１・４間に１基。地焼炉。

その他施設　特になし。

遺　　物　覆土下層から多く出土している。床面にも大型破片がみられたことから遺棄によるものが多いと思われる。

　鉢を模したミニチュア土器が床面から出土している。

所　　見　縄清水期の典型的な住居跡。



第49図　SB238

SB240（第51図、PL５）

位　　置　１Ｄ区、Ⅵ－Ｓ19・24グリッド

重複関係　SK274を切り、SB242に切られる。

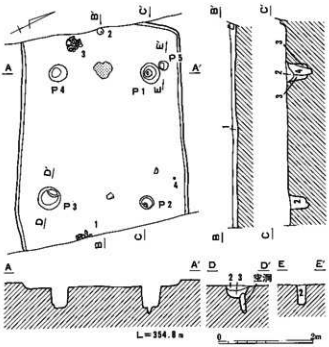
形　　状　隅丸長方形？一部調査区域外。

覆　　土　単層。自然埋没？

壁　　傾斜して立ち上がる。明瞭に検出された。

床　　面　堅固な貼り床。貼り替え、掘り方等は存在しない。

柱　　穴　Ｐ１～４。典型的な４本柱。Ｐ５はＰ１の支柱と考えたい。Ｐ６は他の柱穴に比して深く空洞が残っていた。



1：黒褐色シルト　　3：黒褐色シルト

2：暗褐色砂質土に黄褐色土混じる　　4：３層よりも暗い黒褐色シルト　柱底？

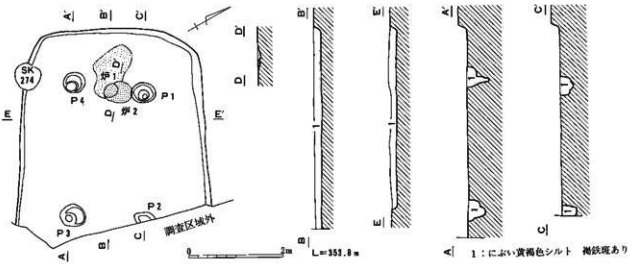
第50図　SB239

炉　　Ｐ１・４間に２基。明らかに作り替えで、炉１の方が新しい。

その他施設　特になし。

遺　　物　覆土中・下層から多く出土している。床面にも大型破片がみられたことから、遺棄によるものが多いと思われる。片口のついた無頸壺が床面から出土している。獣骨も床面からみつかったが、種類は不明である。

所　　見　縄清水期の典型的な住居跡。SB228と同一住居の可能性もある。



第51図　SB240

SB241（第10図、PL－）

位　　置　1D区、VI－S09・10グリッド

重複関係　SB235・236に切られる。

形　　状　不明。隅丸長方形？ほとんどが調査区域外でありコーナーの一部が調査できたにすぎない。

覆　　土　炭化物を多量に含む間層をもつことから、自然埋没の途中で焚火等が行われたようである。

壁　　ほぼ垂直に立ち上がる。明瞭に検出された。

床　　面　明確であるが貼り替え、掘り方等は調査面積が小さいことから不明。あまり堅固ではない。

柱　　穴　不明。壁直下にピットがあるが、ごく浅いもので性格は不明。

炉　　不明。調査区域外。

その他施設　不明。

遺　　物　床面付近に少量みられたのみ。遺棄によるものと思われる。

所　　見　出土遺物から箱清水期の住居跡と思われるが調査できた部分が小さすぎ、詳細は不明。

SB242（第52図、PL－）

位　　置　1D区、IV－S19グリッド

重複関係　SB240・416、ST315、SK276・849に切られる。

形　　状　長方形？検出の不手際により柱穴の位置等から推定。

覆　　土　不明。

壁　　不明。

床　　面　検出時点では堅固な部分は明確でなかった。

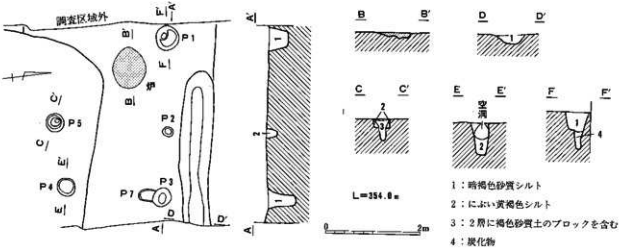
柱　　穴　P1～5。6本柱だと推定する。

炉　　やや大型の地床炉。

その他施設　不明。

遺　　物　覆土が存在しないため遺物なし。重機による検出時点では箱清水式土器がみられた。

所　　見　調査時点では住居跡とはとらえられず、整理段階で判断した。



第52図　SB242

SB303（第53図、PL－）

位　　置　１Ｂ区、Ⅵ－Ｎ06･07グリッド

重複関係　SB321・370を切り、SK304に切られる。

形　　状　方形？一部調査区域外のため断定はできないが柱穴の位置から推定できる。

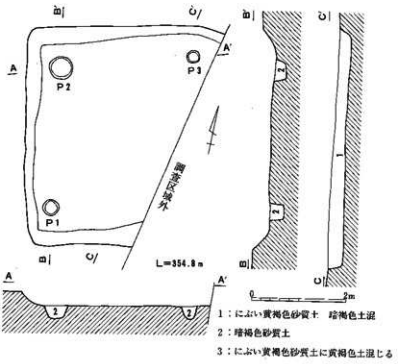
覆　　土　均質な単層。自然埋没と思われる。

壁　　やや傾斜して立ち上がる。明瞭に検出された。

床　　面　堅固であり、明確に検出されたが貼り床程ではない。貼り替え、掘り方等は不明。

柱　　穴　Ｐ１～３。４本柱だと推定する。

炉　　不明。調査区域外？



第53図　SB303

その他施設　不明。

遺　　物　全般に少なく、上層に多くみられた。流れ込みによるものと考えたい。床面、Ｐ３から精清水式土器が出土している。また床面から小型丸底土器が検出されている。

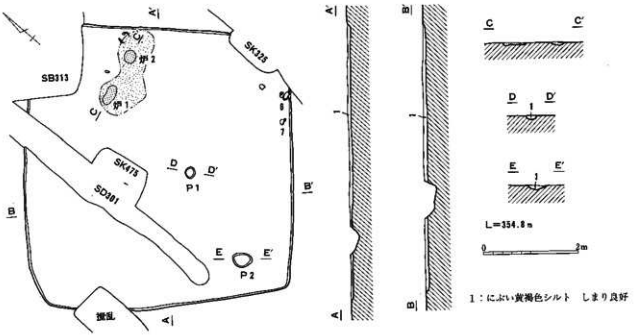
所　　見　出土遺物は弥生時代後期から古代まで多様であるが、住居の形態、特に柱穴の位置及び小型丸底の出土から古墳時代中期あたりと考える。

SB311（第54図、PL－）

位　　置　１Ａ区、Ⅵ－Ｒ05・10、Ｓ01・06グリッド

重複関係　SB312を切り、SB313、SK316・325・326・327・475、SD301・302に切られる。

形　　状　方形。



第54図　SB311

覆　　土　均質な単層。薄いため埋没過程不明。

壁　　わずかしか残っていないため、立ち上がり状態は不明。

床　　面　堅固であり、明確に検出されたが貼り床程ではない。貼り替え、掘り方等はない。

柱　　穴　なし？柱穴らしい位置にあるものはＰ２だが浅く、これと対をなすものも見当たらない。

炉　　２基、地床炉。新旧関係等は不明。どちらも壁際に寄っている。

遺　　物　覆土が薄いわりに、図になる遺物は多い。遺棄によるものと思われる。波状紋をもつ球形胴の甕、小型器台、小型高坏等。

所　　見　古墳時代前期の一括資料がそろっている。柱穴が明らかでないが該期の住居と思われる。篠ノ井遺跡群全体では古墳時代前期の住居はさほど珍しくはないが、新幹線用地内では、明確なものはこの１軒のみである。

SB312（第55図、PL－）

位　　置　１Ａ区、Ⅵ－Ｒ10、Ｓ06グリッド

重複関係　SB311・385、SK321・325・422、SD302に切られる。

形　　状　方形？堅固な床の広がりから推定。約半分程が調査区域外。

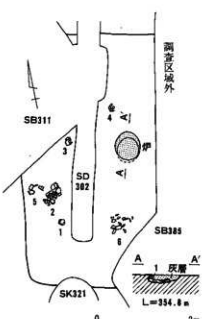
覆　　土　検出の不手際により覆土なし。

壁　　不明。

床　　面　堅固であり、明確に検出されたが貼り床程ではない。貼り替え、掘り方等はない。

柱　　穴　不明。なし？

炉　　浅い掘り込みをもつ。住居のほぼ中央に位置すると思われる。



第55図　SB312

その他施設　不明。

遺　　物　覆土がほとんどないわりに、図になる遺物は多い。遺棄によるものと思われる。

所　　見　古墳時代前期のSB311に切られているので、より古い時期であるが出土した土器は甕ばかりで、明確な時期差は見出せない。

SB321（第13図、PL－）

位　　置　１Ｂ区、Ⅵ－N06・07グリッド

重複関係　SB370を切り、SB303・372、SK359に切られる。

形　　状　隅丸方形？調査範囲が狭く、推定の域を出ない。

覆　　土　単層。自然埋没？

壁　　明確に検出され、やや傾斜して立ち上がる。

床　　面　堅固であるが貼り床程ではない。貼り替え、掘り方等はない。

柱　　穴　不明。Ｐ１・２とも浅く、想定される位置からもずれている。

炉　　不明。

その他施設　特になし。

遺　　物　遺物ほとんどなし。

所　　見　古墳時代中期ころと考えられるSB303に切られていることから、それ以前となるが、出土した遺物は弥生時代後期から古代まで多様であり、時期の特定には至らなかった。図になるような遺物は出土していない。

SB351（第56図、PL－）

位　　置　１Ｂ区、Ⅵ－Ⅰ02・03・07・08グリッド

重複関係　SB353、ST309・311・312、SD313、SK461・464に切られる。

形　　状　隅丸方形。一部調査区域外。

覆　　土　単層。自然埋没と考えたい。

壁　　明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。

床　　面　軟弱。貼り替え、掘り方等はない。

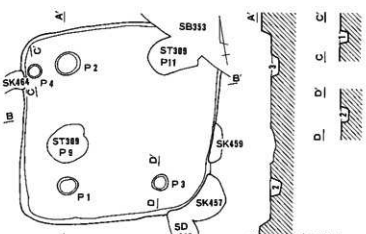
柱　　穴　Ｐ１～３。残りは切られて不明。どの穴もやや浅く、柱痕はみられない。Ｐ４は補助柱穴？

炉　　不明。

その他施設　特になし。

遺　　物　破片が少数出土したのみで図になるものはない。

所　　見　炉は不明であるが、床面・壁等はしっかりしている。古墳時代後期のSB353に切られている



第56図　SB351

ことから古墳中期あたりか。

SB359（第57図、PL－）

位　　置　1C区、V－X19・24グリッド

重複関係　SE301・302に切られる。

形　　状　楕円～不整形？上面検出ではまったく捉えられず、遺物の集中する範囲から推定。

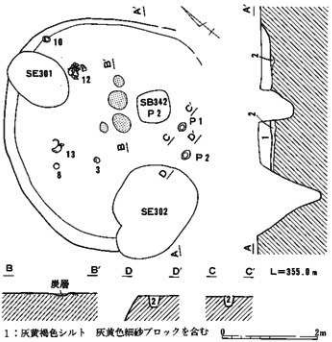
覆　　土　単層だが遺物投棄施設とすれば人為埋没？

壁　　大部分が不明であり、確認された部分では緩やかに立ち上がる。

床　　面　明確に検出され、中央部分では貼り床が認められる。貼り替え、掘り方等はない。

柱　　穴　不明。P1・2は何らかの施設に付属するものと考えたい。

炉　　地床炉4基。新旧関係等は不明。直線状に並んでいるようにもみえる。



第57図　SB359

その他施設　不明。

遺　　物　覆土上層から集中して出土。破片がほとんどである。投棄によるものと考える。鉄製品が1点出土している。

所　　見　しっかりした床及び炉をもつことから、住居に近い施設であろうが、平面形態といい、柱穴が不明な点といい、実に特異である。土器廃棄施設とすることに異論はないが、それ以前の機能についてはまったく不明である。遺物は細片ばかりで図になるものは案外少ない。外来系の高坏の脚が1点、胴部に穿孔された小型の甕が1点出土しているが、遺構の性格を示すような遺物は検出されなかった。

SB360（第58図、PL－）

位　　置　1C区、V－X14・19グリッド

重複関係　SK479に切られる。SD320との関係は捉えられなかった。

形　　状　隅丸長方形。一部調査区域外。

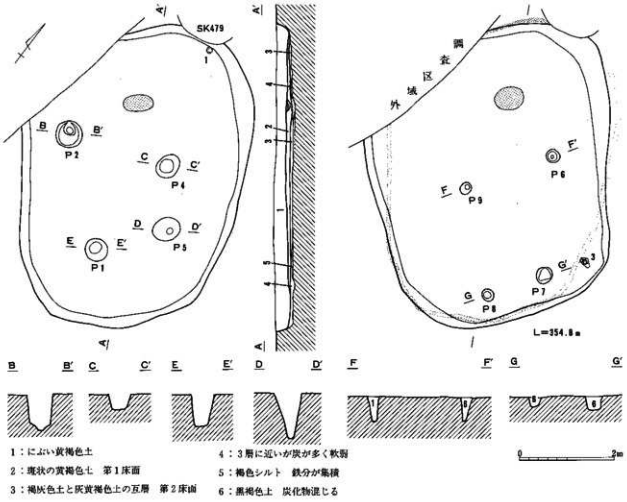
覆　　土　単層。自然為埋没？

壁　　明確に検出されやや傾斜して立ち上がる。掘り込み面はさらに上層？

床　　面　堅固な貼り床が2枚あり、厚さ10cm足らずの掘り方を伴う。第二床面（下層）はラミナ状の断面が観察され、版築風に突き固められている模様。

柱　　穴　第一床面、P1～5（P3は欠番）。6本柱を想定して精査したが検出されなかった。第二床面、P6～9。

炉　　地床炉。同一の位置に上下2基。



第58図　SB360

その他施設　特になし。

遺　　物　全般に少なく、傾向としては上～中層にやや集中する。覆土中より二重の脚をもつ高坏片が出土している。

所　　見　箱清水期の住居跡だが柱穴の位置がやや偏っている。

SB364（第59図、PL－）

位　　置　１Ｃ区、Ｖ－Ｘ23・24グリッド

重複関係　SB367・375を切る。

形　　状　隅丸長方形？大部分が調査区域外。

覆　　土　炭の含有量の差が明確なため分層したが、人為埋没の可能性が高い。

壁　　明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。

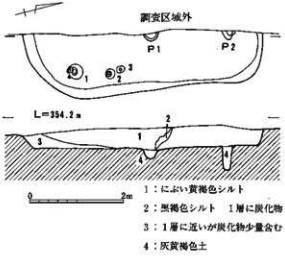
床　　面　軟弱。貼り替え、掘り方等はない。

柱　　穴　Ｐ２。これと対をなす柱穴は調査区域外。Ｐ４は浅く、位置もおかしい。

炉　　不明。たぶん調査区域外。

その他施設　不明。

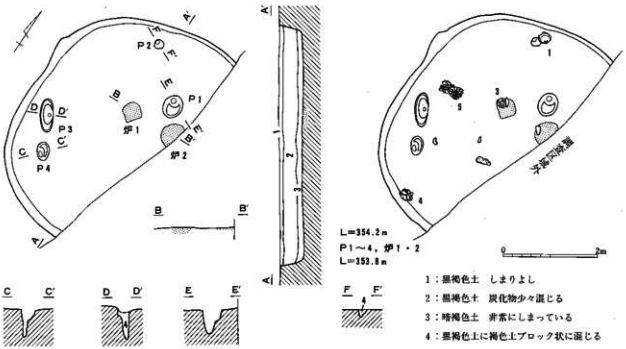
遺　　物　全般に少ないが壁際に多いので投棄または



第59図　SB364

流れ込みか。床面には大型破片が多い。

所　　見　出土遺物から箱清水期の住居跡。柱穴の位置から南北に軸をとると思われる。



第60図　SB365

SB365（第60図、PL－）

位　　置　1C区、V－X15グリッド

重複関係　SB366・373を切る。

形　　状　隅丸長方形？大部分が調査区域外。

覆　　土　3層に分けたがほとんど差はない。自然埋没か？

壁　　明確に検出されほぼ垂直～やや傾いて立ち上がる。

床　　面　堅固な貼り床。貼り替え、掘り方等はない。

柱　　穴　不明。P3・4は入口施設にかかわるものとも考えられる。

炉　　2基とも地床炉。炉1は長期にわたって使用されたとみえ、より深くまで焼土化している。

その他施設　不明。

遺　　物　覆土中総層に多くみられた。投棄によるものか。壁際の床面から鉄製ヤリガンナ。

所　　見　出土遺物から箱清水期の住居跡。P3・4を入口とすれば北東方向に軸をとると思われる。

SB366（第61図、PL6）

位　　置　1C区、V－X15グリッド

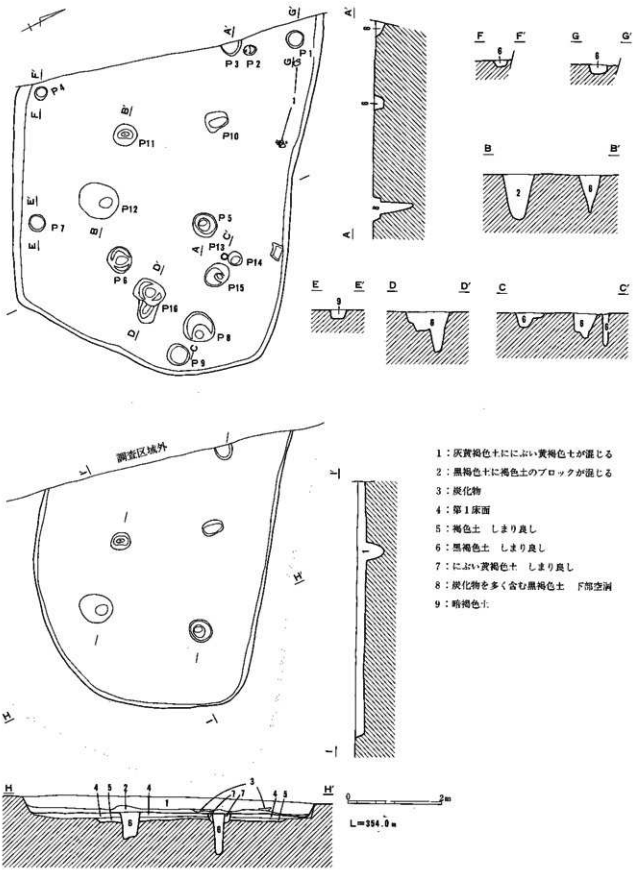
重複関係　SB366・373を切る。

形　　状　隅丸長方形？一部調査区域外。

覆　　土　単層。自然埋没？

壁　　明確に検出されほぼ垂直～やや傾いて立ち上がる。

床　　面　堅固な貼り床2枚。小規模な掘り方をもつ。

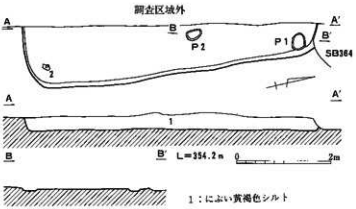

P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
G
G'
調査区域外
H
H'
1：灰黄褐色土ににぶい黄褐色土が混じる
2：黒褐色土に褐色土のブロックが混じる
3：炭化物
4：第1床面
5：褐色土　しまり良し
6：黒褐色土　しまり良し
7：にぶい黄褐色土　しまり良し
8：炭化物を多く含む黒褐色土　下部空洞
9：暗褐色土
L=354.0m
0
2m

第61図　SB366

柱　　穴　第1面　P3・5・10・11・12。6本柱と思われ、P3と対をなすものは調査区域外に想定。P16は棟持ち柱か。P1・4・7等は壁柱穴と考えたい。入口施設にかかわるものもあるはずだが、どの柱穴が相当するのかはっきりしない。
　　第2面　第1面と同様だが壁柱穴等はない。
炉　　不明。たぶん調査区域外。
その他施設　特に見当たらない。
遺　　物　覆土全体から出土しているが細片ばかりで、住居の規模のわりに図になるものはごくわずかである。床面にも遺物はほとんど残されていなかった。覆土中より扁平片刃石斧、太型蛤刃石斧の破片が出土している。
所　　見　住居拡張に伴い床を張り替えているが主柱穴を増やしたり移動させたりした痕跡は認められない。覆土からは新しい時代の遺物もかなり混入していることから、本跡のようなやや大規模な住居も自然埋没ということになるのだろうか。

SB367（第62図、PL－）

位　　置　1C区、V－D03グリッド
重複関係　SB364に切られる。
形　　状　隅丸長方形？大部分が調査区域外。
覆　　土　単層。部分的には分層されるが不明確。埋没過程等は不明。
壁　　明確に検出されやや傾いて立ち上がる。
床　　面　軟弱で掘り方等は観察されなかった。

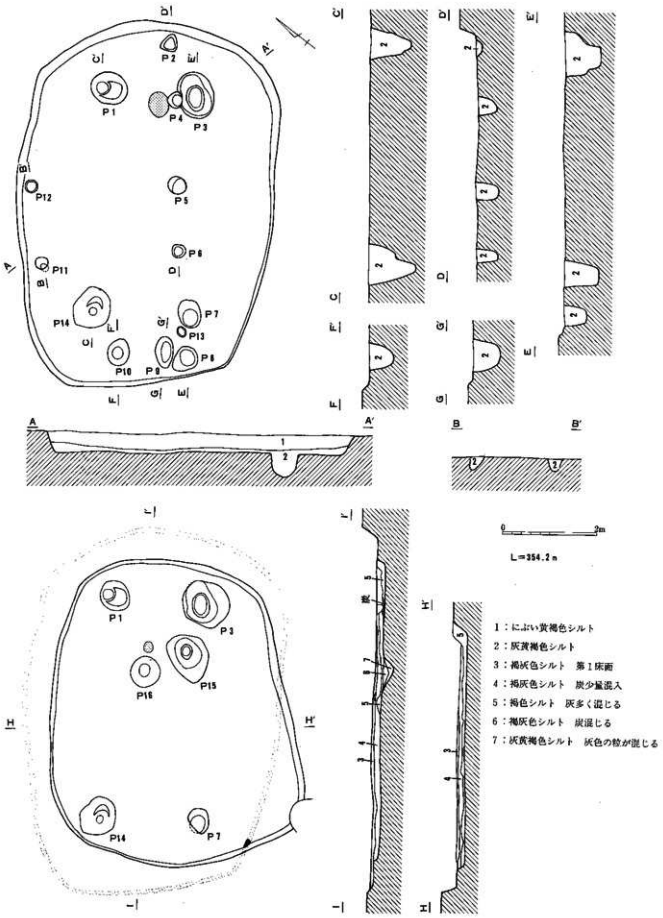


第62図　SB367

柱　　穴　不明。P1・2は補助柱穴？
炉　　不明。たぶん調査区域外。
その他施設　不明。
遺　　物　箱清水期の土器片がわずかに得られたにすぎない。流れ込みによるものと思われる。
所　　見　箱清水期の一般的な住居跡と思われる。

SB368（第63図、PL6）

位　　置　1C区、IV－D03・04グリッド
重複関係　SK485を切る。
形　　状　隅丸長方形
覆　　土　2層に分けたがほとんど差はない。自然埋没？
壁　　明確に検出され傾いて立ち上がる。
床　　面　堅固な貼り床2枚。掘り方はほとんど観察されなかった。
柱　　穴　第1面　P1・3・7・14。P9・10は入口施設か。P11・12は壁柱穴と考えたいが、P5・6とセットで何らかの施設となるのかもしれない。P2は浅く棟持ち柱とするにはやや無理がある。この穴からは管玉が出土しており、住居内の位置から祭祀的な雰囲気もする。


P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
A
A'
B
B'
H
H'
L=354.2m
0
2m
1：にぶい黄褐色シルト
2：灰黄褐色シルト
3：褐灰色シルト　第1床面
4：褐灰色シルト　炭少量混入
5：褐色シルト　灰多く混じる
6：褐灰色シルト　炭混じる
7：灰黄褐色シルト　灰色の粒が混じる

第63図　SB368

第２面　P16を除き、第１面と同様。補助柱穴等は不明。

炉　　それぞれの床面に１基ずつ。地床炉。

その他施設　特になし。

遺　　物　面覆土全体から出土しているが細片ばかりで住居の規模のわりに図になるものは少ない。投棄によるものと思われる。外来系の土器がややまとまって出土している。P14付近から卜占骨と思われる獣骨が検出されたが、取り上げられなかった。

所　　見　卜占骨や玉を伴っていることから特殊な性格の住居の可能性もなくはないが、住居形態からは一般的な箱清水期の住居である。

SB370（第13図、PL－）

位　　置　１Ｂ区、Ⅵ－Ｎ07グリッド

重複関係　SB303・321に切られる。

形　　状　不明。大部分が調査区域外。

覆　　土　下層には焼土がブロック状にみられるので人為埋没か？上層は不明。

壁　　やや傾いて立ち上がる。

床　　面　堅固であるが貼り床、掘り方等は観察されなかった。

柱　　穴　不明。調査区域外？

炉　　不明。調査区域外？

その他施設　不明。

遺　　物　箱清水期の土器片がわずかに得られたにすぎない。流れ込みによるものと思われる。

所　　見　箱清水期の住居とは思われないが、調査範囲が狭く判然としない。

SB373（第64図、PL－）

位　　置　１Ｃ区、Ⅳ－Ｘ15グリッド

重複関係　SB365・366に切られる。

形　　状　方形？大部分が調査区域外及び他遺構に切られる。

覆　　土　焼土・炭化物の多い間層をはさむ。やや埋まりかけた時点で人為埋没したものか。

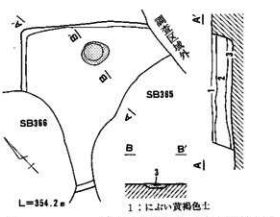
壁　　明確に検出されほぼ垂直に立ち上がる。

床　　面　堅固な貼り床。貼り替え、掘り方等は不明。

柱　　穴　不明。

炉　　地床炉。

その他施設　不明。



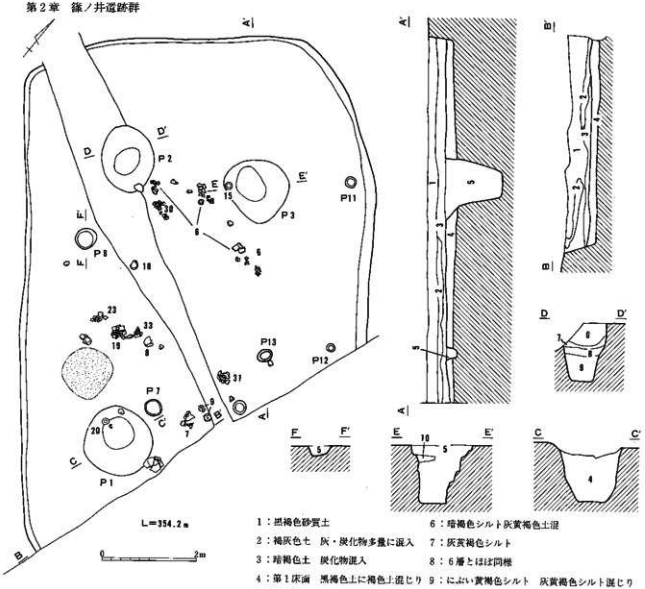
第64図　SB373

遺　　物　覆土中層から少量出土しているほか、床面から２点検出されたのみである。

所　　見　出土遺物から箱清水期の住居と思われるが、調査面積が狭く、断定はできない。柱穴が確認されない点、炉の位置等がやや気になる。

SB374（第65・66図、PL６・７）

位　　置　１Ｃ・Ｄ区、Ⅳ－Ｘ04・05・09・10グリッド



第65図　SB374 (1)

重複関係　SD205を切り、SK328に切られる。

形　　状　隅丸長方形。一部調査区域外。

覆　　土　３層にわたって炭化物が堆積しており、埋没過程で火を焚いた様である。

壁　　ほぼ垂直に立ち上がる。

床　　面　断面観察では５枚の堅緻面が確認され、第３床面までは確認したがそれ以下は調査期間の制約から断面観察のみとした。どの床面も非常に堅固である。掘り方は浅く、割合平坦である。

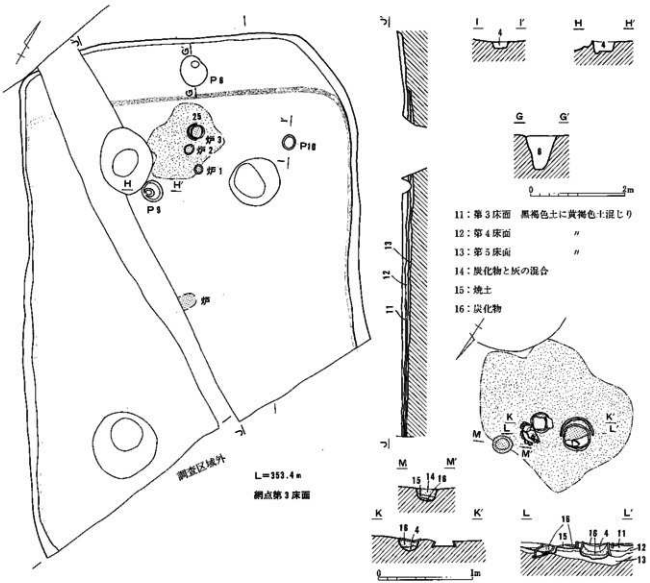
柱　　穴　Ｐ１～３。４本柱。他のピットは何らかの施設か。

炉　　第１床面　炉検出されず。第２床面　炉３基。炉１は地床炉、炉２・３は土器埋設炉。第３床面　地床炉１基。

その他施設　特になし。

遺　　物　住居廃絶後、土器投棄施設となったらしく、覆土全般にわたって膨大な量の土器が出土している。特に入口が予想される東側部分から大量に検出された。特記遺物も銅鏡、ガラス小玉、土製勾玉等多彩。

所　　見　篠ノ井遺跡群新幹線地点内の弥生後期の住居跡としては最大。床は5枚にも及ぶが、住居の拡張は1回のみであり、長期間の利用による貼り替えということだろうか。だとすると篠ノ井遺跡群内でも中核的なイエと言えそうである。しかしこれほど大規模なイエでありながら住居内にこれといった施設も見当たらず、住居の性格を裏打ちするような遺物もない。逆に最後の第1床面に炉が存在しないのはなぜか。また、6本柱が一般的となる規模にもかかわらず4本柱にこだわっていることもやや特異である。



第66図　SB374 (2)

SB375（第9図、PL－）

位　　置　1C区、V－X24グリッド

重複関係　SB364・376に切られる。

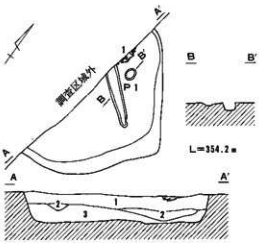
形　　状　不明。大部分が調査区域外及び他遺構に切られる。

覆　　土　2分層したが調査面積が狭いため埋没過程は不明。

壁　　緩やかに立ち上がる。

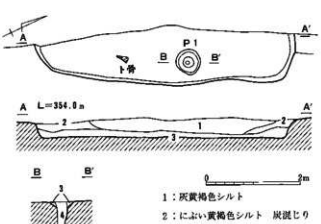
床　　面　軟弱で掘り方等はない。
柱　　穴　Ｐ１。これと対をなすものは調査区域外？
炉　　不明。
その他施設　不明。
遺　　物　覆土全般から出土しているが細片ばかりで図になるものはない。
所　　見　箱清水期の住居と思われるが調査範囲が狭く、断定できない。箱清水期とすれば南北にほぼ同時期の住居が４軒切り合うことになる。

SB376（第67図、PL－）
位　　置　１Ｃ区、Ⅴ－Ｘ19グリッド
重複関係　SB375を切る。
形　　状　不明。大部分が調査区域外。
覆　　土　３分層したが中間の部分に炭、焼土の多い層がみられる。人為埋没の可能性が高い。
壁　　やや傾いて立ち上がるが、上部では地山との差が識別しにくい。
床　　面　やや堅固であるが貼り床程ではない。貼り替え、掘り方等は検出されなかった。
柱　　穴　Ｐ１？調査範囲が狭いため不明。
炉　　不明。調査区域外？
その他施設　間仕切り溝？　深さ５㎝程で壁線とほぼ平行する。
遺　　物　覆土上層に多いが図になるものはごく少数である。投棄あるいは流れ込みと考えたい。
所　　見　弥生時代後期、箱清水期の住居跡と思われる。



第67図　SB376

SB377（第68図、PL－）
位　　置　１Ｃ区、Ⅳ－Ｄ08グリッド
重複関係　SB364を切り、SD316を切る。
形　　状　隅丸長方形？大部分が調査区域外。
覆　　土　SD316が本跡覆土を切るため全体の状況は不明。遺物出土状態から人為埋没と思われる。
壁　　明確に検出され、やや傾いて立ち上がる。
床　　面　やや堅固であるが貼り床ではない。貼り替え、掘り方等は認められなかった。
柱　　穴　Ｐ１？大部分が調査区域外のため不明。Ｐ１は補助柱穴か。



第68図　SB377

炉　　不明。多分調査区域外。

その他施設　不明。

遺　　物　覆土中層に多いが調査面積が狭く、詳細不明。大型破片が多いことから投棄によるものか。床面から15cmほど浮いた位置から卜占骨らしい獣骨が出土。肩甲骨であるが種類不明。

所　　見　弥生後期、箱清水期の住居跡と思われるが詳細不明。

SB380（第69図、PL－）

位　　置　1C区、Ⅳ－D09・14グリッド

重複関係　SB381・382を切る。

形　　状　長方形？一部が調査区域外。

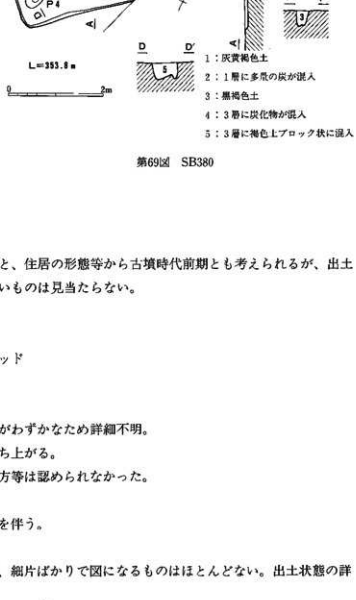
覆　　土　検出の不手際により覆土がわずかであるため詳細不明。

壁　　明確に検出され、ほぼ垂直。

床　　面　堅固な貼り床。貼り替え、掘り方等は認められなかった。

柱　　穴　P1・2・3・4。4本柱と思われる。P2・3は新旧関係？P5・6は何らかの施設にかかわるものか。

炉　　2基とも地床炉。新旧関係か。南側の炉に炉縁石。燃焼部を2つもつ1基の炉かもしれない。



第69図　SB380

その他施設　特になし。

遺　　物　覆土が薄いため詳細不明。

所　　見　箱清水期の住居を切っていること、住居の形態等から古墳時代前期とも考えられるが、出土遺物は箱清水期のみで特に新しいものは見当たらない。

SB381（第70図、PL－）

位　　置　1C区、Ⅳ－D08・09・13グリッド

重複関係　SB380に切られる。

形　　状　隅丸長方形。

覆　　土　単層。検出の不手際により覆土がわずかなため詳細不明。

壁　　明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。

床　　面　堅固な貼り床。貼り替え、掘り方等は認められなかった。

柱　　穴　なし。

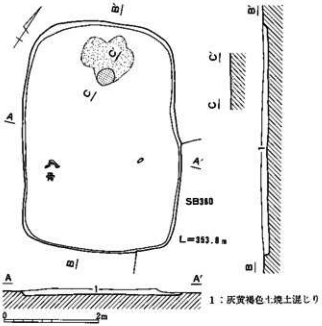
炉　　地床炉。北側に炭を敷いた部分を伴う。

その他施設　特になし。

遺　　物　覆土が薄いわりに遺物は多いが、細片ばかりで図になるものはほとんどない。出土状態の詳

細は不明。床面から獣と思われる骨が検出されているが取り上げられなかった。

所　　見　縄清水期でも新しい時期の住居と思われるが、遺物からは特に新しい要素は見当たらなかった。柱穴が確認されないことも不思議である。



第70図　SB381

SB382（第71図、PL－）

位　　置　１Ｃ区、Ⅳ－Ｄ08・09・13グリッド

重複関係　SB349・380・381に切られる。

形　　状　隅丸長方形。

覆　　土　単層。覆土がわずかであるため詳細不明。

壁　　明確に検出され、傾いて立ち上がる。

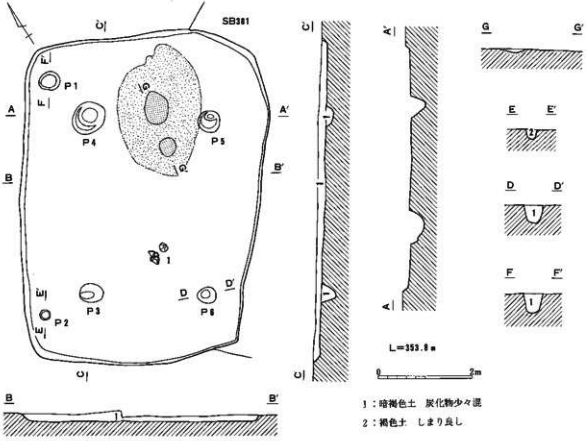
床　　面　堅固な貼り床。貼り替え、掘り方等は認められなかった。

柱　　穴　Ｐ３～６。Ｐ１・２は補助柱穴？

炉　　２基とも地床炉。新旧関係か。周辺に炭を敷いた部分を伴う。

その他施設　特になし。

遺　　物　覆土が薄いわりに遺物は多いが、細片ばかりで図になるものは少ない。出土状態の詳細は不明。床面から台付壷の脚部が検出されている。



第71図　SB382

所　　見　箱清水期の典型的な住居跡である。

SB383（第9図、PL－）

位　　置　1C区、Ⅳ－D14グリッド

重複関係　SK498を切り、SB349、SK491に切られる。

形　　状　長方形？大部分が調査区域外。

覆　　土　下層にブロック状の撹乱土が堆積しているので人為埋没か。

壁　　明確に検出され、傾いて立ち上がる。

床　　面　堅固な貼り床。貼り替え、掘り方等は認められなかった。

柱　　穴　不明。調査区域外？

炉　　不明。調査区域外？

その他施設　特になし。

遺　　物　遺物僅少。図になるものはない。流れ込み、あるいは投棄によるものと考えたい。

所　　見　箱清水期の住居跡と思われるが詳細不明。

SB384（第72図、PL－）

位　　置　1C区、Ⅳ－D18グリッド

重複関係　SK499に切られる。

形　　状　不明。大部分が調査区域外。

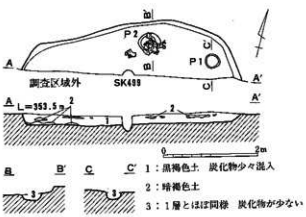
覆　　土　ブロック状の土層が観察されるため人為埋没と思われる。

壁　　明確に検出され、傾いて立ち上がる。

床　　面　軟弱であり、貼り替え、掘り方等は認められなかった。

柱　　穴　不明。調査区域外？P2・3とも柱穴とするにはやや浅い。

炉　　不明。調査区域外？



第72図　SB384

その他施設　特になし。

遺　　物　遺物は少なく床面遺物がほとんど。外来系の甕に小型器台、赤彩を施したS字口縁を伴っている。

所　　見　弥生時代最末期～古墳時代初頭の住居跡と思われるが、未調査部分が多いため不明。

SB389（第一図、PL－）

位　　置　1C区、Ⅳ－X20・25グリッド

重複関係　なし。

形　　状　不明。大部分が調査区域外。

覆　　土　炭化物が多量に混じる土層が観察されるため人為埋没か。

壁　　明確に検出され、ほぼ垂直に立ち上がる。

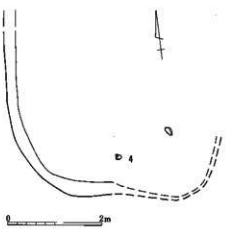
床　　面　軟弱であり、貼り替え、掘り方等は認められなかった。

柱　　穴　不明。調査区域外？

炉　　不明。調査区域外？
その他施設　特になし。
遺　　物　遺物は少なく床面遺物も見当たらなかった。
所　　見　出土遺物から箱清水期の住居跡と思われるが、ほとんどの部分が調査区域外で詳細不明。

SB390（第9図、PL－）
位　　置　1C区、Ⅳ－X15・20グリッド
重複関係　SB365、SK486に切られる。SK490との関係は不明。
形　　状　不明。隅丸長方形？一部が調査区域外にかかる上、大部分を切られるため断定しがたい。
覆　　土　2層に分割でき、自然埋没か？
壁　　明確に検出され、やや傾いて立ち上がる。
床　　面　明確に検出されたが軟弱。貼り替え、掘り方等は調査の制約から確認できなかった。
柱　　穴　不明。P1は柱穴とするにはやや浅いと思われる。
炉　　不明。調査区域外？
その他施設　特になし。
遺　　物　遺物は少なく確実な床面遺物も見当たらなかった。
所　　見　出土遺物から箱清水期の住居跡と思われるが、調査面積がわずかで詳細不明。

SB523（第73図、PL－）
位　　置　1E区、Ⅳ－O23・24グリッド
重複関係　SB508・509・522に切られる。
形　　状　不明。不整形？大部分を切られるため断定しがたい。
覆　　土　単層。埋没状況不明？
壁　　非常に不明確。ゆるやかに傾いて立ち上がる？
床　　面　不明。
柱　　穴　なし。
炉　　不明。調査区域外？
その他施設　特になし。



第73図　SB523

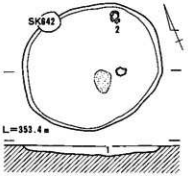
遺　　物　大型破片が多い。甕はほとんどなく、赤彩を施した壺、高坏が多くみられた。台付き壺の胴部下半～脚部の破片、横羽状紋を施した小型甕が出土している。
所　　見　遺物から住居跡とも考えたが検出面が高いこと、プランその他が非常に不明確なことから土器集中としてとらえておきたい。調査担当者は、隣接するSB509構築時点で出土した土器が廃棄された結果ではないかと考察しているが、SB509の下層からは明確な弥生後期の遺構は検出されていない。

SB549（第11図、PL7）
位　　置　1D区、Ⅳ－O13グリッド
重複関係　SB540・544、SK635に切られる。

形　　状　楕円形。
覆　　土　単層。だが2種類の土が混じっているため人為埋没か。
壁　　明確。ゆるやかに傾いて立ち上がる。
床　　面　堅固な貼り床。中央部がやや低い。掘り方、貼り替え等は確認されなかった。
柱　　穴　なし。
炉　　なし。
その他施設　特になし。
遺　　物　全般に非常に少なく、細片ばかりで図になるようなものはない。床面にも遺物はほとんどなかった。
所　　見　検出当初大型の土坑かと考えたが、しっかりした貼り床をもつことから住居跡とした。赤彩の壺破片が出土していることから弥生後期と思われるが、箱清水期の典型的な住居の形態ではなく、炉・柱穴も確認されないことから竪穴状遺構としたほうが良いかもしれない。

SB553（第11図、PL－）
位　　置　1D区、Ⅳ－O12・13・17・18グリッド
重複関係　SB518・544、SK635に切られる。
形　　状　長方形。炭化物が多く散布される範囲をもってプランとした。
覆　　土　単層。上面を古墳時代の住居に切られているため大変浅く、埋没状況不明。
壁　　不明確。立ち上がりはほとんどない。
床　　面　不明確。炭化物、遺物のついた面を床とした。
柱　　穴　なし。
炉　　なし。
その他施設　なし。
遺　　物　調査担当者は覆土全体から大量に出土したと記録しているが、覆土そのものが薄いことから埋没状況不明。
所　　見　住居と認める根拠なし。大量に出土したとされる遺物も引き継ぎの手違いからか不明である。

SB555（第74図、PL－）
位　　置　1D区、Ⅳ－O17・22グリッド
重複関係　SB558を切り、SK642に切られる。
形　　状　楕円形。炭化物が多く散布される範囲をもってプランとした。
覆　　土　単層。覆土全体に炭化物のブロックが混入しており、特に下層ほど多いことから住居廃絶の後、焼却、埋め戻しが行われた可能性が高い。
壁　　不明確。ゆるやかに立ち上がる。
床　　面　明確に検出され、特に中央部が硬いが、貼り床程ではない。掘り方、貼り替え等はみられなかった。
柱　　穴　なし。

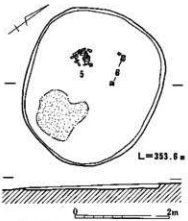


1：褐灰色土　炭化物多量に混入

第74図　SB555

炉　　地床炉。
その他施設　なし。
遺　　物　全般に多いが細片ばかりで図になるものは少ない。中央部に多いことから投棄によるものか。
所　　見　上部を古墳時代の住居に破壊されているので平面プランは不明確である。床も中央部を除き明確とは言いがたい。得られた遺物はすべて箱清水式である。炉が存在することから住居であろうが、箱清水期の楕円形住居はほとんど例がないため、検出ミスの可能性も考えねばならない。

SB556（第75図、PL－）
位　　置　1D区、Ⅳ－O18グリッド
重複関係　SB537・539に切られる。
形　　状　楕円形。遺物と炭化物が多く散布される範囲をもってプランとした。
覆　　土　単層。覆土全体に炭化物が散布している。
壁　　立ち上がりははっきりせず、炭化物の分布から設定。
床　　面　炭化物、遺物のついた部分をもって床面とした。
柱　　穴　なし。
炉　　なし？炭化物と焼土の集中する部分をもって炉とした。
その他施設　なし。
遺　　物　検出面から床面？まで達する土器集中区があり、大型破片がまとまって出土している。
所　　見　SB523・553などと同様に、住居とみるよりも土器集中としてとらえたほうが良いと思われる。



1：褐灰色土シルト質土　炭化物混じり
第75図　SB556

SB557（第一図、PL－）
位　　置　1D区、Ⅳ－O16・17・21・22グリッド
重複関係　なし。
形　　状　楕円形。硬い床面を追い、プランとした。
覆　　土　単層だが大変わずかしか残っていないため埋没状態不明。
壁　　不明。地山と覆土の差が少ないためほとんど確認できなかった。
床　　面　堅固な貼り床。貼り替え、掘り方等は確認されなかった。
柱　　穴　なし。
炉　　地床炉。
その他施設　なし。
遺　　物　遺物僅少。覆土が薄いことからすべて床面である。
所　　見　硬い貼り床が存在することから住居であろうが、平面形態その他は判然としない。本跡付近の弥生後期の住居らしい遺構はほとんど楕円形となっているが、かなり疑問である。

SB558（第76図、PL－）

位　　置　1D区、Ⅳ－O22・23グリッド

重複関係　SB555に切られる。

形　　状　楕円形。硬い床面を追い、プランとした。

覆　　土　単層だが大変わずかしか残っていないため埋没状態不明。

壁　　不明。地山と覆土の差が少ないためほとんど確認できなかった。

床　　面　堅固な貼り床。貼り替え、掘り方等は確認されなかった。

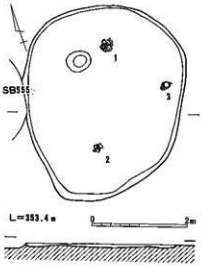
柱　　穴　なし。

炉　　地床炉。

その他施設　なし。

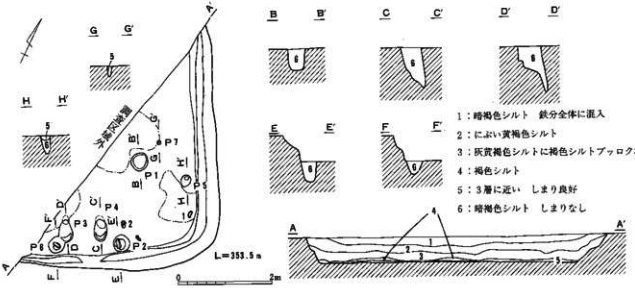
遺　　物　壁際に大型破片。遺棄によるものと思われる。

所　　見　しっかりした貼り床が存在することから住居であろうが、平面形態その他は判然としない。



1：褐灰色土に炭化物混じり

第76図　SB558



第77図　SB577

SB577（第77図、PL－）

位　　置　1D区、Ⅳ－N20、O16グリッド

重複関係　SB578を切る。

形　　状　隅丸長方形。約半分が調査区域外。

覆　　土　炭層が挟在しており、埋没過程で火を焚いた形跡が認められる。埋没自体は自然埋没？

壁　　明確に検出され、テラス状の小規模な平坦部をもつ。

床　　面　堅固な貼り床。一部に貼り替えが認められる。掘り方の有無は不明。

柱　　穴　P1。P2～4・6は入口施設。P5は補助柱穴？

炉　　不明。多分調査区域外。

その他施設　入口施設のP3・4は先端が斜め前方に向かっており、階段状の施設が推定される。P2・

６はこも石が入っており、柱抜き取り後、投棄されたものらしい。

遺　　物　炭層上面に遺物が多く、埋まりかけた住居に投棄したものと考えたい。特記遺物としては土玉が検出されている。骨片も出土しているが取り上げられなかった。

所　　見　典型的な箱清水の住居跡であるが、テラス状の壁は余り例をみない。

SB578（第11図、PL－）

位　　置　１Ｄ区、Ⅳ－N20、O16グリッド

重複関係　SB577に切られる。

形　　状　切られて不明。

覆　　土　炭層が挟在しており、埋没過程で火を焚いた形跡が認められる。埋没自体は自然埋没？

壁　　明確に検出され傾斜して立ち上がる。

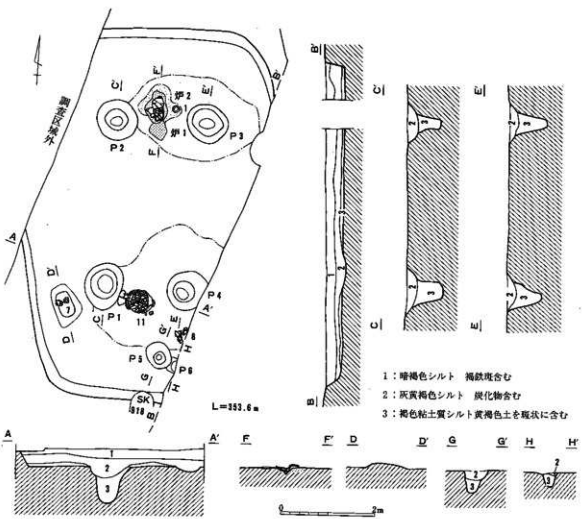
床　　面　軟弱。掘り方、貼り替え等はない。

柱　　穴　不明。

炉　　不明。

その他施設　特になし。

遺　　物　遺物僅少。



第78図　SB579

所　　見　遺物から箱清水期の住居跡と思われるが、調査面積が少なく詳細不詳。

SB579（第78図、PL７）

位　　置　１Ｄ区、Ⅳ－Ｏ01・02・06・07グリッド

重複関係　SK918に切られる。一部調査区域外。

形　　状　隅丸長方形。

覆　　土　ほぼ水平な層序が認められ、自然埋没と思われる。

壁　　やや傾いて立ち上がる。

床　　面　主柱穴周辺のみ堅固な貼り床。他の部分はやや軟弱。貼り替え、掘り方等は認められなかった。

柱　　穴　Ｐ１～４。Ｐ５・６は入口施設？

炉　　２基。土器敷炉が地床炉を切る。

その他施設　入口施設と思われるＰ６から完形の鉢。柱抜き取り後に投棄か。

遺　　物　全般に多い。投棄によるものか。覆土上面に大型壺。特記遺物としては赤彩の皿状壺。覆土上面からヒスイ勾玉。粘土紐を巻き上げただけの未完成のような土製品も覆土中より検出されている。

所　　見　典型的な箱清水期の住居跡。上面から検出された大型壺は残存率が高く、当初土器棺とも考えたが、骨片等はみられず、本跡廃絶後に投棄されたものとした。

SB580（第11図、PL－）

位　　置　１Ｄ区、Ⅳ－Ｎ20・25、Ｏ16・21グリッド

重複関係　なし。ただし調査区域外でSB578と切り合うと思われる。

形　　状　不明。

覆　　土　自然埋没と思われる層序が観察された。

壁　　なだらかに立ち上がる。

床　　面　床はなく、地山を掘り込んだだけの軟弱な底面となる。

柱　　穴　なし。

炉　　なし。

その他施設　なし。

遺　　物　全般に少なく、図示できるものはない。

所　　見　住居ではなく、竪穴状遺構ととらえたい。性格は不明である。

(3) その他の遺構

SA304・305（第79図、PL－）

位　　置　１Ｃ区、Ⅵ－Ｄ13・14グリッド

重複関係　SB382を切るピットがある。

形状・規模　SA304・305とも直径５～30cm、深さ12～40cmの円形ピットの集合で、方向は不規則なものの３～８個のピットが直列に並ぶためSAとした。

SA304　Ｐ１～Ｐ３が北東－南西方向に2.0m。Ｐ４～Ｐ６が北東－南西方向に2.5m。Ｐ６～Ｐ10が北西－南東方向に3.1m。

SA305　P1～P5が東西方向に1.8m。P8～P15が北東－南西方向に3.6m。P16～P23が南北方向に3.1m。

覆　　土　いずれのピットも単層。自然埋没？

遺　　物　なし。

所　　見　本跡は同時期の住居跡の検出面をやや下げた地点で確認されており、この種の小ピットは検出しにくいものの多数が分布していたものと思われる。形態・規模から棒を差し込んだように思われたが人為のよるものかは不明である。

SD204（第10図、PL－）

位　　置　1D区、Ⅳ－O23、T02・03グリッド

重複関係　なし。

形状・規模　幅30～62cm、北に進むにつれ幅広となる。断面形は丸底状、深さ11cm内外。緒約4m

覆　　土　単層。自然埋没と思われる。

遺　　物　なし。

所　　見　方形周溝墓の分布域にあるが、これらとは明らかに異なり墓群との関連は不明である。

SD205（第10図、PL－）

位　　置　1D区、Ⅳ－X05グリッド

重複関係　SB227・374、SK738・814に切られる。

形状・規模　幅85cm内外、断面形は丸底状、深さ5～11cm。北西～南東方向に1.6m程。

覆　　土　単層。自然埋没と思われる。

遺　　物　なし。

所　　見　機能・性格ともに不明。

SD206（第10図、PL8）

位　　置　1D区、Ⅳ－T11グリッド

重複関係　ST320P3、SM242に切られる。

形状・規模　幅80～160cm、断面形は平底状、深さ10cm程度。東西方向に5m程。

覆　　土　単層。自然埋没と思われる。

遺　　物　大型土器片が覆土上層にあるが本跡との関連は疑問。

所　　見　機能・性格ともに不明。

SD207（第10図、PL8）

位　　置　1D区、Ⅳ－T01・02グリッド

重複関係　SM242を切り、SB216、SD324、SK797に切られる。

形状・規模　幅50～79cm、断面形は平底状、深さ6cm程度。北東～南西方向に5.4m程。

覆　　土　単層。自然埋没と思われる。

遺　　物　土器片数点。流れ込みと思われる。

所　　見　機能・性格ともに不明。

SD208（第10図、PL－）

位　　置　1D区、Ⅳ－S10、T01・02・06グリッド

重複関係　SB224、SM240～242を切る。

形状・規模　幅30cm内外、断面形は丸底状、深さ4～11cm。北東～南西方向に15.6m程。

覆　　土　単層。自然埋没と思われる。

遺　　物　土器片数点。流れ込みと思われる。

所　　見　機能・性格ともに不明。

SD209（第10図、PL－）

位　　置　1D区、Ⅳ－T07グリッド

重複関係　SM240、SK225を切る。

形状・規模　幅35cm内外、断面形は丸底状、深さ12cm。北西～南東方向に2.8m程。

覆　　土　単層。自然埋没と思われる。

遺　　物　土器片数点。流れ込みと思われる。

所　　見　SM240とは無関係と思われる。機能・性格ともに不明。

SD210（第10図、PL－）

位　　置　1D区、Ⅳ－S20、T16グリッド

重複関係　SB400、SK822・825を切る。

形状・規模　幅22cm内外、断面形は丸底状、深さ7cm。北西～南東方向に6m程。

覆　　土　単層。自然埋没と思われる。

遺　　物　ほとんどなし。

所　　見　SD208と形態が類似。関連ありか。機能・性格ともに不明。

SD212（第－図、PL－）

位　　置　1D区、Ⅳ－S19グリッド

重複関係　SK276を切り、SK242に切られる。

形状・規模　幅54～70cm、断面形は丸底状、深さ9～20cm。東西方向に3.3m程。

覆　　土　単層。自然埋没と思われる。

遺　　物　甕底部や高坏脚部などやや大型の破片。投棄によるものと考えたい。

所　　見　方形周溝墓に近接するが関連性は薄い。

SD319・320（第9図、PL8）

位　　置　1C区、Ⅳ－X15・19・20グリッド。

重複関係　SB359・365・390を切る。

形状・規模　幅60～70cm、深さ約25cm。北東～南西方向に伸び調査区域内では約6m。

覆　　土　単層。自然埋没か。

遺　　物　箱清水式土器。

所　　見　弥生後期？道路の側溝か。

SD323（第13図、PL－）

位　　置　１Ｂ区、Ⅳ－Ｎ01・02・06・07グリッド

重複関係　SM222、土器棺墓203を切り、SB324・325、SD322、SK374～376・378・716に切られる。

形状・規模　東西方向、ゆるやかに北側に内湾。幅62～141cm、西に進むにつれ幅広となる。断面形は丸底状、深さ16cm内外。

覆　　土　単層。自然埋没と思われる。

遺　　物　箱清水式を含む土器がわずかに出土したのみ。

所　　見　遺物はほとんどないに等しいが、検出面のレベルと均質な覆土から弥生時代後期～古墳時代初頭と考えられる。

SD503（第11図、PL－）

位　　置　１Ｅ区、Ⅳ－Ｊ21・22グリッド

重複関係　なし。

形状・規模　幅60cm、断面形は平底状、深さ６～11cm。東西方向に3.1m程。

覆　　土　単層。自然埋没と思われる。

遺　　物　ほとんどなし。

所　　見　集落の縁辺部に位置する。

SK210（第79図、PL－）

位　　置　１Ｂ区、Ⅵ－Ｉ02グリッド

重複関係　SB209、SK211を切る。

形状・規模　長軸230cm、短軸105cmの楕円～隅丸長方形。断面は皿状、深さ20cm程度。

覆　　土　２分層されるが明確な差はない。埋没過程は不明だが自然埋没？

遺　　物　上層より人頭大の礫。土器片等はみられなかった。

所　　見　箱清水期の住居を掘り込んでおり、形態から土坑墓の可能性もあるが、壁の立ち上がりが不明確なため、埋まりかけた住居跡の凹地ととらえることも出来る。

SK221（第79図、PL８）

位　　置　１Ｄ区、Ⅳ－Ｏ22グリッド

重複関係　なし。

形状・規模　SK221：不楕円形。断面は皿状

覆　　土　２分層され下層は多量の炭化物を含む。埋没過程は不明だが自然埋没？

遺　　物　箱清水期の比較的まとまった破片が底部より出土。

所　　見　遺物のあり方から、土坑墓の可能性もある。

SK222（第79図、PL－）

位　　置　１Ｄ区、Ⅳ－Ｏ22グリッド

重複関係　なし。

形状・規模　直径60cmの円形で深さ70cm内外。

覆　　土　２分層され、下層はしまりの悪い黒褐色土。遺物との関連からたぶん人為埋没。

遺　　物　底部から半完形の小型の甕。
所　　見　隣接するSK221等を考えると土坑墓の可能性も出てくるが規模がやや小さい。

SK223（第10図、PL－）
位　　置　１Ｄ区、Ⅳ－Ｏ22グリッド
重複関係　なし。
形状・規模　一部調査区域外にかかるためはっきりしないが隅丸長方形を呈するものと思われる。断面形はたらい状。
覆　　土　単層だが覆土中位で焼土の広がりがみられた。人為埋没？
遺　　物　特筆すべき遺物は検出されていない。
所　　見　遺物は少ないものの覆土の状況、検出面の高さ等から弥生後期と思われ、平面形態を考え合わせると土坑墓の可能性もある。

SK252（第80図、PL９）
位　　置　１Ｄ区、Ⅳ－Ｓ05グリッド
重複関係　SB233を切る。
形状・規模　楕円形。長軸外56cm程度。断面丸底状。
覆　　土　単層。
遺　　物　高坏の大型破片。
所　　見　周辺には骨片を伴う土坑が分布しており、墓域を形成していたとすれば本跡も土坑墓の可能性が高い。

SK256（第10図、PL－）
位　　置　１Ｄ区、Ⅳ－Ｓ05グリッド
重複関係　SB233・234を切り、SK225に切られる。
形状・規模　円形。直径30cm内外。断面Ｕ字状。
覆　　土　単層。
遺　　物　壺の大型破片。
所　　見　周辺には骨片を伴う土坑が分布しており、墓域を形成していたとすれば本跡も土坑墓の可能性が高い。

SK258（第一図、PL－）
位　　置　１Ｄ区、Ⅳ－Ｓ09・10グリッド
重複関係　SB235・241を切り、SB236・414　Ｐ１に切られる。
形状・規模　楕円形。長軸80cm内外。円弧状。
覆　　土　単層。
遺　　物　高坏の大型破片及び骨片。骨は取り上げられなかった。
所　　見　土坑墓の可能性が高い。

SK263（第80図、PL９）

位　　置　１Ｄ区、Ⅳ－Ｓ14・19グリッド

重複関係　SK275を切る。

形状・規模　長楕円形。長径305cm。最大幅125cm、深さ33～47cm。北西端部は土坑状に深く71cm。

覆　　土　炭化物を多量に含む間層をもつが上下の層はほぼ同様の土質。

遺　　物　覆土最上部に甕大型破片。それ以外は遺物ほとんどなし。

所　　見　土坑墓を想定したが骨等は検出されず、間層を挟むことから別の用途を考えねばならないが判然としない。

SK268（第80図、PL－）

位　　置　１Ｄ区、Ⅳ－Ｓ09グリッド

重複関係　SB236・414に切られる。

形状・規模　楕円形。約半分？が調査区域外。断面たらい状。

覆　　土　単層。

遺　　物　骨片。骨は取り上げられなかった。

所　　見　土坑墓の可能性が高い。

SK485（第80図、PL９）

位　　置　１Ｃ区、Ⅳ－Ｄ04グリッド

重複関係　SB386の第２床面を切り、SD316に切られる。

形状・規模　円形。上面では直径1.0ｍ程度。深さ2.3ｍ。

覆　　土　上層は炭化物が多く、炭化物のみの層も観察された。下層は炭化物が少なく境界も漸移的。

遺　　物　５層上面からほぼ完形の箱清水式？土器６個体以上。５層内にはモモの種子が多数。

所　　見　素掘りの井戸。５層は現地表下4.6ｍで湧水点以下となる。出土した土器群やモモの種子は、井戸廃絶時の儀礼行為によるものか。土器群は完形に近いものの口縁を欠損しているものがほとんどである。

SK902・907（第11図、PL－）

位　　置　１Ｄ区、Ⅳ－Ｏ11グリッド

重複関係　SK920を切り、ST504 Ｐ３に切られる。／ST504 Ｐ５、SK684・911・912に切られる。

形状・規模　円形。上面では直径1.20ｍ／1.0ｍ。深さ0.8ｍ／0.9ｍ。断面逆円錐状。

覆　　土　分層され、ブロック状の断面が観察される。

遺　　物　土器片少々。

所　　見　約2.5ｍを隔てて近接し、形態・規模ともに類似しているため同様の機能・性格の土坑と考えられ、対をなしていた可能性もある。本跡は集落の縁辺部に位置している。

SK819（第11図、PL－）

位　　置　１Ｅ区、Ⅳ－Ｊ22グリッド

重複関係　SB564に切られる。

形状・規模　切られて不明。上面では長軸直径170cm、短軸90cm程度、深さ３～10cm。

覆　　土　覆土が薄いため埋没状況不明。

遺　　物　細かな土器片が散乱。投棄によるものか。

所　　見　土坑とするには掘り込みが浅く、周囲から遺構に伴わない土器も検出されていることから祭祀的な機能も考えられる。本跡は集落の縁辺部に位置する。

SE201（第80図、PL９）

位　　置　１Ｄ区、Ⅳ－Ｘ05、Ｙ01グリッド

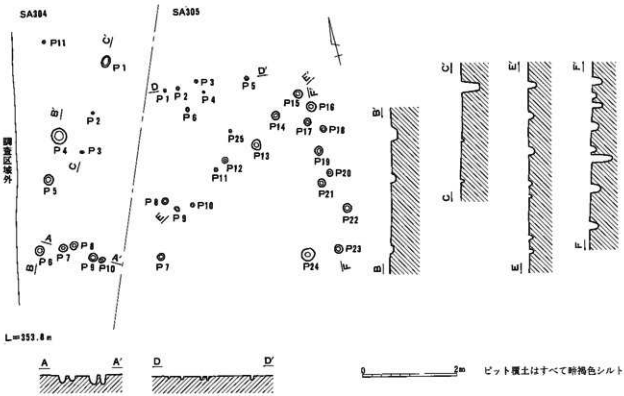
重複関係　なし。

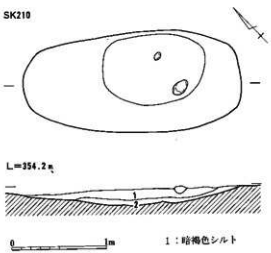
形状・規模　円形。上面では直径0.9ｍ程度。深さ1.6ｍ。ほぼ垂直に掘られている。

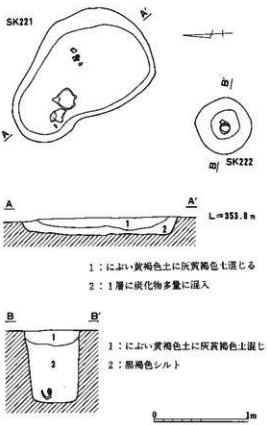
覆　　土　上部は火を焚いた痕跡が認められ、埋まりかけた井戸で何らかの行為が行われた模様であるが、下層は均質かつ漸移的な土壌で人為埋没とはかならずしも言い切れない。

遺　　物　底部付近から完形を含む大型破片が10個体以上。

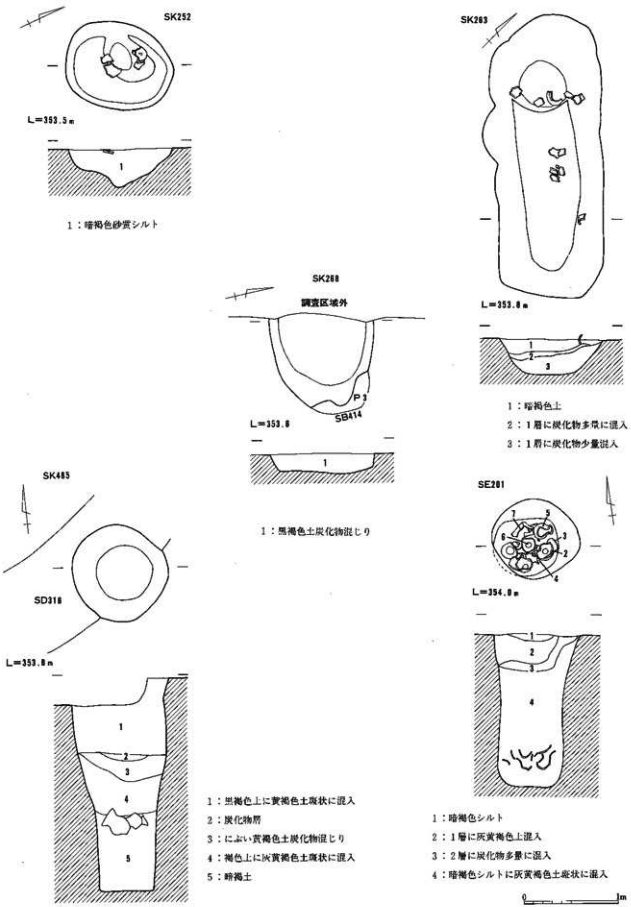
所　　見　出土した土器は当初すべて完形かと思われたが、意外にも胴部下半のみのものや、口縁部を欠損しているものがほとんどだった。SK485の例とあわせ、廃絶時の儀礼行為によるものと考えたい。







第79図　その他の遺構(1)　SA304・305、SK210・221・222



第80図　その他の遺構(2)　SK252・263・268・485、SE201

2　弥生時代後期～古墳時代中期の土器（土製品を含む）

(1) 概要

篠ノ井遺跡群新幹線地点から出土した該期の土器はかなりの量にのぼるが、明確に古墳時代まで下ると思われるものはごく限られた数になってしまう。したがって当初、大部分をしめる弥生時代後期の住居跡の土器を円形周溝墓群の土器とあわせ、遺構の切り合い関係・円形周溝墓の分布位置等から箱清水式の細分化も可能だと思われた。しかし実際に整理作業を進める中で、土器の器形・紋様に現れた変化は小規模かつ微妙であり、井戸等のやや特殊な遺構から出土する毛色の変わった土器等を時期差・様式差ととらえることは危険だと判断するに至った。

つまり、本遺跡の弥生時代後期は当初の予想を越える狭い時間幅の中に納まってしまうことが明らかになってきた。そこで箱清水式という土器様式の流れの中で新旧を大きくとらえることに重点を置き、切り合い等による遺跡内での微細な編年は別の機会に譲ることにした。結論から言えば箱清水期の細分は本遺跡群から出土した土器だけでは困難であったということになる注)。

以下、遺構番号順に述べたい。

SB201（第80・81図、PL32・33）

１は箱清水期に普通の鉢で底部を除く内・外面にミガキを施したのち赤色塗彩して仕上げている。本個体は底部付近の無彩色がやや特異である。一般的には２の形態で口縁に２孔をもつものが多い。底部の調整はナデだけのもの、ケズリを施すもの、まれには体部同様ミガキ・赤色塗彩する個体等もあり多様である。

３は無頸壺で口縁の２孔は蓋をとめるものかとも考えられるが、孔に使用にかかわるスレは観察できず対をなす蓋そのものが特定できていない。赤色塗彩はされていないものの底部までミガかれている。

４～６の高坏はどれも赤色塗彩を施され、ていねいな造りである。４のような形態と５に代表される椀型高坏とがあるが機能分化しているものと思われ、とりたてて時期的な消長はみられないようである。

７の蓋は甕につくものとみられ、外面の煤けたものがしばしば観察される。頂部に穿孔されているものが多い。８～13は煮沸用の甕で17、18の大型甕とは大きさ・器形とも明確に異なっている。サイズはさまざまで法量分化しているらしいが分析できなかった。11、12は頸部が短く、やや古い様相をとどめていると思われる。特に11は内面のミガキがまばらなためハケメが残っている。逆に13は頸部が長く全体に細長い器形で明らかに新しい様相を呈している。

また17・18は対をなすと思われ、土器棺の可能性が濃厚であるが覆土からの出土で骨等もみられなかった。両個体ともほぼ完形であるが18は頸部、底部を欠損しており示唆的である。

14・15はやや古い様相をもつ壺で外面の頸部以上はミガかれておらず、ハケのままとなっている。16は特大形の壺で頸部以上を欠損しているにもかかわらず50cm以上ある。いずれも頸部はＴ字紋ではなく直線紋である。

壺・甕のありかたから本住居は新相と古相の土器が混じっていると言えそうである。

SB202（第82図、PL33）

３の広口壺は頸部に２孔が１対あけられており蓋をとめる孔とも思われるが、鉢口縁部の孔と同様スレたあとはなく、判然としない。鉢の中に底部まで（つまり全面に）赤色塗彩を施したものがあり、これを倒置すれば広口壺や無頸壺の蓋になりそうであるが今のところ確証はまったくない。本個体は底部をヘラ

ケズリしたのち軽くミガいている。

4の甑は全面をミガキで仕上げており箱清水期の甑としてはやや大形か。

5～7は外来系の土器で5は在地の土器の胎土に近く、口縁端部を面取りしている。壺かと思われるが破片が小さくはっきりしない。6も在地の胎土で大形の高坏または器台と考えられ、北陸地方との関連がありそうである。7は胎土・調整とも箱清水式とは異なり、胴部下半の内面をヘラケズリした上荒くミガキを施している。脚が付いていた痕跡があり、外面及び口縁部内面をていねいにミガいたのち赤色塗彩している。

9は大形の壺で高さに比して頸部が細い。器高60cm程である。10～13の甕類は外面が剝落したものが多く調整はやや不明確である。10は器形から台付き甕と考えられ頸部の簾状紋は10単位以上静止している。

SB204（第83図、PL33・34）

1はよくある鉢であるが赤色塗彩がない。それ以外の調整は一般的な鉢と同様である。2の無頸壺は破片が少なかったためかややスリムになったが、本来はもう少しボリュームのある器形かもしれない。

3・4は外来系の土器で3は外面をハケ調整、内面をケズリで仕上げている。小型甕と思われ、胎土も特徴的で搬入品の可能性が高い。4は壺の口縁部と思われるが破片が小さくはっきりしない。胎土は箱清水式に近いものである。

5はやや特異な器形の大型甕で佐久市周防畑B遺跡出土の個体に似ている。6は箱清水式の一般的な大形甕である。

SB206（第83・84図、PL34・35）

1はSB204－2のような無頸壺と思われるが底部付近しか残っておらず判然としない。2は頸部に直線紋を施したのち櫛による刺突を施して簾状紋風に仕上げており、胴部の波状紋や赤色塗彩の状況から群馬地方の樽式にごく近いか樽式そのものである。

4・6は外面全体に赤色塗彩を施しており箱清水式の中でもやや古相か。

7～10は箱清水期に普通の甕で8と10は同一個体の可能性もある。甕に施される波状紋はくびれ部の簾状紋を境にくびれ部以上はくびれ部から口縁部に向かって下から上に、くびれ部以下は上から下に施紋される場合がほとんどである。しかし、大型甕の場合は胴部で上から下、下から上の両方向の施紋方法がとられることが多く、10の甕もそのような方法で施紋されたと思われる。

11の台付甕は8本前後の単位をもつ櫛によってていねいに施紋されており、簾状紋は6単位である。

SB205（第85図、PL34）

1の直口縁壺2は外面全面に細かいハケを施した後、ミガキで仕上げている。底部付近はナデ調整に変わり、ハケメが残る。底部はヘラケズリである。2は頸部しか残っていないが屈曲部分が観察されたため図のような有段口縁が想定される。3は壺の胴部と思われ、下半のわずかなくびれが箱清水式の名残をとどめている。

SB207（第85図、PL－）

1・3はくの字型に屈曲する口縁をもちハケで体部を仕上げている。壺・甕の区別が困難な器種である1は体部外面にハケメ、内面にミガキを施し、折り返し口縁端部を指頭圧痕で飾る。2は体部外面をハケのちナデ、口縁を除く内面をナデで仕上げている。

４は高坏かと思われるが破片がわずかで判然としない。焼成は良好で固く焼きしまっている。５は球形胴の壷と思われ底部までミガかれたうえ赤色塗彩を施されている。６は高坏の脚の一部と思われる。

SB209（第85・86図、PL－）

１は北陸系の壷の口縁であるが胎土は箱清水式に近い。内・外面ともミガキである。３は頸部に５段の櫛描き直線紋をもち、胴部下半の屈曲の強い個体である。

SB210（第86図、PL35）

１は小型の壷でハケ仕上げのままミガキ・赤色塗彩とも施されておらず、器形もやや古い様相となっている。４の壷は欠損した頸部以上を再利用したものか頸部に３孔があけられている。蓋のような用途だったのだろうか。この壷も頸部に直線紋を施されていたと思われ、本住居は箱清水期でもやや古相にあたると言えそうである。

SB211（第86・87図、PL35・36）

本跡は住居跡ではなく大形の土坑墓である。副葬された土器は箱清水期のセットであると考えられるが他の住居跡や墓から出土する大形の壷・甕は含まれていない。また円形周溝墓にしばしばみられるミニチュア土器やそれに近い小型品も検出されていない。すなわち、ごく日常的な器種あるいは大きさの土器だけが供えられていると言えよう。

１・３～５の高坏は３の椀型高坏を除き形態・大きさとも良くそろっており、一般的に使用される大きさがそれほど多様でないことを暗示させる。脚部に窓はなく、脚そのものも余り長くない。６・８は箱清水期の典型的な壷と思われ、６の頸部は上下を沈線で区画したＴ字紋が施されている。８は胴部に穿孔されており葬送儀礼にかかわる容器としての性格を付与されたものと考えたい。このことは他の個体・器種についても同様であるはずだが、胴部・底部の穿孔以外にも口縁の一部を欠損させた場合等ではその判断は容易でなく、今後の一視点となろう。本跡出土の土器も完全に接合されるものは少ない。

10・11の台付き甕、12・13の甕とも特に変わった点はみられず、一般的な個体と思われる。

SB212（第87・88図、PL36）

１は器種不明土器の口縁部で内・外面に赤色塗彩を施しているが、内面の輪郭付近は赤色塗彩されず、一部にハケまたは櫛による装飾をもつ。器台かとも思われるが判然としない。３は壷の胴部下半で直径40㎝近い大型品である。４の高坏はSB211の個体に比較して明らかに脚部が長く、４窓を備える。また７～９の甕は簾状紋以上の部分が長く、口縁端部を面取りしている個体が目立つ。これらの特長はともにやや新しい要素ととらえたい。甕とセットとなる５の蓋は内・外面をミガいて仕上げているが内面のミガキはやや粗く、ハケメが残っている。頂部に細孔が穿たれているが、蒸気抜きの孔だろうか。ゆがみの多い素焼きの甕に、同じく素焼きの蓋など被せたところで隙間だらけのはずであるが、何か特殊な機能でもあるのだろうか。

11のミニチュア土器は高坏を模したと思われ、高さ2.5㎝程度である。他の土器との比較のため敢えて同一縮尺で掲載した。

総じてこの住居跡の土器は箱清水式の中でもやや新しい様相と言えそうである。

SB214（第88図、PL－）

図示した鉢は口縁部の2孔は不明だが底部外面まで（つまり全面）赤色塗彩を施されている。ただし底部外面はミガかれてはおらずナデのままである。胎土に黒曜石が多量に含まれており表面の剝落が激しい。

SB215（第88図、PL－）

1の広口壺は全体の4割程残存しているが口縁の2孔は確認できず、孔のないタイプだと思われる。

SB216（第88図、PL－）

取り立てて特長もない高坏の脚である。小型であることから椀型高坏か。

SB217（第88図、PL－）

壺の胴部下半であるが、底部付近をヘラケズリした後ミガキで仕上げている。底部外面もヘラケズリされているようであるが磨耗しておりはっきりしない。

SB219（第88図、PL－）

台付甕である。頸部の簾状紋は11本程度の櫛で4単位に施紋している。施紋順序は通常の甕と同様、簾状紋から始まり、口縁部は下から上に、胴部は上から下に向かって施紋されている。

SB218（第89図、PL37）

1は小型の甑で、赤色塗彩はないが全面ミガキで仕上げられている。大きさから日常の什器とは思えず、やはり祭祀的な用途を想定しなければならないのだろうか。3はやや大型の高坏の脚であるが内面の上部をヘラケズリしている。一般に高坏の内面は端部が回転ナデ、端部以外はナデとなるが大型品は上部に粘土紐の輪積み痕が残る個体が多い。その意味で本個体はやや特徴的である。

5はまったく器形不明の土器の口縁部で、環状に開く端部の上面にウシの蹄のような連続刺突を行い、ミガキ・赤色塗彩を施している。上面以外も赤色塗彩されているがミガかれずナデだけの仕上げとなっている。端部以外は残存しないが甕口縁が認められることから、図示したような壺の口縁部を想定していたところ、手焙り型土器の口縁ではないかとの指摘を受けた。いずれにせよ外来系土器には違いないが、胎土は箱清水式と区別できないものである。

SB221（第89図、PL37）

1は胴部径50cm、推定器高75cmを超える大型壺である。2と同様頸部のT字紋は上下を沈線で区画され4単位で施紋されている。双方とも頸部の屈曲が強く、やや新しい要素をもつと言えそうである。3は外来系の台付広口壺とでも呼ぶべきものであるが、タマネギに脚を付けたような異様な器形をしており、いずれの地方の土器の流れを汲むものか今のところ出自不明である。外面は細かいハケの上にミガキ・赤色塗彩されており、内面は口縁付近を除いて赤色塗彩はなく荒いミガキとなっている。また脚部内面はナデただけの仕上げである。胎土は黒曜石を含み、在地の土器と同様である。

SB222（第89図、PL－）

典型的な箱清水式の甕である。頸部の簾状紋は6単位と思われるが口縁が全周していないため判然としない。頸部内面にかすかな屈折がみられるためやや新しいかとも思われるが断定はできない。

SB231（第89図、PL38）

図示した鉢は底部をヘラケズリで仕上げている。

SB224（第89図、PL－）

外来系土器。口縁端部を丸く玉縁状に仕上げている。北陸系の高坏の口縁に類例があるが、わずかな部分しか残っていないため判然としない。内・外面ともミガキ・赤色塗彩で仕上げており胎土も在地のものと思われる。

SB227（第90図、PL－）

１の甕は表面の風化が激しく、観察しずらい個体であるが、乱れた波状紋と端部がやや内湾することが特長である。２は匙状土製品の一部と考えられ、他の土器と同様、赤色塗彩された上ミガかれている。

SB232（第90図、PL38）

１の壺は外面に雑なミガキが施されているのみで赤色塗彩がなく、口縁部内面に赤色塗彩が行われている。また頸部もＴ字紋ではなく直線紋で、帯状に間隔をあけて施紋されている。２の甕は受け口にはなっていないものの頸部以上が短い。これらの特徴から本住居跡は箱清水期の中でも明らかに古い時期のものと考えられる。

SB233（第90図、PL－）

１の高坏は坏部に稜をもつタイプのものであるが一般的な個体よりもやや小型である。２は内面のみに赤色塗彩されたやや古相の壷の口縁である。

SB234（第90図、PL－）

図示した鉢は底部をナデただけで仕上げている。破片が小さいので口縁の孔は不明である。

SB235（第90図、PL－）

小型の壷の胴部下半である。内面はナデで仕上げている。

SB236（第90図、PL38）

１は内・外面ともミガかれているが赤色塗彩がなく、椀型の高坏かとも思われるが判然としない。２は口縁部に稜をもつ鉢で全面をミガキで仕上げているが、底部には赤色塗彩はない。３・４は一般的な甕であるが４はやや細長い感じがする。どちらも頸部の簾状紋は７単位である。

SB239（第91図、PL－）

１はやや小型の壷で赤色塗彩のないタイプである。上半部を欠損しているが図示した部分は完全で、破損品を再利用していたものらしい。２は椀型の高坏であるがくびれが強く、口径が15cm程であるのにくびれ部分はわずか３cmに満たない。当然のように脚部を欠損している。３はやや大型の高坏で脚は長く、４窓をもつ。やや新しい様相であろうか。４は鉢を模したと思われるミニチュア土器で口縁部にきちんと２孔を１対（つまり４孔）あけている。

SB240（第90図、PL38・39）

１は鉢の底部付近とみられ底部はヘラケズリしたのち粗くミガいている。２は片口をもつ無頸壺で内・外面、底部までミガかれているが赤色塗彩はない。このタイプの片口はほとんど赤色塗彩されないようである。４の甕はSB236－４と同じくややスリムな器形である。簾状紋の単位は不明。

SB241（第91図、PL－）

内面のみ赤色塗彩する壺の口縁である。本遺跡出土の壺はこのタイプの割合が少なくない。

SB303（第91図、PL39）

本遺跡唯一の古墳時代中期ころの住居跡である。１は小型丸底土器と思われるが表面が荒れていて調整は不明確である。２は小型高坏の脚部で４孔を持つ。

SB311（第91図、PL39）

御屋敷期あたりの住居跡である。１・３はいわゆる小型器台でどちらも脚部に３孔をもつ。３は外面が風化していて調整がはっきりしないが赤色塗彩はない。２・４は小型高坏と思われ、４は内面にカキメのような回転ナデが施されている。５の壺は胴部にミガキはなく、口縁の内面にミガキ、外面はハケのち粗いミガキを施している。６は折り返し口縁をもつ大型壺で、頸部外面に連弧状のミガキをもつ11の甕はくの字型に屈曲する頸部に球形の胴をもち伝統的な櫛描き紋を施している。

SB312（第91・92図、PL39）

甕ばかりであるがどれも表面をハケで仕上げており、くの字型に屈曲する口縁部とともにこの時期の特徴をよく示している。

SB359（第92図、PL39）

１～４は普通の鉢であるが、どれも調整が異なり、３が最も一般的な個体か。４は底部を含めた全面にミガキ・赤色塗彩を施している。５は壺の蓋と思われ、内外面をミガキ・赤色塗彩で仕上げている。口縁部に２孔をもつが破片が少ないため１対かは不明である。７は外来系の高坏または器台の脚部と考えられ、焼成・胎土とも瑞清水式とは異なる。外部をミガキ、内面をナデで仕上げ、小さめの４孔をもつ。９はやや特異な頸部の短い壺であるが破片が少なく判然としない。10の小型甕は胴部に穿孔されており特殊な用途が予想されるが、本跡は住居廃絶後、土器廃棄施設となっているためこの甕をもって遺構の性格を論ずることはできない。口縁部を一か所欠損していること、他の土器に比べて表面がかなり風化していることが気になる。

SB360（第93図、PL39）

１の鉢はほぼ完形であるが口縁部に孔はない。２は二重の脚部をもつ高坏と思われるが破片がわずかで判然としない。

SB364（第93図、PL40）

１の壺は口縁端部を面取りしており、頸部に櫛による４単位のＴ字紋をもつ。２の壺は内・外面ともにまったく赤色塗彩がない。

SB365（第93図、PL40）

図示した高坏は坏部の屈曲がゆるく、他の稜をもつ個体に比べてやや古いタイプと思われる。脚の接合部には裳口縁が明瞭である。４の甕は口縁端部を面取りしたのち波状紋を施し、頸部の簾状紋も二重になるなどやや特異な個体である。

SB366（第94図、PL－）

図示した壷は頸部に対をなさないＴ字紋を４単位施し、やや薄手に仕上げられている。

SB367（第93図、PL40）

１の鉢はミガキ・赤色塗彩とも施されておらず、ナデただけの仕上げである。２は一般的な壷の胴部下半で底部はヘラケズリのようである。

SB368（第94図、PL40）

外来系、あるいはやや変わった土器の多い住居である。１は短頸壷のような器形であまり見かけない土器である。外来系かとも思われるが胎土は箱清水式のものである。２・３は外来系の高坏と考えられ、ともに稜線のはっきりした硬質な印象を受ける土器である。３は４のような器種の脚とも思われるが、やや口径が大きいことから高坏の脚としたい。両方個体とも胎土は箱清水的である。５も高坏と考えたい。内外面ともミガキ・赤色塗彩されているが胎土は異なり、焼成も良好で硬く焼き締まっている。４はいわゆる台付甕を壷にしたような器形である。口縁・脚部とも端部をシャープに面取りしており体部内面はヘラケズリしたのちミガいている。脚部の内面はナデである。胎土は箱清水式に近いが調整等から明らかに外来系である。

５は匙型土製品の把手と思われ全面をミガキで仕上げている。

SB374（第94・95図、PL41）

土器が大量に出土しているが、住居廃絶後土器投棄施設となっており本跡への帰属性は薄い。１の無頸壷はミニチュア土器か。調整は一般的な無頸壷と同様である。破片のため口縁の２孔は対になるか不明。３～５は坏部に稜線をもつ高坏の脚とみられ、やや長めであるが窓はない。本住居から出土した高坏は破片も含め、脚に窓をもつものはほとんどみられない。７の壷は頸部に対をなさない７単位のＴ字紋を施している。器形的には変わったところはみられない。

15の片口は体部下半をハケ、それ以外の部分をナデで仕上げている。内面に白色の塗料のような鉱物質が付着しているが他の遺構から検出された土器片にも同様な鉱物質がみられるものがあり、この破片も片口の可能性が高い。残念ながら白色物質の分析は残念ながら間に合わなかった。

16・17の台付甕はそれぞれ形態が異なり、特に16は外来系かとも思われるが判然としない。20～24の甕は法量がさまざまであるが器形的にはよくそろっている。25は炉体となっていた土器で大型甕の胴部を利用したものである。

26～29は土製品を一括した。26は赤色塗彩を施した土製の勾玉で、ミガキははっきりしない。本来玉類の項でも扱うべきものであるが一括性を重視し本項で扱うことにした。28の紡錘車はナデ、29はミガキで仕上げられている。

30～35は外来系と思われる土器である。30は赤色塗彩はないが箱清水的な胎土で外面はミガキ、内面はハケのち粗いミガキとなっている。31は赤色塗彩されているが胎土は精選されており焼成も良好である。

北陸地方の系譜をたどるものと考えたい。32は壷の口縁と思われるが判然としない。33は大型の高坏の坏部と思われ、沈線を伴うシャープな稜が特徴である。脚は残存せず、付着部の疑口縁が明確である。全面ミガキ・赤色塗彩されており胎土も箱清水的である。34は高坏または器台の脚で端部を面取りしている。箱清水的な胎土であるため33と同一個体かとも考えたが、赤色塗彩の色調が異なるため一応別個体としておく。35も高坏の脚であるが胎土・焼成とも在地の土器とは異なる。SB359－7の個体と同一の器種と思われる。

SB376（第96図、PL－）

1は坏部に稜をもつ高坏、2は椀型高坏の脚と思われる。3の壷は底部及びその付近をヘラケズりしている。

SB377（第96図、PL－）

図示した壷は底部までミガキで仕上げている。内面は剝落が著しい。

SB380（第96図、PL40）

図示した甕に施された波状紋はすべて上から下に向かって施紋されているようである。それ以外は特徴のない一般的なものである。

SB382（第96図、PL－）

台付壷あるいは内面に赤色塗彩のない高坏と思われるが、胴部以上を欠損しているため判然としない。

SB384（第96図、PL40）

1はS字くずれの口縁をもつが、口径が9㎝程しかなく台付甕になるか判然としない。2は小型器台の口縁部と思われるが小破片である。3・4は口縁端部を面取りし体部外面をハケ、内面をナデまたは粗いミガキで仕上げている。これらの個体は北陸地方の土器の系譜をたどるものと思われる。土器の様相から本住居跡は御屋敷期付近か。

SB523（第96・97図、PL41）

2は台付壷と思われ、内面はナデたままの仕上げである。3は小型壷で底部を含む外面全体をミガいているが底部に赤色塗彩はない。ほぼ完形であるが口縁部をわずかに欠損している。4は脚の開き具合から椀型高坏か。5はやや古相の高坏で大型品でありながら坏部に稜をもたない。

7は佐久地方に多い横羽状紋をもつ甕で小型であることから搬入された可能性が高い。

SB555（第97図、PL－）

2の甕は最大径を胴部にもち、頸部が短い。箱清水期でもやや古く位置付けられると思われる。

SB556（第97図、PL42）

1の高坏はSB523－7程ではないが坏部の稜がはっきりせず、古い様相をとどめている。3～6の甕は波状紋のありかたはさまざまであるが、いずれも最大径を胴部上半にもち、頸部が短い。これらの特徴から本住居跡はやや箱清水期の中でもやや古い段階の住居と考えたい。

SB558（第98図、PL42）

３の台付甕は頸部がやや長く直立ぎみである。簾状紋は６単位である。

SB577（第97図、PL42）

１の鉢は口縁端部が受け口状につまみ上げられ、２孔を備える。底部はナデただけの調整である。２孔は対にならない。２の甕は表面の剥落が激しく、調整ははっきりしない。

SB579（第98図、PL43）

１は内外面をミガキ・赤色塗彩で仕上げており、口縁部に２孔を１対備える。蓋と思われ、上田市岳の鼻遺跡にも例があるが今のところ機能等は判然としない。本遺跡でも唯一の個体で口縁の一部を除き、ほぼ完形である。２は鉢とも小型高坏とも考えられるが欠損部に疑口縁がみられるので高坏の可能性が高い。３は小型の蓋で小型甕または台付甕に伴うものと思われるが本遺跡内では他に類例がない。４は台付甕らしいが口縁は短く、直立ぎみでやや特異な器形である。５は横羽状紋をもつと考えられる甕でSB523－７のような器形になると思われるが破片が小さく、図示したとおりである。６は粘土紐を巻き上げただけの土製品でミニチュア土器の未完成品とも思われるがまったく不明である。

11は器高65cmを超える大型壷で、当初土器棺ではないかと思われたが人骨等は確認されず本住居跡に伴うものとした。頸部のＴ字紋は４1/2単位であまり例をみない土器である。

７の甕は頸部に簾状紋を３段に配し、それぞれ６単位である。波状紋はあまり洗練されておらず口縁端部の形態も特異である。やや古相の甕といえようか。８は一般的な器形の甕で簾状紋は11単位である。表面の風化が著しく調整ははっきりしない。

９は外来系の器台と思われ内外面をミガキ・赤色塗彩で仕上げている。胎土は箱清水的である。10は壺の口縁部と考えられ、端部を面取りしたうえキザミを施している。小破片であるが胎土・焼成とも箱清水とは異なる。双方とも北陸系の土器と考えたい。

SK210（第98図、PL－）

外面をハケで仕上げ、口縁端部を軽く面取りしている。４世紀あたりかと思われるがもっと下る可能性もある。

SK214（第99図、PL44）

SB211と同様な土坑墓である。１は小型の壷で外面はミガキ・赤色塗彩を施しているが内面はまったくミガかれていない。２の鉢の２孔は対にならない。底部はヘラケズリである。３は広口壷か。４～８の土器はどれも一般的な個体で特筆すべき特徴は見当たらない。SB211を切っているので新しいはずだが土器はほとんど差がない。SB211のような日用品のセットを成していないことが特徴か。

SK221（第98図、PL44）

小型の広口壷である。本跡は土坑墓の可能性もあるため副葬品とすればミニチュア土器とした方が適当かもしれない。底部までミガキ・赤色塗彩を施している。口縁の２孔は１対である。

SK222（第98図、PL44）

SK221と同様に墓の可能性が高い土坑である。本個体も底部までミガキ・赤色塗彩を施しているが内面

の下半はミガキのみで口縁の2孔も対をなさない。

SK231（第98図、PL－）

当初紡錘車かと思われたが、内・外面をミガキ・赤色塗彩しており中央部がやや高まるため小型の蓋あるいは蓋を模したミニチュア土器と考えた。全体の1/4程しか残存していない。

SK252（第98図、PL－）

体部に稜線をもつ高坏の脚部と思われるが、端部を面取りしており、窓も3方である。

SK485（第99・100図、PL44・45）

井戸の廃絶に伴い投棄されたと思われる土器群である。1～3・5は良く似た器形・大きさだが紋様・調整がすべて異なっている。また、すべて口縁あるいは胴部上半を欠損しており、底部・胴部に穿孔された土器と同様な意味を付加されていると考えたい。4・6も器形は前グループと異なるがあり方は同様である。

これらの土器について、当初他の住居跡から出土した土器群と比較して新しく位置づけるべきと考えていた。しかし、井戸から出土する土器は一般の住居跡から出土する土器とやや異なる場合が多く、一括投棄されたはずの7の甕に特に新しい要素は認められないことから、本跡出土の土器群をもって時期的な差異を示すものとはできないとの結論に至った。したがって弥生時代後期の井戸は、当時の人々にとってその廃絶において日常とはかなり異なる土器を投棄させる程に特殊な意味をもった施設だったということになるのだろうか。

SE201（第100・101図、PL45・46）

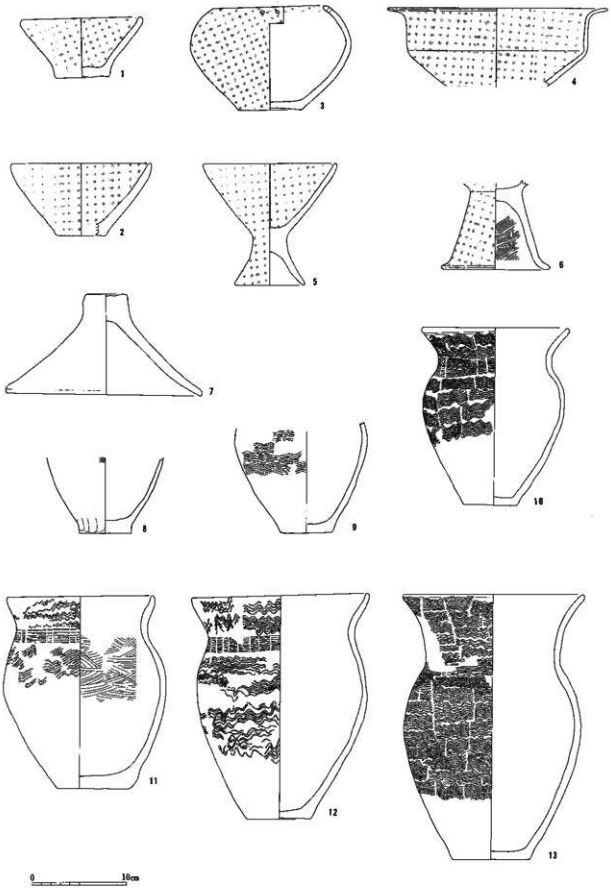
本跡も弥生時代後期の井戸である。SK485と比較してやや日常的な土器が多く含まれていることが特徴と言えるだろう。完形品はなく4・6・8等も口縁の一部を欠損している。

遺構外（第101図、PL47）

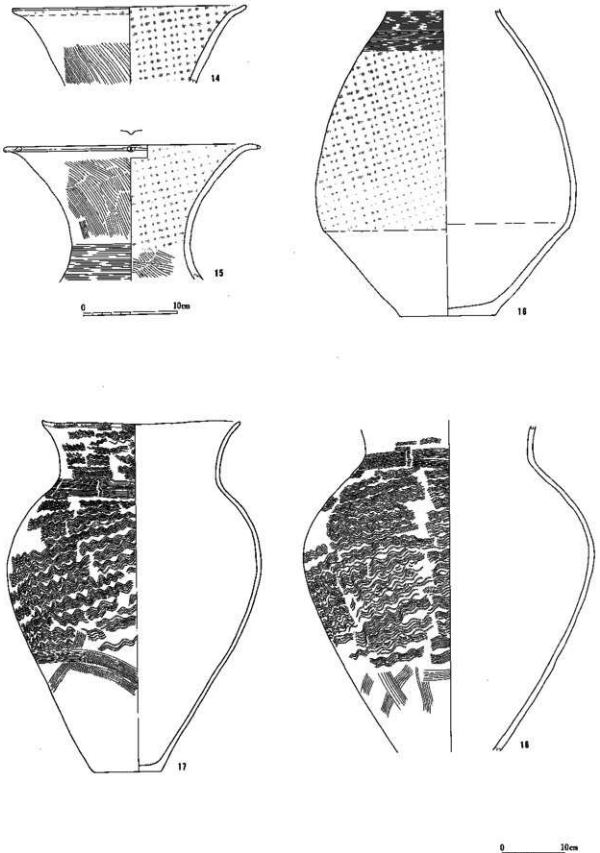
グリッド遺物及びまったく時代の異なる遺構から検出された土器を一括した。2は片口のついたやや大型の鉢で、このタイプは本遺跡内ではこの1点のみである。4は土器棺に使用されるような大型壺であるが古墳時代後期のSB371から検出されている。5は胴部に穿孔されており、特殊な用途を予想させるが奈良時代に比定されるSB407の床下から出土している。7は台付壺と思われるが検出面遺物である。11は中世の大溝SD501から出土しており、外来系の高坏の脚部と思われる。

注）弥生時代後期の土器について、宵木一男氏から有益な教示を受けた。記して感謝したい。

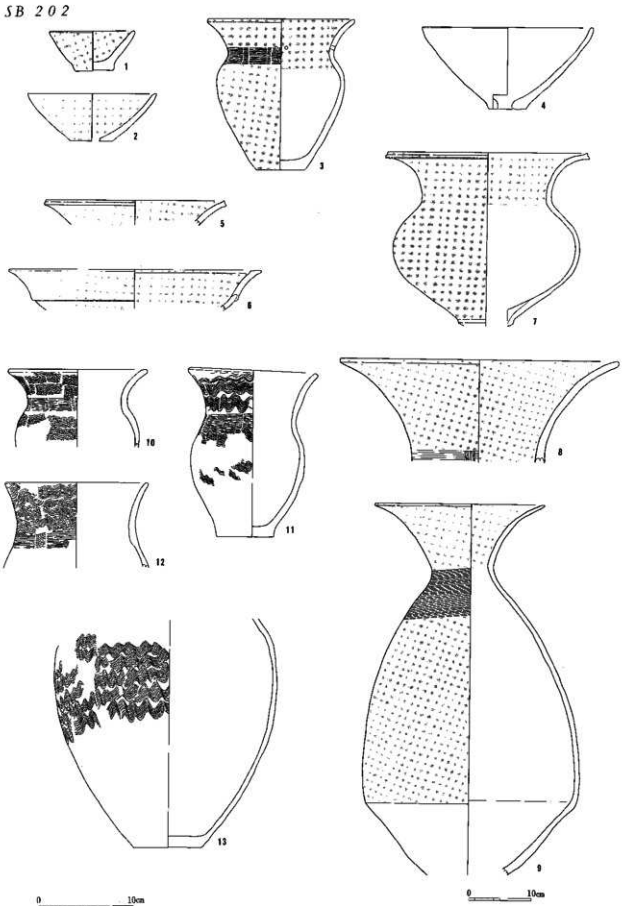
SB 201



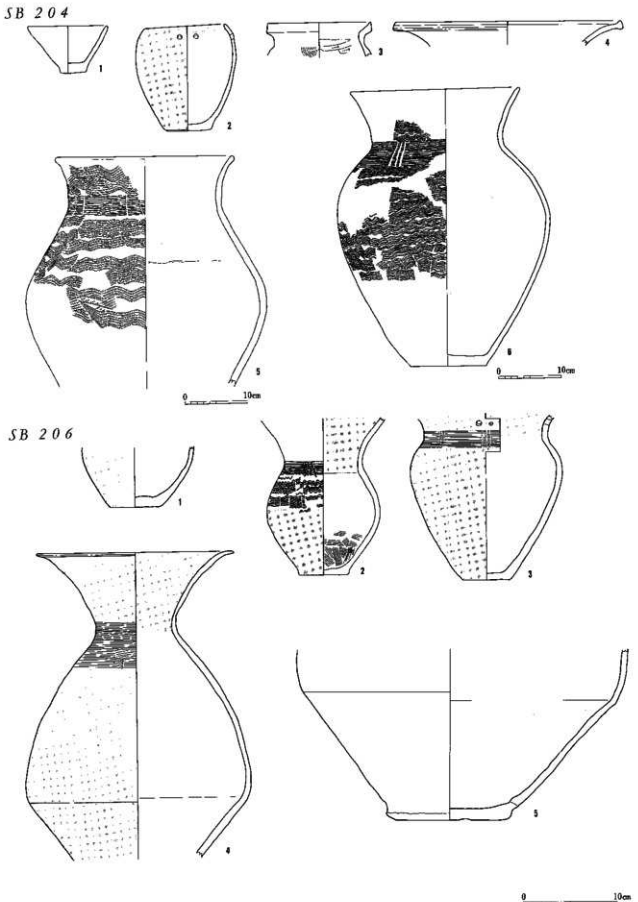
第81図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(1)



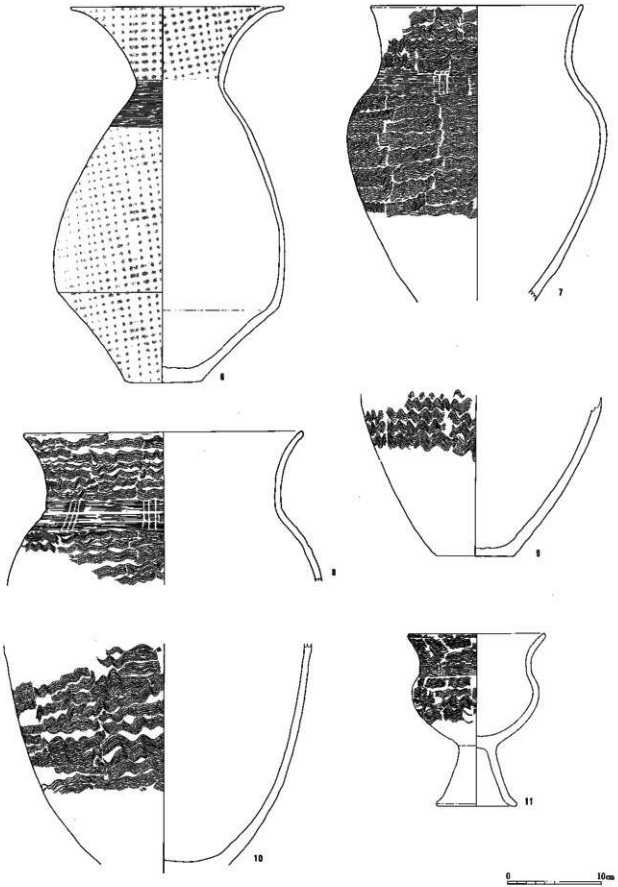
第82図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(2)



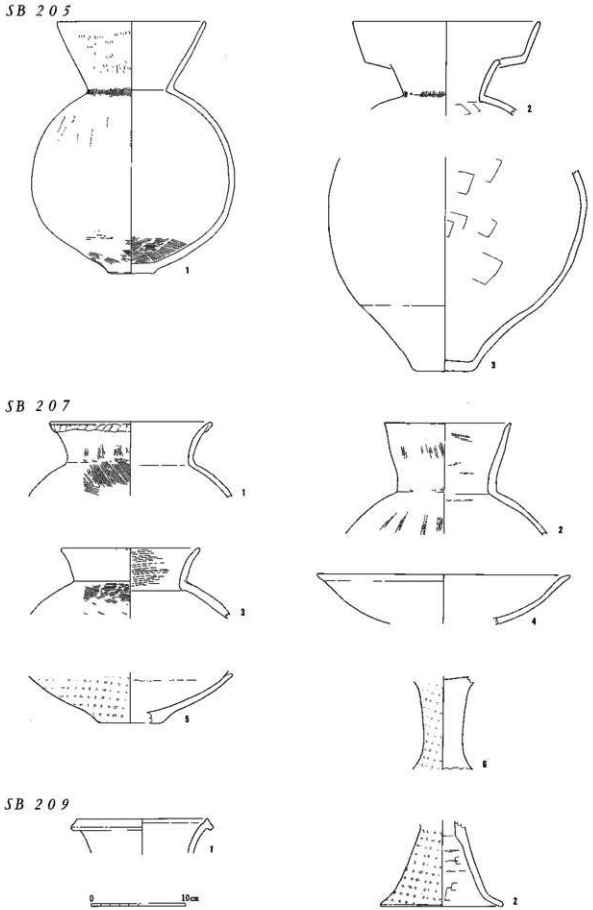
第83図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(3)



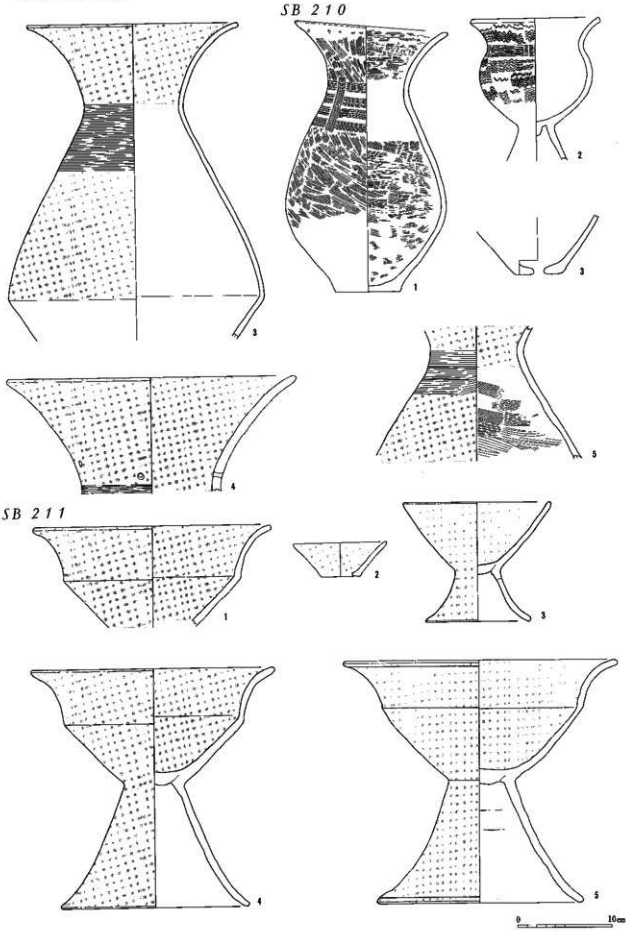
第84図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(4)



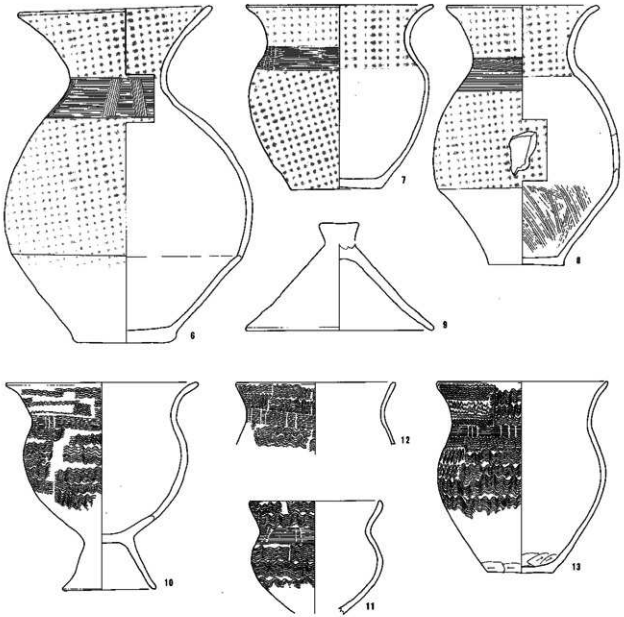
第85図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(5)



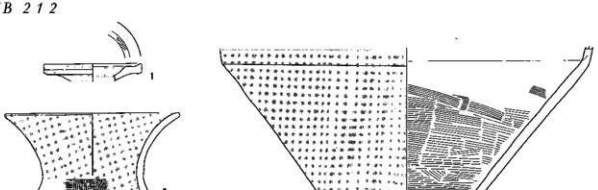
第86図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(6)



第87図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(7)

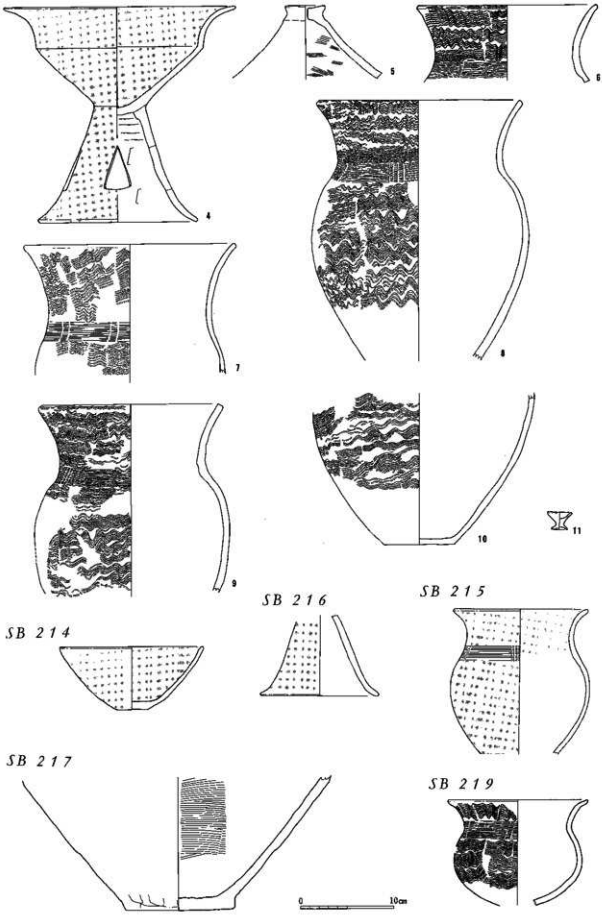


SB 212

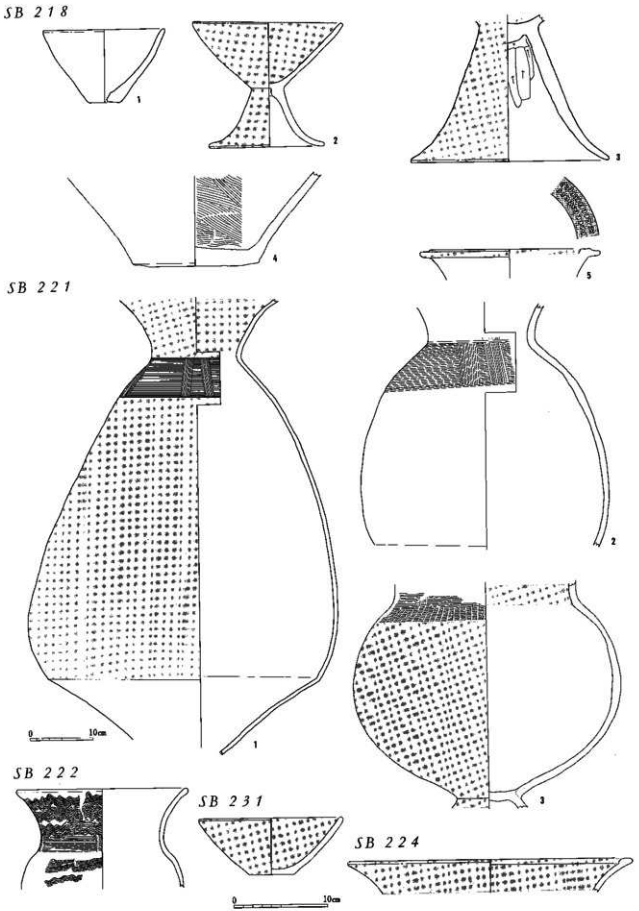


0　10cm

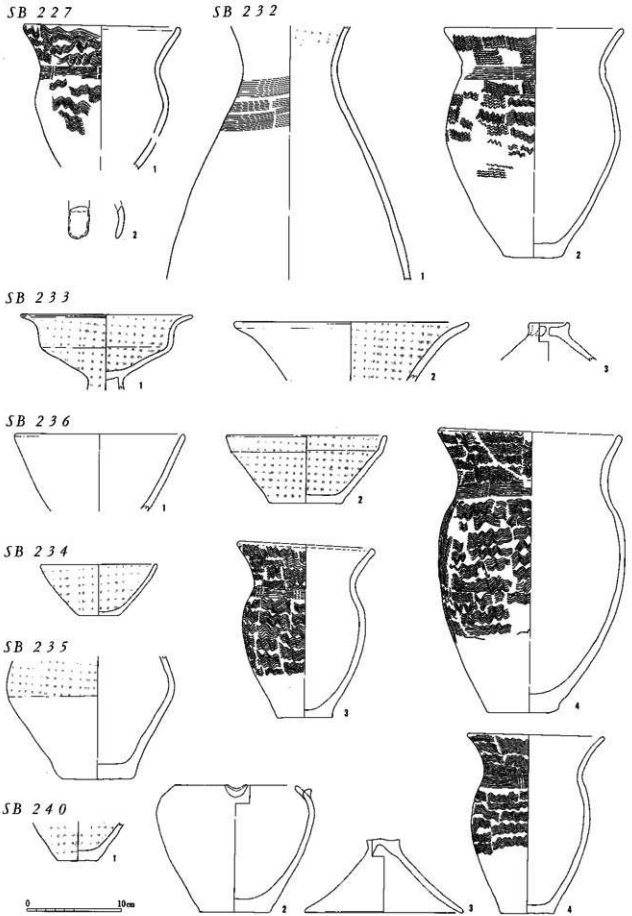
第88図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(8)



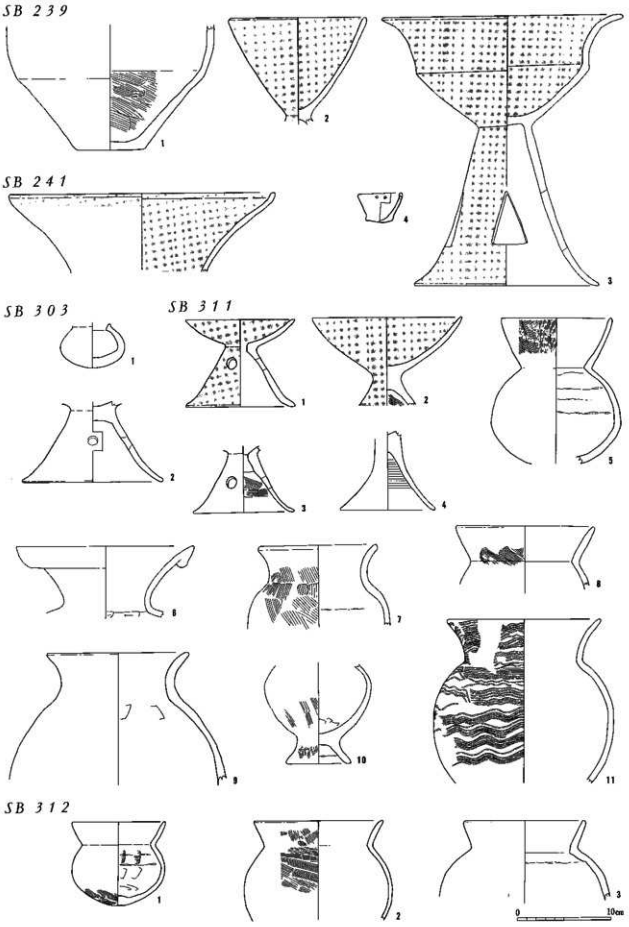
第89図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(9)



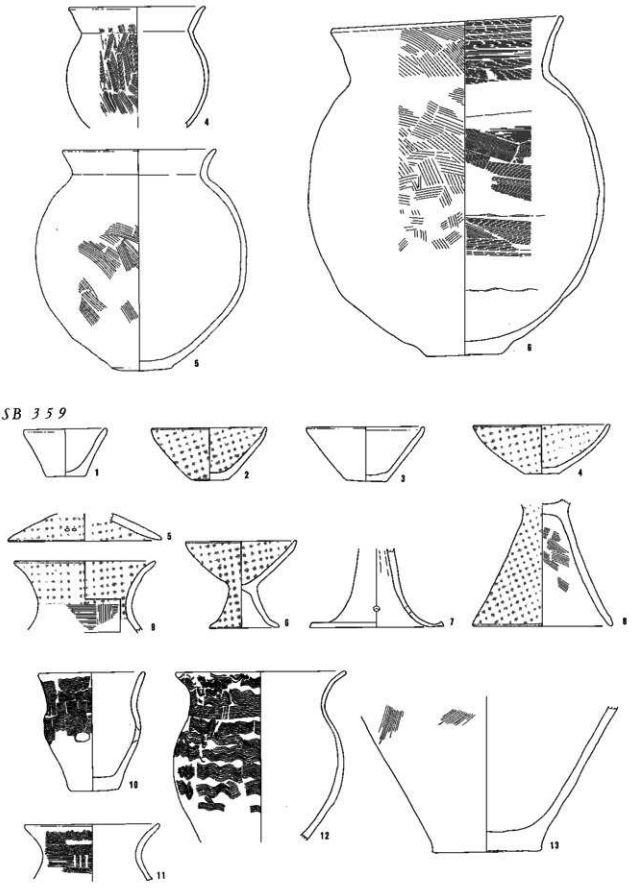
第90図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(1)



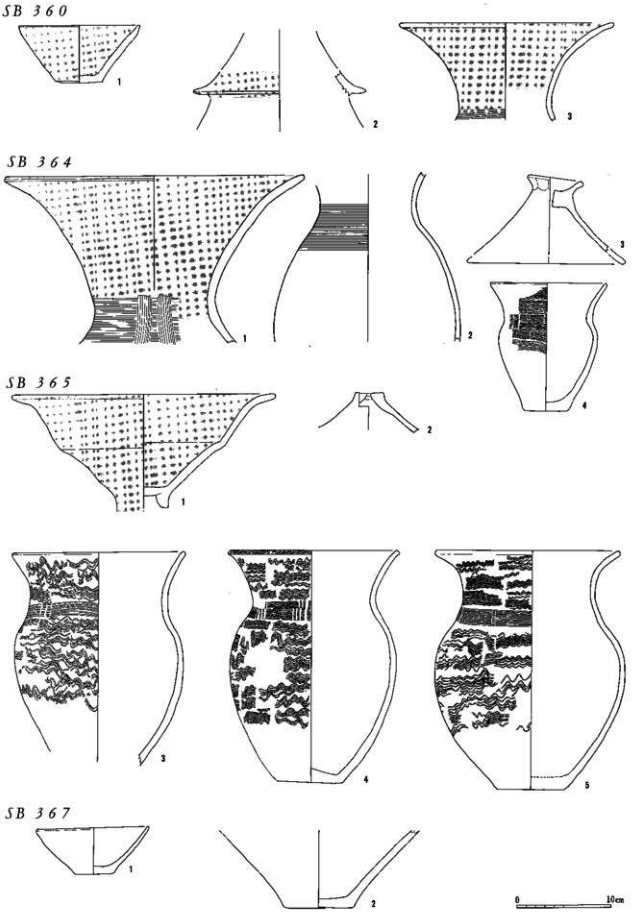
第91図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(II)



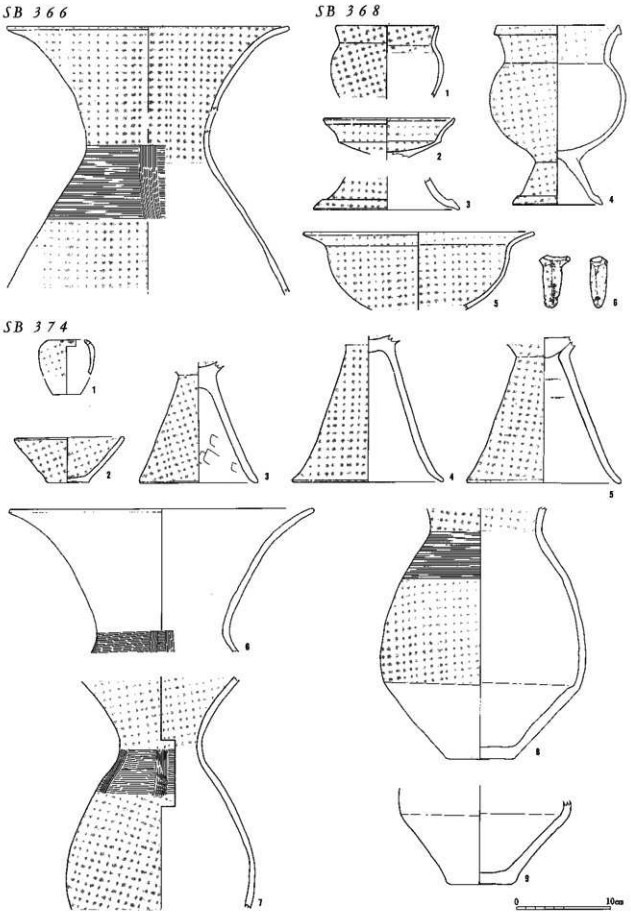
第92図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(12)



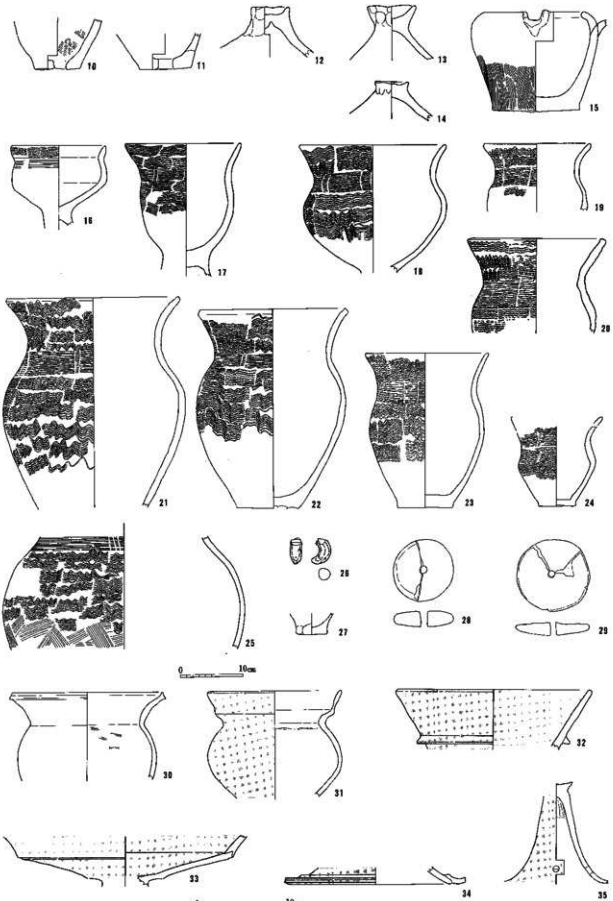
第93図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(3)



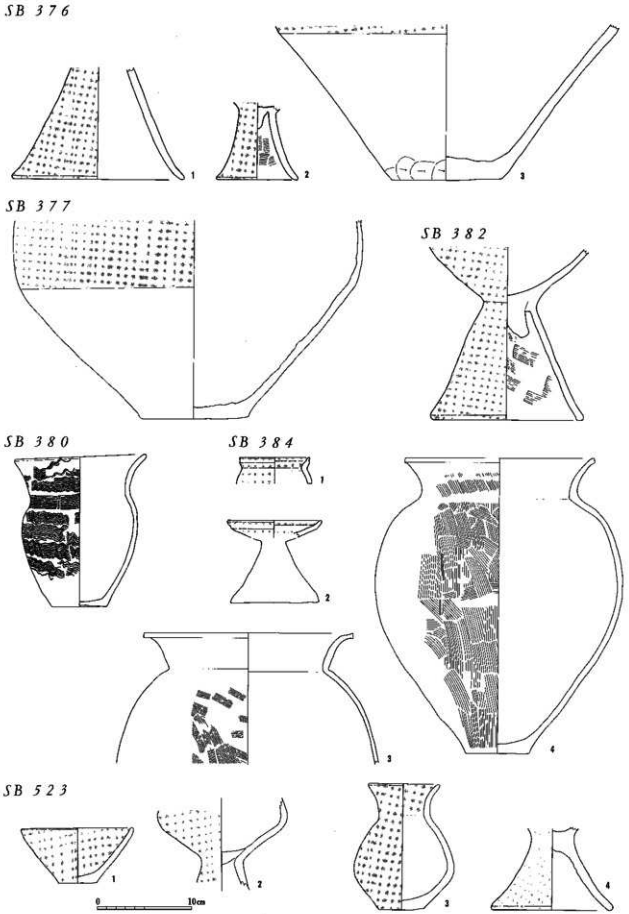
第94図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(4)



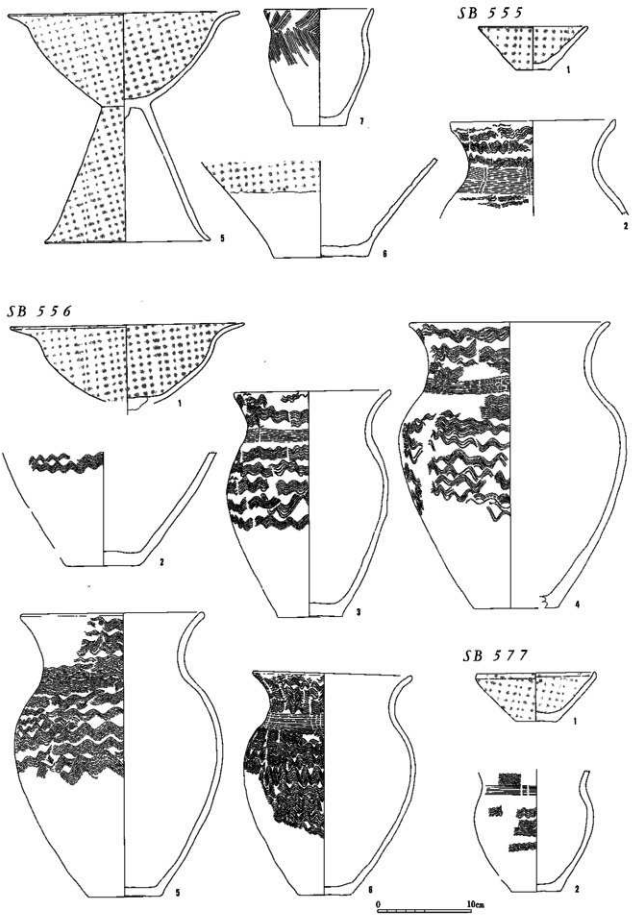
第95図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(4)



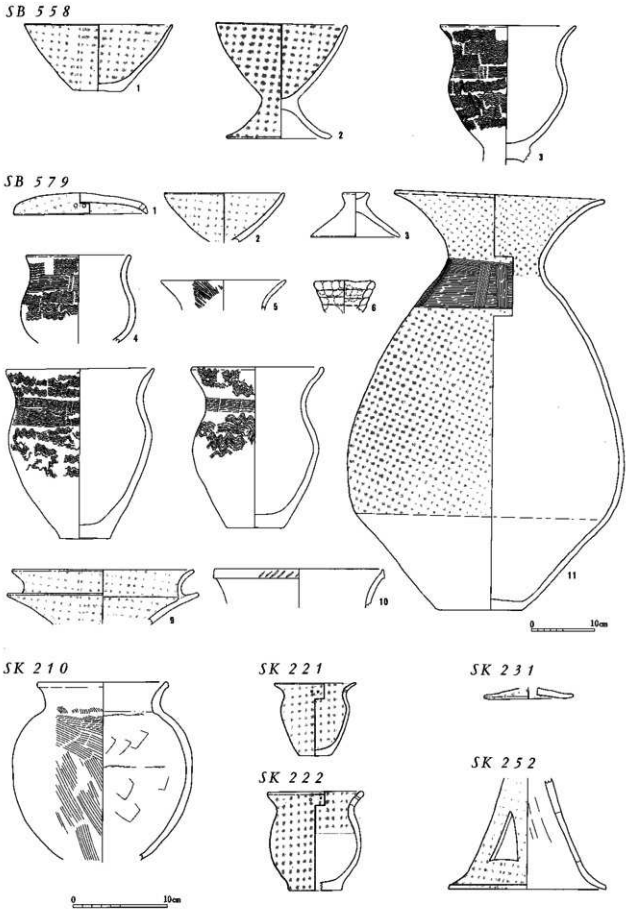
第96図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(6)



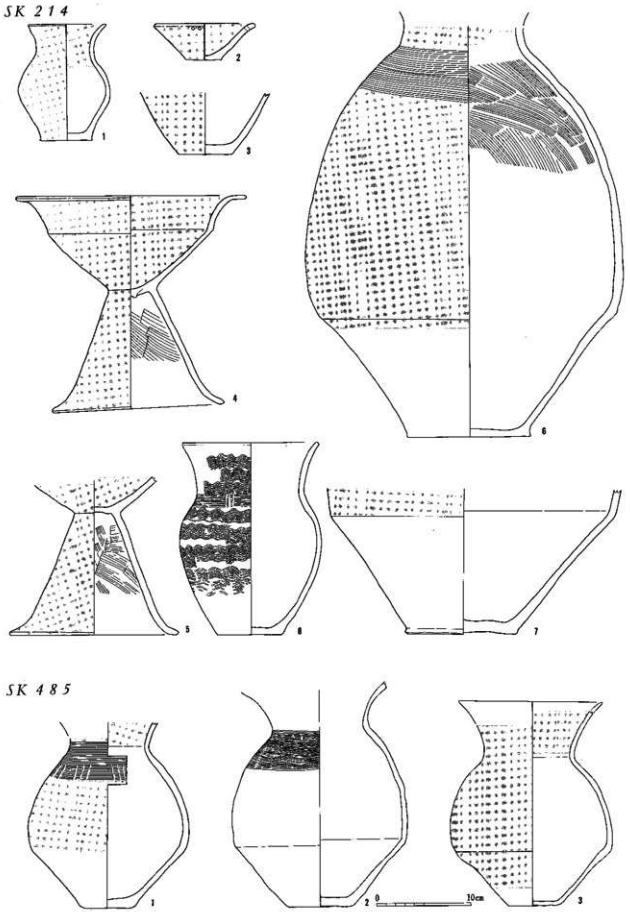
第97図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(7)



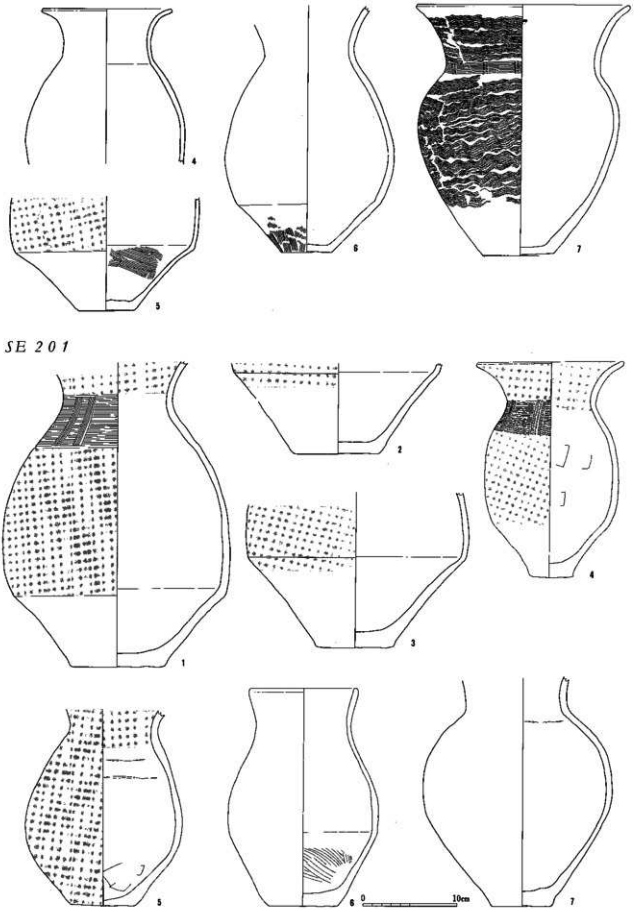
第98図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(4)



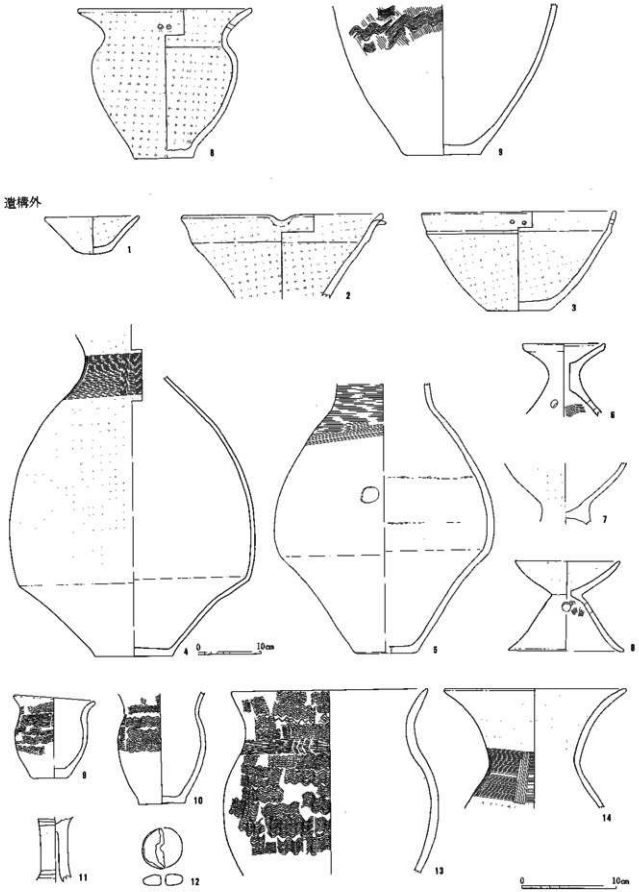
第99図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(9)



第100図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(2)



第101図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(8)



第102図　弥生時代後期～古墳時代中期の土器(2)

3　円形周溝墓群（方形周溝墓・土器棺墓を含む）

(1) 概　要

本遺跡から検出された円形周溝墓は、不明確なものも含め総数55基を数える。これは現在までに検出された、長野県内の全円形周溝墓を軽く上回る量であり、まったく切り合うことなく南北120ｍにわたって展開する配置状況も、それまでの常識を大きく打ち破るものであった。

明確に残存していた周溝に比して、主体部は後世の攪乱により多くのものが破壊を免れなかったが、一部に残された遺体からは鉄鏃、ガラス小玉等の装飾品が検出され、当時の人々の葬送のあり方の一端を知る重要な手がかりとなった。

円形周溝墓はおおむね、南から北へと築造され集落域とは明確に区別されているが、円形周溝墓群内にも区画らしい溝がみられ、一定の領域が設定されているようである。しかしそれぞれの円形周溝墓はどれも大差ない規模であり、副葬品の有無も階層の差を思わせるような状況にはない。ごく一般的な人々の墓とまでは言えないものの、特殊な人間の墓という印象ではない。円形周溝墓に葬られた人々の性格を論ずるには、もう少し資料の集積を待ちたいところである。

方形周溝墓は円形周溝墓群とは分布域を異にするが、便宜的に本節で述べる。土器棺墓も同様に扱う。

(2) 円形周溝墓

SM101（第103図、PL10）

位　　置　１Ａ区、Ⅵ－W04・05グリッド

隣接関係　SM110、114は本跡に接続しており明らかに新しい。SM102・103・115との関係は不明。

規　　模　径約6.4ｍ。溝幅80～88cm。深さ約40cm。

ブリッジ　２か所。東西方向。幅50～88cm。

主体部　土坑（160×336cm）＋木棺痕跡（65×165cm）。

頭　　位　東北東～東。

遺　　物　ミニチュアと思われる小型の壺、同じく小型の甕。ともに周溝から検出。

所　　見　隣接関係からやや古く位置付けられる。

SM102（第104図、PL10）

位　　置　１Ａ区、Ⅵ－R24、W04グリッド

隣接関係　SM110は本跡に接続しており明らかに新しい。SM101との関係は不明。

規　　模　径不明。大部分が調査区域外。幅56～64cm。深さ24～48cm。

ブリッジ　調査区域内では１か所。東西方向。幅64～88cm。

主体部　土坑の一部を確認したのみ。

頭　　位　不明。

遺　　物　周溝壺の破片を検出したのみ。図になるようなものはない。

所　　見　明確な二重周溝。当初から二重だった可能性もあるが、一応掘り直しと考えておきたい。

SM103（第103図、PL－）

位　　置　１Ａ区、Ⅵ－W08・09グリッド

隣接関係　SM104・105・114と接続する。SM114は独自の周溝をほとんどもたないため、明らかに本

跡よりも新しいが他の円形周溝墓との新旧関係は不明。

規　　模　径約6.75m。幅80～104cm。深さ16～40cm。一部調査区域外。

ブリッジ　調査範囲内では2か所。南北方向。幅88～96cm。

主 体 部　土坑（152×248cm）＋木棺痕跡（52×120cm）。2体あるが木棺の痕跡が確認されたのは北側の人骨のみ。2体ともほぼ屈葬ぎみ。

頭　　位　2体とも東。

遺　　物　周溝内からはかなりの土器片が出土しているが細片ばかりでほとんど図にならない。図示したもののほかに高坏がある。主体部からガラス小玉がまとまって検出されている。

所　　見　当初埋葬人骨は2体とも子供と思われたが、鑑定の結果北側の1体は20歳前後であることが判明している。セクション観察から明らかに南側のものが新しい。木棺は確認されていないが直葬とは思えない。

SM104（第104図、PL10）

位　　置　1A区、VI－W08・09・13・14グリッド

隣接関係　SM103・105・114と接続する。新旧関係は不明。

規　　模　径約8.30m。幅80～104cm。深さ24～48cm。一部調査区域外。

ブリッジ　調査範囲内では2か所。北、南西方向。幅88～104cm。

主 体 部　土坑（136×236cm）＋木棺痕跡（65×160cm）。木棺の痕跡が明瞭。棺外にも骨がみられるが、これらは後世の攪乱によるものと思われる。

頭　　位　南東。

遺　　物　周溝内からはかなりの土器片が出土しているが、細片ばかりである。その中で本跡及びSM103・105と周溝を共有する部分から、周溝内としてはやや大型の壺、甕が出土している。

所　　見　周溝内の土器は当初土器棺とも思われたが、骨が検出されないこと、土器棺としては小型であること、合わせ口にならないこと等から棺とするには問題が多い。ただ副葬品とするにしても出土位置が微妙だけに、本跡への帰属性は明確でない。

SM105（第105図、PL11）

位　　置　1A区、VI－W09・10・14・15グリッド

隣接関係　SM103・104・114と接続する。また南側の周溝の形態から、調査区域外の円形周溝墓とも接続している。SM114は明らかに本跡よりも新しい。他の円形周溝墓との新旧関係は不明だが、周溝の形態から本跡が新しいか。

規　　模　径約7.40m。幅56～96cm。深さ16～40cm。一部調査区域外。

ブリッジ　3か所。北、南南東、南南西方向。幅72～152cm。

主 体 部　土坑（124×256cm）＋木棺（165×70cm）。木棺の痕跡が明瞭。

頭　　位　東。人骨は膝を強く折り曲げている。

遺　　物　周溝から壺、台付甕等の破片が検出されているが、細片ばかりである。

所　　見　人骨は身長160cm前後の頑丈な骨格をもち、男性の可能性が高い。前述したとおりSM103・104よりは後出か。

SM106（第７図、PL－）

位　　置　１Ａ区、Ⅵ－W10・15、X06・11グリッド

隣接関係　SM107と接続する。本跡が新しいと思われるがやや不明確。

規　　模　径不明。幅不明。深さ不明。半分以上が調査区域外。

ブリッジ　調査範囲内では１か所。北東方向。幅不明。

主体部　不明。調査区域外。

頭　　位　不明。

遺　　物　周溝から小型壷、鉢等の破片が検出されているが、SM107との接続部分にあたるため図版ではSM107とした。

所　　見　調査範囲が狭いため詳細不明。

SM107（第107図、PL－）

位　　置　１Ａ区、Ⅵ－W10グリッド

隣接関係　SM106・114と接続する。SM114は明らかに本跡より新しく、SM106も不明確だが本跡より新しいと思われる。

規　　模　径不明。幅不明。深さ不明。ほとんどが調査区域外。

ブリッジ　不明。調査区域外。

主体部　不明。

頭　　位　不明。

遺　　物　周溝から鉢、小型（ミニチュア？）壷、小型甕等。SM106との接続部分にあたるため帰属関係はやや不明確。

所　　見　大半が調査区域外のため不明確であるが、推定される規模は１Ａ区でも屈指の大きさとなる。SM106との接続部分から出土した小型甕は、やや古い様相を示しており、周溝の規模とともに円形周溝墓群の中での本跡の位置を示唆しているとも思われる。

SM108（第104図、PL－）

位　　置　１Ａ区、Ⅵ－X06グリッド

隣接関係　不明。調査区域外ではSM107と接続すると思われる。

規　　模　径不明。幅64～72㎝。深さ40～72㎝。大半が調査区域外。

ブリッジ　不明。調査区域外。

主体部　土坑（一×160㎝以上）を確認したのみ。棺は調査区域外。

頭　　位　不明。

遺　　物　なし。

所　　見　調査範囲が狭いため詳細不明。

SM109（第105図、PL11）

位　　置　１Ａ区、Ⅵ－W12・13グリッド

隣接関係　不明。調査区域外ではSM113と接続すると思われる。

規　　模　径5.36ｍ。幅56～88㎝。深さ８～48㎝。一部調査区域外。

ブリッジ　調査区域内では２か所。北西、南西方向。幅80～128㎝。

主　体　部　土坑（128×200㎝）＋木棺痕跡（65×135㎝）。
頭　　位　北東。人骨は腰をかがめ、膝を折り曲げた状況である。
遺　　物　鉢、壷、広口壷？があるが出土位置は不明。周溝内に土器の集中地点があるため図示したが、掲載した土器との帰属関係は明確でない。
所　　見　人骨は18歳未満と鑑定されているが性別は不明。

SM110（第106図、PL－）
位　　置　1A区、VI－R24・25、W04・05グリッド
隣接関係　SM101・102・115・116と接続。SM101・115の周溝を利用しており、明らかに本跡が新しい。SM102との関係は不明だが本跡が新しいか。SM116は本跡の周溝を利用しているため最も新しい。
規　　模　径約5.12m。幅40～80㎝。深さ約16㎝。
ブリッジ　4か所。北、北東方向。残りはSM101・115のブリッジと共有。
主　体　部　木棺（75×160㎝）の輪郭のみ確認。土坑は削平されたと思われる。
頭　　位　不明。人骨は検出されなかった。
遺　　物　なし。
所　　見　遺構の上部がほとんど削平されているため、かろうじて木棺の輪郭を検出したのみ。棺の方向が他の円形周溝墓と大きく異なっていることが気になる。

SM111（第106図、PL－）
位　　置　1A区、VI－W11・12・16・17グリッド
隣接関係　SM112と接続。本跡が古いか。
規　　模　径不明。幅70～80㎝。深さ8～64㎝。大半が調査区域外。
ブリッジ　調査区域内では1か所。南東方向。幅72㎝。
主　体　部　土坑（—×—）の一部のみ検出。他は調査区域外。
頭　　位　不明。
遺　　物　鉢、小型甕、壷等。壷はいずれも周溝上面から出土。他は出土地点不明。
所　　見　調査範囲がせまいため詳細不明。やや大型だとするとブリッジを2か所もつタイプか。

SM112（第105図、PL－）
位　　置　1A区、VI－W11・16グリッド
隣接関係　SM111と接続。周溝のあり方から本跡が新しいか。
規　　模　径不明。幅約96㎝。深さ約24～48㎝。大半が調査区域外。
ブリッジ　不明。
主　体　部　土坑（170×180㎝以上）＋木棺痕跡（60×145㎝以上）。土坑の軸と大きくずれている。
頭　　位　南東。人骨は膝を曲げている。
遺　　物　棺内から小型（ミニチュア？）の壷。土坑外の土器集中からは壷、高坏、台付甕等が出土しているが細片ばかりで図になるものは少ない。
所　　見　土器集中は調査区域外にかかるため不明確であり、他の円形周溝墓でも例がなく本跡への帰属性は判断がつきかねる。土器は残存率が低く、壷の底部が多い。墓域にゴミ穴を掘るとも

思えないが性格ははっきりしない。

SM113（第105・106図、PL－）

位　　置　1A区、VI－W12・17グリッド

隣接関係　不明。調査区域外でSM109と接続すると思われる。

規　　模　径不明。幅不明。深さ不明。大半が調査区域外。

ブリッジ　不明。

主体部　不明。

頭　　位　不明。

遺　　物　なし。

所　　見　調査範囲が狭すぎて詳細不明。

SM114（第107図、PL－）

位　　置　1A区、VI－W04・05・09・10グリッド

隣接関係　SM101・103・105・107と接続する。本跡独自の周溝はSM107に接続してわずかにある程度で、周辺の円形周溝墓の中では最も新しい。

規　　模　径不明。幅64～88cm。深さ不明。

ブリッジ　3か所。北東、北西は独自のもの。南はSM105を利用。幅48～144cm。

主体部　検出面が低いため木棺（75×160cm）の痕跡のみ検出。

頭　　位　北東。

遺　　物　なし。

所　　見　SM101・103等と同一の検出面にありながら主体部の土坑が確認されないことは本跡の掘り込み面が高いことを意味しており、本跡やSM110のような後出の円形周溝墓は同様の傾向にある。

SM115（第106図、PL－）

位　　置　1A区、VI－R25、W05グリッド

隣接関係　なし。SM110は本跡の周溝を利用しており明らかに新しい。

規　　模　径不明。幅48～56cm。深さ約16cm。大半が調査区域外。

ブリッジ　調査区域内では1か所。幅約128cm。

主体部　調査区域外。

頭　　位　不明。

遺　　物　ほとんどなし。

所　　見　調査範囲が狭いため詳細不明。

SM116（第106図、PL－）

位　　置　1A区、VI－R25グリッド

隣接関係　SM110・115と接続する。双方の周溝を利用しており本跡が新しい。

規　　模　径不明。幅約40cm。深さ不明。大半が調査区域外。

ブリッジ　3か所以上。南西、南東のものは独自のもの。南はSM110を利用。幅約184cm。

主　体　部　不明。調査区域外。
頭　　位　不明。
遺　　物　なし。
所　　見　新旧関係はSM115→SM110→SM116で本跡が新しい。

SM117（第107図、PL－）
位　　置　1A区、VI－W23・24グリッド
隣接関係　SM119と接続する。新旧関係不明。
規　　模　径約6.88m。幅64～112cm。深さ不明。一部調査区域外。
ブリッジ　2か所？北、南南東方向。幅96～168cm。
主　体　部　2基存在するようであるが詳細不明。土坑（170×280cm？）＋木棺。双方とも周溝との位置関係が適正でなく、記録もほとんど残されていないため疑わしい。
頭　　位　不明。土坑の軸は西北西－東南東及び北東－南西方向。
遺　　物　なし。
所　　見　千曲川の堤防を越えた現河川敷内部に位置する。橋脚建設に伴う立ち会い調査のため、記録類はほとんど残されておらず、平面図もかなりあいまいなのであるが、円形周溝墓群の分布域を考える上で、極めて重要となるためあえて掲載した。
主体部が切り合う状況は他の円形周溝墓では認められず、極めて異例である。聖川堤防地点のような円形周溝墓と方形周溝墓も、切り合いならば考えられなくもないが、詳細はまったく不明である。

SM118（第107図、PL－）
位　　置　1A区、VI－W19・24グリッド
隣接関係　なし。
規　　模　径不明。幅約104cm。深さ不明。大半が調査区域外。
ブリッジ　調査区域内では1か所。西方向。
主　体　部　不明。調査区域外。
頭　　位　不明。
遺　　物　なし。
所　　見　SM117参照。

SM119（第107図、PL－）
位　　置　1A区、VI－W24、VIIC03・04グリッド
隣接関係　SM117と接続。新旧関係不明。
規　　模　径不明。幅約120cm。深さ不明。大半が調査区域外。
ブリッジ　調査区域内では1か所。北西方向。幅約152cm。
主　体　部　不明。調査区域外。
頭　　位　不明。
遺　　物　なし。
所　　見　SM117参照。

SM201（第108図、PL－）

位　　置　１Ａ区、Ⅵ－Ｒ15・19・20グリッド

隣接関係　SM203・204・237と接続。周辺の円形周溝墓は本跡の周溝を利用しており、本跡が最も古い。

規　　模　径約6.24ｍ。幅80～120㎝。深さ約48㎝。約半分が調査区域外。

ブリッジ　調査区域内では１か所。幅約８㎝。

主体部　土坑（160㎝×―）のみ確認。木棺の痕跡は不明。

頭　　位　不明。土坑は東西方向？

遺　　物　周溝内から壺、高坏、小型甕など。

所　　見　土器はSM203と共有する周溝から出土しているため本跡への帰属はかならずしも明確ではない。

SM203（第108図、PL－）

位　　置　１Ａ区、Ⅵ－Ｒ15・20グリッド

隣接関係　SM201・204・206と接続。SM201は本跡より古く、SM204は本跡の周溝を利用しているため明らかに新しい。SM206との関係は不明だが本跡が古いか。

規　　模　径不明。幅不明。深さ不明。大半が調査区域外。

ブリッジ　調査区域内では１か所。北方向。幅不明。

主体部　調査区域外。

頭　　位　不明。

遺　　物　小型（ミニチュア？）甕があるが出土地点不明。

所　　見　大半が調査区域外のため詳細不明。

SM204（第108図、PL12）

位　　置　１Ａ区、Ⅵ－Ｒ10・15グリッド

隣接関係　SM201・203・205・206と接続。独自の周溝はSM206に接続する溝とSM205に接続するわずかな部分のみで残りはすべて周囲の円形周溝墓を利用している。したがってSM201～206の中では最も新しい。

規　　模　径約6.18ｍ。幅48～108㎝。深さ24～32㎝。

ブリッジ　２か所。北西、南西方向。幅24～80㎝。

主体部　木棺の痕跡（60×130㎝）のみ検出。人骨なし。

頭　　位　不明。木棺は北北西～南南東方向。

遺　　物　周溝内から完形の鉢。

所　　見　周囲の円形周溝墓を利用しているため一見方形周溝墓にもみえる。土器棺201が本跡を切るが本跡との関係は不明。

SM205（第109図、PL－）

位　　置　１Ａ区、Ⅵ－Ｒ09・10・14・15グリッド

隣接関係　SM204・207と接続する。双方とも本跡の周溝を利用しており本跡が新しい。

規　　模　径8.48ｍ。幅72～112㎝。深さ約48㎝。約半分が調査区域外。

ブリッジ　不明。調査区域内にはなし。
主体部　土坑（136×—cm）のみ検出。木棺は不明。人骨を検出しているが細片のため取り上げられなかった。
頭位　不明。主体部の軸は東西方向？
遺物　周溝から壺、小型甕、鉢、高坏等。完形に近いものは小型甕のみ。台付甕を模したミニチュア土器も周溝から出土している。
所見　大半が調査区域外のため明確ではないが周辺の円形周溝墓に比べてやや大きいか。

SM208（第109図、PL－）
位置　1A区、Ⅵ－R10・15、S06・11グリッド
隣接関係　本跡はSM208の周溝を利用し、SM204に利用されている。SM206との関係は明らかでないが本跡が新しいようである。
規模　径不明。幅約88cm。深さ約32cm。
ブリッジ　調査区域内では2か所。ともに他の円形周溝墓のブリッジを利用している。幅約40cm。
主体部　土坑（104×—cm）のみ確認。木棺は不明で人骨も検出されなかった。
頭位　不明。土坑の軸は東西方向。
遺物　検出面から小型甕を検出したのみ。出土位置は不明。
所見　大半が調査区域外で詳細は不明。

SM207（第109図、PL－）
位置　1A区、Ⅵ－R09・10グリッド
隣接関係　SM205・209の周溝を利用。
規模　径不明。幅約80cm。深さ24～40cm。大半が調査区域外。
ブリッジ　調査区域内では2か所。東、南方向。幅40～80cm。
主体部　土坑（160×—cm）のみ検出。木棺は確認されず人骨もない。一部調査区域外。
頭位　不明。主体部の軸は東西？
遺物　周溝から土器片が数点出土したのみ。
所見　大半が調査区域外であり詳細は不明。

SM206（第110図、PL12）
位置　1A区、Ⅵ－R05・10グリッド
隣接関係　SM206は本跡の周溝を利用している。SM209・210は本跡と接続しているが新旧関係は不明。
規模　径6.64m。幅48～120cm。深さ約56cm。一部調査区域外。
ブリッジ　調査区域内では2か所。北西、南方向。幅約40cm。
主体部　土坑（136×208cm）のみ検出。木棺、人骨は不明。
頭位　不明。土坑の軸は北北西～南南東方向。
遺物　高坏、小型甕。出土位置は不明。
所見　本跡の周溝はやや幅広で、一段深い部分が確認されているが、これは掘り直しの結果と思われる。したがってSM209・210との接続部分は、当初分離されていた溝が掘り直しの結果接

統してしまったとも考えられるが、やや判然としない。

SM209（第110図、PL－）

位　　置　１Ａ区、Ⅵ－Ｒ05・10グリッド

隣接関係　SM207は本跡の周溝を利用している。SM208・210との関係は不明。

規　　模　径約6.72m。幅96～104cm。深さ32～48cm。一部調査区域外。

ブリッジ　調査区域内では１か所。北東方向。幅約48cm。

主 体 部　土坑は検出されず木棺の痕跡（90×150cm以上）のみ確認。人骨はみられなかった。

頭　　位　不明。木棺の軸はほぼ東西である。

遺　　物　周溝内からわずかに出土したのみ。

所　　見　SM210との接続部分は当初から近接していた溝が崩れた結果か。

SM210（第110図、PL－）

位　　置　１Ａ区、Ⅵ－Ｒ05、Ｓ01グリッド

隣接関係　SM208・209・212と接続。これらは溝の崩壊によるものか。新旧関係は不明。

規　　模　径約6.8m。幅81～104cm。深さ56cm内外。一部調査区域外。

ブリッジ　調査区域内では１か所。西方向。幅約40cm。

主 体 部　土坑（120×208cm）の痕跡のみ確認。木棺、人骨等は不明。

頭　　位　不明。土坑の軸は北北東～南南西方向。

遺　　物　周溝内及びその付近から壷、高坏、台付甕等。４は有段口縁をもつ壷で、上層のSB311・312（弥生時代後期末～古墳時代初頭）に伴うとも思われたが、出土地点を尊重し本跡に帰属させた。

所　　見　主体部を切るSK725から骨粉が検出されているが、本跡に伴うものか。

SM211（第111図、PL12）

位　　置　１Ａ区、Ⅵ－Ｍ25、Ｎ21、Ｒ05グリッド

隣接関係　SM213は本跡の周溝を利用しているため明らかに新しい。SM212は接続していないが位置的に本跡より新しいか。

規　　模　径約7.70m。幅128～144cm。深さ40～64cm。一部調査区域外。

ブリッジ　調査区域内では１か所。幅約112cm。

主 体 部　土坑（124×216cm）＋木棺痕跡（80×150cm）。人骨の遺存状態良好。

頭　　位　東南東。人骨は膝を折り曲げて左右に開き、足部を合わせた状態である。

遺　　物　頭骨付近からはガラス小玉が検出されており、鉄鋼及び鉢と思われる土器片も主体部から確認されている。周溝からは壷、高坏、甕、台付甕等がみられ、南側周溝の周部にはやや大型の壷もみられた。

主体部とは別に、周溝内には直葬されたと思われる人骨が検出されており、この人骨の頭部及び下顎からガラス小玉とともに、やや大型のガラス玉が検出されている。とくに大型のガラス玉は被葬者の口中に含ませた状況を示しており、同様の事例が大型土坑墓SB211でも確認されていることから、今後該期の墓跡調査を行う上で重要な視点の一つとなろう。

所　　見　人骨はどちらも保存状態が良くなく、性別等は不明であるが主体部のものは女性的な印象を

受けると鑑定されている。主体部人骨と周溝内人骨との関連は不明である。

円形周溝墓群内での本跡は周溝の規模がやや大きいと思われる程度で、とくに際立った存在ではなく、鉄鏃、ガラス小玉等の副葬品の有無は単に主体部の保存状態に左右されているように思われる。

SM212（第111図、PL－）

位　　置　1A区、VI－M25、N21、S06グリッド

隣接関係　SM210・213と接続。双方とも本跡との新旧関係不明。

規　　模　径約6.25m。幅88～104cm。深さ32～48cm。一部調査区域外。

ブリッジ　調査区域内では1か所。北西方向。幅24～40cm。

主体部　土坑（128×192cm）痕跡のみ確認。木棺、人骨等は不明。

頭　　位　不明。土坑の軸はほぼ東西。

遺　　物　破片がわずかに出土したのみ。壺、甕、高坏等である。

所　　見　SM210・213と接する周溝は、当初分離していたものが崩壊によって接続したものか。

SM213（第112図、PL12）

位　　置　1A区、VI－M25、N16・21グリッド

隣接関係　SM214の周溝の上にSM213の主体部が造られている。

規　　模　径約5.75m。幅72～80cm。深さ約40cm。

ブリッジ　調査区域内では2か所。南西、南東方向。幅16～72cm。

主体部　土坑（128×—cm）＋木棺痕跡（80×130cm以上）。一部を確認したのみ。

頭　　位　東。頭部は不明だが脚部の位置から判断できる。

遺　　物　壺、甕、高坏等の破片を少数検出したのみ。出土地点は不明だがすべて周溝内か。主体部内から銅鏃が出土しているが図示できなかった。

所　　見　主体部から検出された人骨は保存状態が悪く、四肢骨であるほか部位等は不明である。

SM214（第112図、PL12）

位　　置　1A区、VI－M20、N16・21グリッド

隣接関係　SM213は本跡の周溝の上に主体部を造っている。

規　　模　径約4.95m。幅約80cm。深さ40～48cm。

ブリッジ　調査区域内では2か所。北西、北東方向。幅24～32cm。

主体部　木棺の痕跡（80×180cm）を確認したのみ。

頭　　位　不明。木棺は東西方向。

遺　　物　SM213参照。

所　　見　当初円形周溝墓の切り合いかと思われたが、基本的に切り合いは存在しないのでSM214の周溝を埋めて、SM213が主体部を追葬し新たな周溝を掘ったものと考えたい。

SM215（第112図、PL－）

位　　置　1A区、VI－M20・25、N16・21グリッド

隣接関係　SM213・314・216と接続。SM213・214は本跡の周溝を利用しており、明確に新しい。

SM216との関係は本跡が新しい。

規　　模　径約6.7ｍ。幅80～112cm。深さ32～40cm。一部調査区域外。

ブリッジ　調査区域内では２か所。東、南東方向。幅32～48cm。

主 体 部　土坑（152×―cm）を確認したのみ。木棺、人骨等は不明。主体部の位置が周溝に対して適正でなく、大半が調査区域外。

頭　　位　不明。土坑の軸は東西？

遺　　物　壺、甕、高坏、鉢、蓋等の破片を少数確認したのみ。出土地点は不明だが周溝内か。

所　　見　主体部の位置が南側に寄っており、墳丘？内のSK208を避けているようにもみえる。SK208はとくに遺物もない性格不明の土坑で、今のところ判断がつきかねる。

SM216（第113図、PL13）

位　　置　１Ａ区、Ⅵ－M20、N11・16グリッド

隣接関係　SM214・215・218・239と接続。周溝の形態からSM214が最も古いと思われる。SM215は本跡の周溝を利用しているようだがやや判然としない。

規　　模　径約６ｍ。幅64～88cm。深さ24～40cm。

ブリッジ　１か所。南東方向。幅約48cm。

主 体 部　木棺の痕跡（90×170cm）を確認したのみ。土坑、人骨等は不明。

頭　　位　不明だが木棺の軸は東西方向。

遺　　物　周溝内から鉢、広口壺、高坏、甕、台付甕等。また周溝内から土器棺202が検出されているが、土器棺は溝底部に接しており、本跡とあまり時間をおかずに埋葬されたらしい。

所　　見　土器棺202は主体部に葬られた人物の縁故者の墓か。

SM217（第113図、PL－）

位　　置　１Ａ区、Ⅵ－N06グリッド

隣接関係　不明。

規　　模　径不明。幅約64cm。深さ不明。ほとんど調査区域外。

ブリッジ　調査区域内では２か所。南西、北西方向。幅32～40cm。

主 体 部　不明。調査区域外。

頭　　位　不明。

遺　　物　なし。

所　　見　大半が調査区域外で詳細不明。

SM218（第113図、PL－）

位　　置　１Ａ区、Ⅵ－M15・20、N11・16グリッド

隣接関係　本跡はSM216の周溝を利用しており、明らかに本跡が新しい。SM219との関係ではSD302の性格が問題となるが、この溝については所見欄で述べる。

規　　模　径約4.8ｍ。幅48～72cm。深さ約24cm。大半が調査区域外。

ブリッジ　不明。調査区域外？幅不明。

主 体 部　土坑（110×170cm）の一部を確認したのみ。木棺、人骨等は不明。一部調査区域外。

頭　　位　不明。土坑の軸は北西－南東？

遺　　物　主体部付近から磨製石鏃。他に遺物はほとんどなし。
所　　見　調査範囲が狭く詳細不明。SD302は本跡を含めた周囲の円形周溝墓群と共存する形を取っており、切り合うような状況ではない。すると円形周溝墓群内でのこの溝の性格・機能が問題となるが、この溝を利用している円形周溝墓がみられることから、円形周溝墓群形成以前から存在していた可能性が高く、今のところ明確な根拠に欠けるが、やはり墓域をいくつかの小集団に分割するための溝ととらえておきたい。

SM219（第113図、PL13）
位　　置　1B区、VI−M15、N11グリッド
隣接関係　なし。
規　　模　径不明。幅72～80cm。深さ24～40cm。一部調査区域外。
ブリッジ　調査区域内では2か所。北東、南東方向。幅24～128cm。
主 体 部　土坑（124×192cm）と木棺（100×—cm）の一部を確認したのみ。木棺は片方だけだが木口痕が明らかなため、いわゆるII型か。
頭　　位　不明だが土坑の軸は北西～南東方向。
遺　　物　周溝内から壺、高坏、甕等の細片が得られたのみ。図示すべきものはみられない。
所　　見　周溝が4分割されるタイプとすれば木棺の形態からやや古いものか。

SM221（第114図、PL−）
位　　置　1B区、VI−M10、N06・21グリッド
隣接関係　SM229と接続。本跡が新しいか。
規　　模　径約5.76m。幅72～80cm。深さ約32cm。一部調査区域外。
ブリッジ　調査区域内では1か所。東南東方向。幅約120cm。
主 体 部　土坑（104×—cm）の一部を確認したのみ。木棺、人骨等は不明。一部調査区域外。
頭　　位　不明。土坑の軸は北西～南東方向。
遺　　物　壺、鉢、甕等の破片が周溝内から少数検出されたのみ。
所　　見　周溝に対して主体部の位置がやや適正でないようだが。

SM222（第114図、PL13）
位　　置　1B区、VI−N01・02・06・07グリッド
隣接関係　SM223・230と接続。SM230は本跡の周溝を利用しており、明らかに新しいがSM223は接続が微妙で新旧関係ははっきりしない。
規　　模　径約5.6m。幅64～88cm。深さ40～48cm。
ブリッジ　1か所。西北西方向。幅約56cm。
主 体 部　木棺（90×150cm）の一部を確認したのみ。土坑、人骨等は不明だが歯が検出されている。古墳時代のSD323に切られる。
頭　　位　不明だが歯の出土位置から南東方向か。
遺　　物　周溝内、肩部等から壺、高坏、広口壺、甕等。どれもまとまって検出され半完形、大型破片が多い。壺には土器棺を思わせる大型品が含まれているが骨等は検出されず、合わせ口にもならないため本跡に伴うものとした。またこの土器棺とは別に、土器棺203が周溝内に存在

するが、本跡出土の土器の中にはこの土器棺203に伴うものも含まれている可能性が高い。

所　　見　取り立てて特徴のない円形周溝墓だが、遺物が多いことは土器棺墓の存在と関係ありか。SM216も土器棺がみられ、周溝内の土器も多めであることが気になる。

SM223（第114図、PL13）

位　　置　1B区、VI－N01グリッド

隣接関係　SM223・224と接続する。双方とも新旧関係は不明である。

規　　模　径約5.12m。幅64～96cm。深さ約32cm。一部調査区域外。

ブリッジ　調査区域内では2か所。南、東方向。幅16～32cm。

主 体 部　土坑（128×200cm）の痕跡を確認したのみ。木棺、人骨等は不明。

頭　　位　不明。土坑の軸は北東～南西。

遺　　物　周溝からは壺、甕等の破片を少数検出したのみ。主体部からも壺の破片を得ているが、図になるようなものではない。

所　　見　周溝の配置に対して主体部の位置がやや南東に寄る。したがって調査区域外にも主体部をもつ可能性もある。

SM224（第115図、PL14）

位　　置　1B区、VI－I21・22、N01・02グリッド

隣接関係　SM223・225・226との接続するが、これらは周溝の崩壊によるものと思われ、本来は独立していたようである。

規　　模　径約5.2m。幅56～80cm。深さ48～80cm。一部調査区域外。

ブリッジ　調査区域内では2か所。西、東方向。幅32～40cm。

主 体 部　土坑（120×224cm）を確認したのみ。木棺は不明だが骨粉が検出されている。

頭　　位　不明。土坑の軸は東～西方向。

遺　　物　都合で図示できなかったが、主体部からやや大型の壺が出土している。壺棺とも思われたが棺にしてはやや小さく、合わせ口にもならないため棺上にそなえたものと考えたい。周溝からは壺、鉢、高坏、甕等がまとまって出土しており、残存率も高い。とくに壺には胴部に穿孔したものもみられ、祭祀的な色彩が強い。

所　　見　本跡は二重周溝を備えるが北側のものは明らかに掘り直しで、SM225・226との分離を明確にしているようである。これに対し南側の周溝は同心円状をなしているものの、不必要な掘り込みがみられ確実に本跡に伴うものか、やや判然としない。
北側の周溝には直葬と思われる人骨が確認されているがこれといった副葬品もなく、人骨の性別、年齢等も不明である。

SM225・226（第115図、PL14）

位　　置　1B区、VI－N01グリッド

隣接関係　SM227・228は本跡の周溝を利用しており明らかに新しい。SM224とは本来接続しない可能性が高い。

規　　模　径約6.5m。幅56～80cm。深さ48～64cm。一部調査区域外。

ブリッジ　2か所。北東、南西方向。幅32～72cm。

主　体　部　2基。南のSM225（104×160㎝）、北側のSM226（104×177㎝）とも土坑を確認したのみ。SM225・226双方ともほぼ同規模である。SM226は合わせ口になる大型壷が出土しており、当初から木棺ではなく土器棺であったと思われる。SM225は木棺の痕跡も不明。

頭　　位　不明だが土坑の軸はそれぞれ北西―南東方向、北東―南西方向である。

遺　　物　SM225の主体部からは高坏、鉢のミニチュア土器。SM226の主体部からは上記の土器棺のほか高坏が出土している。

所　　見　本跡はSM227等とともに円形周溝墓群の最北端にあたる。1つの円形周溝墓に2つの主体部をもつものは本跡だけ（追葬と思われるSM103は単独の主体部とする）であるが、円形周溝墓群内における本跡の位置が問題となろう。また木棺と土器棺の関係も議論の対象となりそうである。

SM227（第116図、PL14）

位　　置　1B区、VI－I16・21グリッド

隣接関係　SM225・226と接続する。明らかに本跡が新しい。

規　　模　径不明。幅72～88㎝。深さ約50㎝。大半が調査区域外。

ブリッジ　不明。ブリッジ状の開口部はみられるが性格が不明。

主　体　部　不明。調査区域外。

頭　　位　不明。

遺　　物　周溝内、肩部等から壷、高坏、無頸壷等。とくにこの壷は大型でSM211・222の大型壷と同様のあり方を示しており、土器棺の可能性もなくはないが骨等の明確な証拠に欠ける。

所　　見　大半が調査区域外のため詳細は不明であるが、周溝のあり方はかなり特異であり、単なる掘り直しでは片づけられないようである。円形周溝墓群の北端に位置していることも本跡の周溝を考える上で重要である。

SM228（第115図、PL－）

位　　置　1B区、VI－I22グリッド

隣接関係　SM225・226と接続する。本跡が新しい。

規　　模　径不明。幅約70㎝。深さ不明。ほとんど調査区域外。

ブリッジ　調査区域内では2か所だが独自のものは1か所のみ。北西、南西方向？幅約32㎝。

主　体　部　不明。調査区域外。

頭　　位　不明。

遺　　物　遺物ほとんどなし。

所　　見　ほとんど調査区域外で詳細不明。本跡もSM225・226等とともに円形周溝墓群の北端を形成する。

SM229（第116図、PL－）

位　　置　1B区、VI－N06・07・11・12グリッド

隣接関係　SM221・230と接続する。双方とも本跡より新しいか。

規　　模　径約6.50㎝。幅56～104㎝。深さ24～32㎝。一部調査区域外。

ブリッジ　調査区域内では3か所。南西、北北東、南方向。幅40㎝内外。

主　体　部　土坑（152×264cm）の痕跡を確認したのみ。木棺は不明。脚と思われる四股骨が検出されている。
頭　　位　土坑の軸、四股骨の位置から東南方向か。
遺　　物　周溝からは壺、高坏、甕等の破片を少数検出したのみ。図示にたえるものは甕のみ。
所　　見　SM238の北側周溝が二重だとすれば本跡が新しいことになる。

SM230（第116図、PL－）
位　　置　1B区、VI－N06・07グリッド
隣接関係　SM222・229と接続する。双方の周溝を利用しており本跡が新しい。
規　　模　径約5.44m。幅80～88cm。深さ40～64cm。一部調査区域外。
プリッジ　調査区域内では3か所。北、南、東方向。幅16～40cm。
主　体　部　土坑（112×208cm）確認したのみ。木棺は検出できなかったが骨粉を検出している。
頭　　位　不明。土坑の軸は北西～南東。
遺　　物　壺、甕、高坏の破片を少数検出したのみ。
所　　見　本跡北側は二重周溝状になるがSM222との関係から別の円形周溝墓を想定するべきか。

SM232（第112図、PL－）
位　　置　唐猫地区。
隣接関係　不明。調査区域外でSM234と接続する可能性が高い。
規　　模　径不明。幅不明。深さ約25cm。大半が調査区域外。
プリッジ　調査区域内では1か所。南方向。幅不明。
主　体　部　土坑（—×176cm）及び人骨を確認したが木棺は検出できなかった。
頭　　位　不明。人骨のあり方から東か。
遺　　物　主体部上面、30cm程浮いた地点から完形の鉢2点。周溝内からは壺、高坏等の破片が若干得られたのみ。
所　　見　調査範囲が狭すぎて詳細不明。

SM234（第112図、PL－）
位　　置　唐猫地区
隣接関係　なし。調査区域外でSM232と接続すると思われる。
規　　模　径不明。幅不明。深さ不明。大半が調査区域外。
プリッジ　調査区域内では1か所。南東方向。幅不明。
主　体　部　調査区域外。
頭　　位　不明。
遺　　物　壺、高坏等の破片を少数検出したのみ。
所　　見　大半が調査区域外となるため詳細不明。

SM235（第8図、PL－）
位　　置　唐猫地区
隣接関係　不明。

規　　模　径不明。幅不明。深さ不明。ほとんど調査区域外。
ブリッジ　調査区域内では1か所。北西方向？。幅不明。
主 体 部　不明。調査区域外。
頭　　位　不明。
遺　　物　周溝内から壺、高坏、鉢、甕等の破片をわずかに検出したのみ。鉢は大型で高坏の可能性も否定できない。
所　　見　ほとんどが調査区域外で詳細不明。

SM236（第117図、PL－）
位　　置　唐猫地区
隣接関係　不明。
規　　模　径不明。幅約72cm。深さ約24cm。大半が調査区域外。
ブリッジ　不明。
主 体 部　検出の不予際により半分程を破壊してしまったが土坑（—×100cm、深さ約28cm）を確認したのみで木棺は検出できなかった。人骨は頭骨が不明だが歯、四肢骨が残存していた。
頭　　位　歯の位置から東か。
遺　　物　主体部の人骨は右腕？に鉄釧を装着しており、腹部にはベンガラが散布されていた。土器は主体部、周溝ともほとんど皆無である。
所　　見　調査範囲が狭く、詳細不明。

SM237（第108図、PL－）
位　　置　1A区、Ⅵ－R19グリッド
隣接関係　SM201と接続する。本跡が新しい。
規　　模　径不明。幅約65cm。深さ約30cm。ほとんど調査区域外。
ブリッジ　不明。
主 体 部　不明。調査区域外。
頭　　位　不明。
遺　　物　やや特異な甕が周溝内から出土している。
所　　見　調査範囲が狭すぎて詳細不明。

SM238（第117図、PL－）
位　　置　1B区、Ⅵ－N11・12グリッド
隣接関係　不明。SM229と接続？
規　　模　径不明。幅64～80cm。深さ約30cm。大半が調査区域外。
ブリッジ　調査区域内では1か所。北西方向。幅約56cm。
主 体 部　土坑（120×—cm）の一部を確認したのみ。木棺は検出できなかったが脚部と思われる骨を検出している。
頭　　位　人骨の脚の位置から東と思われる。
遺　　物　周溝から壺、甕、高坏等の破片を少数検出したのみ。図示すべきものは見当たらない。
所　　見　大半が調査区域外で詳細不明。

SM239（第112図、PL－）

位　　置　１Ｂ区、Ⅵ－Ｎ16・21グリッド

隣接関係　SM214・213と接続する。形態から本跡が新しいとも思えるが判然としない。

規　　模　径不明。幅約112cm。深さ不明。ほとんど調査区域外。

ブリッジ　調査区域内では１か所。西方向。幅約24cm。

主体部　不明。調査区域外。

頭　　位　不明。

遺　　物　なし。

所　　見　ほとんどが調査区域のため詳細不明。

(3) 土器棺墓

土器棺101（第119図、PL15）

位　　置　１Ａ区、Ⅵ－Ｗ16グリッド

隣接関係　SM112主体部に掘り込む。

規　　模　80×105cm、楕円形。

覆　　土　不詳。

遺　　物　甕×２。骨片が少々みられた。

所　　見　上部を削りすぎたため詳細不明。

土器棺201（第119図、PL15）

位　　置　１Ａ区、Ⅵ－Ｒ15グリッド

隣接関係　SM204周溝肩部を掘り込む。

規　　模　掘り込みがはっきりしないため不明。

覆　　土　不詳。

遺　　物　甕＋壺。内部からは骨片、歯が出土。炭化物もみられたが骨片は焼けていない。

所　　見　周溝肩部に位置するため、SM204の封土はそれなりの厚さを保っていたはずだが詳細は不明である。

土器棺202（第120図、PL15）

位　　置　１Ｂ区、Ⅵ－Ｍ20グリッド

隣接関係　SM215周溝の底部に接触。

規　　模　掘り込みがはっきりしないため不明。

覆　　土　不詳。

遺　　物　甕＋壺の合口甕棺。内部に骨片、歯等ともにガラス小玉20個。

所　　見　棺が周溝底部に接触していることから、主体部の時期とあまり差はないか。

土器棺203（第121図、PL15）

位　　置　１Ｂ区、Ⅵ－Ｎ02グリッド

隣接関係　SM222周溝を掘り込む。

規　　模　50×70cm程度か。周溝底部を20cm程掘り込んでいる。

覆　　土　不詳。
遺　　物　壺3個体。2の壺の内部に3の壺を納め、1の壺を3分割して全体を被っていた。内部からは頭骨、上腕（？）骨のほか、管玉、炭化物等がみられた。
所　　見　SM222主体部よりも新しいことは確実だが詳細は不明。人骨は保存状況が良くなく鑑定できなかった。

土器棺504（第120図、PL－）
位　　置　1E区、VI－O13グリッド
隣接関係　単独。
規　　模　105×120cm、楕円形。深さ40cm内外。
覆　　土　地山とほとんど区別できない。
遺　　物　骨片が少々出土した。壺の胴～底部を使用しているが頸部以上は不明。
所　　見　他の土器棺とはかけ離れた位置にある。時期差とも思われるが判然としない。

(4)　方形周溝墓

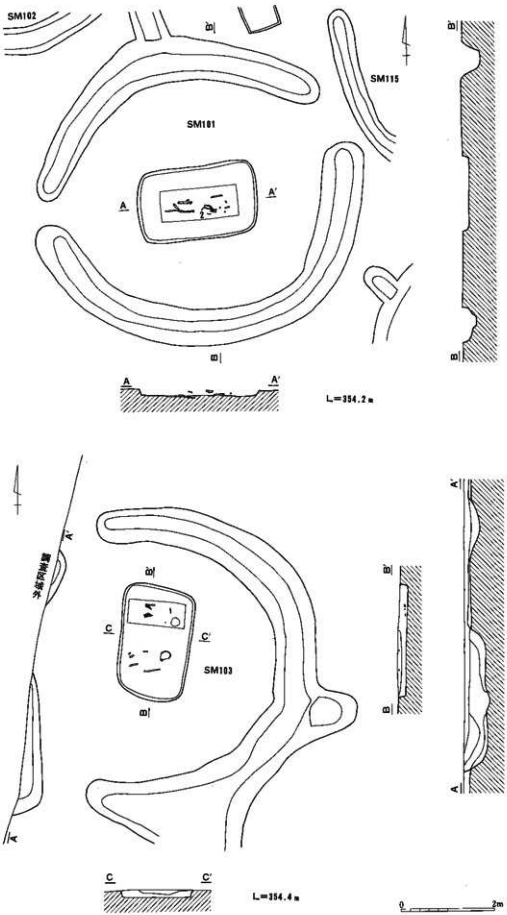
SM240（第118図、PL－）
位　　置　1DB、VI－T02・03・07・08グリッド
隣接関係　なし。SD209を切り、SD207・208・324、SK226・788、ST318に切られる。
規　　模　径約10.4m。幅104～112cm。深さ8～48cm。
ブリッジ　調査区域内では1か所。南東方向。幅約70cm。
覆　　土　単層。溝壁の立ち上がりは非常にゆるやか。
主 体 部　不明。削平されたと思われる。
頭　　位　不明。
遺　　物　周溝内から箱清水式と思われる壺、甕等のほかに、土師器らしい土器片も検出されているが図示できなかった。
所　　見　SM241・242が隣接しており、墓域を形成するものと思われる。

SM241・242（第117図、PL－）
位　　置　1D、IV－T01・06・07・11・12グリッド
隣接関係　なし。SM242を切る。そのほか新しい時代の遺構に切られる。
規　　模　径不明。幅40～120cm。深さ8～16cm。
ブリッジ　1か所。南西方向。幅約112cm。
覆　　土　単層。溝壁の立ち上がりは非常にゆるやか。
主 体 部　土坑・木棺等は不明。人骨が2体検出されており、南西側の個体を人骨1、北東側を人骨2とする。
頭　　位　南東～南南東。
遺　　物　人骨1は頭部に管玉、脚部に管玉・ガラス小玉等を伴っていた。人骨2は頭部にガラス小玉を伴っていた。周溝内にはわずかな土器及び礫がみられたのみ。
所　　見　重なり合う周溝と2体の人骨をどのように結びつけるかが問題となり、いくつかの状況が想定されるが人骨の軸と周溝のあり方から2体ともSM242に帰属し、人骨2が埋葬された後、

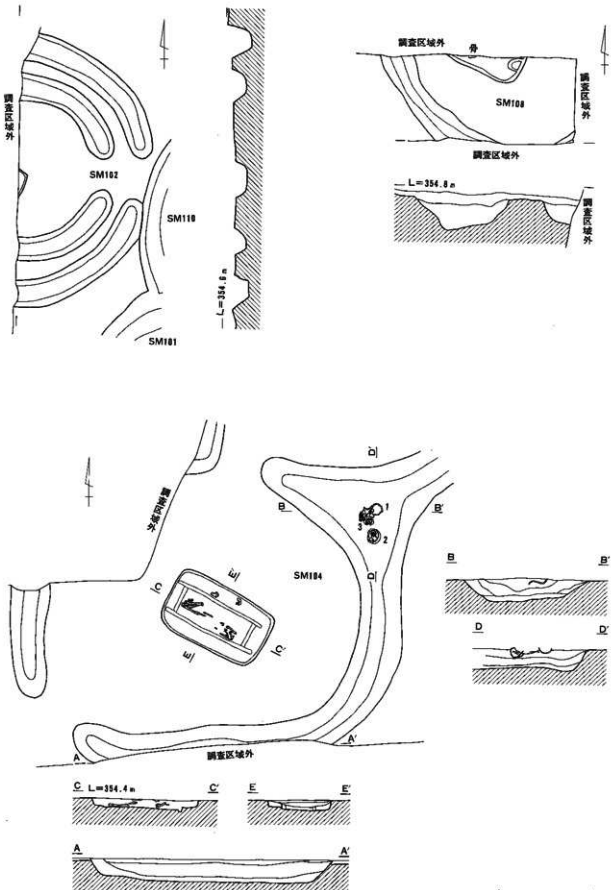
人骨１が追葬されたと考えたい。

SM243（第118図、PL－）

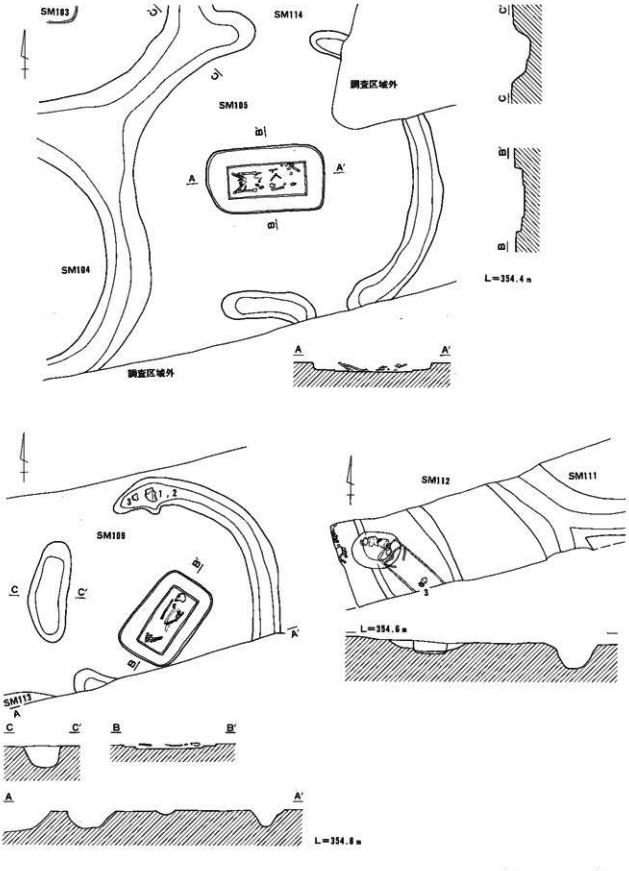
位　　置　１Ｄ、Ⅳ－Ｓ20・25、Ｔ16・21グリッド
隣接関係　なし。弥生時代後期のSB222に切られる。
規　　模　径約8.32ｍ。幅48～72㎝。深さ約16㎝。
ブリッジ　３か所。北、東西方向。幅32～48㎝。
覆　　土　単層。溝壁の立ち上がりは非常にゆるやか。
主体部　不明。削平されたと思われる。
頭　　位　不明。
遺　　物　ほとんどなし。
所　　見　方形周溝墓とする根拠なし。



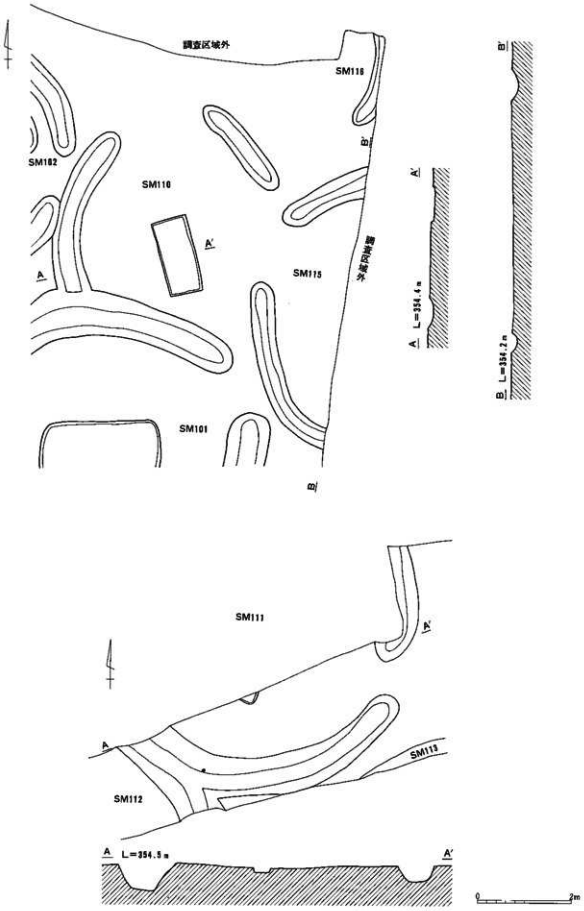
第103図　円形周溝墓(1)



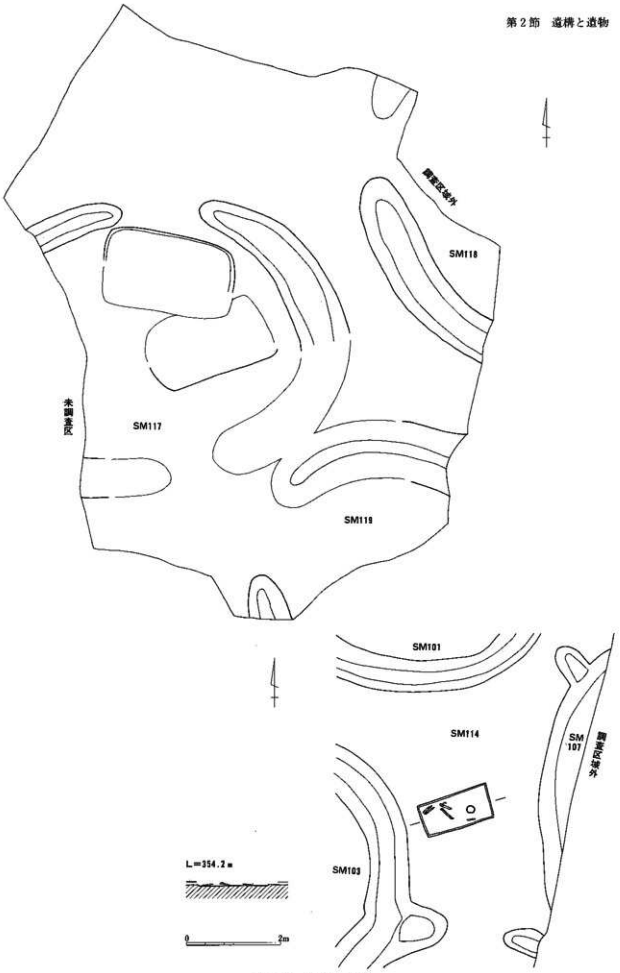
第104図　円形周溝墓(2)



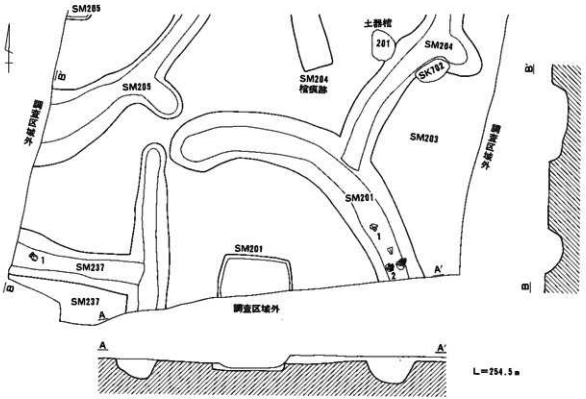
第105図　円形周溝墓(3)



第106図　円形周溝墓(4)

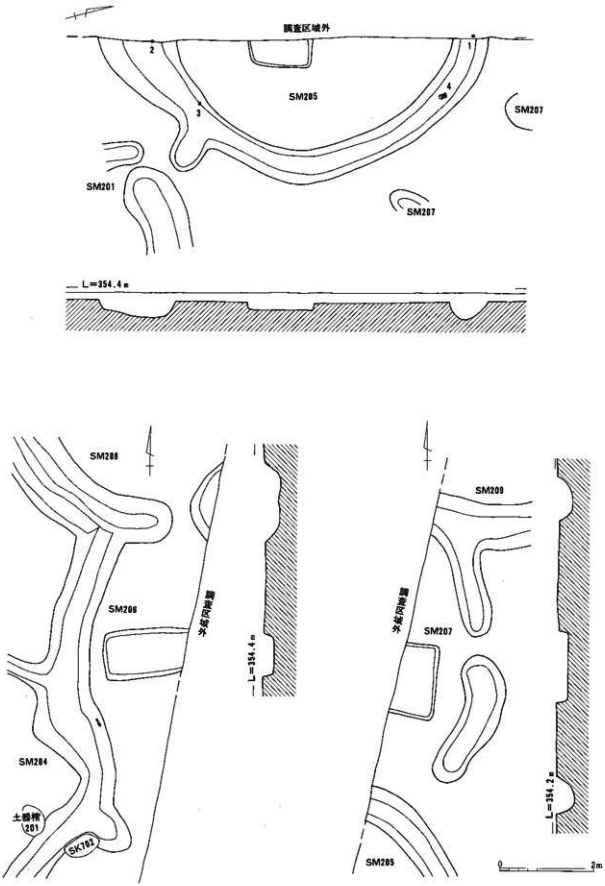


第107図　円形周溝墓(5)

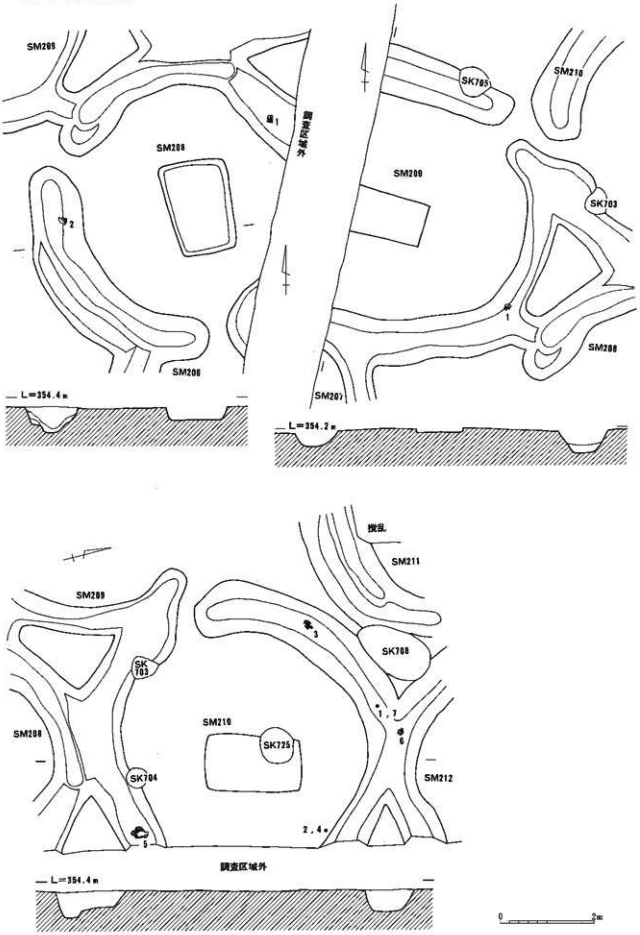


0　　2m

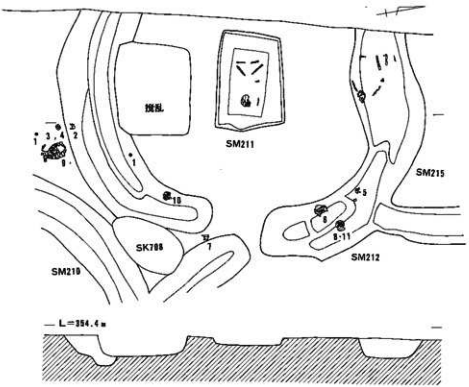
第108図　円形周溝墓(6)

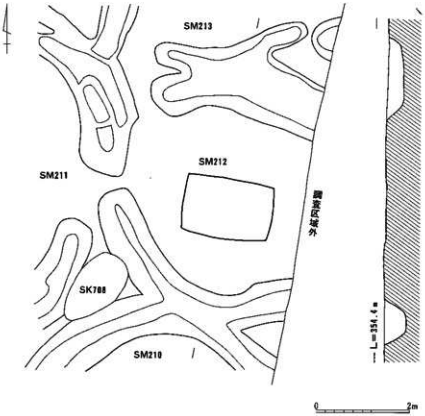


第109図　円形周溝墓(7)

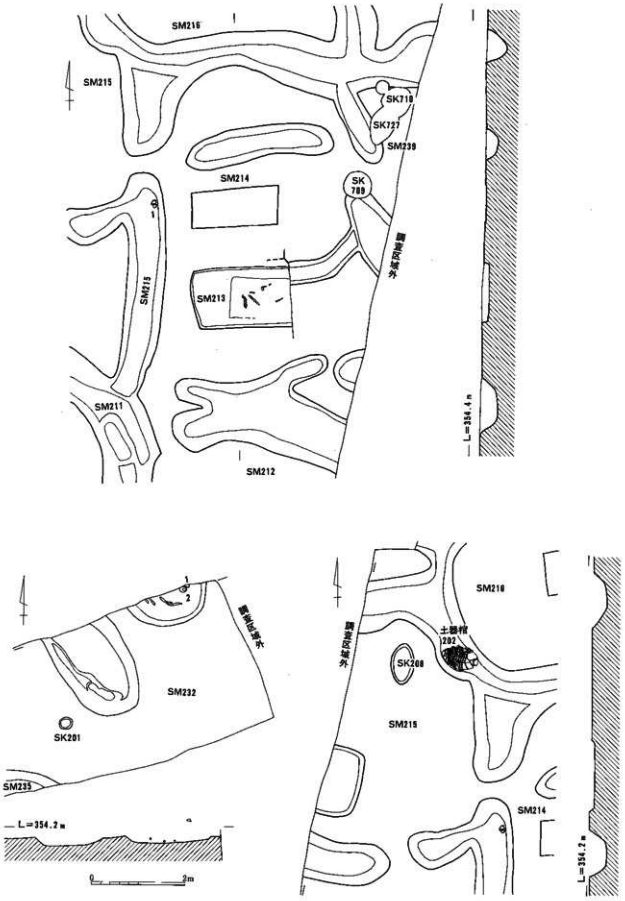


第110図　円形周溝墓(8)

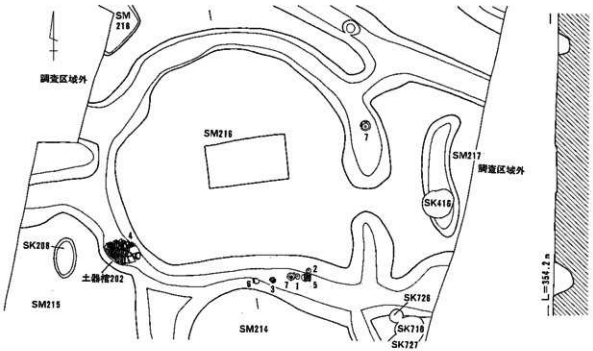


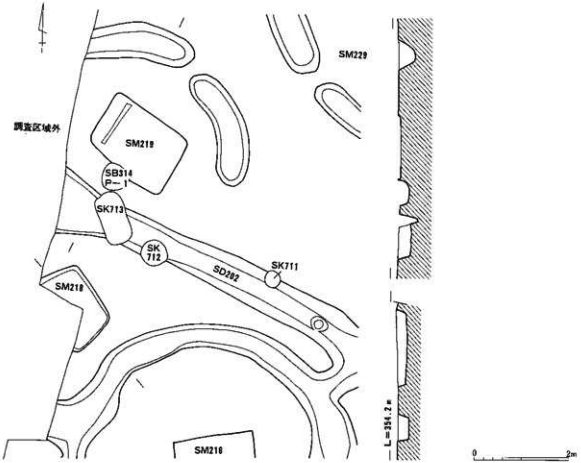


第111図　円形周溝墓(9)

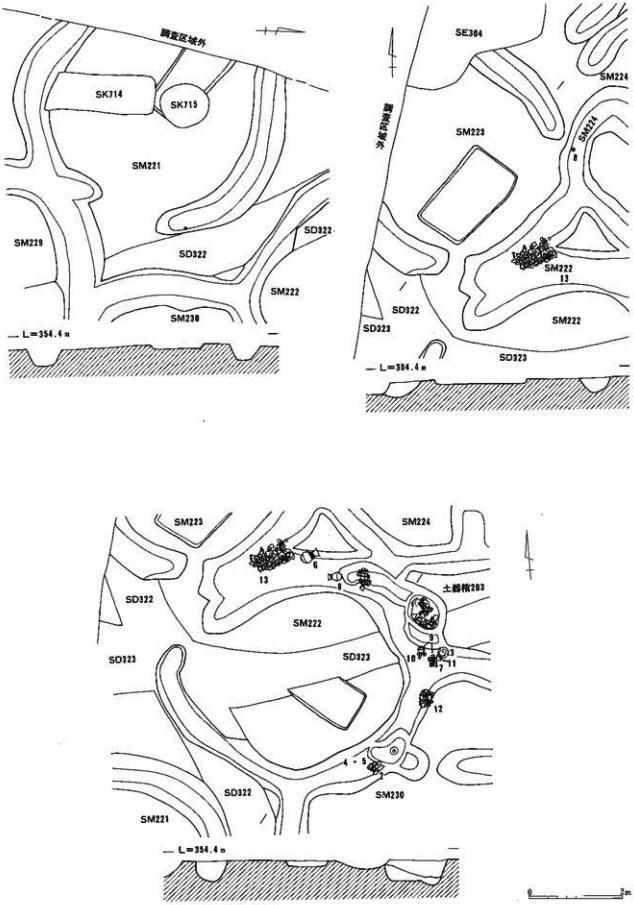


第112図　円形周溝墓(10)

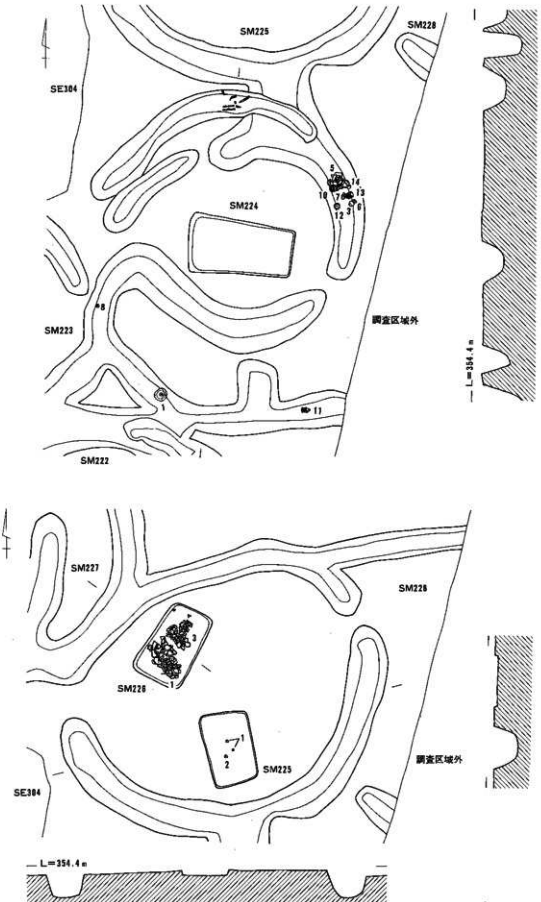




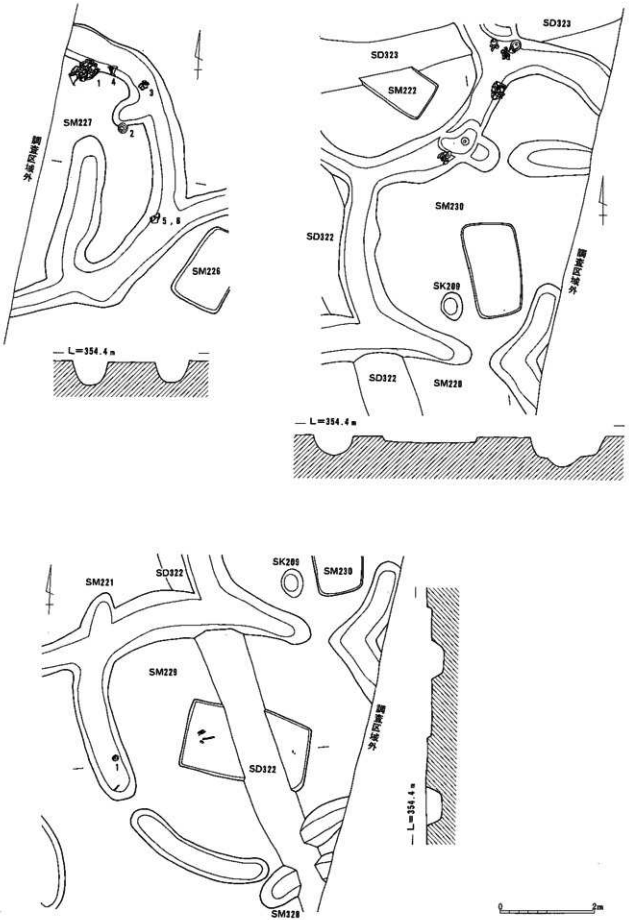
第113図　円形周溝墓(1)



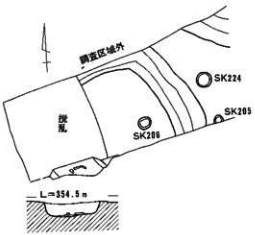
第114図　円形周溝墓02

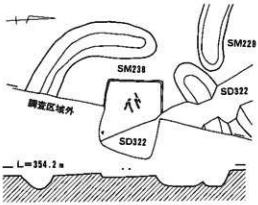


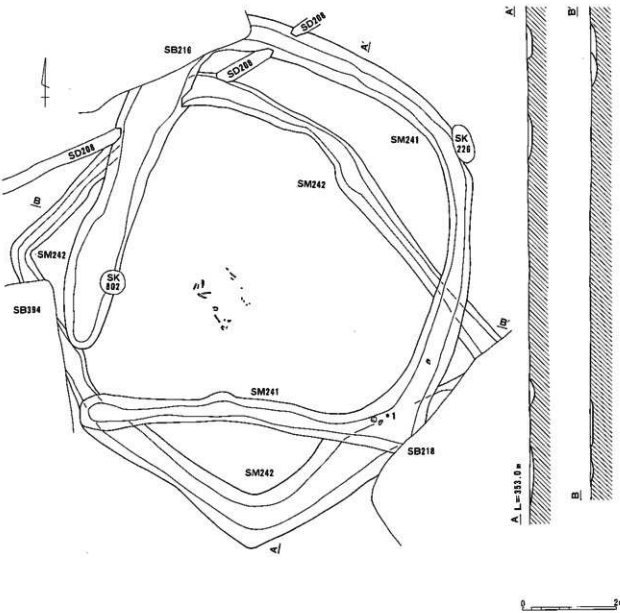
第115図　円形周溝墓(3)



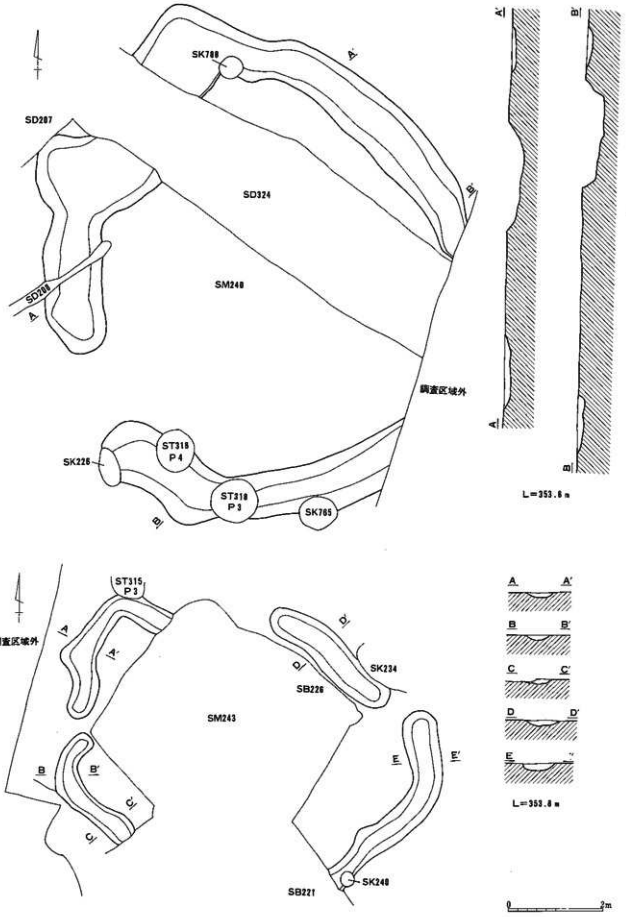
第116図　円形周溝墓04



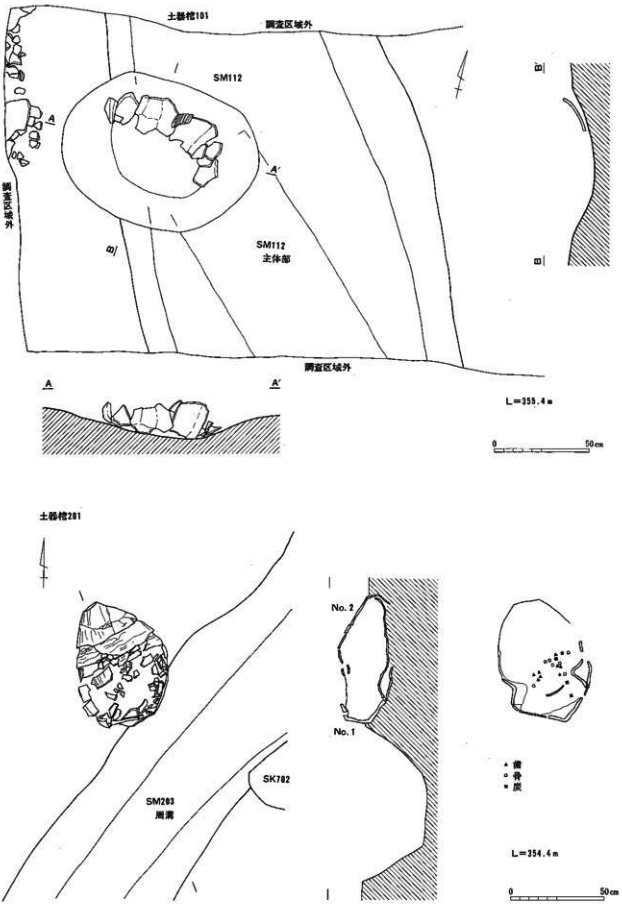




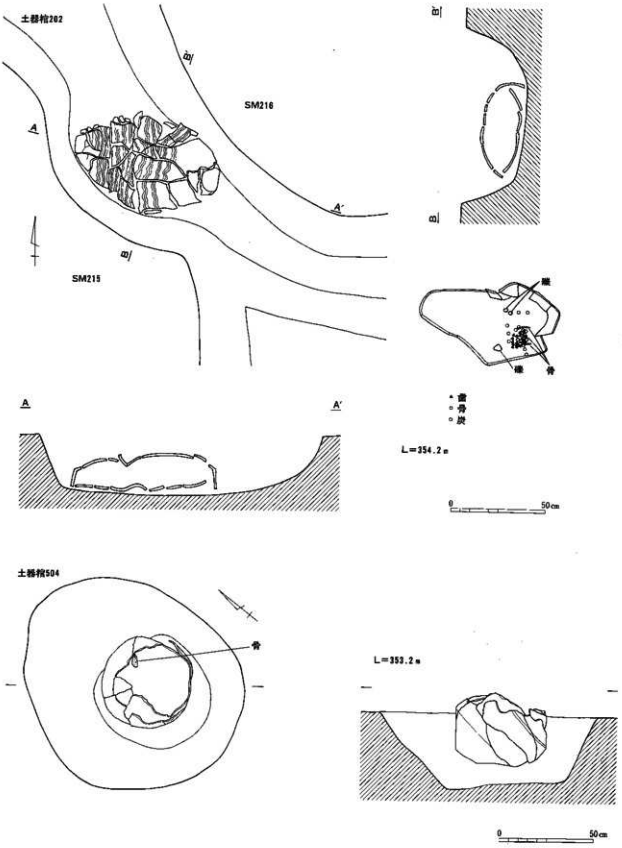
第117図　円形周溝墓(05)



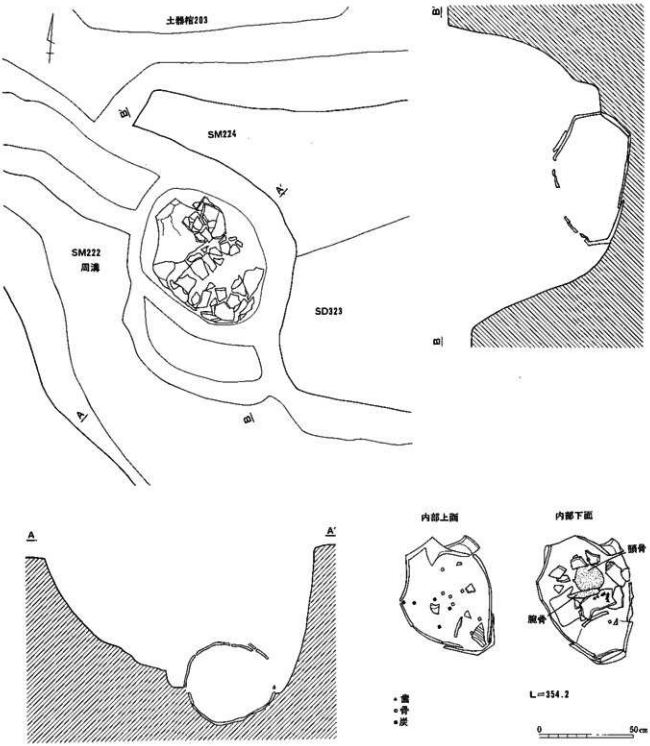
第118図　円形周溝墓(6)


土器棺181
調査区域外
SM112
A
A'
B
B'
調査区域外
SM112
主体部
調査区域外
A
A'
L=355.4m
0
50cm
土器棺281
No. 2
No. 1
SK782
SM283
周溝
▲ 歯
○ 骨
■ 炭
L=354.4m
0
50cm

第119図　土器棺墓(1)


土器棺202
SM216
SM215
A
A'
B
B'
A
A'
B
B'
縁
縁
骨
＊貝
＊骨
＊炭
L=354.2m
0
50cm
土器棺504
骨
L=353.2m
0
50cm

第120図　土器棺墓(2)



第121図　土器棺墓(3)

4　円形周溝墓群の土器（方形周溝墓・土器棺墓を含む）

(1) 概　要

円形周溝墓の土器は箱清水式のみによって構成されているが、その時間幅は以外に狭く、明確な時期差を見いだすことは困難であった。これは弥生後期～古墳時代中期の土器の項で述べたとおりである。しかしながら、円形周溝墓がおおむね南から北へ向かって展開していった状況は、個々の円形周溝墓の形態・分布状況等から想定されており、それは土器の差によっても裏づけられるはずである。箱清水式の大きな流れの中でならば古い様相と新しい様相の差は現れるはずである。そこで個々の土器に表現された古様・新相に注意をはらいながら、観察結果を述べたいと思う。ここでもまた便宜的に方形周溝墓・土器棺墓の土器についても扱う。

(2) 円形周溝墓

SM101（第122図、PL48）

１の小型壺はミニチュア土器と呼ぶべきか。外面及び口縁部内面はミガキ・赤色塗彩されているものの胴部内面はハケのままである。また口縁端部の突起は１か所のみで、直線紋あるいはＴ字紋であるはずの頸部も簾状紋となっている。２の小型甕は主体部から検出され、円形周溝墓によくみられるサイズである。当初ミニチュアかと思われたが胴部にススが付着していることから、やはり実際に使用されたもののようであるが、どのような用途だったのだろうか。内・外面の調整は一般の甕と変わらず、頸部の簾状紋は６～７単位と考えられる。図示していないがSM104－１に近い壺の破片も検出されている。

本跡は壺の形態等からやや古い様相を示すものか。

SM103（第122図、PL49）

１は台付甕であるが胴部の1/3程しか残存しておらず、簾状紋の単位等も不明である。２は口縁端部を面取りしており、簾状紋は10～11単位と思われる。本個体も内・外面に炭化物が付着しており、実際に使用されたことがわかる。

SM104（第122図、PL48）

SM103、104、105が共有する周溝から出土しており、当初土器棺とされた土器群である。１は口縁端部に８単位前後の突起をそなえ、頸部の直線紋直下に添付紋を配していたようである。添付紋はすべて剥落しており、単位等は不明である。２の壺は上下を沈線で区画されたと思われる７単位のＴ字紋をそなえ、直下を擦による刺突で飾っている。３の甕は最大径が胴部中央に位置し、やや受け口状になる短い口縁をもつ。本跡の土器は総じて古い様相を示していると言えよう。

SM107（第122図、PL48）

１の鉢は小型であまりみかけない器形である。口縁の２孔は対をなしていない。２の小型壺は残存率が低く、図上復元でも口縁部は欠損したままで、Ｔ字紋の単位等も不明であるが、表面の調整は一般にみられる壺と同様である。３は明らかに頸部以上が短く、簾状紋も２条？からなり、古い様相をとどめている。４は赤色塗彩しない壺の胴部下半と思われ、ミガキはみられずハケとナデで仕上げている。この個体もやや古い様相を示すといえるだろう。

SM109（第123図、PL49）

1の鉢は底部も含めた全面をミガキ・赤色塗彩で仕上げているが1/4程しか残存していないため口縁の孔等は不明である。2の鉢は底部をナデただけで赤色塗彩はない。3は壺の胴部下半と思われ、内面、底部はナデで仕上げている。

SM111（第123図、PL49）

1の鉢の底部はナデただけの仕上げで、口縁の2孔は対を成していないようである。2の小型甕はあまり洗練されていない波紋状とやや受け口状の口縁をもち、やや古い様相を示すと言えようか。3の壺は頸部に直線紋をそなえ、底部付近を除いてミガキ・赤色塗彩している。この個体も古い様相をとどめている。4は大型の甕または壺の胴部下半で外面はタテヘラミガキ、内面はナデの仕上げである。

SM112（第123図、PL49）

1・2・4は土器集中から得られたもので、どれも口縁端部付近と内面のみに赤色塗彩を施す壺である。口縁内面はミガキ・赤色塗彩、口縁外面はハケのちナデの仕上げ。頸部は直線紋と簾状紋、胴部は上半がミガキ、下半がハケのちナデである。1と2は同一個体の可能性もある。

3は主体部の土器で口縁部を1/6程欠損している以外は完形である。頸部には5単位のT字紋を配し、直下を同じく5単位の添付紋で飾っている。外面は紋様部分と底部を除き、ミガキ・赤色塗彩、内面は頸部までをミガキ・赤色塗彩、胴部はナデの仕上げである。総じて本跡の壺はやや古い様相を示していると言えそうである。

SM201（第123図、PL50）

1は小型の椀型高坏で脚部の内面も軽くミガいている。精製品と言えるのだろうか。2はやや小型の甕で本円形周溝墓群にしばしばみられる小型甕とは異なるように感じる。調整は一般的な甕と同様で簾状紋は5単位である。本跡の土器はSM101～112の土器群に比して新しい様相を備えているが、箱清水期全体の中では中葉あたりか。

SM203（第124図、PL49）

図示した小型甕は口縁端部を強く面取りしており、頸部に簾状紋はない。そのほか一般的な甕と同様な調整となっている。

SM204（第124図、PL49）

図示した鉢は底部を含めた内・外面をミガいているが、底部には赤色塗彩はない。口縁に2孔はなく、ほぼ完形であるが胎土に黒曜石が多量に含まれているため、表面の剥落が激しい。

SM205（第124図、PL50）

1の鉢の口縁部の2孔は焼成後の穿孔で対を成していない。この孔に使用にかかわる痕跡は認められないが、わざわざ穿孔しているところをみるとそれなりの機能があったはずであるが、今のところその意味は不明である。底部はナデただけの調整で赤色塗彩もない。

3は一般的な坏部に稜をもつ高坏である。4は本周溝墓群によくみられる小型甕で器形にこれといった特徴もないが、ハケを施した上に波状紋を配しており、頸部の上下を問わず上から下へ施紋している。

また本個体も外面に炭化物が付着している。

２は台付甕を模したと思われるミニチュア土器で、胴部全体に指頭圧痕がみられ、口縁の一部を除きほぼ完形である。

本跡の土器群にはとくに古い要素も新しい要素も感じられない。

SM206（第124図、PL－）

一般的な小型甕である。整った波状紋が底部付近まで施紋されていることが特徴だろうか。やや新しい様相とも考えられる。

SM208（第124図、PL50）

１の高坏はSM205－３、SM210－２等に比して坏部の稜以上がやや短い。また２の小型甕も波状紋が洗練されておらず、簾状紋も２条で構成されている。

SM209（第124図、PL50）

一般的な鉢である。口縁の２孔は対をなしておらず底部はナデただけの仕上げである。

SM210（第124図、PL50）

１は椀型の高坏で脚部を欠損している。３・５はほぼ同様な器形と考えられる壺であるが５の内面のヘラケズリはやや特異である。また頸部のＴ字紋は３単位である。やや新しい時期の壺であろうか。

６・７は一般的な台付甕で、６には焼成後の穿孔が施されている。７はミニチュアとも思われたが内面に炭化物が付着しており、実際に使用されたもののようである。

４は時代の下るものと思われ、流れ込みと考えたいが出土地点を重視してあえて掲載した。本跡上層付近には４世紀と思われる住居跡がみられるためそちらに帰属する可能性が高い。

SM211（第125図、PL51）

１はやや古い様相を示す高坏で内面の口縁付近はナデ・赤色塗彩、その部分以外はミガキ・赤色塗彩の仕上げである。３の広口壺は頸部に直線紋をもつタイプで、口縁部及び底部を欠損しているが胴部はほぼ完存している。９の壺は頸部に４単位のＴ字紋を配しており、くびれの状況等からやや新しい様相とも思われるが判然としない。

４の小型甕はまったくミガかれておらず、外面に炭化物の付着もみられないため、ミニチュア土器または墓用の儀器の可能性が否定できない。

７・８の台付甕、５・10・11の甕はいずれも一般的なものである。

SM213・214（第125図、PL－）

図示した土器は椀型高坏の坏部である。とくに特徴はみられない。

SM215（第125図、PL51）

１はやや小型の蓋で内・外面ともナデ仕上げである。２の鉢は赤色塗彩はあるもののまったくミガかれていない。双方とも儀器の可能性も考えられる。

SM221（第125図、PL52）

一般的な鉢であるがやや小型か。内外面をミガキ・赤色塗彩で仕上げ、底部はナデである。

SM216（第126図、PL52）

１・２の鉢は双方とも赤色塗彩は施されているものの、まったくミガかれておらず１の個体では底部付近にハケメが残されている。SM215にも類例がみられるが、やはり儀器と考えるべきだろうか。

３・４の台付甕はとくにこれといった特徴もないが、３はミニチュア土器かと思われる小型である。本個体に炭化物等の付着は認められないが、SM210－７の個体の例もあり、やはり実際に使用されるのだろうか。６・７も一般的な広口壷、高坏で特記すべき特徴は見当たらない。

SM222（第126・127図、PL52～54）

１は住居跡等で一般的にみられる鉢であるが、外面の底部付近が激しく摩耗している。２は椀型高坏で坏部はほぼ完全であるが、脚がまったく見当たらない。

３～４は坏部に稜をもつ高坏であるが、３は内面底部が激しく摩耗しており、上記の鉢の摩耗位置から高坏に鉢をのせた状況も想定できる。また４・５は同一個体とも思われたが接合せず、やや焼成も異なることから別個体とした。

７・９は広口壷で７の口縁部には孔はなく、９には２孔が対であけられる。また本個体は口縁から胴部にかけてほぼ完全であるが底部はまったくなく、意図的に欠損させられた可能性が高い。

６・８は一般的な壷であるが12・13はかなり特異である。12は頸部の装飾がまったくなく、器形もあまり例をみないもので、墓用の特殊品（儀器）かと思われるが判然としない。13は高さ67㎝、最大径47㎝を測る巨大な壷で、当然ながら土器棺かと思われたがやはり骨等は検出されないため、一応本跡に属する土器ととらえた。

10・11の小型甕は本円形周溝墓群によくみられるもので、双方とも外面に炭化物が付着している。

SM224（第127図、PL54・55）

２・４の鉢は底部外面を含む全面をミガキ・赤色塗彩しており、２の口縁部の２孔は対を成さない。３は底部外面の赤色塗彩はないものの、ヘラケズりの後ミガキを施している。

８は広口壷または無頸壷の小型品あるいはミニチュアと考えられ、外面は底部までミガキ・赤色塗彩しているが内面はナデただけの仕上げである。

１の高坏は住居跡等にみられる一般的な個体で、脚部を1/4程欠損している以外ほぼ完形である。４窓を備えたやや長めの脚は新しい様相と言えそうである。甕９は椀型高坏を模したと思われるミニチュア土器で、外面及び坏部内部を簡単にミガいた後赤色塗彩している。

５は内・外面はもとより底部外面まで赤色塗彩を施した、まさに真紅の広口壷であるが、底部外面の調整はヘラケズりのみである。頸部のはっきりした屈曲はやや新しい様相ととらえたい。６・７とも一般的な壷であるが７は胴部に穿孔されたものと思われる。

12は内部がミガきのみで赤色塗彩がない。当初高坏かと考えたがＳＭ227－３にみられるような台付甕のような器形を呈すると考えた方が適当かもしれない。

10・11は台付甕で10は口縁端部を面取りしている。11の個体は頸部の簾状紋がなく、やや特異と言えば特異であるが、この個体にも外面にススが付着している。

13・14は一般的な甕である。14は頸部以上が明らかに長く、やや新しい様相を示している。

以上の状況から本跡は、円形周溝墓群の中でもやや新しい時期に位置付けられると考えたい。

SM225（第128図、PL56）

1・2とも主体部から出土しており、ミニチュアというか明らかに儀礼のための土器である。双方とも調整はていねいで一般の土器と同じくミガキ・赤色塗彩されている。2の鉢の孔は1個のみで対をなすこともない。

SM226（第128図、PL56）

1はやや小型であるが普通の椀型高坏、2は坏部に稜をもつ高坏の脚部と考えたい。3・4は土器棺に使用された壺で4はほぼ完形、3も胴部以下は完形である。双方とも穿孔されたような形跡は認められない。

SM227（第128図、PL57）

1の無頸壺は外面を底部までミガキ・赤色塗彩しているが、内面はナデただけの仕上げである。口縁部の2孔は反対側にも穿孔され、対をなしている。

2・4は坏部に稜をもつ高坏であるが、一般的な個体で特記すべき点は見当たらない。3は広口台付壺とでも呼ぶべきものであまり例をみない器形である。外面及び口縁部内面はていねいなミガキ・赤色塗彩を施しているが、胴部の内面はナデただけである。

6は大型の壺で頸部以上しか図にならないが、T字紋の上下を沈線で区画しているようである。5は土器棺かと思われていた壺で、胴部にかご網の痕跡が残っていた。

SM228（第128図、PL57）

図示した甕は頸部のくびれがやや弱く、6単位の簾状紋を施している。また口縁端部は面取りされている。本個体は底部を欠損しているのみで、他の部分は完全である。

SM232（第129図、PL57）

1・2とも内・外面にミガキ・赤色塗彩を施しているが、底部は1が弱いミガキ、2がナデとなっている。両個体とも完形である。

SM235（第129図、PL－）

大型の鉢、あるいは椀型の高坏と思われるが判然としない。口縁端部がわずかに内湾するので椀型高坏の可能性が高いか。内・外面をミガキ・赤色塗彩している。

SM237（第129図、PL57）

口縁端部にハケによる刺突を施し、胴部には細かな櫛で波状紋及び簾状紋を施すが、胴部の大半がミガキで仕上げられあまり施紋されていない。明らかに他の甕とは異なり、本遺跡内でこのような特徴を備える甕はこの甕一点のみである。他の地域からの搬入品と考えたい。

SM241（第129図、PL－）

方形周溝墓の土器である。特異な器形で台付甕状の壺とでも言うべきか。外面及び口縁部内面はミガキ

・赤色塗彩され内面の胴部はミガキで仕上げられている。胎土は箱清水式と同様である。

土器棺101（第129図、PL60）

１は胴部以上を、２は頸部以上と底部を欠損している。双方とも古い様相の甕と思われる。

土器棺201（第129図、PL60・61）

１は大型の甕であるが波状紋は連続して施紋されており、他の甕とはかなり異なった印象を受ける。２は一般的な大型の壺の胴部下半である。双方とも底部は焼成後の穿孔が認められる。

土器棺202（第129図、PL61）

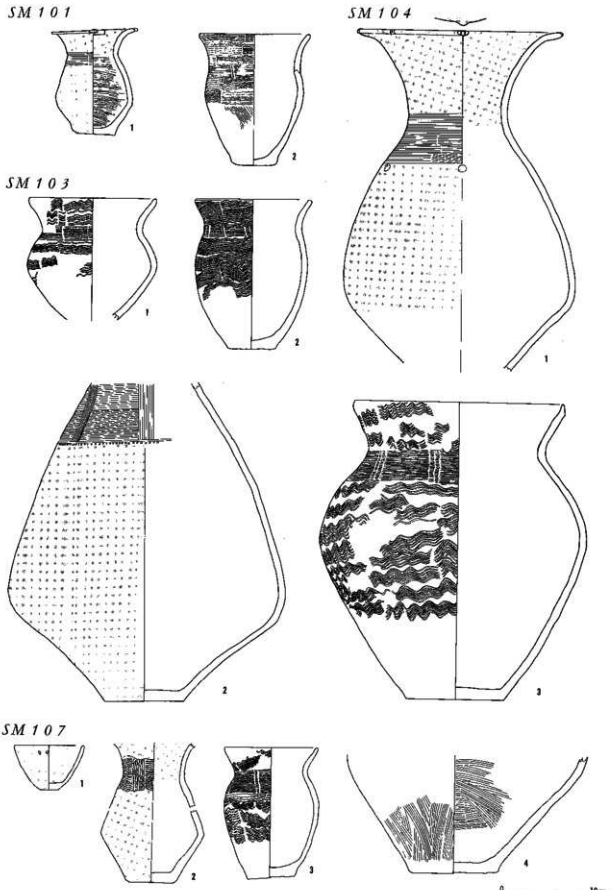
１・２ともやや特異な甕で、１は波状紋が散在的に描かれ、２は頸部に独特の簾状紋を施している。これらの甕は棺として製作された特別な土器なのだろうか。

土器棺203（第130図、PL58・59）

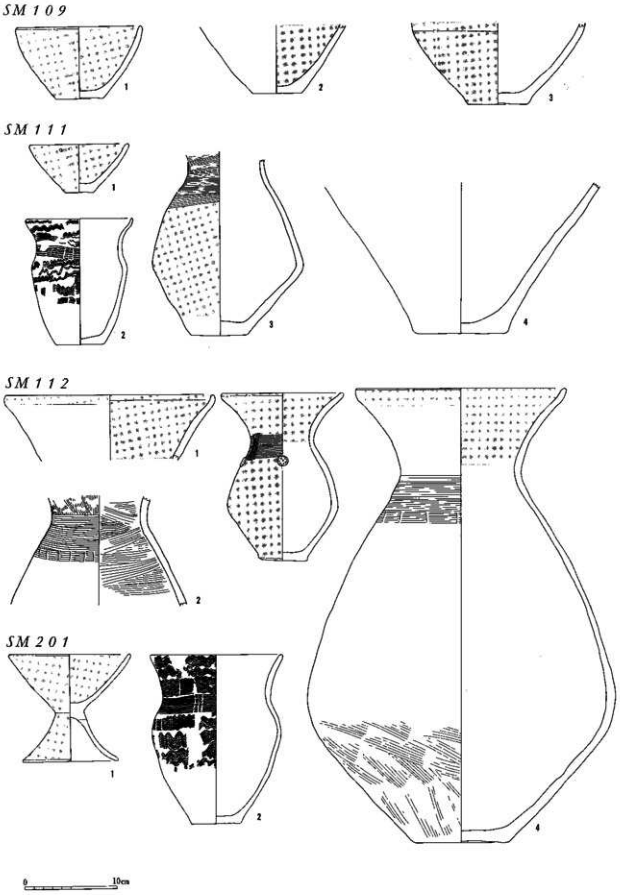
３個体の壺をもちいた土器棺である。２を棺体とし内部に３を納めていた。１の壺は３分割されて棺体を覆っていたものである。１・３は大型であるがこれといった特徴はみられず２も一般的な壺である。

土器棺504（第130図、PL－）

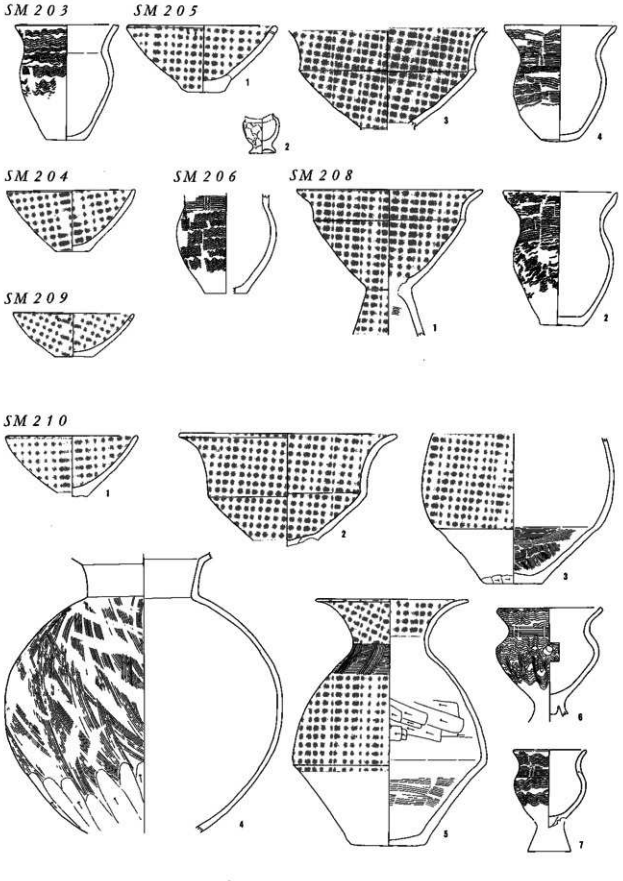
大型の壺の胴部を身と蓋にしている。土器自体に目立った特徴はみられない。１は焼成後の穿孔である。



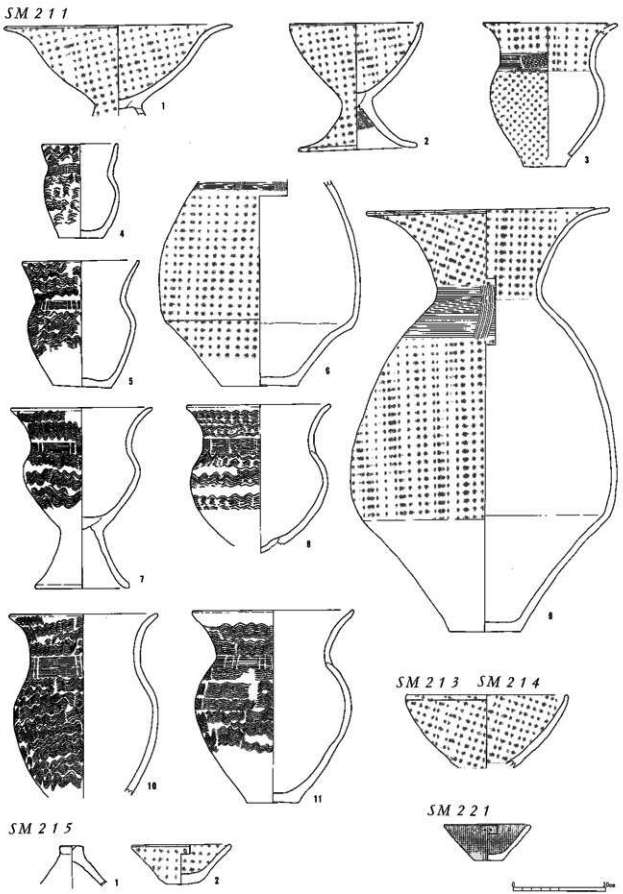
第122図　円形周溝墓の土器(1)



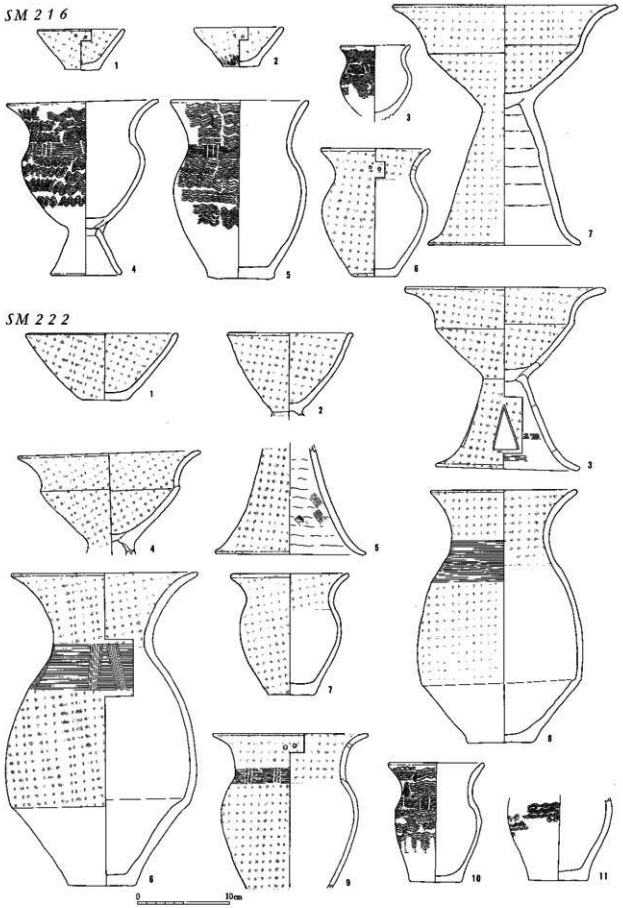
第123図　円形周溝墓の土器(2)



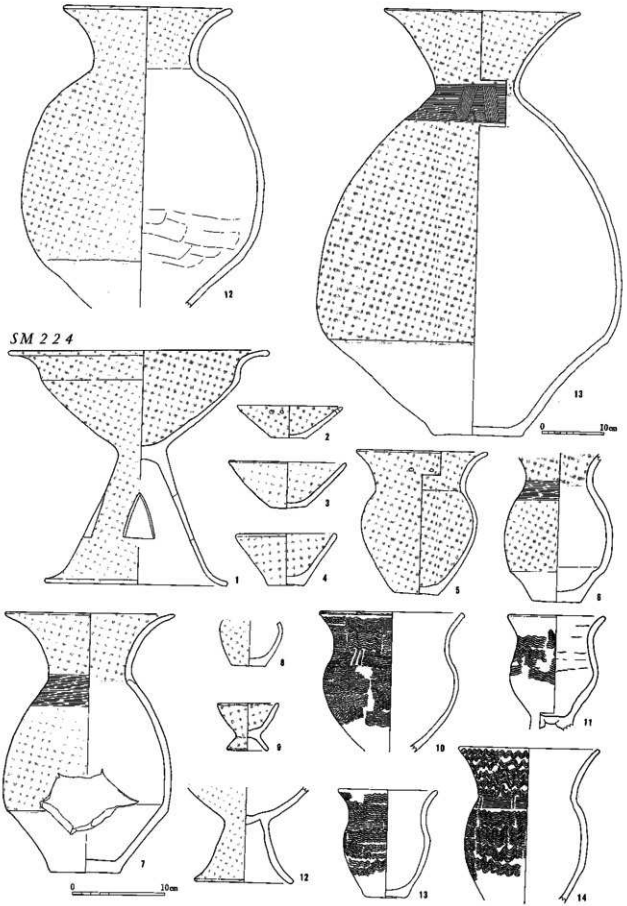
第124図　円形周溝墓の土器(3)



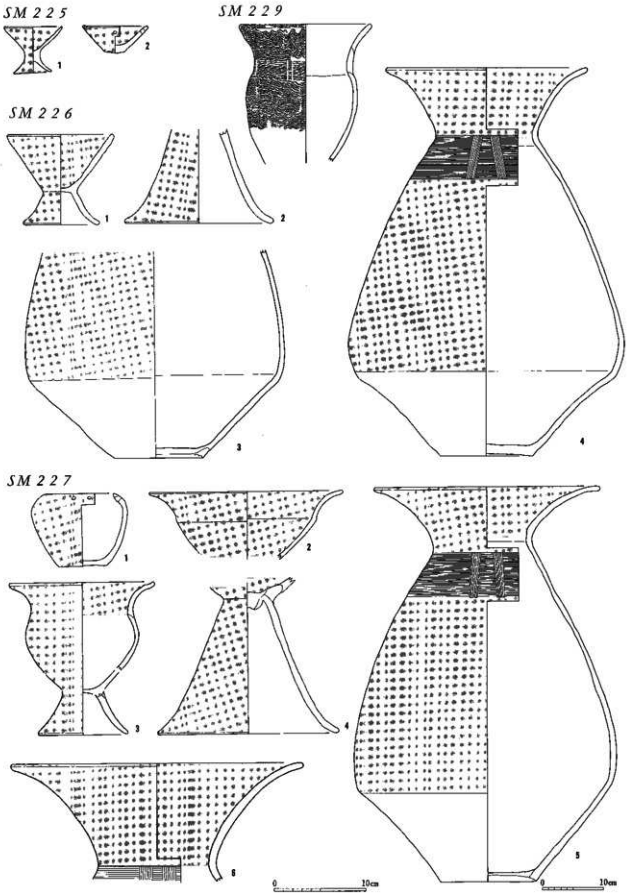
第125図　円形周溝墓の土器(4)



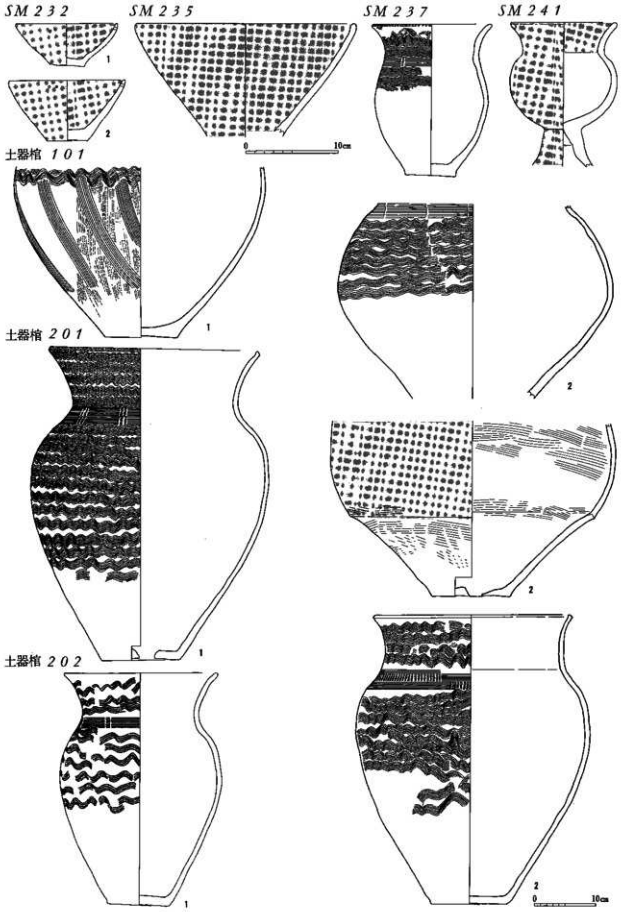
第126図　円形周溝墓の土器(5)



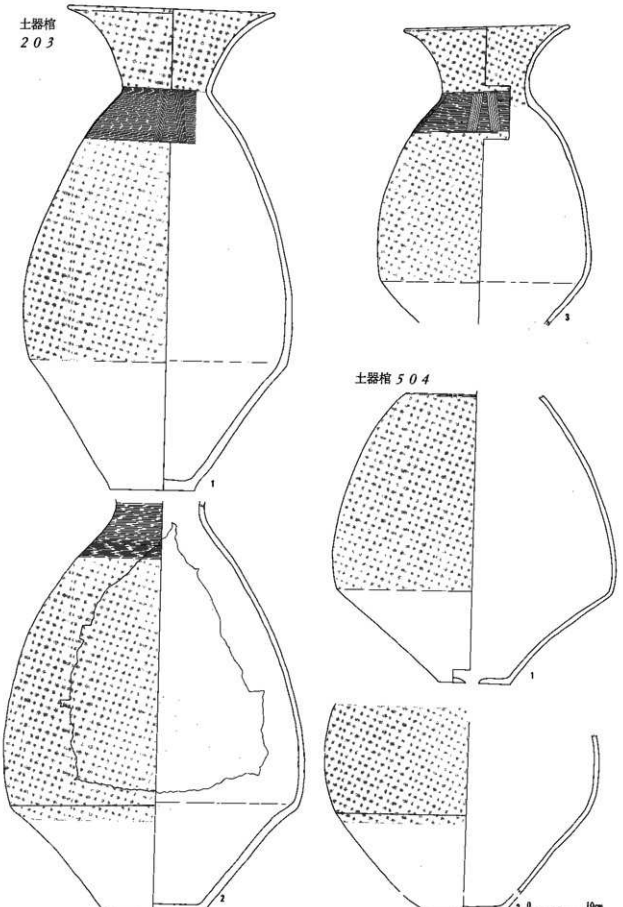
第127図　円形周溝墓の土器(6)



第128図　円形周溝墓の土器(7)



第129図　円形周溝墓の土器(8)



第130図　円形周溝墓の土器(9)